明治四十三年四月廿九日第三種郵便物認可　大正元年九月十五日發行　（毎月一回廿四日印刷納本）（本號九月十二日印刷納本）　七版

第三卷　第十號

學生

鄉土偉人號

九月十五日・東京冨山房

御注文の方は『學生』廣告に據る旨御附記を乞ふ

惡筆家の失敗

某實業家の談

いまの社會に字の下手な人ほど氣の毒なことは無い、生涯どれだけの損をするか知れません。我實業界の重鎭たる某男爵の事務所へ有力なる人の紹介で一法學士が職を求めて來た。其學士は品行も方正、學業も優等であつたので男爵は非常に喜んで早速葉書を書かせて見たが甚しい惡筆!!流石の男爵もこれでは――と體よく斷わつて了つたと云ふ事である。斯かる惡筆家の失敗は到る所で聞く此學士の如く惡筆で困る人は評判高き專賣特許習字速成法で練習すれば短日月で驚く可き能筆家になられる。

希望者は東京本郷區大學正門前帝國習字速成學會（電話下谷參貳壹〇番）へハガキを出せば見本附き會則を無代で送つて來る

尚類似物續出注意あれ。

御注文の方は『學生』廣告に據る旨御附記を乞ふ

文學士内海弘藏先生著◎四六判美本 正價五拾錢 送料六錢

實用 新書簡文

忽四版

新時代に適應せざる時勢遲くれの手紙を書く人は日日莫大の損失をなしつゝあり。簡潔にして要領を得たる手紙に依つて始めて社交の圓滿、取引の敏活、信用の增進等を望み得べし。本書はこの要求を充分に滿たし得る最新最良の新書簡文也。

東京高等商業學校教授稻川雲谿先生書◎横帖綴本 正價四拾錢送料四錢

手紙と葉書

廿版

本書は簡潔なる手紙と葉書文を選み。先生獨特の名筆にて揮毫せられたる書簡文兼用無二の習字帖なることは蓋し異數の賣行きに於て證明せり。殊に手本の書者は文部省習字檢定委員稻川雲谿先生を始め、玉木愛石先生、小野鵞堂先生である。

文學士内海弘藏先生著◎菊判上製 正價壹圓廿錢送料拾錢

訂正增補 文章十講

八版

本書は著者が多年心血を濺ぎて成りたる大著にして第一講より第十講に分ち、根本的眞髓を教ゆ、故に一讀せば豁然として文章作法の眞髓に悟入し、名文立所に成るの妙域に達するを得。

尾池宣卿先生著◎菊判上製 正價壹圓拾錢送料拾錢

豐太閤

三上博士曰く

本書は從來出版されたる類書中最優秀のもの也。と各新聞雜誌の批評一致せり。

本書を讀まずして、眞の豐公を語る能はず。

岡谷繁實翁著 袖珍美本十册 各册 價六拾錢 送料六錢

袖珍 名將言行錄

天覽

本書は萬世不朽の名著にして國民必讀絕好無二の修養書也。

市原先生著

屋島と壇の浦

價八拾錢 送料八錢

橘君著 末醒君畫 滑稽百出

番茶一抔

價三拾五錢 送料四錢

毛内君著 末醒君畫 珍談奇聞

名士の片影

價四拾五錢 送料四錢

東京本郷森川町 振替壹九四六七番 文成社 學生讀者に限り 送料免除

目次

偉人論（二）……主筆 大町桂月

九州

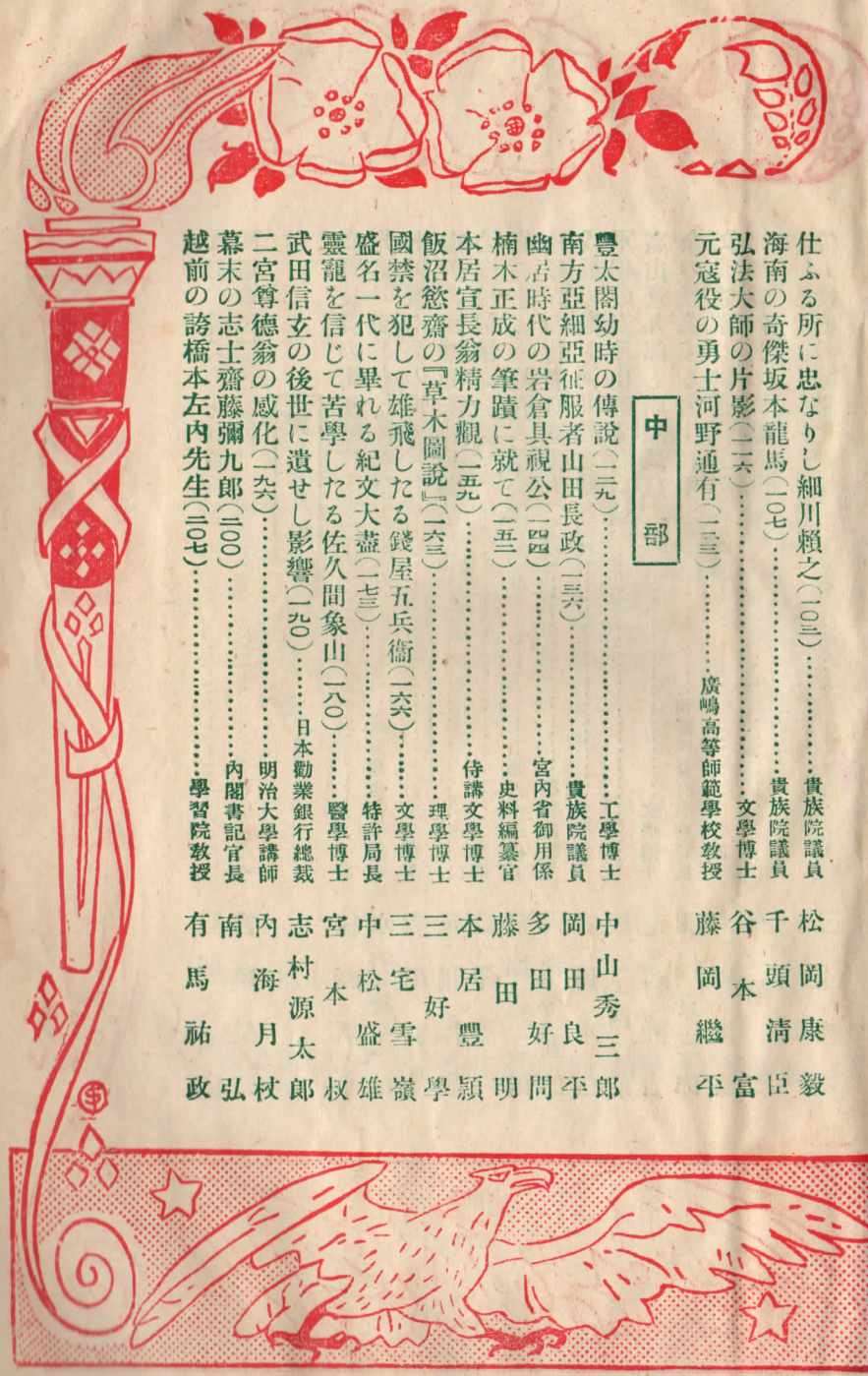
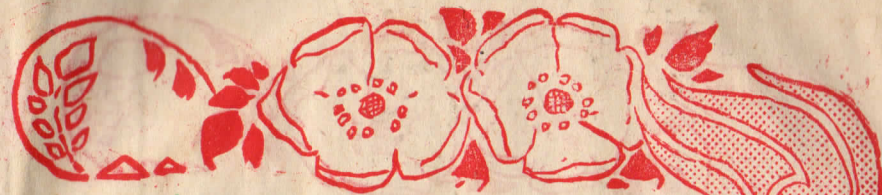
鍋島閑叟公の回顧（八）……伯爵 大隈重信
南洲詩話（一七）……文部大臣 長谷場致堂
文明の恩人本木昌造翁（二二）……文學博士 黒板勝美
横井小楠先生の印象（三〇）……農學博士 横井時敬
模範的教育家貝原益軒（三八）……福本誠
西洋文明の輸入者福澤諭吉（四七）……東京外國語學校長 村上直次郎
安井息軒先生（五四）……第一高等學校教授 安井小太郎

西部

池田光政の治績（六四）……子爵 花房義質
名和長年想出の記（七一）……中央大學校長法學博士 奥田義人
大石良雄瑣談（七八）……醫學博士 井上通泰
吉田松陰の松下村塾（八二）……中島靖九郎
修學時代に於ける頼山陽（八九）……醫學博士 永井潜
主家の犧牲となりし山中幸盛（九九）……早稻田大學教授 島村抱月

仕ふる所に忠なりし細川頼之（一〇三）……貴族院議員 松岡康毅
海南の奇傑坂本龍馬（一〇七）……貴族院議員 千頭清臣
弘法大師の片影（一一六）……文學博士 谷本富
元寇役の勇士河野通有（一二三）……廣嶋高等師範學校教授 藤岡繼平

中部

豐太閤幼時の傳說（一二九）……工學博士 中山秀三郎
南方亞細亞征服者山田長政（一三六）……貴族院議員 岡田良平
幽居時代の岩倉具視公（一四四）……宮內省御用係 多田好問
楠木正成の筆蹟に就て（一五三）……史料編纂官 藤田明
本居宣長翁精力觀（一五九）……侍講文學博士 本居豐穎
飯沼慾齋の『草木圖說』（一六三）……理學博士 三好學
國禁を犯して雄飛したる錢屋五兵衞（一六六）……文學博士 三宅雪嶺
盛名一代に畢れる紀文大盡（一七三）……特許局長 中松盛雄
靈龍を信じて苦學したる佐久間象山（一八〇）……醫學博士 宮本叔
武田信玄の後世に遺せし影響（一九〇）……日本勸業銀行總裁 志村源太郎
二宮尊德翁の感化（一九六）……明治大學講師 內海月杖
幕末の志士齋藤彌九郎（二〇〇）……內閣書記官長 南弘
越前の誇橋本左內先生（二〇七）……學習院教授 有馬祐政

果斷に富みし井伊直弼（二一六）……ドクトル・オブ・フィロソフィー 服部文四郎
鴻儒森田節齋（二二四）……文學士 宮崎榮雅

東部

高野長英の青年時代（二二七）……男爵 後藤新平
先見の明ありし佐藤信淵（二三五）……地方局長法學博士 水野錬太郎
上杉鷹山公の性格（二四二）……文學博士 吉田熊次
市井の俠幡隨院長兵衞（二五〇）……笹川臨風
塙檢校追懷錄（二五六）……男爵 澁澤榮一
修養上より見たる義公（二六二）……水戸中學校長 菊池謙二郎
法華經の行者日蓮上人（二六八）……學習院教授 大森金五郎
戊辰の亂と河井繼之助（二七六）……文學博士 吉田東伍
軍學の泰斗山鹿素行（二八四）……柴四朗
高山彥九郎と廣瀨淡窓（二八八）……文學博士 遠藤隆吉
余の景慕する蒲生君平（二九〇）……朝鮮總督府學務局長 關屋貞三郎
文武兼備の伊達政宗卿（二九五）……文學博士 大槻文彥
津輕爲信公の機略（三〇一）……外崎覺

＊　＊　＊　＊

偉人投票の結果を評す（三〇七）……文學博士 三上參次

繪畫目次

三色版
- ジャイアント（齋藤五百枝作）……表紙畫
- 川中島の戰（東城鉦太郎作）……口繪
- 矢矧橋上の麒麟兒（渡部審也作）……口繪

石版
- 偉人分布地圖……口繪

精巧寫眞版
- 吉田松陰米艦を訪ふ（石版畫）……口繪
- 福澤先生の遺業（寫眞）……口繪
- 伊達政宗の遺蹟（寫眞）……口繪
- 征韓軍の出發（五雲齋貞秀筆）……口繪

寫眞版
- 元寇役の奮戰（石版畫）……口繪
- 昔の新聞（寫眞）……口繪
- 三大偉人銅像（寫眞）……口繪
- 賴山陽の筆蹟（寫眞）……口繪
- 田原阪の激戰（一六―一七）……插畫
- 古城の面影（四八―四九）……插畫
- 義士の夜討（八〇―八一）……插畫
- 弘法大師遺蹟（一三八―一三九）……插畫
- 櫻井驛の訣別（一四四―一四五）……插畫
- 佐久間象山の畫（一七六―一七七）……插畫
- 捕卒と闘ふ高野長英（二三四―二三五）……插畫
- 水戸の誇り（二五六―二五七）……插畫

巻中挿畫目次

（木版・亞鉛凸版・寫眞銅版百八十五個）

正面より見し鍋島閑叟公……二
側面より見し鍋島閑叟公……一三
閑叟公の筆蹟……一五
西鄉南洲翁の想像畫……一八
南洲翁の筆蹟……一九
南洲翁洞中紀念碑……二一
本木昌造翁肖像……二五
同上筆蹟……二七
同上墳墓……二九
橫井小楠の像……三三
同上筆蹟……三五
藤田東湖肖照……三七
貝原益軒肖像……四一
同上筆蹟……四二・四三
福岡舊城の光景……四五
福澤諭吉翁肖像……四九
同上筆蹟……五〇
慶應義塾內紀念館……五一
『世界國盡し』中の國會の畫……五三
安井息軒肖像……五七
同上筆蹟……六一
池田光政肖像……[illegible]
姫路城……[illegible]
備前岡山城……六九
名和長年像……七三
別格官幣社名和神社……七四
後醍醐帝腰掛石……七五
名和長年筆蹟……七七
泉岳寺內義士の木像……七九
大石良雄の書……八〇
高輪泉岳寺表門の光景……八一
吉田松陰の自贊肖像……八二
松陰筆蹟……八五
同上……八七
賴山陽の肖像……九〇
賴春水・賴杏坪・菅茶山……九一
梅颸夫人の日記……九三
山陽七歳の試筆……九四
廉塾の光景……九五
山陽遺髮塚……九七
山中幸盛の像……一〇〇
同上甲冑……一〇三
細川賴之肖像……一〇五
坂本龍馬肖像……一〇九
同上書翰……一一一
[illegible]……[illegible]
弘法大師初產湯井戸……一一七
弘法大師肖像……一一八
同上眞筆……一一九
善通寺の赤門……一二二
河野通有像……一二五
石壘上の我が將士……一二六・一二七
河野の旗さし……一二八
秀吉勝家を按摩す……一三〇・一三一
太閤所持の扇面……一三三
同上鞍と鐙……一三四
大阪城……一三五
山田長政畫像……一三九
淺間神社奉納暹羅軍艦圖……一四一
山田長政の送りし方物……一四三
岩倉具視公像……一四七
同上歌並に書翰……一四九
同上和歌……一五〇
楠木正成肖像……一五三
楠木正成の書翰……一五五
楠氏最後の遺蹟……一五七
本居宣長肖像……一六〇
同上筆蹟……一六一

宣長翁の遺物古鈴……一六一
春庭・大平・內遠……一六三
飯沼慾齋肖照……一六四
『草木圖說』の挿畫……一六五
錢屋五兵衞肖像……一六七
同上密貿易の圖……一六九
加州藩の船……一七一
『俳人百家選』にある紀文の像……一七五
紀文大盡の盛宴……一七七
菱垣船……一七八
佐久間象山肖像……一八三
同上筆蹟……一八五
同上畫……一八七
同上書東……一八九
武田信玄像……一九一
武田信虎同夫人畫像……一九三
武田信玄筆蹟……一九五
二宮尊德肖像……一九七
縣社報德二宮神社……一九九
齋藤彌九郎肖像……二〇一
德川齊昭……二〇三
彰義隊奮戰の圖……二〇五
橋本左內肖像……二〇九
同上筆蹟……二一〇
松平春嶽公……二一三
骨ヶ原の景岳碑……二一四
彦根城……二一九
井伊直弼銅像……二二一
直弼を斬りし有村の佩刀……二二三
森田節齋筆蹟……二二五
高野長英肖像……二二九
同上筆蹟……二三一
『二物考』中の馬鈴薯挿繪……二三三
佐藤信淵肖像……二三七
同上工夫の異風砲異樣船……二三九
三田尻地方の鹽田……二四〇
上杉鷹山公の肖像……二四三
同公の筆蹟……二四四・二四五
同上……二四七
上杉神社の拜殿……二四八
團十郎の幡隨院長兵衞（一）……二五一
同上（二）……二五三
松本幸四郎の長兵衞……二五五
塙保己一肖像……二五七
同上の生家……二五八
德川幕府よりの御召狀……二五九
塙檢校の墓……二六〇
德川光圀の肖像……二六三
舊水戸城の眞景……二六[illegible]
『大日本史』卷頭の聖旨……二六六
英雄僧日蓮上人……二七一
日蓮上人の筆蹟……二七三
甲州身延山久遠寺の祖師堂……二七四
河井繼之助肖像……二七九
同上筆蹟……二八一
『最後に見た河井さん』……二八二
山鹿素行肖像……二八五
同上墓……二八七
高山彦九郎肖像……二八九
蒲生君平肖像……二九一
同上筆蹟……二九三
宇都宮の忠節碑……二九四
伊達政宗木像……二九六
仙臺青葉城……二九七
伊達政宗の達磨の畫……二九九
同上筆蹟……三〇〇
津輕爲信の木像……三〇三
同上の筆蹟……三〇四
弘前舊城の概觀……三〇五
津輕爲信の廟……三〇六

外にカット（四十五個）

偉人分布地圖
日本海
太平洋
朝鮮
高野長英
伊達政宗
上杉鷹山
佐藤信淵
河井繼之助
山鹿素行
蒲生君平
高山彦九郎
佐久間象山
武田信玄
日蓮
豐臣秀吉
本居宣長
池田光政
吉田松陰
頼山陽
山中幸盛
名和長年
細川頼之
河野通有
坂本龍馬
横井小楠
安井息軒
西郷隆盛

矢矧橋の上の麒麟兒

これは豊太閤の幼時・日吉丸と云つた頃・矢矧橋の上で・野武士蜂須賀小六の袖を控へて・その群に入れて呉れと頼んだといふ傳説に基づいて・渡部審也氏が特に本紙の爲に畫かれたものである・

SHINYA

川中島の戰

永祿四年九月十日の夜・黑革縅の鎧を着て赤栗毛の逞しきに跨つたる覆面の武者一騎・脫兎の如く武田の本陣へ駈け入つて・唯一打と信玄に斬りつけたが・軍配團扇に受け止められ・團扇は眞二つに折れて散つた・第二の太刀は敵の肩先・今一太刀と振上げた所を・武田の大將原大隅が槍を延して横合から突き出す・その槍馬に當つて馬驚けば・信玄得たりと隙を見て虎口を逃れた・覆面の武士は誰あらう・音に響いた越後の勇將上杉謙信・(東城鉦太郞作)

東洋寫眞製版所

世界各國の盛衰隆替一目瞭然!!!

陸軍教授　依田雄甫先生編纂

訂正增補　世界讀史地圖

第九版

四六倍判（圖面縱八寸、橫一尺一寸）洋裝頗美本●略說（菊判紙數二百餘頁）共全二冊●石版色刷大小百九圖

定價金壹圓九拾錢　小包料金拾貳錢

目次大要

ちぐりす地方及地中海沿岸諸國●希臘及希洲戰地●歷山帝國及現今露國南侵●古代伊太利●羅馬戰地●羅馬帝國●古代東洋●古代東西人に知られたる世界●孔孟釋、耶三生地●大移轉●亞剌伯帝國●シャールマーニ及神聖羅馬帝國●英佛建國●北人遠征●神功皇后征韓●雨漢五代入唐航路●五湖渤海契丹突厥●十字軍●遼宋夏金蒙古帝國博多鎌倉龍口元兵航路●百年戰爭●土耳古建國●コロンブス●マゼラン、ピサロ等の進路●大友大村有馬德川伊達使節の進路●耶揚子、安針住地●支那一朝鮮に對する遠征（倭寇）●豐公征韓●運羅平定●宗教改革、エリザベス時代●三十年戰爭●瑞典●露國の西伯利政略●水主佐平等の世界一周●拿翁帝國●トラファルガル、ワーテルロー●中央歐洲●普佛戰爭●土耳古沿革セバストポル包擊●北米の沿革●印度安南巴密布哇●海陸軍管區日清戰地平壤黃海旅順威海衛臺灣精圖●諸國領地●航路電線●日露交戰●旅順包擊奉天會戰●北露艦航路●人口人種宗教●諸國興亡●其他數十種

本圖は邦文世界沿革圖の開祖にして、其製按は著者教授の實驗に據り沿く歐米各國及び東洋の史籍に攷へ正確詳密なるのみならず、特に日東帝國民に適切なる林料を搜り古日本人踏破の遺跡は悉くこれを網羅し、以て後人が雄圖企書の大志を奮躍せしめんことに留意せり。

今や日露戰役の新材料を增補し、修訂を加へ第九版を發行す。戰捷勃興の光榮を荷ひ世界列强の斑に伍したる我國民、燈下此圖に親まば世界に於ける治亂興亡、自ら眼底に來往するの快感あらん。

發行所　東京神田　合資會社　富山房

（電話本局一〇三六　振替口座五〇一番）

御注文の方は『學生』廣告に據る旨御附記を乞ふ

空前無比の東洋歷史圖

文學士　箭内亙先生編（東洋史專攻）

最新刊

東洋讀史地圖

東洋の覇權を握れる日本國民の最も深く研究を要する東洋歷史也。歷史の舞臺は地上に在り、而も東洋の地理たる區域尨大、關係錯綜、專門の學者と雖も之が沿革を詳にするに苦む。是れ從來此種の良書更に無き所以也。著者此の缺を補はん欲し其博覽と卓識とを以て多年の研究索搜を重ね以て本書を大成す。其詳を盡し明を極めるは讀史家唯一の參考たるは呶々を要せず。

◎大判（竪一尺五分　橫一尺六寸）大小廿九圖（局部圖約廿圖、解說卅頁）

定價金貳圓　郵稅十二錢　臺樺、二十五錢　鮮、支三十五錢

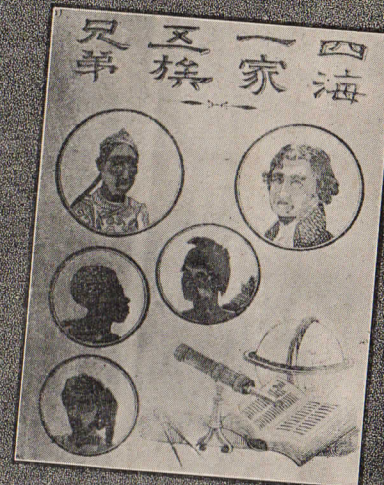
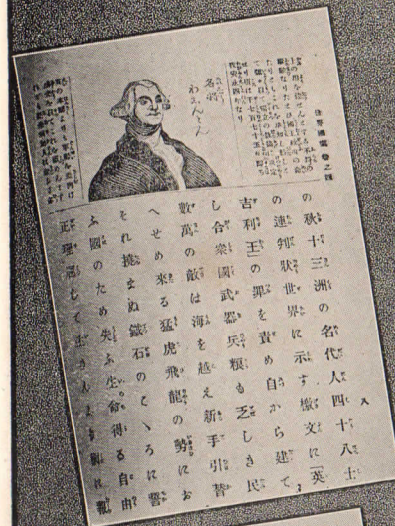
發兌　東京神田　合資會社　冨山房

（電話本局千卅六　振替口座五〇一）

賣捌店　全國各地到る所に有り

吉田松陰が國禁を犯して夜小艇に乘じ・米艦に投じて外遊の志を告げんとするところ 時は安政元年三月廿七日・處は伊豆の國下田の浦・光景宛として目に見るが如し（吉田松陰記事參照）

吉田松陰米艦を訪ふ

福澤先生の遺業

上は福澤諭吉先生の筆蹟である・中の右は『世界國盡し』の巻首・左はその覆刻の第八頁目・下の左は明治三年洋行の際先生が買ひ求め來りし教授用の地球儀・左は先生の遺著の一部分である・（村上直次郎氏記事參照）

伊達政宗の遺蹟

右の上は伊達政宗公の築いた青葉城の雪景色である・下は有名な松島瑞巖寺で・其處に左の下にある政宗公の像が安置せられてゐる上は仙臺にある伊達政宗公の廟・春風秋雨三百年・遺功今尙ほ土地の人々に慕はれてゐる・(大槻博士記事參照)

征韓軍の出發

これは五雲齋秀貞の筆になる錦繪で・豐臣秀吉の征韓軍が門司を發して朝鮮に向はんとする所である・舳艫相啣んで滿帆に風を孕ませたる雄姿は・眞に一代大英雄の企圖たるに恥ぢぬ（豐臣秀吉記事參照）

元寇役の奮戰

これは吾が將士が木の葉の如き小船に乘じて元の巨艦に近づき・檣を倒して敵に架し・躍り入つて敵兵を鏖殺するところ・教育日本歴史畫に依つて寫出する（河野通有記事參照）

◎圓滿なる常識
一 汽車に乘りたる時間
二 萬事積極的態度
三 寄宿舍生活の趣味
四 實用と趣味
五 家に對する趣味
六 住めば都
七 完全なる常識
八 容貌態度と常識
九 室外趣味と自主趣味
一〇 人情に通ずる必要
一一 各方面の人情

◎青年團の話
一 人格大小の說
二 地方偉人
三 青年團事務所
四 學問と建築物
五 青年團と地方改良
六 青年團相互の關係

◎農家と獨立思想
一 新鮮なる食物
二 自然の情趣
三 地面に接近すると
四 近處の交際
五 靜穩なる生活
六 家屋の周圍
七 家の周圍の整頓
八 手の掛らぬ裝飾
九 自主獨立
一〇 家屋と精神

◎地方慣習の利害
一 三三九度
二 獻酬
三 盆踊り
四 宴會の習
五 年始廻り
六 年中行事
七 慣習打破の必要
八 御幣擔ぎ

◎日本我の說
一 日本我の要素
二 日本我と自負心
三 日本我と自尊心
四 日本我と生活趣味
五 日本我の自覺
六 言論と實行
七 自己の實行
八 日本我の複雜
九 知識上の興味
一〇 外國の事に冷淡
一一 意識の膨脹

◎社會思想の必要
一 商人と社會
二 農夫と社會
三 社會意識
四 社會各人の義務
五 社會の趣味

◎自覺と修養
一 腹中一點の光
二 腹の切り所
三 圓滿なる經濟
四 過誤の利用
五 遜讓なきは不幸
六 病氣も一好機會
七 精神修養の機會
八 時々刻々の生活
九 理想と實際

一 一事を疎にすな
二 一瞬間の修養
三 細事と大事
四 細事に注意の必要
五 原始的生活

◎孔子と釋迦
一 理想の人
二 孔子も人間
三 釋迦の悟
四 解脫の光
五 釋迦は何を讀みしか
六 孔子の多方面
七 孔子の不動心
八 孔子の悟
九 孔子の勉強

◎生活の意味
一 諸方面の生活
二 生活の模擬
三 可能的生活
四 精力善用論

◎都會と精神

◎讀書法
自一、至十三

◎特殊部落問題
一 特殊部落の階級
二 特殊部落の異名
四 感情の融和
五 貧民救濟

昔の新聞

嘉永六年六月北米合衆國提督ペルリ・艦隊を率ゐて相摸浦賀に入港した時・七万六千の軍勢が陸地を警固した様を・木版印刷にして頒布したもの・つまり當時の新聞と見て差支ない（井伊直弼記事參照）

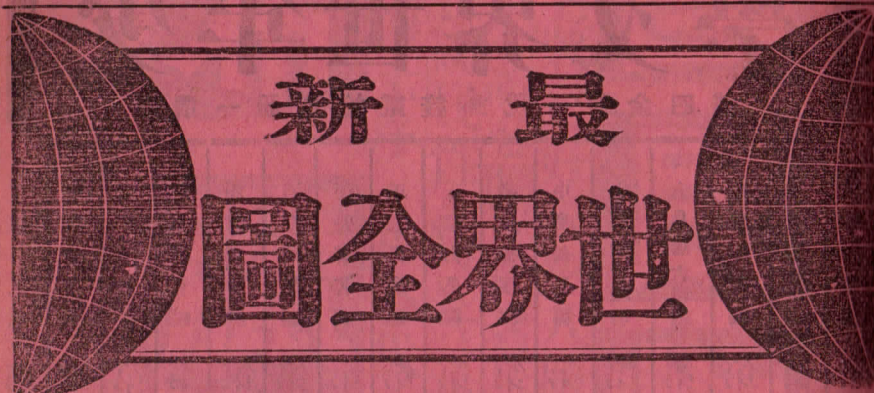
御注文の方は『學生』廣告に據る旨御附記を乞ふ

三大偉人銅像

上の右は宮城前二重橋外にある楠公の銅像・左は筑前東公園にある日蓮上人の銅像・下は横濱に建てられたる井伊直弼の銅像である
聲望と事業とにこそ差異はあれ・國に盡せし志は千古民人の龜鑑とするに足る（藤田・大森・服部三氏記事參照）

頼山陽の筆蹟

雲耶山耶呉耶越水天髣髴青一髪萬
里泊舟天草洋煙横篷窗日漸没瞥見
大魚波間跳太白當船明似月

これは子爵山内豊尹君の所藏に係るものである・『雲耶山耶』の詩は山陽の詩中で最も人口に膾炙してゐるが・筆端淋漓・天草洋の雄大なる光景を偲ばしめて餘りある・山陽は書家ではない・興至れば酒間筆を採つて紙面墨痕を印す・線々點々皆力あり・書は人格の影也といふ語の事實なるを偲ばしめる・（永井博士記事參照）

文學博士坪内雄藏先生校閲

少年世界文學

正價一冊金拾貳錢郵稅一冊金四錢

正宗白鳥編　第一編　ふしぎの魚　渡部審也畫
中島孤島編　第二編　猿太郎　渡部金秋畫
河井醉茗編　第三編　神代の話　尾竹國觀畫
河井醉茗編　第四編　はちかづき姫　尾竹竹坡畫
西村醉夢編　第五編　イソップの話　東城鉦太郎畫
石原萬岳編　第六編　六勇士　東城鉦太郎畫
河井醉茗編　第七編　蛤の草紙　尾竹國觀畫
正宗白鳥編　第八編　梅王松王櫻丸　鏑木清方畫
正宗白鳥編　第九編　葛の葉姫　鏑木清方畫
高須梅溪編　第十編　七夜物がたり　一條成美畫
中島孤島編　第十一編　百姓と惡魔　東城鉦太郎畫
大島居古城編　第十二編　五斗兵衛　鏑木清方畫
大島居古城編　第十三編　賴光四天王　尾竹國觀畫
平尾不孤編　第十四編　新伏姫　小島沖舟畫
中島孤島編　第十五編　蝶の魔法　小島沖舟畫
佐野天聲編　第十六編　ロビンソン物語　一條成美畫

發兌元　東京神田　（電話本千卅六 振替五〇一）　合資會社　冨山房

御注文の方は『學生』廣告に據る旨御附記を乞ふ

文學博士　芳賀矢一先生著

九版

國民性十論

近世の名著として好評忽八版を重ねたる本書は、世界の大舞臺に立て活動せんとするものゝ必讀必購の快著たるのみならず、教育家父兄も亦耽讀して其子弟をしてよく我國民性の特長を了知せしめ益我國體の精華を發揮するに努めざる可らず

四六判　全一冊　定價七拾錢　郵稅金六錢

坪内博士序　杉谷代水先生譯補

九版

希臘神話

菊判全一冊　四百卌頁　定價一圓五十錢　郵稅十二錢

坪内博士序々の一節

希臘神話はパーナツサスの山腹に野生して亂れ咲ける無數の花卉に比すべし。泰西の名ある文藝にして此花の蜜によりて釀されざりしもの殆ど稀なり。はるか後代の詩人藝術家とても大抵たびは狂蜂となりてこゝに遊べり。希臘神話を閑却するは西洋文藝の大半を閑却するにひとし。代水君の此篇ある所以なるべし……西洋古文學研鑽の技折として賣むべく新しき詩材として讀むべく亟未高き童話としても讀むべし。

發行以來好評嘖々今其第八版を刊するの盛を見る。紳士家庭必備の名籍。

東京神田　冨山房　電話 四一三〇 一〇三六　振替口座 五〇一番

郷土偉人号

GAKUSEI

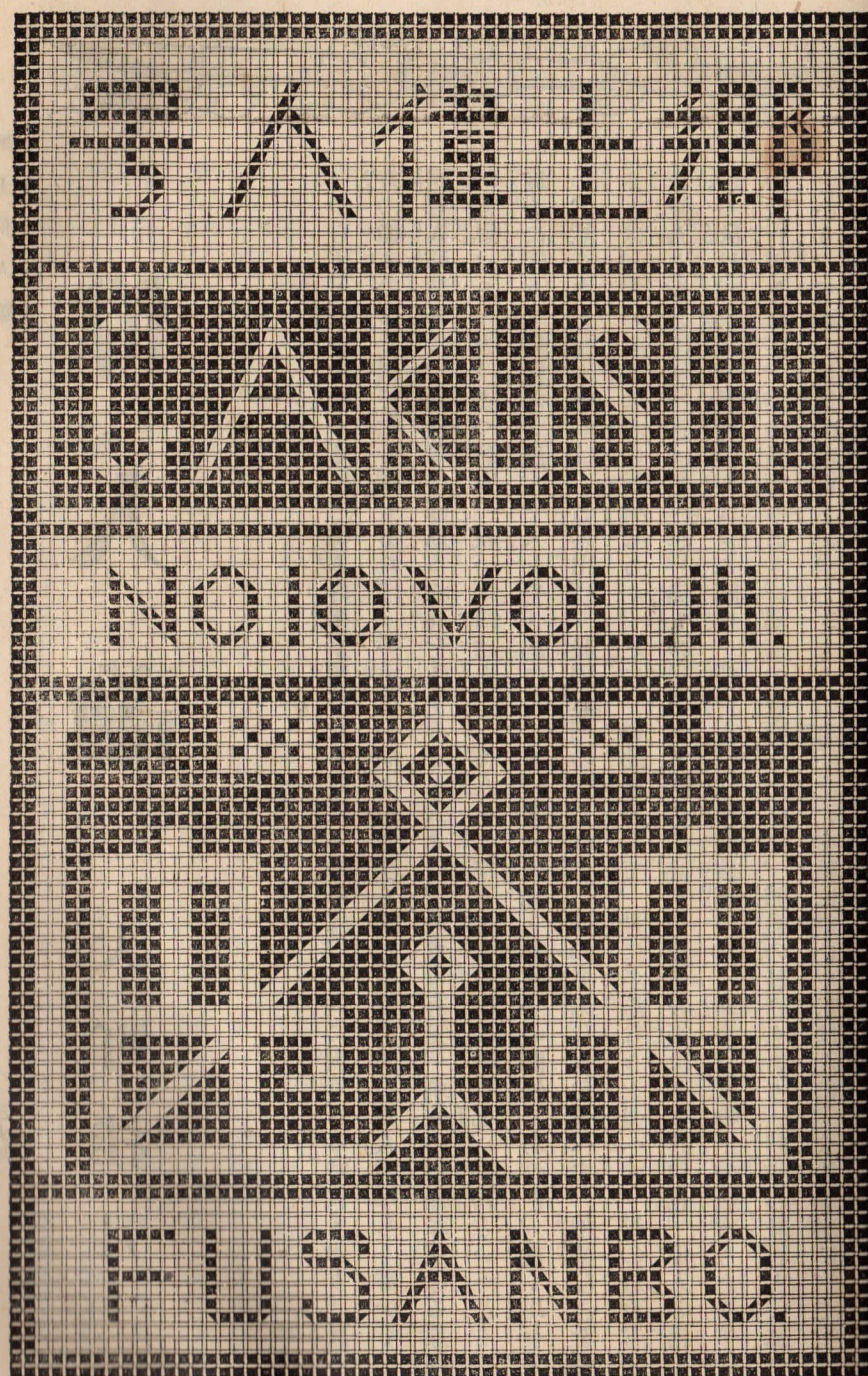
NO.10 VOL.III

學生

FUSANBO

偉人論

大町桂月

一

つら〳〵歴史を按ずるに、偉人の多く出でたる時代もあれば、一向に出でざる時代もあり。又一方に偉人の多く出でたる國もあれば、一方に一向に出でざる國もあり。異なる人種ならばともかく、同じ人種なるに、如何なれば斯る相異を生ずるぞと云ふに、教育の有無、刺戟の有無が主なる原因かと思はるゝ也。まづ教育に就いて曰はんに、偉人を生ずる最大原因は教育也。動物といへども、教育に因りて變化す。況んや人をや。馬にしても、多少土地と氣候との關係もあれど、能く馬を愛し、能く之を養ふ處には、名馬出づ、我國奥州の野これ也。世に名馬なきを憂へず、伯樂なきを憂ふとは、古の不遇の士の歎聲なるが、之に一轉語を下して、世に名馬なきを憂へず、馬の教育なきを憂ふとも言はゞ、言はるべし。偉人の出でざる時代は必ずや教育の振はざる時代也。偉人の出でざる國は、必ずや教育の振はざる國也。教育とは唯學問技藝のみに非ず。人物上の教育もあり。武の教育もあれば、商の教育もあり。勇氣の教育もあれば、禮義の教育もあり。時代の教育といふことあり、父祖の遺傳的教育といふこともある也。次に刺戟に就いて云はんに、太平無事にして、唯驕樂に耽り、安逸を貪りて、刺戟なければ、人はみな凡人となるべし。猪を養へば、豚となり、之

を山に放てば、もとの猪となるとかや。刺戟の有無、此の如し。富豪の子弟に豚犬多く、世亂れて英雄あらはる。之を碁の如き遊戯に見るも、何處へゆきても、笊碁の域を脱せざるぐらゐのものなるが、唯初段以上の人が一人でも居れば、笊碁の域を脱せるもの少からず。これ教育の致す所なれども、刺戟の力とも云はれざるにもあらず。わざ〳〵學ぶ了簡なくとも、周圍の刺戟にて、自然に強くなる也。生存競爭も強き刺戟也。生活の氣樂なる處には、活氣なく、從つて偉人は出でざるべし。

二

明治の世には、各方面に偉人輩出したり、偉人とまで行かざる迄も、偉人的人物多く出でたり。これ僅々五十年前に國を開きたるにも拘らず、一躍して世界の一等國に列したる所以也。斯く明治の世に偉人多く出でゝ國家の大發展を遂げたることも、教育と刺戟とにて說明が出來るべし。我國は米艦に叩かれて國を開きたれども、其時より始めて目を覺まして教育を施したるに非ず。我國は二千年前、既に支那の文明を入れたりき。印度の文明も入れたりき。固有の精神的文明之と融和し武門起るに及びて武的教育勃興し、人情優にして風俗厚く、夙に君子國の稱ありき。殊に江戸三百年の間、文武の教育盛なりき。されば、國を開きて西洋の文明に接したれど、日本國民は科學を了解し之を應用するに困難ならざりき。武士の階級すたれて、徵兵の制を採りたるも、日清戰爭に、日露戰爭に、世界最强兵の實を舉げたりき。刺戟に至りては、大に甚しきものあり。米艦渡來の前

既に露艦の來侵ありて、天下の識者は海防に苦心したりき。米艦渡來よりは、開港攘夷の爭海内鼎沸し、勤王論となり、佐幕論となり、終に伏見鳥羽の戰となり、王政維新となりたるが、外部の刺戟は益強く、今日とても、依然として甚し。我國民一般に開闢以來、明治の世ほど強き刺戟を受けたることなかるべし。然るに刺戟に屈せざるのみならず、刺戟あればある程猛進して、世界の人士に奇蹟と云はるゝまでに光りかゞやく新帝國を擁立したり。敎育の程度と刺戟の程度との強きこと空前なりしだけの事ありて、人才の輩出せし事も空前也。國力の勃興せしこと亦空前也。

三

明治の世は、日本一般に人才が多く出でたるが、なほ細かく府縣に就いて云へば、比較的多く出でたる處もあれば、少く出でたる處もあり。政治と軍事との權力を握りたるは、薩長人士也。西鄕隆盛、大久保利通、黑田淸隆、松方正義、西鄕從道、大山巖、川上操六、樺山資紀、東鄕平八郎、山本權兵衞などの人々は薩人也。木戸孝允、大村益次郎、廣澤安任、伊藤博文、井上馨、山縣有朋乃木希典、桂太郎、兒玉源太郎などの人々は長人也。其他の人才薩系に屬せざれば、長系に屬するもの多し。肥の副島種臣、大隈重信、土の後藤象次郎、板垣退助などは、自から別系也。とにかくに薩長は、政治と軍事とに最も多く人才を出したり。明治政府には薩長の藩閥ありて、政黨内閣の邪魔を爲したるが、それも歷史を探れば、さう成るべき次第あり。維新の大革新は、薩長人士が最も功ありき。之に土肥を加へて、勤王の一大四藩の稱ありき。四藩が斯く偉功を立つるには、つまり人才が多かりしから也。幕末の大騷動は、四藩の成功にて一幕を結びたりと云ひて可也。他の二百餘藩は與らず。偉人は四藩にのみありて、他の諸藩には無かりしかと云ふに、さうとも限らざるが、とにかくに、幕府の最末には、薩長が天下の志士の梁山泊なりき。その前には、何處に人才が多かりしぞと云ふに、水戸藩也。然るに水戸藩は同士討して、人才幾んど盡きたり。江戸三百年の間、天下の最も亂れしは、安政以後にして、その間に薩長の人才が最も現はれしは、所謂世亂れて英雄現るゝもの也。

四

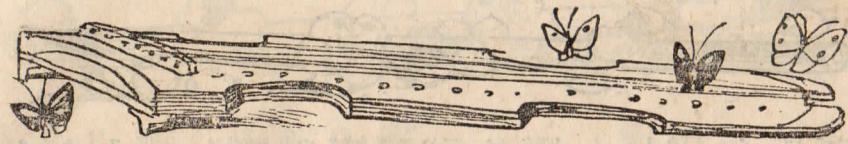
なほ德川幕府の初に溯れば、德川が前田を壓し、毛利を壓し、島津を壓し、伊達を壓して、德川幕府を起したるは、德川の本國なる參河に人才が多かりしからの事也。參河に人才多くして德川起り、人才少なくなりて德川倒れ、之に代りて、人才の多かりし薩長が藩閥をつくりたり。人才多ければ、國興り、人才無ければ、國亡ぶ。獨り薩長のみならず、源氏然り、平氏然り、北條氏然り、足利氏然り。方今世界的割據の世、どの國家もこの例にもるゝことを得んや。

五

我國古來偉人多し。支那は今は振はざれども、國大きく歷史古きだけ偉人の數は、なほ一層多し。

されど一時代だけを見れば、偉人の中絶せし事もあり。これ興亡の絶えざりし所以也。希臘にも偉人多かりき。羅馬にも偉人多かりき。されど、英と云ひ、米と云ひ、獨と云ひ、露と云ひ、佛と云ひ、方今世界に雄視する國々は、比較的歴史の新しき國也。雄視しつゝあるは、人才盛なる也。人才衰ふれば、今日の雄國、明日の亡國とならむ。明治の日本は、初めに西郷大久保木戸を有したり。後に伊藤東郷乃木を有したり。大正の日本、偉人の多きことに於て、豈に明治に劣るべけんや。

六

偉人とは、唯政治上若しくは軍事上に偉大なる人のみを云ふに非ず。實業上にも偉人あるべし。學問上にも偉人あるべし。發明界殊に偉人なかるべからず。大將には大將の偉人あるべく、兵士には、兵士の偉人あるべし。むかし廉頗は大將としての偉人なりき。趙の兵を率ゐて常に勝てり。晩年楚の兵を率ゐしに、常に敗れたり。これ廉頗の罪に非ず。趙には兵士としての偉人あれども楚には兵士としての偉人なきに由る也。勇將の下、弱卒なしと云へり。物は類を以て集る。上に偉人なくんば、下にも偉人なし。されど、上に偉人ありとも、下餘りに無神經なれば、上の偉人も亦之を如何ともする無し。餘りに神經過敏なるも、困れど、偉人に感ずるの神經は敏なれ。つとめて賢友に交れ。つとめて偉人に接せよ。つとめて偉人の傳を讀め。さるにても、一體偉人とは如何なる人をさすといふことを一考せよ。余は人才の語を用ゐたるが、人才とは主として才智のある人物をいふ。大才となれば、偉人なれど、才小なれば、偉人とは云へざるべし。余は玆に偉人を解して云はむとす。先づ第一に偉人とは強き精神を有する人也。精神が弱くては、何の役にも立たざる也。強き精神にも種類あるが、金が取りたさに、火事の中に入るなどは、慾が強き也。精神が強きに非ず。それが御眞影の場合ならば、精神が強き也。義の爲めに水火を避けず、如何なる困難と闘ひても初一念を翻さず、驚かず、恐れず、疲れず、弱らず、從容として勇往するが、まづ精神の強きといふもの也。次に良き頭腦を有する人也。如何に精神が強くても、頭腦が惡くては、偉人の資格なし。頭腦が良ければ、常人のわからぬこともわかり、思ひつかぬことを思ひつき、出來ぬことが出來る也。次に體軀の強健といふことも、一條件也。必ずしも其長短大小を問はず。強き身體には、強き精神が宿ると云へども、精神だに強からば、弱き身體を強くすることも出來る也。最後に其行爲が全く惡念より出でゝ、毫も世を益することなくば、如何に非凡なる事をなすとも、余は之を惡魔と云ふべし。偉人とは云はざるべし。偉人の事業には、善美若しくは壯快が伴はざるべからず。それが一時的ならずして、永遠的に、一國的ならずして世界的ならば、偉人益偉也。もし又世に良き頭腦を有し、強き精神を有し、強き體軀を有して偉人の資格を有するものありとも、唯己れのみを善くして世に何もなさぬならば、寳の持腐れ也。偉人と稱するに足らず。諸葛孔明もし臥龍にて終りしならば、恐らくは偉人とは云ばれざるべし。世の青年の士偉人の傳を讀むならば、請ふ反省して見よ、我精神は果して強きかと。弱からば、強くする工夫を爲せ。我頭腦は果して良きかと。良からずんは、良くする工夫を爲せ。我體軀は果して強きかと。弱からば、積極的に運動せよ。消極的に養生せよ。而して我最善と信ずることに全力を注いで趣味を以て當れ。一時的ならずして、一生之に當れ。而して其爲したることの果して偉大なるや否やは、徐に人の評に任せて可也。

鍋嶋閑叟公の回顧

伯爵　大隈重信

少年時代の眼に映じたる公

我輩は元鍋島閑叟公の臣。少年の頃には一も二もなく有難かつたが、漸々成長して小學を卒へ、大學に入るに逮んで、世間の事が少し分るやうに成つてからは、公の政治に就いては感服もし、又感服しないこともあつた。否大に不感服で反對をして、學校を放逐されたことがある。無論我輩一人ではなかつたが、我輩は元兇として最も重い罪を科せられた。閑叟公は是等について全部知つては居られまいが、餘程働きのあつた君主で、法政の事を擧げて臣下に委ねなかつたから、勿論責任はあることであらう。併し今からして顧へば、我輩等は當時年少氣鋭の學生で、教員の遣口に不滿を懷いて、それに反抗したのに過ぎない。つまり今時の學校でよくやるストライキ騷ぎのやうなものだつた。それから活動の時代に入つては、公から叱られたことが度々ある。酷く叱られたのは前後二回で、一度は切腹といふ際どい處まで往つたが、公は『それには及ばぬ。まだ書生の事やから、寛大な處置を取て説諭位に留めて置け』と云はれ、間もなく牢から出されて謹愼を仰せ附かり、祿も取上げられずに濟んだ。處が再犯——又候忌諱に觸れることをやつたので藩の司直は怒るまい事か、憤然として怒つて我輩等に腹を切らさうとした。處が公はそれと知つて『彼の所爲は惡意があつたのではなく、寧ろ藩の爲を思つてした事である。今は非常の時擧國動亂せんとしてゐる、此の時に當つて、假令一人たりとも處罰すれば、闔藩の人心動搖して却つて良からぬ結果を見よう。』と云つて我輩等を再び許された。此の時倶に藩法を犯した著名な面々は、副島、大木、江藤、我輩などで、江藤はたしか三犯、我輩は再犯であつた。而も皆許されて身を全うすることの出來たのは、一に公が時勢を觀るの明と寛大なる政治とによると、我輩等は當時涙を流さん許りに敬服感謝した。

大罪人深川を拔擢す

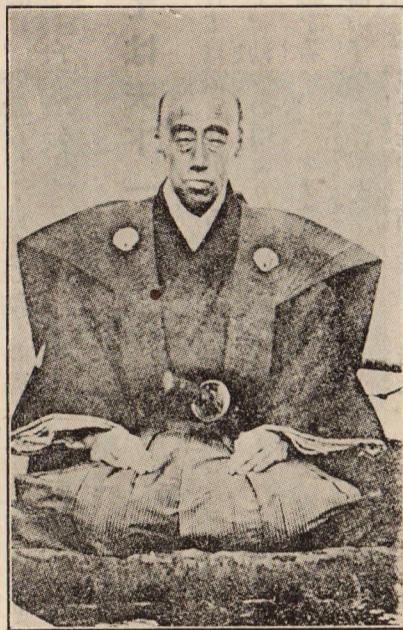
當時封建の制漸やく紊れて、各藩共内部は大分動搖してゐたが、規律は尚ほ嚴格で、主義主張の爲めに切腹を命ぜられたものが多かつた。水戸、土佐、肥後などは尤も藩論沸騰し統一を缺いた爲人を殺す事が自然多かつた。黨派の爭にさへどし〳〵と人を殺して顧みなかつた。我輩よりも先輩で、副島よりは少し後輩、大木と同年輩のものに深川良藏といふのがあつた。劍客で、學者で、一番始めに脱藩した男だ。此の深川が安政五年、堀田備中守が上京して條約の批准を奏請し、且つ勢猛烈なりし京都の攘夷論者を壓服せんとした時、堀田を刺さんとして岩倉などに會見した。京都の藩邸の留守居は却々氣慨ある男で、勤王の精神にも富んで居たが、此の事を知つて深川の遣り口が餘り過激に失するのを遺憾とし、呼び寄せて注意を與へたところ、深川は中々聞き入れぬ。何うしても實行すると云ふ、若し事露はれては一大事、累を藩公に及ぼすは必定と、留守居は深川を抑留して國元へ放逐した。藩の有司は容易ならぬ大罪人と、重罪に處しようとした

處、閑叟公は之を聞いて、『何を爾うびく〳〵する？良藏はまだ書生ぢや、書生ならば乃公でもやり兼ねまい。面白い男ぢや、乃公が召使はう』と、拔擢して自分のお側に使はれたので、役人共は開いた口が塞がらなかつた。深川は之が爲めに酷く感激して、國家の事も何も忘れ、一生鍋島家に奉公する決心をした。閑叟公は退隱の時、深川を世嗣に與へて近侍せしめたが、勤王家であり、京都の縉紳の家に出入してゐたから、その聲名は自然朝廷にも聞えて居り、維新後屢々召し出されたが固辭して之に赴かず、一生鍋島家を離れずしてその基礎を固めた。岩倉公などは酷くその爲人に敬服してゐられた。深川が愆く自己を沒却して、一生を鍋島家の爲めに竭くす決心をしたのも、つまり閑叟公の厚情と知遇とに感激したからである。——佐賀は大藩で、薩州と長州とを除けば、三百諸侯の中で最も人間の多い方であつたが、よく之を統率して動搖せしめず。切腹、暗殺仔りに行はれ、綱紀地廢して地に墜ちし時に於いて、平和の裡に維新を迎ふることを得たのは全く閑叟公の技倆と云はずばなるまい。實を云へば我輩は始終不滿に思つてゐた。維新前風雲急なる時に丁つては、屢々公を動かさうと思つたが中々動かぬ。或る時の如きはその心事を疑つて、鋒先を向けようとまで思つたこともあるが、何處やら豪い所があるので不滿の中にも何事かを期待して、我輩は勿論過激の輩も沈靜して時の到るのを待つてゐた。——此の、今に起つ、も少し經てば何事かをすると云ふやうに思はして人心を繋ぎ、闔藩をして何等の動搖なく、廢藩置縣の際完全に藩籍を奉還し得たのは、列侯中稀に見るの事實ではないか。

英雄に非ず君子なり

閑叟公の長所は、此の際に最も遺憾なく發揮せられた。公が父の遺領を襲いだ時には、國帑疲弊して財用給しなかつたが、公は意を財政に用ゐ、始終節儉を以て一藩を維持し、その末年には大分剩餘を生ずるに至つた。外國の事起ろや國内騷然として寧日なく、諸侯は自領と江戸との間を屢々往來し、それには兵隊を多く引き連れねばならず、又朝廷よりも幕府よりも兵備を修めよ〳〵との命令屢次來るので、俄に西洋の兵器を買ひ入れたり、軍艦を買入れたり、大砲を鑄造したりして、財政は甚だしく困難に陷つたが、閑叟公は多年節儉蓄積したるものを以て之に充てた。佐賀では紙幣を發行して居つて、それには準備金が積み立てゝあつたが、國用多端の際にも金は減つても準備金にまで手を附けるに至らず、藩籍奉還に際しては發行紙幣に對する準備金を政府に献じ、別に兵器、大砲、軍艦、汽船若干をも納附した。かくの如きは、當時に在つては稀に見る所で、公が口先ばかりでなく實行に努めたことも分り、又單に政治のみでなく財政にも苦心してゐたことが分る。而して是れ等の施設は、皆公自身が中心となつてやつたのであるが、實は闔藩に公以上の人物が居ず、假令居るにしても餘りに聰明なる公は之を自らせざるを得なかつたであらう。これ我輩が閑叟公を英雄に非ず君子なりと云ふ所以だ。その末路に過なけれど、保守的に傾き大功なかりし所以も亦此處だ。

正面より見たる鍋島閑叟公

姦雄か將た君子か

維新前公武の間に確執を生じて風雲頻ぶる急に、當然活動を開始せねばならぬ時にも、公は動かざること山の如くであつたから、少壯活動の青年は甚だ齒痒い事に思つてゐた。併しこれは公が老年、而かも病弱で臣下また多くは年を老つて居り、お剰に朱子學で固めた融通の利かぬ人達が多かつたからであらう。然るに文久慶應の際旗幟漸く鮮明となり來るや、公は俄然として活動を開始した。是に於いて乎、惡く云ふ者は公を以て姦雄なりとなしたが、公は決して勢を見て利に就くが如き人ではなかつた。此の説は二つながら誤つてゐる。遠く當時に溯つて公の周圍と境遇とを見よ。公自身は年老い身衰へ、嗣子は溫柔平和の性質で、到底、亂世に起つて腕を揮ふに

堪へぬものである。良材ありて之を扶けんか、事甚だ期し易しと雖ども、倩々家臣を顧みれば手足となつて働くものが大して見えなかつた。かと云つて自分は多病である。何時までも活きて居られるものでない。聰明なる公は惓く考へて、遂に保守に傾いて了つたのである。故に表面に現はれた公は、奸雄らしく見えてゐても、裏面に隱れた公は確に君子であるのだ。

學問にかけては天下一

三百諸侯の中、學問にかけては公と比肩する者があるまい。公は非常な學問好で、幼少の頃より和漢の學を修めたが、洋學にも亦た眼を着け、ペルリ渡來以前から既に西洋研究を始め、藩の子弟に洋學を學ぶことを慫慂し、或は洋學家を招聘し、或は長崎在留のシーボルトに金を餽つて新書を購はしむる等、西洋文明の輸入に腐心した。當時西學の研究は勿論、洋書の輸入等は幕府の禁ずる所であつたが、公は長崎奉行に依賴して、巧みに新文明を輸入することに努めた。早く弘化の末年に着手して竣功し　嘉永六年彼理來航の頃には已に港口に偉觀を添えて居た長崎の新式海岸砲もそれに据え附けた大砲も、皆これ佐賀藩で築造、鑄造したもので、米艦や露艦は心秘かに之等に驚いてゐたのである。——當時諸侯の中、才名一世に高かつた者薩摩の島津齊彬、越前の松平春嶽、土佐の山內容堂等その人に乏しくなかつたが、閑叟公の眼中には唯だ齊彬公一人あつたのみで、他は毫も之を信用してゐなかつた。水戶の烈公の如きは年長者でもあり、交を求められたけれども、藤田東湖の歿した後は段々と遠くなつて了つた。公は天下の形勢を觀察して、その亂る丶近きに在るを知り、心中幾度か之を斂むるものなきやを考へ、轉た寂寥の感に打たれざるを得なかつた。時恰かも安政のコレラ流行に際し、畏敬せる齊彬公は敢なく倒れ、殘る所は井伊掃部頭であるが、これも櫻田の變に僵されて了つた。烈公一人の力何をか能くせん。他は凡庸の君子のみ、談ずるに足らず。惓く考へて公は、日本の前途に對して限りなき憂慮を懷いた。

當時陽明學は禁じられてゐたので、公も表面は朱子派のやうな顏をしてゐたが、その實陽明學を尊んで『大學』の朱註を迂遠極まるものだと詆譏した。公は雄辯で、文學の才に富んでゐたが、詩は殊に巧みで、常に『陽明文集』を愛讀した。嘗て烈公と小石川の邸に會した、時は中秋、明月天に懸つて清光座を照らした。公の即吟の律詩中に曰はく、

回頭世事謾紛紜。
誰以浮譽附白雲。
天下英雄幾屈ㇾ指。
平生知己獨負ㇾ君。

つまり人を馬鹿にしてゐたのだ。この詩などを見ると公は如何にも英雄らしい。公は幕府から長崎の警備を命ぜられてゐたが、一年置には自身で長崎へ行つて、和蘭人に質問したりして、他人よりも早く、大砲、砲臺、軍艦などの知識を得た。最も手近な例を擧げれば、公は日本人中最も早く種痘を施した人で、始めバタビヤから種を取寄せたが、船路が遠くて役に立たなかつたので、更に香港より新らしい種を仕入れ、先づ之を自分の娘に種ゑ、直ぐ江戶に上つて將軍家の誰彼にも種ゑしめ、又藩士に令を下して自分の娘の種痘から取つた種を種ゑしめた。かくの如く公は弘化の頃よりして西洋文明の輸入に盡力し、城下に西洋流の醫學校や、病院をさへ建つるに至つた。

側面より見たる鍋島閑叟公

少壯氣鋭の書生を登用す

こんな次第で、公は學問を奬勵せられたが、啻に奬勵したのみならず、之を政治上實際に應用した。公の遺領を襲ふや、國用給せず財政は太だ苦しかつたが、公は國に就いて二三年の後、父の時から政治に携はつてゐた役人共を試驗する積りで

諸種の命令を發して有司の報告を徵し、然る後自ら馬を馳せて實地に檢分し、報告と實地とが甚だしく懸隔せるを見て大に驚き、早く親讓りの固陋なる老役人を免職して新進有爲の秀才を大學（凡そ藩士、七歲となれば小學に入れ、十六歲以上は大學に入らしめた。）の書生中より登用した。新役人は何れも年齡二十五六歲の若者で、活潑な代り失策も多く、これが爲めに藩論沸騰して一時は何うなることかと思はれた。かく改革の結果は面白くなかつたが、中でも社寺の淘汰に就いては奇妙な現象を生じた。子供心に覺えてゐるのは城內の天滿宮の事。この社は太宰府から遷つたもので、靈驗極めていやちこであるとかで、當時大に流行してゐたが、その流行は三十年來の事だといふので、若手の郡奉行はこんな淫祠を殘して置いては不可ぬと、命じて之を取毀たしめたが、土地の者は恐れて近かぬ。已むを得ず自分で松明をつけて火を祠堂に移して燒き拂つたが、間もなくその息子が頓死したので、そりや見た事かと土地の人が騷ぎ立てる。こんな事が他にも多くあつたので、その奉行は免職になつたが、兎も角も此の改革によつて淫祠は毀たれ、寺院の祿は取り上げられ、闔藩の人心が一新せられた事は著明である。

それから後世まで利益を與へたのは、女郎屋、芝居、料理屋の廢止であつた。この法度は明治維新まで續き領內には一軒の茶屋も、料理屋も、劇場もなく、人民は角力も、芝居も知らずに過ごした。勿論旅の藝人も關門を通さず、禁を犯せば直ぐ縛り上げると云ふ風に號令が甚だ嚴重であつたので、風俗は大に修まり、冗費は頗ぶる省かれたが、餘り極端な禁欲主義で、四十年來一切の娛樂に遠ざかつた人民は、氣欝し情荒んで、五六人寄つて酒を飲めば直ぐ喧嘩をするといふ風であつた。しかも此の美風は今尙ほ遺つて、佐賀縣內で藝妓や女郎になつてゐるものはないと云ふ事だ。

特筆すべき貧民保護政策

今一つ云ふ可き事がある。それは何處でも企てゝ而かも成功しなかつた貧民の保護である。閑叟公は夙に豪農の土地所有を制限し、五町步以上の地主は、以後十箇年間小作料を小作人に惠めと云ふ命令を出したが、地主の間には異論が起つて不平の徒は、暴動も起しかねまい勢であつたが、遂には泣寢入になつて十年を過ごした、處が矢張り小作人が貧困だと云ふ理由で、もう十年延期といふことになり、今度は最う廢止かと思つてゐると、廿年目に又もう十年延期との命令。此度こそはと待つてゐると三十年目が恰度明治元年、此の保護政策の爲め、佐賀藩內には大地主、大金持といふものはないが、農村は一帶に富裕で、事實上社會主義が強制的に行はれて居たから外國へ移住しようといふやうな者は少ない。併し因習久しければ俗となるの諺通り、三十年來我が物のやうに耕作して來た小作人は、自己の所有物として權利を移轉したものもあり、維新後大分八釜敷い問題となつて、政府も長らく困しめられたが、遂に二十五萬圓を支出して不十分ながらも始末をつけることに成り、今日では比較的土地の分配も旨く行き、貧富の懸隔も甚しくないといふ事である。併し恁くの如き保護政策は、民人の進取的氣性を失はしめる虞がないか、社會學上最も研究を要すべき材料で、他藩と比較をして見たら面白からうと思ふ。それは兎に角、恁くの如きは、皆公が學問を實地に應用して見ようといふ計畫から產み出された問題なのである。

鍋島閑叟筆蹟（副島伯所藏）

封建の終を完うせる人

最も早く西洋文明に接觸した公は、次第に國を富ます爲めには政治は勿論、商業、工業を奬勵するの要あり、從つて、航海を盛んならしめざる可からずと、その方面にも努力して、多くの帆前船を造つた。蒸汽船も造らうとしたが、これは成功しなかつた。最後に最も失望したのは製鐵事業である。公は藩としては不相當の金を投じて、その機械を買ひ入れたが、最初、機械さへ買ひ入れゝば据え附けて直ぐ役に立つこと

田原坂の激戰

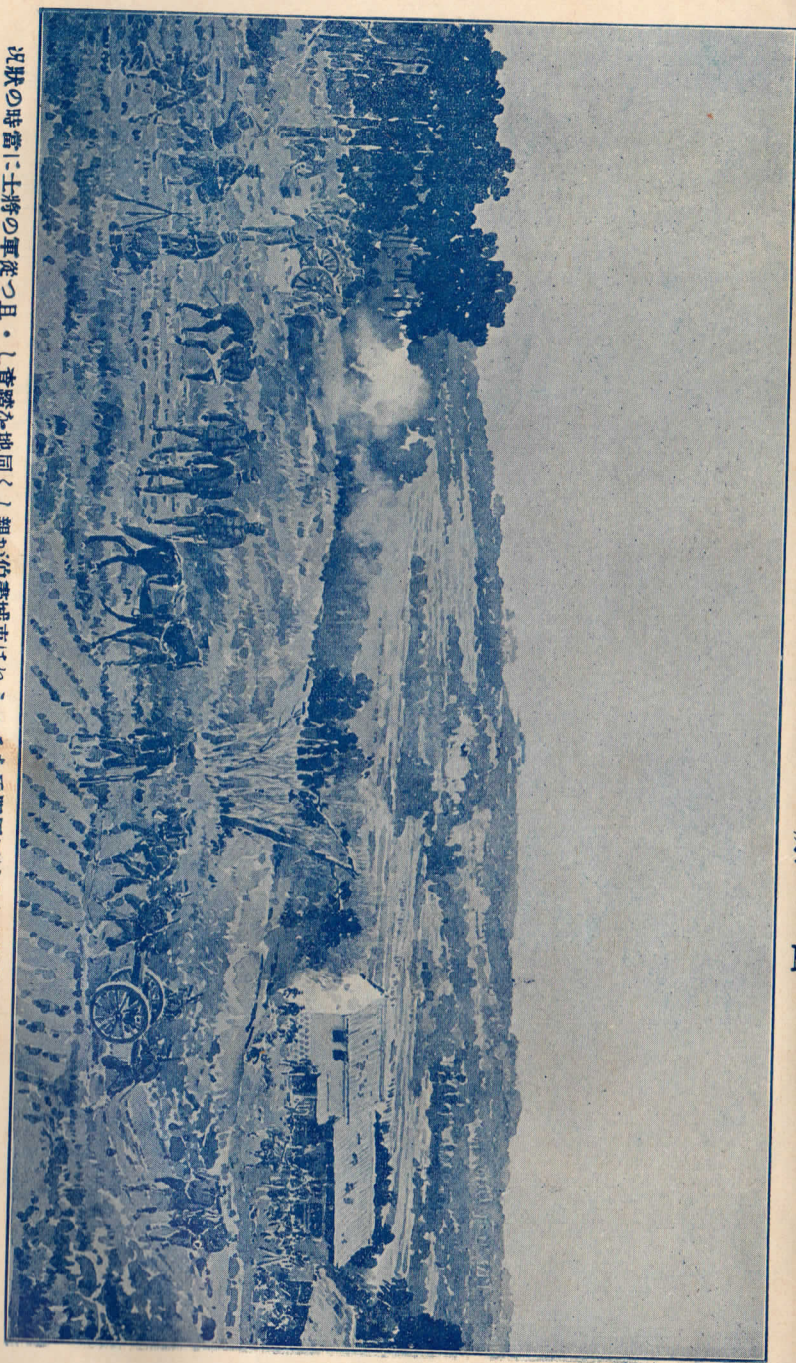
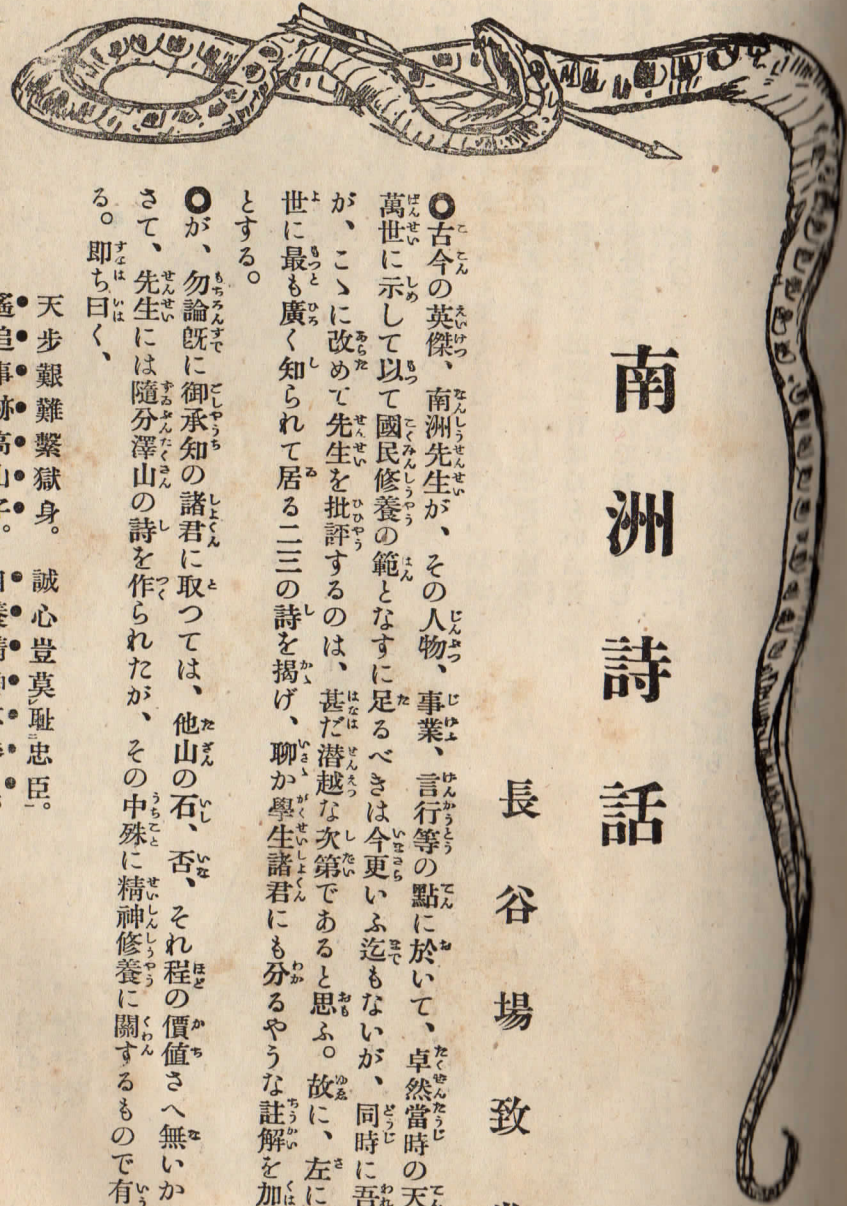
西南の役に於いて官賊兩軍の最も苦戰したのは田原坂である・これは東城畫伯が親しく同地を踏査し・且つ從軍の將士に當時の狀況を質して描いた水彩畫である（西郷隆盛記事參照）

ゝ思つて居たのに、愈々製造に取懸るには機械以上の金が費ると云ふことを知り、遂に斷念したと云ふ喜劇もある。悉く公は種々の計畫を立てられたが、一般民衆は衆に先んじて憂ふる者の心を知らず、依然として舊文明の夢を見てゐるので、公はいたく天下に人なきを慨歎せられ、我輩如きに向つても屢々此の歎聲を發せられた。公の詩に、

天下滔々紀綱壞。　時無英雄亦何怪。
花前爛醉藉草睡。　此樣誰向麒麟畫。

と云ふのがある。また慶應元年天子に奉つた詩に、

宇內萬邦王赤子。　圖南萬里國山河。
鎭西快子臣齊正。　先唱昇平第一歌。

と云ふのがある。公の晩年はすべて保守的に傾いてゐたが、而かも機に觸れては鬱勃たる胸中磊塊の氣が吐き出された。これ等の詩を見ると、公は如何にも英雄らしく見えるが、所詮は君子人、封建の終を完うして瑕疵なき藩籍を朝廷に奉還し得たのは全く此の人格が然らしめたのである。之を要するに赫々の功は無いけれども、藩政頗る困難の時に、少壯氣鋭なる公は其藩政を根本より改革し、財政の紊亂を整理した。又風俗亂れ賭博などの流行を見るや、公は之を改むるに鋭意し、兼ねて遊女屋、芝居其他遊藝類一切を嚴禁したので、遊惰の風は一時に閉塞してしまつた。又身を以て學問を奬勵し、忙しい中に閑を作つて學校を見廻り、時には親ら試驗もする。凡て理想を藩政の上に行つた。又國學洋學をも奬勵して教育に改良を施し、官吏も學校より採用した。そして幕府の末路國內人心動搖し、脫藩等の事方々に聞ゆる時に於て、能く藩論を纒めて其動搖を防ぎ、苛察な政治は公の藩を治むる間に一度もなかつたのである。そして幕府末路の動搖期には內外の費用甚だ多かつたに拘らず、自ら儉約を守つて一藩の財政に注意し、其巨額の費用に應ずるを得たるのみならず、尙ほ且つ藩籍奉還の場合に際しても何等の混雜醜態なきを得た。閑叟公の人物は即ち此間に於て察すべきである。

南洲詩話

長谷場致堂

○古今の英傑、南洲先生が、その人物、事業、言行等の點に於いて、卓然當時の天下を壓し、萬世に示して以て國民修養の範となすに足るべきは今更いふ迄もないが、同時に吾等後輩の徒が、こゝに改めて先生を批評するのは、甚だ潛越な次第であると思ふ。故に、左に先生の作で世に最も廣く知られて居る二三の詩を掲げ、聊か學生諸君にも分るやうな註解を加へて見る事とする。

○が、勿論既に御承知の諸君に取つては、他山の石、否、それ程の價値さへ無いかも知れぬ。さて、先生には隨分澤山の詩を作られたが、その中殊に精神修養に關するもので有名なのがある。即ち曰く、

天歩艱難繋獄身。誠心豈莫恥忠臣。
遙追事跡高山子。自養精神不咎人。

○これは先生が危機に莅んで泰然自若、克くその措置を愆らなかつた所以を詠せられたもので、前後二回、五年に餘る孤島生活に、悠々として精神を練り、修養に勵まれた趣である。『自から精神を養ひ人を咎めず』とは正にこれ聖人の心である。又、曰く、

幾歷辛酸志始堅。大夫玉碎恥甎全。
我家遺法人知否。不爲兒孫買美田。

○これも世路の艱難を經て始めて人格の基礎が固まるといふ修養觀を賦せられたもので、一旦人格の基礎が固まり、大丈夫となつた以上は、瓦となつて身を全うするよりも玉となつて碎けよ、我が輩の家には一種の家憲がある、それは子孫の虛榮に供する爲に敢て蓄財して田畑を買はぬといふ先生の最も高潔な心を吐露されたものである。而して、先生は事實に於いてこれを證明された。既に『兒孫の爲に美田を買はず』といふ決心であるから、貧困は少しも先生の苦とする所でない。否、却つて貧苦が益々人を磨くとさへ云はれて居る。その心を詠せられた詩に曰く、

一貫唯々諾。從來鐵石肝。
貧居生傑士。勳業顯多難。
耐雪梅花麗。經霜楓葉丹。
若能識天意。豈敢謀自安。

西鄕南洲翁の想像圖

○即ち、貧居は却つて人を傑士となし、大事業には必ず大難あり、見よ梅花は雪に苦しめられて益々麗しく楓葉は霜に會つて愈々美くしいではないか、といふ意

である。從つて、先生は、浮世の毀譽褒貶などを少しも意とせられなかつた。曰く、

世上毀譽輕似塵。眼前百事僞耶眞。
追思孤島幽囚樂。不在今人在古人。

○轉結の二句は、先生が往年の孤島生活を回顧せられて、一片の愁思、恍として眼前の百事を忘れしめた趣である。一體、南洲先生は、あれ程の豪傑でありながら、心は非常に優しい、謂はゞ情義に涙するの人物であつた。先生が、奧羽、北海の鎭定後、高踏勇退して故山に歸らるゝや、自分と同じく回天の雄志を抱いて空しく中途に殪れた殉國の士を悲しむこと甚しく、殊に相約して鹿兒島灣頭の藻屑と消えた僧月照を懷ふの情に堪えず、暗然としてその墓に對せられて曰く、

相約投淵無後先。豈圖波上再生緣。
回頭十有餘年夢。空隔幽明哭墓前。

○然れ共、英雄の常として、事ある時に氣慨天を衝き死も亦これを動かす能はざる强烈な意志を示した。曰く『我に千絲の髮あり、毿毿として漆よりも黑し。我に一寸の心あり、皓々として雪よりも白し。我が髮猶ほ斷つべし、我が心斷つべからず』といふが如きは、即ちその一例である。先生が最も力を籠め、それが爲

南洲翁の筆蹟

に遂に官を辭するに至つた征韓問題は、取りも直さず先生が一生の大經綸であつた。一死以てこれが解決を期し、漸くにして使節となる内旨の下つた時、乃ち萬丈の意氣と誠心とを吐露して曰く、

酷吏去來秋風凊。雞林城畔逐涼行。
須比蘇武歳寒操。應擬眞卿身後名。
欲告不言遺子訓。難離難忘舊同盟。
故天紅葉凋零日。遙拜雲房霜劒橫。

○然るに、これ程熱誠を籠め、意氣を發した征韓問題も、幸か不幸か、廟堂の一角より反對せられ、遂に終世の憤涙を呑んで、飄然都門を去つた。けれ共、一片耿々の志は、默せんとしても默し難く、忘れんとしても忘れ難く、一詩を賦して是非の判斷を後世の知己に俟たれた。曰く、

獨不適時情。豈聽歡笑聲。
雪恥論戰略。忘義唱和平。
秦檜多遺類。武公難再生。
正邪今那定。後世必知清。

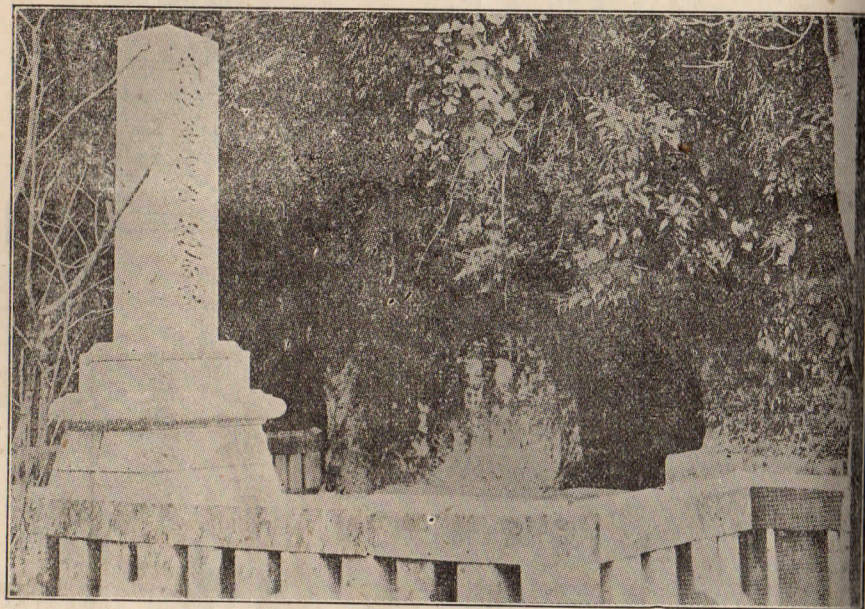
○之より先き、先生が未だ東京に居られた時の詩に、『我が家松籟塵緣を洗ひ、滿耳の清風身仙ならんと欲す、誤つて京華名利の客となり、此の聲を聽かざること已に三年』といふのがある。斯くて潔く鹿兒島に歸り、武村の草廬に隱遁して、出でゝは獵犬を驅つて山河を跋渉し、入りては明窓淨机に對して松籟清風を樂しまれた。この頃の作には本職の詩人も遠く及ばざる程の、幽玄微妙の風格を俱へた詩が澤山ある。曰く、『犬を驅つて雪を衝き萬山を渡る、傲然長嘯斷崖の間、請ふ看よ世上人心の險、涉歷す山路の艱よりも艱』と。又或る時は溫泉に遊んで心身を養ひ、得意の靈境に達して肅然として曰く、

幽居夢覺澹茶烟。靈境溫泉洗世緣。
地古山高靜於夜。不聞人語只看天。

○『人語を聞かず只天を看る』の一句、漫ろに閑寂の境に悠遊する偉人の俤を髣髴させる。同じくこの隱居中であつたと思ふが、或る時偶成の一詩を賦し、大丈夫の心懷を筆端に迸らせて曰く、

不養虎兮不養豺。亦是九州西一洲。

七百年來舊知處。百二都城皆我儕。
壓倒海南三尺劍。蹂躙天下七寸鞋。
人若欲識余居處。長住甕城千石街。

鹿兒島岩崎谷南洲翁洞中紀念碑（最後に翁の潛みし所）

○最後の千石街といふのは、南洲先生の生家のあつた所で、この生家につき面白い一場の逸話がある。先生最初の流罪を許されて鹿兒島に歸るや、先以てこの生家に赴かれた。すると、留守の間に、生家の一部が新たに增築されて居た。これを見ると、先生の顏色が遽かに曇り、家人を呼びつけて小言を云はれた。その言に曰く、邸宅の如きは素と露雨を凌げば足る、何ぞ今改めてこれを增大するの必要があらう。貴樣達、早くも予が平生戒めて居た所を忘れたるか。苟くも家人にして家長の命を奉ずるなくんば、竟に一家を理することは出來ぬ。何ぞ況んや天下をや。最早予が言を用ゐる者はないであらう』と。聞く者は悄然として一語を發することも出來なかつたと云ふ。最後に先生の辭世吟を揭げてこの話を終はる事と致す。

百戰無功半歲間。首邱幸得返家山。
笑儂向死如仙客。盡日洞中碁響閑。

文明の恩人 本木昌造翁

文學博士 黑板勝美

長崎縣の偉人

今長崎縣と云はるゝ中には、維新以前にあつて外樣大名なりし平戸、大村、五島を始め、譜代大名の島原など、多くの小藩が並んで居り、長崎といふ天領もあり、又佐賀藩の領地も交つてゐて、各々風俗習慣等にも又多少の相異が殘つて居る。從つて纏まりのよくない處であるから、縣下の偉人を誰と云つて拔き出すことは一寸と困難である。それに九州でも邊陬の地で、古來餘り歷史上の人物に富んで居らぬ。江戸時代になつてから、藩主の中には英明の人を出したこともあるが、その影響は封内だけであつた。故に若し、日本全體に向つて貢獻した人物といふばなら、直接に幕府と關係のあつた長崎に之を求めねばならぬ。例へば元祿の頃將軍に召し出された西川如見の如き、また大に傳へらるべき人であるが、こゝに誰もそれと氣につくのは高島秋帆である。彼が砲術を以て幕府に召し出され、又諸方より來つてその門に遊んだ者も多く實際幕末の兵術といふ點から觀ると、秋帆に負ふところ多きのみならず、彼の識見また大に觀るべきものがあつた。されど、こゝに幕末に當つて、日本の文明に貢獻した大人物として忘るべからざるは實に本木昌造翁その人を擧げればならぬ。或は勤王といふことを以てしたら、平戸、島原、大村などの各藩に人物も少くなかつた。併しその事業が何等花々しからざりしに係らず、我が國の文明に

貢獻した功の偉大であつたのは、或は福澤翁と共に、本木翁を並べ稱するも決して遜色がないかと思ふ。『學生』誌上投票の結果、此の人が長崎縣の偉人として當選したのは、實に此の間に橫はつてゐる大なる理由によるのではあるまいか。翁の遺業は今活字の鑄造を始め、諸種の印刷事業の發展に於いて、ます〳〵その光輝を放つて居る。併し翁の生前の事業は必らずしも活版事業のみに止まらなかつた。航海、製鐵、育英の方面にも携はつてゐたのであるが、その中活版事業が最も多く成功したと云ふに過ぎぬ。而して是等の事業は、日本の現在に於ける物質的方面と、精神的方面とに、堅固なる基礎を與ふることに成つたので、翁が明治文明史の上に重要なる位置を占むることは云ふまでもないことだと思ふ。

基礎科學に着眼す

本木翁は元來長崎の町の吟味役の家に生れ、母方の、和蘭通事であつた本木氏に養はれた人で、その養父に當る人は、和蘭語のみならず佛語をも修めて、長崎に在つて蠻學世話係といふ役になつてゐた。翁が此の人の養子になつたのは十一歲の時であつたが、元々悧發の性であるから、和蘭語には尤も早く上達し、後にはその飜譯が長所であつた。當時我が邦は外國の刺戟を受けて國論沸騰し、鎖國攘夷、開國貿易の二つの異つた説が互に鎬を削つてゐたが、彼はそれ等のことは差し置き、何時かは開國すべき時期が來るに相違ないと、先づその根本をなすべき外國の學問の研究に志ざした。それが彼の最も豪い點で、いはゞ今日の所謂『基礎科學』の方面に眼を着け、殊に物理化學などの研究に意を致し、自分でも藥品を集めたり、機械を造つたりして種々の實驗をやつた。そしてこれがその活字鑄造の事にまた翁を導いた理由の一であつた。維新後育英事業に從ひ、私塾を開いた際にもその門長屋に機械、藥品などを備へ、餘暇あれば之に入つて實驗に耽つたが、その長屋は今も尚ほ殘つてゐると云ふことだ。

學問の普及を圖る

恁く翁は學問の研究に耽つたのみならず、如何にせば之を普及する事が出來るかと、最も都合よき普及の方法を考へ、その結果活版に着目したのである。尤

も彼は家柄が家柄丈に、和蘭人に就いて歐羅巴の書物を見、それが活字版なることを他の人々よりも早く知つてゐた。併し、活字は此の時始めて本木翁が日本で造つたのではなく、三百年以前より既に存在し、俗に一字板と云つて家康なども盛んに之を造らしめた。今も殘つてゐる慶長板は活字版で出來てゐる。かのハルマの辭書なども、活字で三十部を作つたと云はれてゐるが、併しこれ等の活字は、今の流し込み式のものとは異なつてゐるから、歐羅巴流に流し込み活字を造り始めた功は、これを本木翁に歸しなければならぬ。恰度嘉永四五年頃、彼が二十九歳か三十歳かの時に、種々苦心して始めて流込の活字を造り『和蘭通辯書』といふ蘭英對譯辭書を出版したけれども、之れは無論不完全なものであつたので、爾後苦心慘怛、如何に忙い時でも之が改良のことをその念頭から去らなかつた。明治三年に至つて米人の力により、漸く理想に近いものを、造る事が出來た。その和蘭通辯書の出來た嘉永五年から、此時までは二十年を費してゐるが、思ひ立つたのを假りに嘉永元年頃とすれば、實に二十五年を費してゐる譯である。たとへ其成功は米人により齎されたりとはいへ、翁が不撓不屈遂にその志を得るに至つたのは、その如何にえらい人であつたかゞ了解さるゝのである。

航海術的方面に於ける活動

本木翁は元來が通辯役であるから、合衆國のペルリや、ロシヤの使節プーチャチンが來て條約を結んだ際には、彼は幕命によつてそれに關係したが、その時がまた彼が航海術的方面に活動した初であつたのは注意すべきことである。安政元年十一月、伊豆の下田に大海嘯があつて、露艦ヂアナ號が全部破壞し、戸田で以てスクーネル型の船を造つたことがあるが、これが西洋型船舶製造の嚆矢で、その圖は今も尚は殘つて居る。その時、彼は蘭語が出來ると云ふので、通辯且つ周旋役となり、讀書によつて得たる造船學の智識を實地に試驗することが出來た。これによつて彼が造船方面の

智識のを增したと如何ばかりであつたらう。翌年土佐の山内容堂侯の註文で汽船の雛形を造つて献上した。後來山内家で盛んに汽船をつくり、その藩士が乘り廻して雄を海上に唱へるに至つた起因は、之にあるのでは有るまい乎。所が更に驚くべきは、彼が當時既に船の運用術をも知つてゐた事である。萬延元年に、英國より小蒸汽船を買ひ入れた際、彼は自ら船長となつて江戸長崎間を往復したが、同年十一月、幕府が長崎に於いて製鐵事業を起せし時、彼はその御用係を命ぜられ、幕府に建白して英國よりヴイクトリア號、チャールス號といふ二隻の小蒸汽船を買入れた。その初航海は文久元年三月で、長崎から大坂へ航行したが、文久元年には翁は紀州加太の砲臺を巡檢に赴く勅使を、そのチャルース號に載せて往つたこともあつた。今日から見て最も面白く感ぜらるゝは、當時に在つて原名をその儘に、チャールス、ヴイクトリアなどゝ呼んだ事である。元治元年にはヴイクトリア號に搭じて東海を航行したが、遠州灘で難破して八丈島附近の小島に避難し、辛うじて相川浦に上陸した。命だけは拾つたが、船は滅茶〱に壞れて了つた。併し恁く八丈へ往つたことも何かの因緣、當時同島には疱瘡が流行してゐたが、ヴイクトリア號に乘り込んで居た吉尾圭齋といふ醫者が始めて島民に牛痘を種ゑてやつて、全島の疱瘡を撲滅せしめたといふことである。

本木昌造翁肖像

長崎製鐵所の事業

抑も此の製鐵所は何の爲めに起されたか。當時幕府は大分外國から軍艦を買入れてゐたが、破損を修繕するには何うしても機關の据換をしなければならぬ。それや是れやの必要から、安政二年に製鐵所を長崎に設けられたのである。これは長崎奉行永井玄蕃頭の上申に基いたのではあるけれど、翁が玄蕃頭をよく識つて居た點から考ふれば、また恐らく翁の建議に出でたのであらう。さればこそ四年には外國から種々の機械が到着するや、當時或る嫌疑で獄に下つた翁が出獄して、早速御用係を拜命したのであつた。そこで翁は力をその創業時代に竭したが、幕末の事とて財政窮乏し、翁は非常にその經營に苦しんだ。超えて明治元年には製鐵所の頭取となり、三年まで關係してゐたが、その時の所長は誰あらう今の井上侯爵であつた。同二年に長崎濱野町、築町間に架けた鐵橋は、實に此の製鐵所で造られたもので我が國に於ける鐵橋の初である。翁が此製鐵所に在る間最も苦心した事は、上位にある役人と、下位にある職工との關係で、當時はまだ舊幕時代の事とてその間に面倒な事が多かつたが、翁は慶應元年に建議して、役人も職工も同一の門より出入せしめる事、各藩より參觀に來るものあらば喜んで之を許すのみならず、寧ろ慫慂して來觀せしめる事を請ふなど、大に開放主義を取り、且つ如何にして製鐵、造船、航海の三つを連絡せしめんかを考へた。今日長崎に在る三菱造船所は非常に盛大なもので、東洋第一と云はれてゐるが、その基をなしたものは本木翁の關係してゐた此の製鐵所である。明治三年に至り、此の製鐵所は神戸へ移されたが、これは今の川崎造船所の起因となつた。而して最後に製鐵所は横須賀に移されたが、それこそ今の海軍造船所の一部となれるものである。

苦心慘憺たる活字鑄造

本木翁は夙く、製鐵、航海に力を盡してゐたが、併し一日とても活字鑄造を忘れたことはなかつた。翁が最も苦心したのは如何なる點であるかと云ふに、良い材料のなかつた事である。鉛は有つても純粹のものでなく、鉛に混ずるアンチモニイは絕對にないので、一寸は巧く出來ても直ぐ惡くなつて了つた。又字母即ち流し込みの原型は鋼鐵へ字を彫るのであるが、何うも巧く字が揃はない。加ふるに印刷機械は不十分であり、インキが碌なものでないので、これ等の點についても非常に研究苦心をしてゐた。彼是する中、明治維新が來て、大に人才を養なふ必要が起つたので、翁は東脩不要、月謝不納の學校を開いて少壯氣鋭の士を集めたが、その費用の出所がないので活字で得た利益を全部之に廻さうと企てた。その塾は新街私塾と名づけられた。かくて明治二年には活版製造所が起されたが、無論立派なものではなかつた。然るにその頃、米國の宣敎師が上海に來て、立派に活字を造つてゐると聞き、直ちに人を遣はして視察せしめたが、先方が秘密にしてゐるので、十分にその製法を知る事が出來なかつた。

遂に外國技師を傭入る

その時恰度、故重野博士が薩藩の用で上海に行き、活字を買うて持て歸られたが、種々やつて見ても思はしく行かぬと云ふ事を聞き、池原香穉といふ人を介して薩藩よりその機械文字一切を買入れた。此の機械はワシントン・プレッスと云ひ、外字、漢字の二種一組

本木昌造筆蹟

であつたが、何うも思ふ様に巧く使へぬので、困つてゐると、宣教師のフルベッキが見て大に翁に同情し、何とかして成功させんと盡力中、前述の上海の活版所の技師ガンブルが滿期で歸國する旨を聞き込んだので、フルベッキを介して長崎へ呼び寄せ、製鐵所附屬として、元唐通事會所の邸跡へ、活版傳習所といふものを開いて、活版鑄造、電氣版製造を始めた。これは明治三年の事であつたが、此處で活版の技術を習つたものが、各地に出でゝ今日の盛運を致したのである。本木翁に關係のあつたものは、長崎新町の活版製造所が初めで、その後、東京の築地活版製造所、大坂の活版製造所と云ふやうなものに發達し、他のものは製鐵所の手から工部省に移り、漸々變化して今の印刷局となつた。

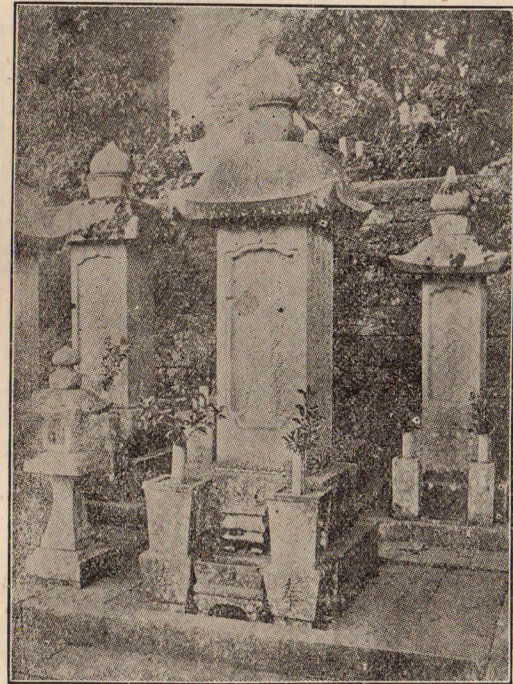
活字一匁に銀一匁

明治四年十一月、本木翁は平野富次なる者を東京に派して、當時の新聞、横濱毎日新聞、讀賣新聞などに賣り込ましめたが、平野は神田の藤堂邸の酒倉を買受けて、其處へ新たに活版所を開いた、それが即ち築地活版所の前身である。活字は最初に二號、次に初號、五號、四號と云ふ順で造られたが、當時の相場は非常なもので、銀一匁に活字一匁といふ高値なこともあつたさうである。そして翁は活字鑄造によつて、一面大に我が國の文明に貢獻するところあつたが、同時にまたその中には二つの從たる目的も含まれてゐた。即ち新街私塾の費用を此の方面の利益から取らうと云ふのが一つ、今一つはその後藩籍奉還といふことになつて、士族は扶持に離れ、他の職業に轉じなければならないが、それには多少文字の有るものでなければ出來ぬ活版事業が最も適はしい。恁く士族を救ふやうな考もあつたが、長く祿を取つて遊ぶに慣れた士族は、何うも思ふ様に働かないので、此の方は、目算がガラリと外れたらしかつた。が、その內から、今日の盛んな活版事業に、中心人物となれる多くの人々を出したのである。

翁の經營した新街私塾の敎課は、讀書、習字、漢學、洋學の四科であつたが、その中主として授けられたものは洋學で、洋學の中には語學は勿論、數學、物理、化學などが含まれてゐた。今日長崎の出身で、社會の重要の地位を占めてゐる人々は、皆此の塾の出身者と云つても差支がない。以てその感化の如何に大きかつたかを知る事が出來る。

長崎大光寺內本木翁の墓

清廉潔白の人

翁は識見卓拔にして時代よりも一歩足を先へ進めてゐたのみならずその性格清廉潔白にして自己を肥やすことを考へず、事業については全く獻身的であり、如何なる苦痛困難が來つても泰然として動かぬ不屈不撓の英志があつた。これが彼の最も傑出した點であると思ふ。彼は恁く工藝技術に力を盡して居たけれど一面非常に感情的の所があつて、暇さへあれば歌を詠んで自から慰め、書も可成巧かつた。

然るに明治八年大阪に滯在中病に罹り、國に歸つて療養した甲斐もなく、同九月三日を以て歿した。その生年は文政七年であるから、享年は恰度五十二歲である。併し此の時は既に活字鑄造事業は完成し、印刷術も大に發展してゐたので、安心して瞑目したと云ふことである、遺書は『和蘭通辯書』一部、『海軍蒸汽機械學』一部、『西洋古史略』若干部、和蘭ホイケンス作海軍書の飜譯を始め蘭書の飜譯等などがある。本年二月、天恩、翁の枯骨に及び從五位を追贈せられた。想ふに翁が地下に於ける喜びも嘸大なることであらう、我々はこの天恩を辱ないと思ふと同時にまたこの文明の恩人を忘れてはならぬ。活版の書が行はるゝ間、輪轉機の音の絕えざる間此恩人を忘れてはならぬ。また出來得ることならば、その邸宅を保存し新文明貢獻者の遺跡として永世に傳へたいと思ふ。

横井小楠先生の印象

農學博士　横井時敬

多藝多能出來ぬものは馬術丈

◎横井小楠先生は熊本の藩士で、名を存（實名時存）、字を子操と云はれた。文化六年八月に熊本内坪井の折千段で生れられたが、後年故あつて街を二里許り離れた沼山津へ轉居せられた。別號を沼山といふのは此の地名に因んだのである。小楠と號せられた譯は詳しく知らぬが、何でも楠公の德を慕うて、その氏を一字取られたものらしい。『廢帝論』を唱へたなどゝ云ふのは全くの嘘で、非常の勤王家であつたらしい。楠公を慕はれた事と云ひ、參與になつて、天顏に咫尺し奉つた時、手の舞ひ足の踏む所を知らなかつたと云ふのを見ても、先生の志しが那邊に在つたかは、大抵それも推測することが出來る。

◎先生は極めて多能の人で、何でも出來ぬ事のないやうに聞いてゐたが、單に武技學藝のみならず、蚊頭引まで上手であつた。子供の時非常に貧乏であつたから、魚でも捕つて生計の足とせられたのが起因でゞもあらうか。——肥後では蚊頭引と稱して、小鮎なり、鮠なりを蚊鈎で釣ることが流行るが、竿は短く、綸は極めて長く、竿の三倍以上も長いのがある。先生はこれの名人であつたから、邸の前を流るゝ清流へ、袖垣越に綸を垂れられたと云ふ。

◎居合拔は尙更名人であつた。熊本には當時江良といふ指南が居たが、先生はその人の門人で、古來未曾有の達人だといふ噂があつた。恁樣に先生は何も彼も上手であつたが、馬と書とは下手であつたと云ふ。併し書は決して凡筆ではない、唯だ少時手習をしなかつたと云ふ丈である。諸處方々で賴まれて揮毫せられたが印などは持つてゐないから、何處でゞも書放にされたのを、福井へ行かれてから誰かゞ立派なのを作つて贈つた。晚年には大分好になつたと見えて、門弟に野々口といふ書を能くするものがあつたが、時によると『何うぢや、一つ書かうか』と、興に乘して揮毫せられた事もあつたとか。兎に角、書も決して下手ではなかつた。

學問に懸けては熊本一

◎併し是等よりは學問の方が優れてゐて、當時『熊本一』と云ふ評判があつた。熊本には秋山玉山の時に出來た時習館といふ藩黌があつたが、先生は其處で十代の時に學問をせられた。よく出來たので、十五位の時に選拔せられて同黌の居寮に入つた。此年齡で此選拔に逢ふたのは破天荒の事たるを失はぬ。

◎若い時分には文章も作り、詩も時々屬せられたが、先生の豪いのは詩文が巧かつたと云ふ點ではない。少壯の時に作られた文稿には中々の傑作があり、また晚年迄時々作られたる詩の中、二三篇は確かに詩人と見て差支ない程のものがあると云ふ。梁川星巖曾て先生の作を見て驚き『若し百首も作つて予に添削せしめたならば、予は到底及ぶべからざるに至るであらう』と云つたが、先生は、『予は詩人となるを欲せず』と云つて、添删を乞はず、畢竟訓詁詞章の事は意に介けなかつた。

○先生の志しは國家の經綸に在つた。故に多讀博識を以て榮とせず、ひたすら見識を以て立つことを主眼とせられた。先生は自ら朱子派を以て標榜とせられたが、その實は陽明派であつたのである。好んで『大學』を講じられたが、その講義の仕方は一種特別で、先つ其詞章の大要を說き、列席者名々自己の經驗界より勝手の意見を陳べて討論せしめられた。これが所謂『講習』といふので、私は直接先生に師事しなかつた、その門人竹崎氏に就いた時、氏は先生の遺風に從うて敎授せられた。その時なども字義には拘泥せず、詞章にはお構ひなく、手々に自由なる解釋を下した。私などはよく物理學的の解說をつけたものだ。

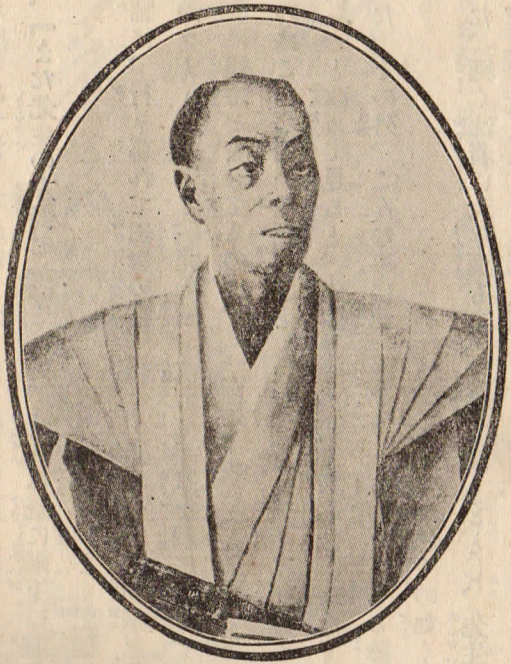
○その代り、事起ればそれに就いて研究し、博く考へ深く慮つて、微小なる事と雖も忽諸にしないと云ふ風があつた。所謂『實學風』で、實際と云ふとが眼目であるから、後年、必要があつて物せられた論文などは皆假名交り文であつた。この點も先生の凡人でなかつた證據になる。

見識を以て世に立つ

○先生が見識を以て人に重んぜられた事は、當時、時習館の敎官方が文を草せられた際には、先づ意見を先生に徵して後筆を執つたと云ふ一事を見ても分る。それに就いて面白い話がある。

○まだ若い時の事、或る侍が魚釣に往つて、輕輩と喧嘩をして斬られた。で長官は戒めて『今後は漁に行く時と雖も良さ大小を佩いて行け、畢竟刀が惡いから斬られるやうな破目に陷るのだ。』と云つたが、先生は之を聞いて冷笑し、『苟くも武士たる者が輕輩に斬られるやうでは駄目ぢや。漁に行く時なぞは、刀を佩ばんでも可からう』と云はれた。

○併し、先生は表道から許り進むやうな、一本調子の人ではなく、確乎不動の見識の間に、燦爛たる機智の閃めきを見せた。常に機先を制して、容易に他を敗つたことは、蓋し先生の最も得意な所であつたらう。これは子供の時分の話であるが、或る日、或る處で朋輩に小便を仕懸けた。朋輩は憤然として家に歸つたが、軈て『小便をしかけられた儘では武士道が廢る、仇を取らう。』と云つて果し合に來た。先生は一刀を腰にして玄關に出で、『小便を仕懸けられた丈でも既に武士道が廢つてゐるではないか。』とやり返された。

○これもまだ若い時分の事であつたらう。或る培臣者が馬上から禮をして『失敬』と云つて通つた。先生憤然之を馬上より引摺り下して折檻し、『培臣の癖に馬上から禮をするとは無禮ぢやないか。』と云ふと、『いや、拙者は先日、侍分の家へ養子に行つたから、最早其許と同じ資格ぢや。それを知らいで打擲とは不都合で御座らう。』と息捲く。先生輕く受けて『それだから擲[illegible]丈で止めた、元の儘なら擲き殺す筈であつた。』

橫井小楠の像

○江戸へ遊學中は品行が修まらぬと云つて、郷里へ逐ひ戻された位亂暴であつたが、或日吉原からの歸るさ、黑門前で放歌して某藩邸に拘留せられた。何處の者だと調べて見ると、熊本藩なので、早速藩邸へ使が立つて迎ひの人が來る。引渡される。取上てあつた刀を返す。處が先生は腰の物を受取るや否や、『えい』と云つて居合を拔いた。一同は驚いて『何をするのだ』と咎めると、『武士たる者が刀を受取るのに、中身を改めぬと云ふ事があるものか。』と云はれた。

危機に臨んで泰然自若たり

◎先生は非常なそゝツかし屋で、右封じにすべき手紙を、左封じにして差出すことが屢々あつた。それ故、先生から手紙が來た場合には、『また先生の左封じか』と云ふのが常であつた。

◎曾て友人と共に銃獵に出懸け、行き暮れて田舍の宿屋に泊つた。すると先生はぷッ／＼と怒つて『此の宿屋は甚ぢや不都合だ、其許には搔捲を着せてるのに、拙者には着せ居らぬ。拙者のはこんな薄い蒲團だ。』と云ふので、『そんな筈がない。』と改めて見ると、先生は搔捲を逆さに着てゐられた。その外、こんな事は他にも隨分あつたやうである。

◎併し、先生には膽の据つた、極く沈着いた半面もあつた。豪傑は大方極端から極端に奔つて、その眞の性格が窺はれ難いものであるが、先生の如き亦た矢張りその趣がある。或る夜友人二人と、常盤橋外の料理屋で酒を飮んでゐると、刺客が先生を目懸けて斬り込んだ。その頃料理屋では皆双刀を預ける掟になつてゐたので、先生は勿論三人とも無腰であつた。然るに一人は殺され、一人は手疵を受け、先生のみは難を免れた。何うして無難であつたかと云ふに、刺客の斬り入つた時、先生は既に階下に避けてゐて、これは危ないと見て取つたので、よく肥後の武士の着てゐるぶつさき羽織――襟のついた羽織を脫ぎ捨て、帶を貝の口に結び直して手拭を肩に懸け、敵が待ち構へてゐる門口を、『御免下さい』と云つて外へ出た。敵も眞逆と思つてゐたが、もう先生は何處へ往つたか分らない。恁う云ふ風に先生は危機に臨んでも周章てず、泰然自若として處すべき方法を考へる餘裕があつた。

◎何故先生が恁くの如く、人に覘はれたかと云ふことは後で說くこととし、先生は歸國すると直ぐ切腹を申附けられる筈であつたが、何うした譯か祿を召上げられる丈で濟んだ。私は今までその理由を知らなかつたが此間越前の人に聞いた所に由ると、松平春嶽公から命乞の使者があつた爲めだと云ふ。兎に角先生は祿を召

上げられて、亡父――横井家の附籍となられた。

◎その頃先生は屢々語られた相だ、『同姓はその昔兄弟であつたのが、分家したものであるから畢竟兄弟同樣だ。後々の新しい親類よりも、却つて尊く親しい筈である』と。それで大事ある毎に必ず他二軒の横井家には之れが處理に就き相談せられた。亡父は反つて先生に師事して居つた。

◎先生が最後に國を立たれた時早や私の父は死んでゐたので、私は兄と共に先生を見送つた。私はその頃六七歳で、殆んど全く先生のお顔を覺えてゐないが、何か知ら書物を讀んでゐた私に向つて、『今度俺の歸るまでには、春秋左氏傳を讀んで置け。それが出來ぬと寄せ附けぬぞ。』と云はれた事だけは、まだ有々と耳の底に殘つて居る。若し寄せ附けられなかつたら何うしようと、私は小さい胸の中で色々と考へ乍ら、畏ろしくて／＼堪らなかつ

横井小楠筆蹟

た。

○此の時先生は熊本藩から徵士として都に上られ、明治元年には參與になられたが、二年刺客の爲めに暗殺せられた。恰度その時先生は病後で、朝廷から駕籠で歸家る途上、數名の刺客が短銃を放つて襲つて來たので、老體ながら駕籠を出で、短刀片手に敵を防がれたが、病氣揚句で力足らず無念の最後を遂げられた。

學校黨と實學黨

○先生が人に憎まれた原因は、主として學問の上からであつた。先生が水戸藩の招聘に應ぜずして國に留まり、家塾を開いて徒弟に教へたのは弘化四年であつたが、何時とはなしに實學黨と呼ばれて、世間の嘲笑の的となつた。それが爲めに弟子の中でも、先生の門に出入するのを忌がつた者もある相なが、先生は常に『僞學の名を被むつて咎を受けた例はいくらもある。實學の稱を受けて、而かも何等の禍なきは甚だ結構でないか』と云つて、平然として屈する所がなかつた。

○實學黨と目せらるゝ者の中には長岡監物――米田侍從の父に當る人――と云つて、連枝で、名望の高い人が居つたが、『親民』といふ字の意見について議が合はず、分れて二派となつたと云ふ說があるが、事實は何うであるか私は知らぬ。

○兎に角、實學黨は學校黨と鎬を削つて、政治上の權力の爭奪をやつた。學校黨は佐幕主義で、祖先以來、累葉德川氏の祿を食んで來たのだから、それに叛いては義理が立たぬと主張したが、實學黨の方では勤王開國主義を主張してゐた。かくて實學黨は政權を失つて了つたが、學問見識は敵黨の間にすら認められ、青年の學校黨の者に敎を乞ふことがあると、『橫井先生へ御出でなさい』と、秘に先生の學問人物を稱揚したと云ふ話だ。

○今一つ先生が憎まれた理由として、先生は勤王黨との間に、固い約束があつたにも拘はらず、變心してその約束を實行しなかつたと云ふ事を擧げるものもあるが、若し然うとすればそれは一身の利害の爲めではな

く、他に重い大きな理由があつたのであらう。先生の眼は大局に注がれてゐた。小さな眼で先生を觀ると、或はこの樣な批難が起るかも知れない。

英雄を知る者は英雄なり

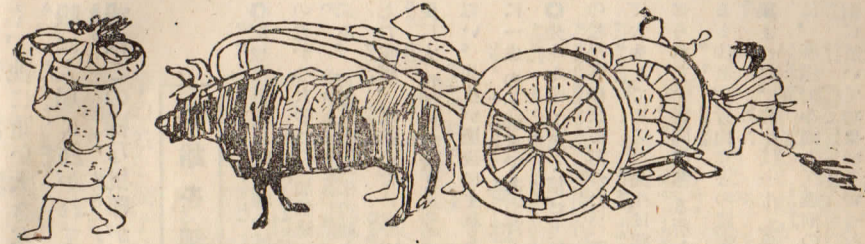
○肥後は熊襲以來喧嘩の國で、內輪喧嘩のなかつたのは、加藤淸正の時代丈だと云ふ。實際小楠先生の如きも、こせ〱した喧嘩、反抗のない處にゐられたら、更に大に才を展べることが出來たに相違ない。先生が肥後に生れられたのは、實に一生の不祥事であつたと思はれる。

○先生を最も篤く信ぜられたのは、越前の松平春嶽公であつた。肥後に容れられなかつた先生も、越前へ行けば大先生である。先生は福井で老職の上に位し、色々政治上の指導をせられた。晝間は憚る所あつて、通り一遍の講義をされたが、夜になると由利、青山などの諸豪が命を奉して講話を聞く爲めに先生の家に集まつた。先生は一生を貧窮の中に送つたが、而かもその卓落の意見は、春嶽公を通して越前の政治に實行せられ、商工その他の勸業的方面に於いて功果が多かつた。春嶽公が後年江戶に勢力を振はれた裏面には、先生が控えてゐて翼贊に力を盡されたのである。

藤田東湖肖像

○長州の福原は大に先生に傾倒してゐたが、吉田松陰も、また先生を崇敬し、其洋行を企てた際にも、先生の意見を徵めたと云ふ事である。水戸の藤田東湖とも交際があり、曾て酒席で詩を作つて、東湖の思想の局所に偏寄して大事を誤まるの恐あるを戒めた。其詩は長篇であるが、中々『慷慨悲憤氣即氣。恐二於國家一無二稗益一。炎漢朱明亡可レ徵。何事君子心甚迫』の句があつた、東湖は直ぐそれに次韵したが、翌日書を寄せてその詩の返却を請ふた。それは義經が見すぼらしい弓を流すのは名折だと云つて、それを態々拾ひ上げたのと同じく、恥を後に殘すまいとの東湖の苦衷であつた。

○かくの如く先生は非凡の達見家で、人に優れたる見識を持つてゐられた。勝海舟は曾て、先生と佐久間象山とを比論して『小楠は象山の上に出づ。象山は文筆の人であるが、小楠は見識の人である。』と云れた。事を尋ね、物を研めることの確實と、人を見ることの明敏とは蓋し先生の最も畏敬し崇仰すべき點であらうと思ふ。

○その兄の子、佐太郎、大平の二人の、將に海外留學の途に上らんとするや、先生はこれに送つて、『明二堯舜孔子之道一。盡二西洋器械之術一。何止二富國一。何止二强兵一。布二大義於天下一耳。』と云はれた。以てその進步した、積極的の先生の思想を窺ふことが出來る。

模範的教育家　貝原益軒

福本誠

一　少年時代

寛永年間に、筑前福岡の黑田侯の御祐筆に貝原利貞といふ謙德の人があつた。人々は寬齋先生と云つて懷いて居た。その子が即ちこゝに擧げられた貝原益軒である。益軒、諱は篤信字は子誠、通稱は久兵衞といつた。最初には損軒と號したが、晩年に益軒と改めたのである。又た一時は柔齋と稱してゐた事もある。寛永七年十一月十四日福岡城中に生れたのだ。少い時から物覺えのいゝ兒で、七歳の頃、まだ書は習つてなかつたけれど、略、假名だけは讀め、好んで繪草子類を玩んだ。猿樂の俗謠などを喜んだのも、この頃の事だと傳つてゐる。九歳の時に兄存齋に三體詩絕句を授つたが、記性に富んだ此の少年は、それをも能く呑み込んだ。それから、平氣物語を借りて讀み、保元平治物語に少からず興味を看出した。十歳で、始めて倭玉篇や節用集などを抽き出して來ては、字を暗記するのを面白い事にして遊んだと云へば普通の子に變つた特長が

既に九歳十歳の時から著しく見えてた事がわかる。父寛齋に百人一首を書いて貰つて、復讀して直に背誦したのは十一歳であつた。而してその翌年には、訓點のない活字本の太平記を樂に讀めるやうになつた。元來その當時の兒童の本讀みの順序は、解つても解からないでも、孝經大學の素讀から敎はつたものだが、益軒は、最初から自分で、稗史小說を求めて讀み耽つた。これは偶然の事でもあつたらうが、後年益軒が一家の學を成して、童蒙の便利の爲めに、假名交りの文を書き、意をこの邊に用ひたのは、全く自家幼時の實驗に顧みたものらしい。十四歳の時に、兄の存齋が京師から還つたので、それに就いて始めて經書を學ぶ機會を得た。存齋は、もと〳〵醫術を學ぶために、京師に五年間遊學したのであるが、實際は、醫よりは寧ろ經學を多く修めたのであつた。元來貝原家では、益軒の父寛齋も、黑田侯の御祐筆であつたに拘らず、世間には全く醫官として傳つてゐる位で、當時の習慣では、儒者は醫家から出たのが多いやうだ。益軒も此の頃、父の傍で醫學正傳、醫方選要、萬病回春などの諸書を讀んでゐたのである。

二　藩侯の給仕になる

慶安元年の秋九月、始めて國主忠之に召出されたが、勤務したのは御納戶の御召料方と唱ふる鄙職であつた。此の時が十九歳である。後年あれ程の大名を成した先生も、可哀相に最初の仕官は藩侯のお茶坊主であつた。今でいふ給仕見たやうなものである。自分で書いたものに『拙者事十九歳の九月忠之公へ被召出、四人扶持被下候迄にて其外には米祿不被下、下人をも御付不被成、御仕着も拜領不申、衣類少々被下候迄にて、其年十月江戶へ被召遣、翌年歸候而、一夜替に、御傍にて不寢之番被仰付、甚致困苦、其後與力に仰付被成候』とあるが、『寢ずの番』を一夜交替にさせられた勤勞は、さこそと思ひ遣られる。それでも氣六ケ敷い藩侯の御機嫌を取るのは、中々容易でなかつた。遂に、如何したのか二度までも忠之の怒に觸れて、四人扶持をも取上げられて、再び無職無祿の人になつた。それが二十一歳である。彼れの好學で、書に讀み耽つた事は少い時からの癖なので、或はその爲めに公用に立ち後れるやうの咎めを受けなかつたとも限らぬ。忠之は峻酷を以て聞えた人で、仕へ難い主であつた事は、一般に知られてゐる。益軒は その主人のお側仕へをしてゐたのだ。その食祿を離れた消息も、暗々の間に

推測されぬではない。浪人の身となつても讀書勉強は決して怠らぬ。近思錄を讀んだのは二十二歲の時であつた。二十五歲六歲の間には、長崎に二度往つた。自分では『書など見に行き、久々滯居候』と書いて居る。七年の間、浪人生活が續いた。益軒の學問は、老境に入つて圓熟したのではあるが、この浪人してゝも、刻苦して勉めたといふ事が大に後の盛名を贏ち得た所以でもある。

三　京都遊學

明曆元年に、益軒は醫者になる考へで國を出た。その前年に國主忠之薨じ、賢君光之の代となつてゐる。益軒の頭擡ぐる時節も近づいた。その頃父の寬齋は江戸の藩邸に祇役して居たので、その膝下に侍して、親しく孝養もしたいし、益軒は、よろこんで江戸の旅に上つた。二回目の旅ではあるが、最初は忠之の參覲に隨つて、職務を持つた體で、自由が利かなかつた。今度は閑散の身だから、近畿の山水名勝を縱に歷觀して、東海道を下つた。江戸に入る前日、川崎の宿驛で髮を剃り落して醫柔齋と名のつた。いゝ、つるッとした坊主頭を撫で廻はして、先生どんな氣がしたか。江戸の藩邸では、醫者を名のつては居るが、本來の讀書子、儒學の研究を抛つ譯には行かぬ。否、寧ろ此の方に力を注いだのである。半儒半醫は、貝原家の學法であるかのやうに、父の寬齋も、兄の存齋も左樣であつた。この間に益軒は、人の信用を博するやうになり、翌年父に隨つて西歸し、次いで寬齋が致仕したので、國主光之に仕へ、その知遇を蒙つた。表面は御醫者であつたけれど、その實際は儒者として文學を職とした。

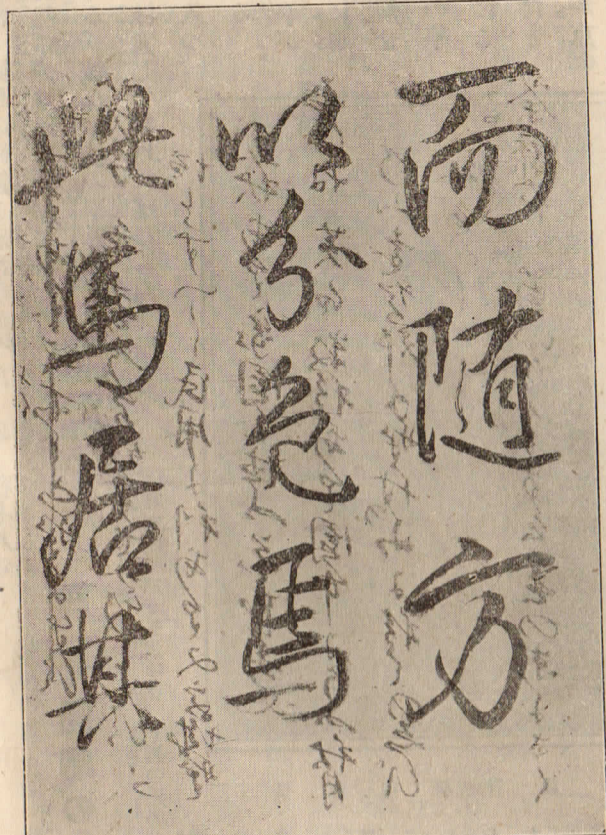
明曆三年は益軒二十八歲である。三月に京都遊學の命が下つた。京都に入つてからは、松永尺五を訪ひ、山崎闇齋を訪ひ、また木下順庵を訪うて、學ぶ所があつた。寬文五年六月十二日の日記に、二條邊に往つて伊藤源吉と會つたとあるのは、仁齋の事である。仁齋の子の東涯が、益軒とは『曾て一縉紳の家に相會ふ。而して道契はず』と書いてあるのも面白い。一方は程朱の學を奉じ、他方は陸王の說を喜ぶ。兩者の意氣もほの見える。當時の學者は、たゞ漢學々々と云つて騷いだけれど、益軒の考へは、聊か人と異つて、孔孟の

經傳を講ずる傍には、國學の研鑽を忘れなかつた。日記に職原抄や、徒然草の講延に列した事を書いてゐるのは即ちそれである。彼れの後の學風を成す所以を思ふ人は、その事に注意してなければならぬ。歷史や、本草の研究に立ち入つたのもこの時である。要するに京都の遊學が如何に彼れを有効に導いたかは、直に領解せらるゝ所で、彼れの學問、事業は、多分にこゝで磨き上げられたと云つて可い。彼れが京都遊學中、日夜刻苦して、或は通宵寢ねざる事もあつたといふのは僞りでない。藩命で一度歸國したけれど、又入洛して、寬文四年まで京都に留まつた。名聲は大に加り、諸生は爭つて益軒の經傳を傾聽した。京都で力學講習する事、前後七八年。

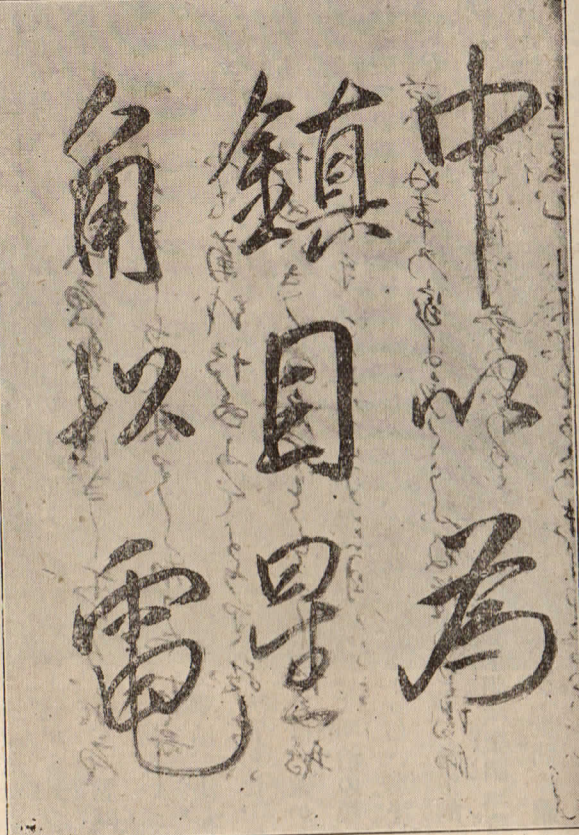
四　光圀卿の湊川建碑

寬文四年三十五歲の春、京都の遊學を終つて、醫鶴原正琳と相携へて歸國するの途、益軒が湊川に楠公の墓を弔うた行跡は、頗る注意に値する事實である。今でこそ、楠公といへば、誰しも古今隨一の忠臣として擧げもすれ、それは水戸の德川光圀卿が楠公を顯彰した以來の事で、その以前に在つては、左程人の崇拜した者でもなく、寧ろ曖昧で、有邪無邪に葬られて居た。益軒が湊川を訪うて、楠公の墓下に涙を揮つたのは、その年三月八日であつた。墓といつても名ばかりで、壞封もなければ碑碣もなく、塋上たゞ纔に梅と松と二株あるのみで、周圍は、草蓬々と生ひ茂つて、荒るがまゝに荒れて居た。益軒は少時太平記に讀み耽つて、能く楠公の忠を知つて居る。しかも、其の孤忠酬いられず、現在か程に打捨てられて居る墓を見ては、慨然として憤起せずには居られなかつた。彼れは情

貝原益軒肖像

知らずの木強漢でない。頑強な漢學先生でもない。忠義の爲めに涙を灑ぎ、孝節の爲めに聲を呑んで泣く正直な特志家であつた。暫くこの有樣を見て躊躇低回して去り得なかつたが、これでは、古墳は鋤かれて田と爲る時もあらう。松梅は摧かれて薪となる場合もある。後世或は楠公の墓たる事を知れなくなりはすまいかと、自からも貲を投じて、一小石碑を塋上に建てんと志し、兵庫には、黒田家の御用問屋たる檜屋某といふ富商もあるので、それに能く事情を打明け、建碑の事を托して國に歸つた。しかし、謙遜な益軒は後に、公の偉烈洪名は、區々たる揄揚を待つべきまでもなく且つ公の德業を稱述して、之れを石碑に勒するには、餘程文學に長けた者でなければならぬ。微賤の身で、他藩に石碑を建てるのは、僭越の罪を免れぬと云つて引下り、建碑の事は遂に思ひ止つた。この顚末は楠公墓下記といふ文を作つて述べて居る。

光圀卿が元祿五年、嗚呼忠臣楠子之墓を建てたのは、益軒の企てたのから、二十七年の後である。光圀卿は、湊川建碑のためには、近侍の儒臣佐々宗淳を遣はして、その事に當らしめたが、この宗淳は、それに先ち、貞享二年の夏、大日本史の資料採取の目的で、光圀卿の旨を受け九州に下り、筑前にも來て益軒と太宰府で會見したのである。益軒が建碑を企て、半にして思ひ止つてから二十七年、宗淳入筑して益軒と緩話を交へて後七年で、光圀卿の建碑は行はれた。これで考へたら、その裏面に益軒といふ人のあつた事は、見逃してならぬ關係である。益軒の記錄の中には、水戸君より物を賜ふといふやうな文字も存して居て、水戸との消息關係もある譯である。益軒が早く此の間に着眼してたのは、近世思想史を稽ふる者に取つては、甚だ重要な一事實たるを失はぬのである。

貝原益軒の筆蹟（筑前續風土記土産考の草稿裏面に手習して子供に見せしもの）

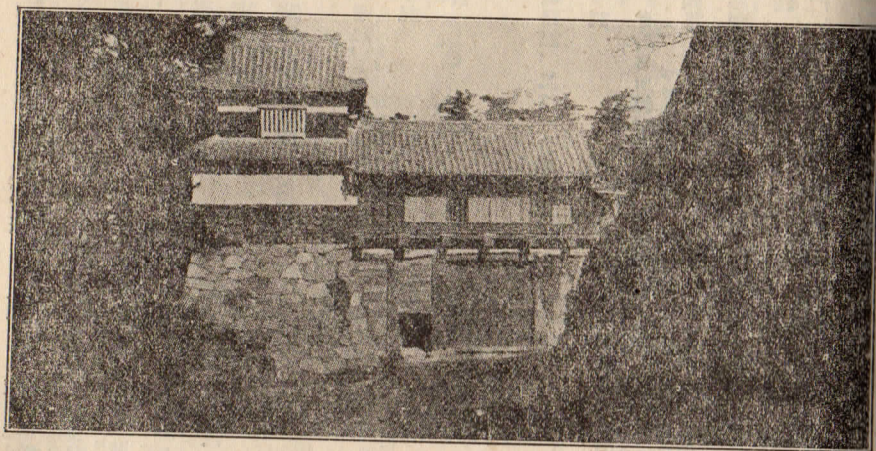
五　社會教育

益軒は最初に陸象山、王陽明の說を學んだが陳淸瀾の學蔀通辯を讀むに及んで、大に感ずる所あつて、陸王の學を棄て、專ら朱子を尊信した、朱子文範を撰んで窮鄕晩學の徒の、簡便に讀めるやうな道を拓いてやつたのも、近思錄備考や、小學備考を著はして世に布いたのも、動機はそこに在る。しかし、この動機が、大に世間を利して一般に敎育を擴げるつてになつた。

藩の儒臣として彼れの力めた事は多い。黒田家譜や筑前續風土記の大編纂に從事したのは、後の歷史家乃至地理學者が、どれ程餘澤を蒙つたか、兎に角有益な仕事をしておいて呉れたと感謝して可い。けれど益軒を、單に儒者として見るのはどうだらう。儒者としても立派な地位を保てる人であつた。けれど彼れの本領は、寧ろそれではなかつたらしい。彼れを歷史の大家と見るのも可笑しい。彼れは醫者でも

あり、本草學者としても可成り大きな著述をのこしてゐるし、又、言語學者としても、その方面では早く着眼した人だけに、確かに敬意を表してもいゝ筈だ。益軒は驚くべき多方面の學者として、一生の間、暫くも休まずに、努力奮闘の生活を續けた。

嗚呼吾輩嘉穀を食ひ、白日を消し、生れて時に益なくんば、禽獸と同じく生く、便ちこれ天地の間の一蠹のみ、苟くも民生に助あらば、方伎の小道を執りて、世儒の誹議を受くと雖も、亦辭せざるところなり。

とは、益軒が、自ら謂つた言葉で、これが、やがて益軒の生涯を貫く精神であり、主義であつた。既に『民生の助』といふ。その着眼點より歸納しても、彼れの學風は、略推察されるので、彼れは學理を扱ふにしても、力めて平易で、婦女童幼にも、決して難解の箇所のないやうに心がけた、隨つて彼れの學者としての態度は、常に社會教育といふ楔子に在つた。彼れの精神と主義とを以てすれば、彼れの教育法が、濟物利用に傾いて、實際方面に走るのは無論である。單に彼れの著述を一見しただけで、枯淡に過ぎて居るなど評するは、寧ろ益軒の本意を知らぬ者といはねばならぬ。彼れの學德を以て、一身を社會教育に捧げ、派手ではないけれど、天晴れな事業を文明史上に築き上げたのは、恰かも明治の福澤翁のやうな者で、その人物から云つても、その教育主義から云つても、實に相似たもので、益軒は、福翁の仕事を、當時に行つて居たと見ても差支へない。實用と平易といふ事に、いつも注意を怠らなかつた益軒の文章は、決して華やかなものではない。けれど内容の充實した、權威ある文章の一體を成した。この點に於ては、確かに一頭地を拔いた識見のある文人であつた。明治の福翁は、必らず此の邊に於て、益軒を學んだらしい形迹がある。益軒が、社會民生に稗益せんとして、通俗的に書いたもので『家道訓』『大和俗訓』『初學訓』『樂訓』『童子訓』などは、所謂『益軒十訓』として、弘く世間に讀まれ、現在の教育にも、多大の影響を及ぼしてゐる。當時の學問の中心は漢學

で、何事を書くにも、皆な學者は、六ケしい漢文を並べて、得意がつたものだ。益軒は自己の研究上の立場からして、必要でない限り之れを避け、日本人は日本人としての獨立した文章を書かねばならぬ事を主張し、出來得べくんば、漢學の精神をも日本文が傳へるやうにし、經書を讀ませるにしても、章句の間に沒頭するのを甚しく嫌つて、一流の讀ませ方をなし、漢文中の措字などを讀むのを廢して、出來るだけ日本本來の文脈に合ふやうに讀ませた。今では滅びて了つたやうな立派な日本語が彼れの文中に往々發見される事がある。今日に於て徂徠や仁齋の書いたものが、どれ丈け一般に讀まれてゐるか、益軒の文章が、是に至つて益々その存在の理由を明かにし、その光輝を増す所以である。

殊に益軒が、當時誰れも想ひ及ばなかつた所の、女子教育に注意したのは、流石烱眼を備へた經世の人であつたといふ面目を、更に著しく浮刻にして見せる趣がある。

福岡舊城の光景

六 晩年の努力

益軒は、元祿十三年、七十一歳で致仕した。けれど、それは益軒の精力の衰へた爲めではない。寧ろ益軒は、これから更めて新しい人として出直す考へであつた。七十一歳は普通人にあつては、所謂古稀を過ぎたおめでたい人であるわるく云へば老癈爲すなき敗殘の人であるが、益軒は決して、その年で老いぼれる程の無氣力ではなかつた。彼れは專ら力を述作に用ゐ、讀

書研究、只管その功を積んだ。彼れの精力絶倫な事は、左の著述年代を見ても判るだらう。

元祿十二年　七十歲　和字解、日本釋名、三禮口訣
元祿十四年　七十二歲　近世武家編年略、至要編、宗像郡風土記、膝行訓語、眞字假字
元祿十五年　七十三歲　音樂紀聞、修補扶桑記勝
元祿十六年　七十四歲　黑田忠之公譜、點例、和歌紀聞、五倫訓、君子訓
寶永元年　七十五歲　宗像三社緣起並附錄、栞譜
寶永二年　七十六歲　古詩斷句、鄙事記
寶永三年　七十七歲　和漢古諺
寶永五年　七十九歲　大和俗訓
寶永六年　八十歲　大和本草、岐蘇路記、篤信一世用財記
寶永七年　八十一歲　樂訓、和俗童子訓
正德元年　八十二歲　岡港神社緣起、有馬名所記、五常訓、家道訓
正德二年　八十三歲　心畫規範、自娛集
正德三年　八十四歲　養生訓、諸州巡覽記、日光名勝記
正德四年　八十五歲　愼思錄、大疑錄

當時、群雄割據の狀態をなして、學者各相下らず、互に議論を戰はして唯我獨尊、無暗にドグマを振り翳して威張つた世の中に、益軒の落付いた態度は、實に稱讃すべきものであつた。八十を過ぎ、九十に近からむとする頽齡で、尙且つ研學の徒に交つて、矻々孜々として思索的生活をつゞけたのは、歐米の大學者に見る態度で、日本には珍らしい例としなければならぬ。『恭默道を思ふ』とは、彼れの題目であつた。けれど謙遜な彼れには、決して學者に通弊と見られる頑固な點がなかつた。

學術に定見なきもの、固より佳となすべからず。而も其學術正しければ　即ち見る所適變するを妨げず。其見る所適變する時は、即ち其學ぶ所適進む。變ぜざる時は則ち進む能はず。

と云つて、舊見に安んじて移らざる者を下愚として斥けた。この思想の推移といふ事が、彼れをして、老いて益新たならしめた所以である。その最後の年に至つて『大疑錄』を編して、宋儒の理氣二元論に反對し自ら一元論を立てゝ、一家の定員を示したのは、實に痛快を極めた事實と認めなければならぬ。

正德三年冬に賢明を以て聞えた東軒夫人が逝くなつた。益軒はその翌年の春に病んだ。老友宮川忍齋が、その病床を訪れた時、益軒は源氏物語宿木の卷の文句『心やすくして暫しあらむと思ふ世を、思ひの外なるかな』と、あるのを誦んじて聞かせた。それが四月で、『大疑錄』を完成したのは、六月であるから、厭くまで奮鬪の生活をよさなかつた忠實さに感服せざるを得ないのである。その八月二十七日、彼れは八十五歲の高齡を以て靜かに瞑目した。

西洋文明の輸入者福澤諭吉

東京外國語學校長　村上直次郎

緒方塾の塾頭

福澤先生は豐前中津藩士福澤百助氏の季子で、天保五年十二月、大阪堂島の藩邸で生れた。父の百助氏は文學を以て藩中に知られてゐた人であつたが、不幸にして先生の幼い中に身まかられたので、先生は長兄三之助氏に依ることゝなた。長兄また文學を修め、才思闔藩に聞えてゐたから、先生は之に導かるゝ所が少なくなかつた、安政元年二十一歲の時、先生は時勢の必要から洋學を修めねばならぬと感じ、長崎に赴いて蘭學を修めた。翌年同地を去つて大阪に至り、緒方洪庵の門に入つて蘭學の研究を續けたが、長兄の喪に遭つて一時鄕里に歸らざるを得ざるに立ち至つた。併し又間もなく大阪に出でゝ再び緒方塾に入り、遂にその塾頭を勸めるに至つた。此の間に於て先生の學力は非常な進步をなしたが、特に師洪庵の注意によつて、飜譯の上に多大なる

工夫を費し、文章を成る可く平易にして、何人でも一讀直ちに意味を了解するやうにしようと努めた。通常の飜譯書は原書に拘泥して、拮据なる文字、聱牙なる語格を用ゐる結果、頗ぶる難解に陷つて、原書と譯書とを對照せねば判らぬやうであつた。先生は此の弊を看破し、如何にもして之を矯めやうと心掛けたが、それが爲め後年に至つて先生の譯書並びに著書は、文章極めて平易にして、解し易く、世に汎く行はるゝに至つた。此の點は全く緒方洪庵のお蔭であると先生自らいつて居られる。

江戸に出て活動を始む

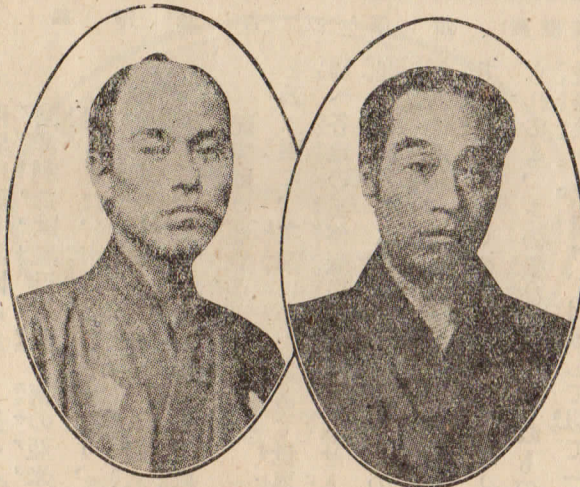
安政五年二十五歳の十月、先生は江戸に移つて鐵砲洲に蘭學の塾を開き、子弟を教授する傍ら心を英學の研修に潜めた。その後安政六年の冬米國に渡航したるを始めとし文久六年歐洲に慶應二年再び米國に渡り前後三回 海外に赴いて大に知見を廣め、慶應三年塾を新錢座に移し、學舍を新築して慶應義塾と稱したが明治四年更に三田(今日の慶應大學の地)の地に校舍を移した。當時は、開國論者と攘夷論者とが鎬を削つてゐる最中で、ともすれば洋學者は攘夷論者の爲めに脅迫せられ、また危害を加へらるゝことも屢々あつたに拘はらず、先生は盛んに西洋學を主張し、一方子弟の教育に力を盡すと同時に、他方盛んに西洋の事情を紹介して、わが國民の蒙を啓くことに努め、多數の著書及び譯書を出版せられた。その中、最も早いのは『唐人往來』と題するものでこれは、外國の事情も、開國の由來も知らずに、徒らに幕府の處置を批難し、排外説を唱へるものを諭す爲めに書かれたもので、當時先生は之に關して自から『一本の筆を振廻して、江戸中の爺婆を開國に口說き落さう』としたものであると云つてゐられる。

『西洋事情』の賣高十五萬

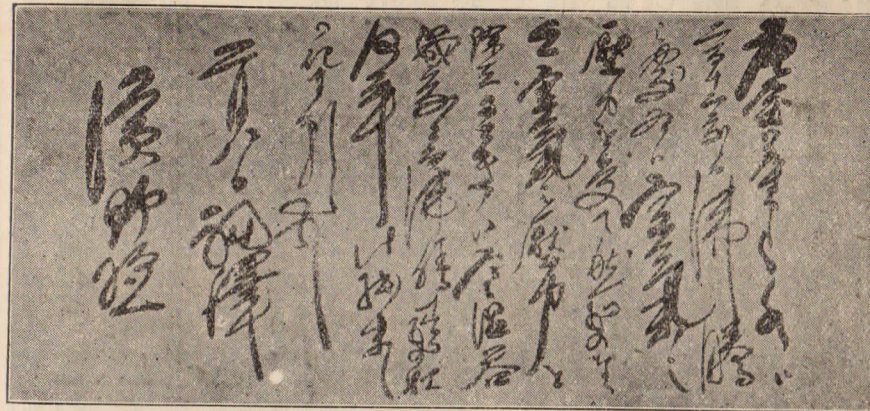
文久元年、先生は幕府の使節に隨行して歐洲諸國を巡回されたが、歸朝後間もなく『西洋事情』といふ書を

古城の面影

これは巻中の偉人に關係ある古城で・一は播州姫路城・二は甲斐の甲府城址・三は尾張の名古屋城・四は肥後の熊本城・五は京都の二條城・六は安藝の廣島城・七は越前の福井城・八は攝津の大坂城・何れも有名なもので・封建時代を窺ふに足る絶好の遺物である・

著はされた。此の書は西洋諸國の地理歴史の大要、政治上の施設、經濟の狀態、その他文物制度等に付て見聞したことを記載したもので、わが國人一般に大に歡迎せられた。實際此の書は時勢に適した書で、一人がこれを見て『これは面白し、これこそ文明の計畫に好材料なれ』と語れば萬人これに應じ朝に野に苟も西洋の文明を談じ、開國の必要を說く者は、一部の『西洋事情』を坐右に置かざるはなしといふ有樣であつた、さればこの發賣部數は大したもので、前後重版して十五萬部を賣り盡したが、僞版の分も地方によつてよく賣れたから、合せれば彼是二十五萬部にも達したであらう。先生は此の書を著はすに當り豫て緒方塾で注意せられた通り普通讀者にも分るやう、特に注意して文章を平易にした爲め、恁くの如く汎く用ゐられたのであらうが、併し單にそれ計りではなく、此の書には、西洋諸國の施設にして、我が國に採用すべきものが多く紹介してあつたので、當時の有志政治の局に當つてゐる人達が、之を參考とした爲めに一層の聲價を博したのである。

晩年の福澤先生と壯年の福澤先生

『世界國盡』

福澤先生は又我が國民一般に、諸外國の事情に通せしむる爲めに、色々の工夫を凝らされたが、當時の寺子屋の手本に『江戸方角』又は『都路』と云つて、五七の口調で地理を敎へる書物があつたので、それに倣つて『世界國盡』といふものを作つた。此の書はその後小學校にも用ゐられ、垂髮の

福澤諭吉の筆蹟（慶應義塾藏）

兒も之に依つて世界の事を知るに至つた。今その一部分を擧げて見やう。

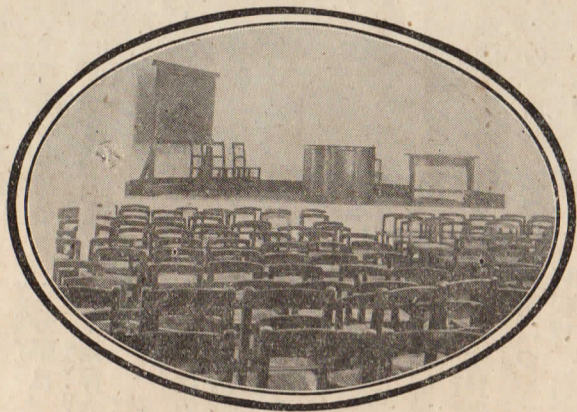
發端

世界は廣し萬國は多しと云へど、大凡五つに分けし名目は、亞細亞阿非利加歐羅巴、北と南の亞米利加に堺かぎりて五大洲、大洋洲は別にまた、南の島の名稱なり、土地の風俗人情も、處變れば品變る、その樣々を知らざるは、人の人たる甲斐もなし。學びて得べきことなれば、文字に遊ぶ童子へ、庭の訓の事始め、まづ筆とりて大略を記す所は亞細亞洲。

と云ふ風に、次第に歩を進めて世界の大勢が書いてある。それに頭註を加へ各地の風俗歴史の概要を載せ人物風景の圖も掲げた。その一般に歡迎せられたのは當り前である。その他『西洋旅案內』を著はして、海外旅行者の心得べきことを示し、『條約十一國記』、『西洋衣食住』等を著はして、更に詳しく西洋の事情を知らしめるに努めた。又銃器が多く舶載せられても、その扱ひ方を知らぬものが多いので、西洋の書物を譯して『雷銃操法』と名附け、出版して以て一般人に銃器の取扱を知らしめた。

筆舌を以て啓蒙に從ふ

明治五年十一月、太陰暦を廢して太陽暦を用ゐ、同年十二月三日を以

て、明治六年一月一日と定める旨の布告が出た時、先生は我が國人一般に改暦の大に必要なることを知らせる爲めに、『改暦辨』を著はして公刊し、且つ卷末に時計の圖を描いて時の計へ方を示した。當時、時計は既に我が國に渡つて居り、上流の人士の間には金時計を持つてゐる者が大分あつたが、唯だ持つてゐる丈で、その見方を知らぬ者が多いと云ふ有樣であつたので、先生は『改暦辨』の卷尾にその説明を加へられたのである。恁う云ふ風に、福澤先生は事毎に工夫を凝らして、我が國人の爲めになるやうな著述をされた。その後又西洋簿記の書を譯して『帳合の法』と題し、新式記帳法を紹介されたこともある、更に新政が布かれて、統治機關が追々發展するにつれ、西洋諸國の如く演説の必要が起ることに氣付き、『會議辨』なる一書を著はして世人に警告し、且つ同志と共に演説の練習をなし、遂には慶應義塾の內に演説館を建設して、其處で屢々學術演説をなすに至つた。これが我が國で建てられた、演説會場にあてる講堂の第一であつて今も尚ほ保存されてゐる。

慶應義塾內に於ける福澤先生記念館

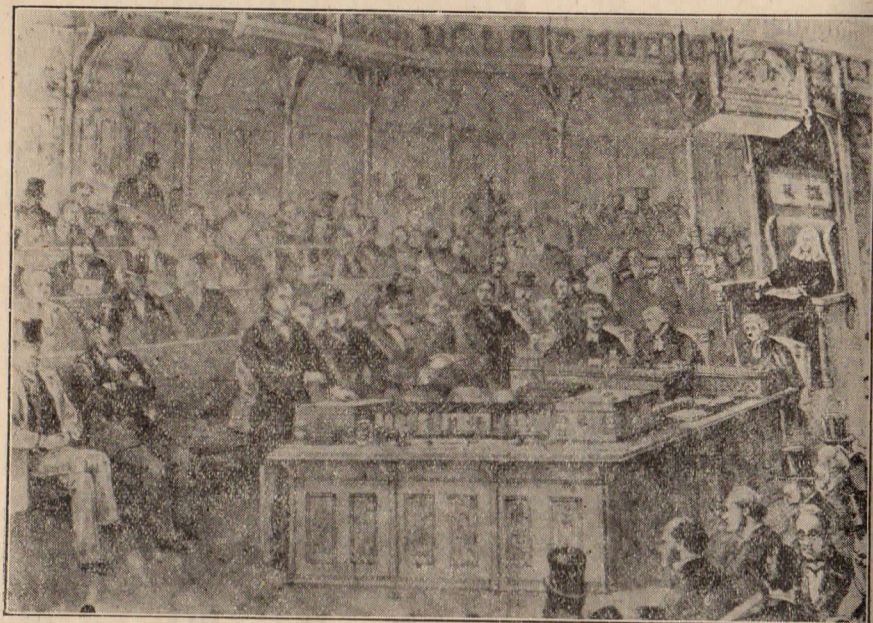
恩賜金五萬圓

以上の外先生の著譯された書物は甚だ多く、すべて『福澤全集』に載せてある。何れも我が國人をして西洋文明の長所を取入れしめやうとする趣意は一つであるが時には我が國人の固陋なることを十分に自覺せしめやうとした結果、その言極端に馳せて反感を招いたことも少くなかつた。併し我が國を今日の開明の域に導びいた事に付いては、先生の著譯と、

慶應義塾に於て施された教育の力とが與かつて大であるは誰も認むることである。先生の人格とか、功業とかに付ては、言ふべき所が澤山ゐるが、紙數の都合で此處には單に、夙くより洋學を修めて、西洋の事物を我が國に紹介された事の一端を述べるに止めた。先生の事業の偉大にして、その功勞の顯著なることは、明治三十五年に　天皇陛下より特旨を以て金幣五萬圓を下賜された一事に見るも明らかである。その前年二月三日、先生六十八歲を以て歿するや、衆議院は滿場總起立を以て哀悼の決議案を議決した。その辭は先生の一生の功業を述べたものゝ中、最も簡潔で、而かも最も要領を得たものである。其の辭は、『衆議院は夙に開國の說を唱へ、力を敎育に致したる福澤諭吉君の訃音に接し、玆に哀悼の意を表す』といふのである。實に剴切の言である。惜くも先生は身曲られたが、その遺業たる慶應義塾大學は益々盛んで、年々多くの卒業者を出してゐる。これ等卒業生は、皆古い出身者と共に社會に出でゝ憂秀の地位を占め、國家の爲めに努力健闘してゐる。

大分縣と維新との關係

大分縣は、往時西洋交通の盛んであつた時代に、最も早く西洋人の渡來した地方であり、大友宗麟の代にはキリスト敎の宣敎師も少なからず入り込んで、宗敎と共に西洋の文物を輸入し、當時吾が國に於て最も進步した地方であつた。その後德川幕府が鎻國の令を發した結果西洋諸國の事情は、僅かに和蘭陀の商人を通じて、知り得る時代になつても、又前野良澤といふ蘭學者を出した。良澤は中津藩の醫者で、最も早く蘭學を修めたものゝ一人である。始め蘭學の開祖とも云ふべき青木昆陽について語學を習ひ、後、長崎に至つて通詞について更に多くの蘭語を學び、明和八年には杉田玄白と共に和蘭解剖書の飜譯に從事し、四年を經て業を了へ、『解體新書』と題して之を世に公にした。これ實に、我が國に西洋の學術を紹介した始めで、蘭學の興る起原であつた。當時の中津藩主奧平昌高は、自

世界國盡し中にある國會の圖

から蘭學を修め、文化七年には『蘭和字書』を公にした。昌高は同年和蘭商館長ヘンドリック、ドウフ（Hendrik Doeff）が江戶に出府した時に之に賴んで、フレデリック、ヘンドリック（Frederik Hendrik）の名を附けて貰つた程の蘭學熱心家であつた。其長子にも後にマウリッツ（Maurits）といふ名を貰つたし、藩主にピーテル、ファンデル、ストルプ（Pieter van der Stolp）といふ名の人もあり、良澤の感化で蘭學がなか〳〵盛んであつた。我が國が開國に決して維新の大業をなすに際し、事に當つた人々の中には蘭學を修めたる者が少なく、又當時の國論を開國に導びいたのには、我が國人の中で比較的に、西洋諸國の事情に通じてゐた蘭學者が與かつて力があつた。從つて維新の大業と、中津との關係は、夙く蘭學を起した前野時代から起つてゐる譯であつて、吾が福澤先生は此の如き地に生れて、此くの如き空氣を呼吸した人、前述の如き生涯を送つて、我が國今日の文明に貢献せられたのは決して偶然ではない。

安井息軒先生

第一高等學校教授　安井小太郎

世々日向の伊東公に仕ふ

息軒先生、名は朝衡、字は仲平、また半九と號す。幼名順作。滄洲先生（諱は朝完君）の第二子なり。世々日向飫肥藩主伊東公に仕へ、その支邑清武郷中野に居る。家傳によれば安井氏の祖は上州厩橋附近安井の人なりしが、延元々年足利尊氏筑紫下向の節、畠山修理亮に屬し日向に下り佐土原に滯在すること一年、同人口入を以て伊東祐持公の臣となり、知行として諸縣郡古松郷を領し、それより代々伊東家に仕へ、その家臣となれりと。然れ共天正年中伊東家日向沒落の時家臣四散し、舊記散逸したるを以て、その姓名事歷等は詳かならず。豐太閤の島津征伐後伊東家再興に及び、來りて臣となるを相左衞門朝秀と云ふ。之を安井氏中興の祖となす。息軒先生九世の祖なり。朝秀五世の孫朝宜、兵學に精しきを以て、清武の子弟に兵學を教授することを命ぜらる。

朝宜の曾孫朝完君に至り始めて文學を以て家を興す。

息軒の父滄洲先生

朝完、字は子全、通稱平右衞門、滄洲と號す。幼にして父を喪ひ、叔父日高源助につき句讀を受け、筆法を習ふ。長ずるに及び、讀書を好み出入書籍を離さず。時人皆之を笑ひ、學問は唐土の事なり、この邦に生れてはこの邦の俗に從ひ、弓馬こそは學ぶべけれとて、其の來るを見ては、孔子來れり、孔子來れりと罵りしかど、少しも意とせず、益々聖學に心を傾け、文化の初江戸勤番の歸途、有馬湯治を名として京都に滯留し、皆川其園の門に入り、徂徠派の學を修むると一年にして歸り給ひければ、郷人の學に向ふもの多く譏も少くなりぬ。常に曰く、この世に生れたらんには、須くこの世の用を爲すべし、今日爲すべきは、獨り人材を教育して國家他日の用に供するあるのみと。文政十年、邑人矢野莊左衞門、平島八郎兵衞、高橋藤藏等と議し、邑中に學校を作り、十月十二日落成し、之を明教堂と名く。飫肥には之に先立つこと二十七年、享和元年に振德堂の設けありて、教授、主事等數人を置き、釋奠なども行ひしか、文具に過ぎずして、文教の振興を見るに至らざりし。然るに清武に明教堂起り、滄洲、息軒、二先生鋭意して之を振作されし結果は、僅かの間に人材輩出し、飫肥の振德堂を凌駕せん勢となれり。天保二年に至り、公命を以て滄洲先生を振德堂教授に、息軒先生を助教授に任じ飫肥移轉を命ぜらる。以後校務に盡力する事數年、天保七年卒し給ふ。古今體詩六卷、紀游若干の著あり。年六十九。飫肥の文學教育あるは滄洲先生に創まれり。而して、息軒先生の學も亦先生に淵源するを以て、先生の傳記を叙するに際し、數言を家學の來歷に費したるなり。

勤勉藩醫を驚かす

息軒先生に兄あり。通稱文治、諱は朝淳、清溪と號す。滄洲先生を助けて郷里の教化に從事されしが、弟を大成せしめんと欲し、父に請ひて大阪に遊學せしむ。時に文政三年、息軒先生二十一歲の時なり。先生、父兄の允許を得て大阪に出て、篠崎小竹の塾に入りしが、學資給せざるを以て土佐堀三丁目の伊東家倉屋敷の一室を借り、自炊して通學されたり。その刻苦常人の堪ふる能はざるものありしといふ。大豆をその儘醬油に鹽を和したるものにて煮しめたるを一二升作り置き、三食唯この大豆のみを數年續用せられたれば、屋舖の人など仲平豆とて追々之を用ふるものあるに至れり。先生、元來蒲柳の質にて、勤學の割には食事も十分な

らざるを以て、藩醫の江戸より來る者、倉屋舖に至り先生の容子を見て廢學歸鄕を勸むる者あり。先生曰く、戰場に敵と組合つて討死するは武士の面目なり、我已に學問に志す、書卷を抱いて一室に斃死するとも憾む所なしとて、研學止まず。已にして兄清溪君病を以て下世し給ひしを以て先生を繼嗣と定め召還する事となりぬ。時に文政五年なり。先生大阪に苦學すると三年曾て友人の誘引にて住吉に一度行きしのみ、他は、未明より夜半まで兀坐机に對し倦怠の色なかりしと云ふ。

始めて昌平校に入る

大阪留學を中止して鄕里に歸られたる後は、滄洲先生を助けて鄕黨の敎化に從事されたるが、四方の志止むべくもあらず。文政七年江戸に遊學して昌平校に入る事となれり。當時昌平校に入る者は、敎授の一人を師と定むる定めなりしかば、先生は古賀小太郞を師として入學され、此にて鹽谷宕陰、芳野金陵、木下犀潭諸氏と交を結び、廣く官庫の書を閲し、清儒考據の學にあらざれば聖人の學に至り難きを知り、漢注唐疏を專心研鑽されたるよし、後に物語りありし。昌平校は元來林家の私學なりしを、樂翁公の時に官學に改めしかど、尙程朱學を本宗とし、考據學は陸王と同じく異學として排斥を受けたるが、先生は毅然不屈、自から期する所ありと云ふ。時に歳二十六。左の一首を賦し、同舍へ示されたりと云ふ。

今は唯忍ぶが岡の杜鵑
いつか雲井に名をや揚げなん

文政九年、江戸藩邸勤番を命ぜられ、祐相公の侍讀を兼ね、十年五月、祐相公に從ひ歸國、此時清武の明敎堂新築の事及び飫肥移轉の事あり。天保二年九州諸國の風俗政治視察の内命を帶び、兩豐肥筑の地方を巡覽して歸り、觀風抄一卷を著はし進呈す。天保四年側儒者に任ぜられ、祐相公に從ひ東上し、五年歸國す。七年滄洲先生捐館。時に先生三十八。

再び昌平校に入學

大阪遊學は清溪君下世の爲に中止せられ、昌平校遊學も奉養の爲に吏務に役せられ、專心墳典を研鑽する能はず。又外浦埋立(日向洋に面する一港)の事を以て鄕黨の容るゝ所とならざりければ、滄洲先生の喪終るを俟ち、勤學の暇を乞ひ、十一月江戸に來り再び昌平校に入らる。この時、人材稀少、學政も大に亂れたるを以て、增上寺の金地院に入り、自炊して讀書せられたり。之は金地院の藏書多きを以て、借覽の便を得ん爲なり。この歲江戸居住の許を得。明る天保九年二月歸國。六月妻子を伴ひ東上、千駄ヶ谷の公邸に住す。先生の手記に、この時の事を記して、籠鳥冲天の想ありとあり。さもあるべし。時に歳四十。

安井息軒肖像

御客があれば好いなと思ふ

昌平校入學、金地院僑居皆意に適せず。家族を伴ひ江戸に住居の身となり、始めて後顧の患なきを得たり。然れ共小藩の貧士が都會の地に桂玉の生を營むことなれば、一歳の俸祿を一月の資に供するも尙不足を免がれず。先妣はこの時十一歳なりし由なるが、炊事買物等は皆一人にてその事に當り給ひ、田舍者と罵らるゝと、言語不通なるとは、何より悲しかりしとの事なり。又老後屢々余等に物語られしは、夜分來客の時は、夜鷹蕎麥二つを出して酒の菜とするを例とせらるるを以て、自然と夜鷹蕎麥の味を知り、寒き夜などは御客があれば好いなと思ひし事度々ありし位なるが、唯如何に不自由しても、父上が出精して御出になれば御出世は疑

なしと思ひ、それのみを樂にし、江戸に來て以來御祭一つ見た事なかりしと。宕陰翁の文に此の時の事を記して左の如く言へり。

戊戌歳。遂辭官挈家來就學於江戸。居無幾而逢火。貲財蕩盡。未踰年。季女又病瘂矣。仲平自降祿爵離桑梓。孑然僑居于三千里外。竈突未黔累逢不虞之難人倫之變。皆人所不能堪。而志氣不少撓。讀書日必盈寸。作文年可以囊計。齡垂五十。俛焉刻勵不知頭之將蒼。此豈今世之士哉。

文久二年、昌平校教授となり給ふまで二十五年間は、先生の最困窮時代なりしが如し。然し此二十五年間は後來諸般の基礎となりし日月にて、三計塾の創立、諸經説の著述等、皆この間にその下地出來たるものなれば、先生に取りては最も興趣ある時代なりしなり。

三計塾の創立

三計塾の創立はいつ頃なるや詳かならざれど、最初千駄ヶ谷の藩邸に居られしは僅かの間にて、邸外居住を願ひて下二番町なる旗下某氏の長屋を借り、そこに始めて塾を開かれしが、其頃命名せられたるものならん。其後諸所に移轉し、昌平教授時代には、下谷和泉橋通りなりし。其次前は詳かならず。三計塾記は世間に流布せるを以て省く。塾生は七八人より三十人位に止まり、維新後の如く八十人、百人などいふ事はなかりし。隨つて師弟の間も親しく、教訓もよく屆きしと云ふ。三計塾出身にて、後來知名の士となられたるは左の人々なり。

長森　敬斐　小中村清矩　島本　仲道　松岡　七助
渡邊　昇　增戸　武平　本間瀬柔三　安藤　太郎
世良　修藏　谷　干城　木越　亭　井田　讓
品川彌次郎　黑田　清綱　三浦　安　陸奧　宗光
三好　退藏　雲井　龍雄　藤井　三郎　岩崎小次郎
龜谷　省軒　柴原　和　山東　一郎　山内　提雲
鵜飼　銕城　石本　新六　松村　介石　柳田　眞平
神鞭　知常　大東　義徹　佐久間貞一　島村　干雄
明石元次郎

右は入塾の順序により記したるが、この外學問德行にて世に秀でたる人許多あり。又姓名を變更したる爲に知名の士たる事不分明なるも多かるべし。先生が佐幕勤王の論を主持せられたるにも拘らず、門下に維新の大業を翼贊せる人士の輩出せるは奇と稱すべきも、之によりて先生敎化の素あるを見るべし。滄洲先生が人

材を教育して國家の用に供すべしとの志は、先生に至りて之を大成されたるものと云ふべし。三計塾則は簡短なるものにて、一、忠孝の大道を守るべき事。二、酒色遊蕩を愼む事。三、喧嘩口論を爲すべからざる事。但し學問政治に關する議論ならば、徹夜して爲すも不苦等の事なり。當時の塾生は皆藩の選拔生にて年齡は二十四五位を常とし、歸國後は藩校の教授又は藩政の顧問となるもの多きを以て、その講究する所は天下の大勢に關するもの多く、蓬頭弊衣の書生なれど一國の大臣を以て自から許し、その氣慨當るべからざるものありしと云ふ。

昌平校教授と成る

講學の傍ら人材の教育を以て任とし、民間の一儒生たりし事二十五年。文久二年に至り、將軍家持公より拜謁を賜ふ旨沙汰あり。先生病を以て辭する者再なりしが、九月に至り復召命ありければ、十五日拜謁・十二月十二日昌平校教授を命ぜられ、二百俵を賜ふ旨沙汰あり。翌年別に學資として十人扶持を賜ふ。當時諸藩には大抵藩學あり。江戸市中にも講學を以て家を樹つるもの數十に下らず。藩士の俊秀なる者は、多く私塾に入りて業を受くる姿なりければ、昌平校は旗下の子弟と、少許の藩士を教授するのみにて、隨つて教授の職も實は文具に過ぎざる有樣なりし也。先生が二度まで賜謁の命を辭退されたるも、これ等の事情に因るなり。故に教授となられし後も、定日に登校教授するのみにて、精神の注ぐ所は尚私塾教育にありしが如し。先生昌平校教授となる事三年。元治元年二月奥州塙の代官に轉任す。この時幕府庶政を更新し、殊に所謂天領の地に意を致し、その根據を固くし、土崩瓦解の禍を拒がんとし學識あり兼ねて民政の心得ある者を各地方の代官とせるが、先生もこの選に與かれる也。然るに親友數輩、先生の老いて寒鄕に吏となるを憫み閣老板倉周防守に免官のことを懇請したる爲に、同年八月代官職御免となり、小普請入を命ぜられたり。

攘夷論沸然として起る

嘉永癸丑米艦浦賀に來りしより、續いて歐洲諸强國亦軍艦を率ゐて通商を乞ふに至り、幕府は鎖國の舊制を據り、武門政治の破滅を致さん事を恐れ、寛永の前規を引いて百方之を拒ぎしが、彼亦幕府が淸國和蘭と通商せる事實を執り、容易に承諾せず。一歩を誤らば

清國鴉片亂の覆轍をも踏まん形勢なりしかば、依違の間に事を了し、許否を明答せず。因てその間に於いて國防を充實せんと圖れり。然るに二百年泰平の後を承けたる事とて、議論のみ多くして實績を擧げたるは一もなかりし。先生、當時の作に、

寇至色然駭。寇退復恬嬉。悠々三十日。未レ聞二一策奇一。謝安鎭二物情一。豈無レ所二設施一。陽戰陰主レ和。欺レ人亦自欺。百年論自定。誤レ國竟歸レ誰。一誤猶倚可。再誤亦不レ可レ爲。(讀宋紀)

是は幕府の吏員が表面の取繕に止まり、誠實に國を憂ふる心なきを嘆かせられたる也。國防を充實して通商を拒絕するは、當時の輿論にて、水戶景山公を首め鍋島閑叟、島津齊彬、山內容堂の諸公は有力なる主張者なり。幕府も最初は攘夷論なりしが、外艦の屢々來りて要請するに逢ひ、力の敵せざるを知り、通商は止を得ざる事と爲し、その意見を變更したるを以て、こに於いて攘夷論沸然として起り、策の施すべきなかりし。安政五年二月に至り、堀田閣老を上京せしめ、通商勅許を得て、人心を鎭壓せんとしたるが、中山大納言以下八十餘人の反對に逢ひ、不可許の旨を得て歸東せり、幕府にては井伊直弼を大老とし、堀田の閣老を罷め、その六月米國と神奈川條約を訂し、通商を許す事となる。然れ共勅許を得ざるを憚かり、假條約と稱せり。是に於いて幕府の處置を違勅なりとして、勤王論大に起れり。これよりして勤王攘夷の論は一世を風靡したり。

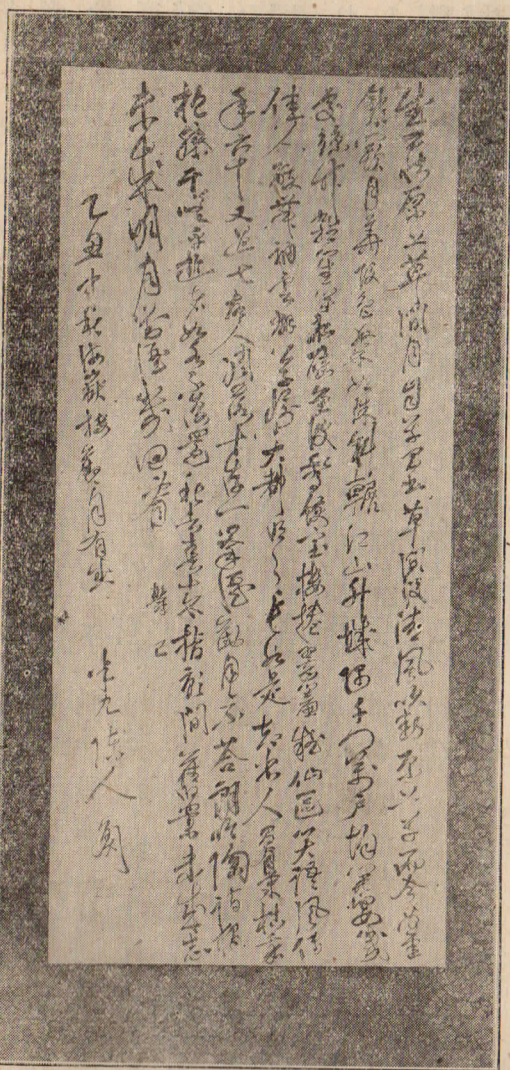
致仕退隱するに至る

先生は國民として勤王すべきは勿論なれど、文武百般の政治を關東へ御委任の事となれる今日に於ては、偏に幕府を佐けて朝旨の奉行を務むべし、朝旨が攘夷なる以上は、幕府は勿論之を遵奉すべき道理なり、唯攘夷を爲すは、彼我の形勢を知り、武備を充實し、又人心を作興すべしとて、景山公及時の閣老へ數々建白されたり。景山公は殊に先生の意見を尊重し、藤田東湖に命じて常にその說を徵取せられ、足レ食足レ兵民信レ之矣の八大字を書して贈られたり。然るに幕吏の爲す所先生の豫期に反し、假條約を訂するに至り、その後己未の大獄など起り、幕府の處置宜を失ひければ、その爲すべからざるを見て、慶應三年に至り致仕を乞ひ、その允許を得給へり。是より市井の一老學となり、益々著述に全力

を傾注し給ひたり。先生の手記慶應三年の條にこの時の事を記して、嘉永癸丑米夷橫濱闖入より、時機に從ひ當路及び水府景山公へ上書する事數十度、皆採用せられず、此年に至り、時事不可爲を見て、官粟を素餐するを名として致仕を乞ひ、十二月に至り始めて允さる云々とあり。尙先生の時局に對する意見は、海防策、攘夷論、與堀士遜書、西鈴要錄序題豐公裂册圖等に散見せり。又藩主伊東公碑文に、豪俠喜レ事者。爭遊二說諸侯一。以二佐幕勤王一爲レ辭。以レ次到二飫肥一。問曰。公佐レ幕乎抑勤レ王乎。答曰。我世隸二武門一。然將軍亦勤王臣也。幕府未レ廢。佐幕以勤レ王。幕府既廢。親奉二朝廷之旨。勤王佐幕其義一也云々。これ祐相公の言を叙せしものなれど、實は先生の志なりし也。

安井息軒の筆蹟

領家村に轉居す

致仕後四日を經て、近街より火災起り、半藏門外の住宅烏有となりたるを以て、復千駄ヶ谷の藩邸に暫時寓せられけるが、遂に王子在の領家村に轉居されたり。

その理由は自著北潛日抄の端がきにあり。曰く、既而西師漸追。海道踰二函根一。山道至二諏訪一。諸侯在二府下一者。卒賜レ告歸レ國。幕士采邑在二近畿以西一者。亦有二西上一者。而府下謝罪之使。冠蓋相望。

皆不得達。又聞予門人多在西師中。或有爲將卒者。竊謂予新辭祿。若事未成。門人儻有訪予者。世或疑予通於西師。百喙不能解。嫌疑之間。不可不愼。不若暫潜近郊以至晩節也云々。先生當時蓄ふる所七兩餘に過ぎず。而して五人の家族を伴ひて僻郷に世を避け給ひたる事なれば、常情よりせば、生活以外に考慮の及ぶなき筈なるに、自著の日記を見れば、戰國策補正、書說摘要は皆この潜居中に出來せる也。又最も及び難きは、祐相公が先生の祿を辭して窮居せるを聞き、大夫平部溫卿に命じ、厚祿を以て先生を迎へんとし、溫卿が書を致して之を慫慂したるに對し、不覺感泣。而有大義在焉。不得輙應之と云ひ、又德川氏之安危存亡未定。而先謀身家之安。舊君之義安在。且衡辭祿近耳。或謂視機而作。以圖後榮。嫌疑所在。百喙不能解。生則終身含羞。死則遺臭於千載。五十年讀書拂地而盡矣。とて其命に應せられざりし事なり。然れ共、子孫の憂は先生と雖も時に免れざるものあり。日記に又曰く、夢幼孫裸乞於路。不覺悲號。爲家人所喚醒。過進午飯。客氣滿腹。卻而不食。孫千菊甫三歲。持蕃薯來献。見之垂泣。恐家人輩疑怪。遽復蒙衾。既而自謂。吾氣歉竭矣。恐不能久。與其徒死於憂。寧姑爲吾業。雖不能有成。或亦有所少慰。未位強起。復脩摘要。終高宗肜日般庚三篇。云々。又、考妣忌日の條に、是日爲先妣忌日。村居荒陋。無以爲薦。昨購茄子於川口。僅以爲奠。嗚呼存無以奉歡。亡無以慰靈。飄零於千里之外。不能以歲時掃墳墓。七十之年。無家可歸。無親可依。祖孫五人。瞠然以待飢寒之迫於後。雖以逢亂離。抑亦天所以罰不孝也云々。一度德川氏の臣籍に屬したるを以て、致仕後と雖もその節を全うし、窮困に處して晏如たるは、その毅然たる性質の致す所なるべし。

杜門謝客の生涯

領家村に在る事十一箇月にして、その年十一月井伊家の代代木邸に移る。是より先、井伊家より先生の著左傳輯釋を刻せん事を請ひ、校正その他の事につき邸内に延き、客禮を以て待つ旨を云ひ來りたるを以て、その請を容れ、後又伊東家の外櫻田邸に移れり。明治二年二月辨官に出仕を命ぜられしが、衰老を以て辭し、後又宮家より侍講の囑ありしが、同じく辭して就き給はず。著述に耽り、碁を友とし、杜門謝客の生涯なりしが、憂時の念時に溢れて辨妄となり、論共和政事書となれり。當時西洋思想横流して、皇國の風俗典禮を一掃し、國體に迄變更を試みんとする狀勢なりしが、先生の是の二著により、狂瀾を挽回するに幾分か力を添へし者あらん。明治以後は伊東家より三十人扶持を給せられ、塾生も百人内外ありしを以て、家道も稍裕かとなりしかば、優悠として世を送り、明治九年九月二十三日易簀せられたり。歳七十八。著す所、管子纂話、左傳輯釋、論語集說、孟子定本、大學、中庸、辨妄、讀書餘適、息軒遺稿（救急惑問）睡餘漫筆（以上既刊）周官補疏、毛詩輯疏、書說摘要、戰國策補正等あり。

殖産事業にも苦心せらる

先生の事業中、教育著述は重なる者なるが殖産に就いても常に心を用ゐられたり。日向は土地の割には人口疎なれど、當時藩制にて絹布を用ゐるを嚴禁したる爲めに養蠶を爲すもの一人もなし。先生之を憂へて城ヶ崎町の南村惠藏にすゝめて之を爲さしめ、桑の栽培法などは先生親しく上州に至り之れを調べ、手紙を以て報知などせられたり。宮崎南那珂二郡の養蠶家は、全く先生の指導に因るなり。この事は官報第一號に宮崎縣報告として委しく掲載しあり。以上は息軒先生の事歴の梗概とす。子孫が先人の事を敍するは、所親に私する嫌あるを免れざるを以て、息軒先生日記、平部溫卿の日向纂記、太夫人より聞きたる事などを取集めて之を書し誇張虛飾に涉らざらん事に注意せり。先生が絶倫の精力を以て勤儉家を興し、子孫をして其の慶に賴らしめ給ふ事は、余等の永記して忘れざらんと欲する所なり。

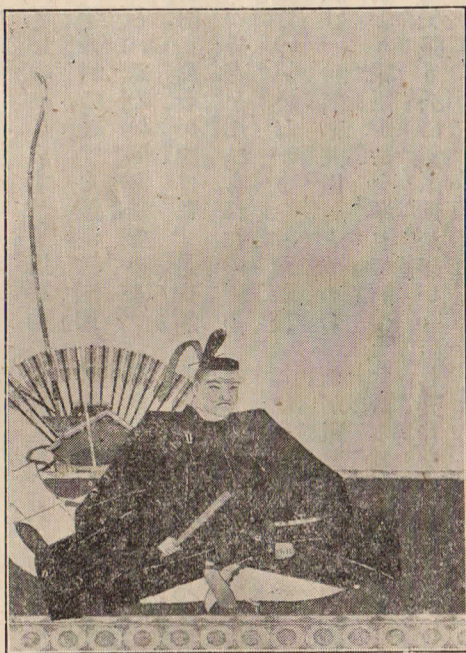
池田光政の治績

樞密顧問官子爵
花房義質

眞の賢主眞の名君

元和偃武の後、全國の列侯は長らくの兵亂に疲弊したる人民を休養せしめんものと、爭うて鴻儒碩學を招聘し、その意見を諮ひ、その獻策を容れて、政治に力を盡した結果、教學盛んに興つて風化一時に改まり、諸藩には少なからざる賢主名君が現はれたやうに歷史の上に見えて居る。その中には秀でた學者や、優れた家臣やを選任して、やらせられたには相違もなからうが、總て創業時代には賢明な君主が百年の基を建てられたのである、就中池田光政公もまた、當時の名君として、その名一世を籠罩したが、之には熊澤蕃山を始め數多の碩學鴻儒を招聘され、就中蕃山が補弼の力多かりしは之を認めねばならぬが、蕃山始め家臣等の翼賛なしとするも、公は決して無爲にして終られた方ではない。公が眞の賢主名君であつた事は、三十年間記け續けられた日記によつて、明かに之を認める事が出來る。日記は備忘の爲め私に記けられたもの、素より簡單なものではあるが、それを精讀すると、燦爛たる公の事業施設が、單に部下の發議考案に成りたるもののみに止まらず、公自身に發明し、工夫せられたものの多き事が知れるのである。

八歳にして家を繼ぐ

光政は輝政の孫、利隆の子、幼時は父の名を取つて幸隆と云つたが、後諱を光政と改めた。通稱を新太郎と云ひ、從四位下左近衞權少將に任ぜられたので、世之を新太郎少將と稱し、薨去後諡して芳烈公と稱した。慶長十四年四月四日備前岡山城で生れたが、同十八年祖父輝政姫路城に薨じたので、父の利隆はその遺領を襲いで播磨四十二萬石（宍粟、佐用、赤穗三郡を除く）を食むこととなり、光政は父に從うて姫路城に移つた。元和二年八歳の時、父卒して遺領を襲つた、間もなく三年因幡伯耆二國に轉封せられたが、年まだ若く自ら政治を覽ることが出來なかつたので、自己は江戶に止り、老臣をして國に就かしめ、翌四年に至つて鳥取城に入り、十五歳にして元服を加へ、從四位下に敍し侍從に任ぜられ、越えて寬文三年十八歳の時左近衞權少將に進んだ。同九年二十四歳の時、又備前に轉封せられて、備前及び備中數郡三十一萬五千二百餘石を領した。

池田光政公像（史料編纂係蒐輯）

注目す可き治水土木事業

公の經營せられた事業は甚だ多く、一々枚擧するに遑はないが、治水と土功とは特筆すべきものゝ一つであらう。その一例を擧ぐれば、上道郡宇野村大字今在家の下祇園の堤防長さ約百間を石疊とし荒手となし、幅百間の河床を作つて兒島灣に通じ、岡山城下の洪水氾濫を防ぎ、更に旭川の水源に植林を營んで水源を涵養し、土砂扞止工事を施こしたるが如

き、今日の進んだ治水法を實行してゐるのは豪い。又寛永十四年には、御野郡萬倍新田、十九年には同郡平石新田、萬治三年には上道郡金岡新田、寛文三年には同郡松崎新田及び御野郡辰巳新田、延寶七年には倉田新田など數百頃の新田を開きしのみならず、上道郡西大寺村北方から、岡山城南平井村に達する運河を開鑿して溉灌に便した、倉安川といふのが即ち是である。是等新田の開墾は大概津田左源太の計畫を用ひられたのである。寛文十一年には從來稻作の見込なかりし和氣郡友延に古制に據つて井田を設け、村名を井田村と改められた。これ等の事業は、素より家臣が命を奉じて行つたのであるが、その成功は矢張り公に負ふ所が多い。

經濟政策と救恤法

光政公は又經濟政策及び、貧民救濟政策に於いて、見るに足る可き施設を行つた。光政の長女で本多忠平の夫人となつたものには、湯沐銀千貫目を附してあつたが、公は之を私蓄して毎年五十貫目づゝ、逐附することゝし、家臣津田佐源太がそれを借りて米若干に代へ、朱熹の社倉法に擬して毎春薄利で村民に分貸し、年末に至つて母子を收め、增殖して備荒貯蓄に充つる計畫を立てた。又畝麥の法を興したが、これは麥秋の時、農民から毎畝二升の麥を納めしめ、それを藩廪に貯へ置きて窮民があれば貸與し、翌年の麥秋に返納せしめるといふ定規で、つまり一種の備荒貯蓄であつた。公は又京師より鑄錢師を傭ひ、錢座を設けて通貨を鑄らしむること二回、以て金融を圓滿ならしめたが、度量衡が亂雜で、商賣取引が澁滯を來す所から、その劃一を圖る爲めに幕府に請うて、備前の國中に慣用せられし升量を廢して、新に京量を用ゐることにした。

『一人の饑餓なからしめよ』

寛永十九年、光政の江戸より歸るや、疾風迅雷のやうな勢を以て諸法度を改め、郡村の法、規則、檢見法などを更張した。その年、公は六月に國に就いたのであるが、十二月に至るまで約六箇月の間に、政治上の

案件千二百六十七を處分したと云ふ。以て公の精力絶倫にして、如何に政務に勤勉なりしかが分る。承應三年初夏には旱があり、七月には雨多く、陰霖連日憂愁國中に充ち渡り、月の十九日には旭川が暴溢して水は内郭に及び、家士の邸宅を始め農家市店に至るまで、或は浸水し或は破壞するもの四千戸の多數に上つた。是に於てか、公は倉廩を開いて饑餓を賑恤し、食物金銀竹木等を與へて修繕の用を助け、鰥寡孤獨は特に物資を給して饑餓を免れしめ、郡村には醫員を置て疾病に惱めるものを治療せしめた。その際一部の老臣は、經費多大にして倉廩の空乏を告ぐるを憂へたが、公は重臣及び諸々の有司を集めて戒めて曰はく、『今年の旱潦は我一代の大厄である。思ふに我無道なるが爲めに、此の殃を受けるものならば、上天の意は我を滅ぼすに非ずして、反つて我を戒め給ふのであろう。若し又天の時ならんか、我は好き時に國を保つた。我の覺醒すべきは今である。汝等までよく我が心を體し、夙夜に努力して一人の饑餓なからしめよ。金穀を費さゞるを以て我が爲めとなす勿れ。倉廩は例令空乏を告ぐるとも、國民をして困究せしめざれ』と。命じて用度を節し、儉約を嚴行したが、尚は普れく給するには足らなかつたので、幕府に請うて金四萬兩を借り、之を以て賑恤の資に充てた。

藩黌及び鄕校百廿四を興す

光政公は頗ぶる心を學藝に用ゐ、國民をして教育の光澤に浴せしめようと、寛永十一年には熊澤蕃山を招聘して學事並びに政治上の事を諮詢した。同十八年には學校を領内花畠に興し、藩士の子弟をして之に入つて文武を習はしめた。その學則は花園會約と云つて九箇條より成つてゐる。撰者は熊澤蕃山である。寛文六年十一月には、之を城内に移して假學校とし、九年更に西中山下圓乘院の舊址及び、隣接家士の邸宅十七區を合はせて一區域とし、總面積七千五百坪の中に、講堂、中堂、東舍、西舍、校門等を設け、地方には鄕校百二十四を設けて

姫路城

農商の子弟に讀書、習字、算術を習はしめた。その用度は年額現米五百八十石であつた。同十年また和氣郡木谷村字延原の地を相し、家臣津田佐源太に命じて黌舍を設けしめた。延原は地形幽邃にして講學に適してゐるので、改めて閑谷と名づけることにし、木谷村地高二百七十八石餘を學田と定めた。此の事業は元祿十四年に至つて全く成つた。

文事ある者は必ず武備あり

光政が夙に學問を好んで、文武の道を奬勵したとは、既に前にも說いたが、當時の碩學鴻儒の中、特に深く中江藤樹の學德を慕ひ、參覲の途次には必らず之を大津驛に迎へて、親しくその敎を受くるを例とした。でその門人熊澤助右衛門(蕃山)その弟泉八右衛門、中川權左衛門、加世八兵衛及び藤樹の男中江伊之助、同藤之丞、同彌三郎等を聘用し、又市浦淸七郎、小原善助、窪田道和等の諸儒を聘して文學を敎授せしめたが、獨り文學のみならず、武辨の士も亦諸方より集り來つて、兵學、槍術、劍術、弓術、砲術、馬術等の技術を傳へ、又盛んに流鏑馬を行つて騎射を習はしめ、時々山野に狩獵して進退分合を實地に試みたが、その折には近國の諸侯で來觀する者が多かつた。延寶六年には和氣郡鹿喰島、梔島及び鳴島に牧場を設けて、軍馬の畜養を盛んならしめた。寛永十四・五年島原の役、幕府は西海の侯伯に命じて賊徒を征伐せしめ、板倉重昌をして軍を監せしめたが、光政は船奉行中村主馬に命じて關船十艘を大阪に廻漕せしめ、征討の侯伯航海の用に供した。而して公自身は十五年二月を以て、將軍の内命によつて歸國した。蓋し賊勢猖獗にして事危しと見ば、直ちに結束して戰場に赴く筈であつたのである。

孝子多く領內に現はる

光政公が一生を通じて最も苦心せられたのは、如何にして人民を休養せしむべきかと云ふ事であつた。公は下の意の上に達せざるを患へ、大に言路を開かんと

欲して、承應三年南門の橋上に一匣を設けて諫書を受くることにし、その橋を目安橋と呼んだ。寛文四年には善行十五條を撰んで標準となし、士民をして見聞するに從うて適合の者を上申せしめ、人材に隨うて之を登庸する道を開いたが、後四年の間に、善事を開申する者千六百八十四人に及んだ。當時の有名なる儒者藤井懶齋『本朝孝子傳』を著はして世に行ふたが、その近世の部に收められてゐる孝子十三人の內、六人までは備前の者であつたと云ふのを見ても、如何に闔藩に敎化が行はれて、善人孝子が多く現はれたかゞ分るでないか。これ一に公が文武の道を奬め、敎育を勵ました結果に外ならぬ。公の着眼は實に非凡と云はねばならぬ。

備前岡山城

社寺を合祀し僧侶を淘汰す

寛文六年に至つて、光政は社寺の廢合を斷行した。公は夙に此の點に着眼して、よくその弊害を認めてゐたのであるが、宗敎上の事は如何なる政治家も斷乎たる處置を採り兼ぬる所である。公も亦た此れに關しては少なからず苦心したが、遂に思ひ切つて備前備中の領內に於ける社寺の廢合を企てた。當時領內諸部の神社は、その數一萬一千百三十あつたが、その中六百一社は產土神であるから之を保存し、その他の小祠は由緒正しからざる淫祠故悉く之を廢し、社地に生えた木材を伐つて、一の代官所轄に一社を建立して雜祠を合祀し、これを寄宮と稱した。その數は總て七十六社

あつた。又一面には正祠を修理せしめたが、その數は七十餘社の多きに上つた。安仁神社の如きは式内の大社であるが、興國中兵燹に罹つて唯だ一小祠を存じてゐたのみであるから、公は更に社殿を造營して歲時祀典を執行された。(今此の社は國幣中社に列せられてゐる)公は又當時僧侶の墮落甚しきを慨し、有司に命じてその品行を調査せしめ、退轉或は還俗せしめしもの、凡そ八百四十七人の多數に上つた。寺院も亦たその由來を糺して、五百六十三寺を廢したが、その反對に興復せしめたものも少くない。就中金山寺の如きは國中第一の古刹であるが、仁安以來頽廢してゐたので公は將軍家光に建議して舊に復し、寄附高百八十六石餘の朱印を授けた。此の改廢は實に勇斷で、公一生の施政中最も注目す可きものである。流石の公も、此の改革に就いては庶民の誤解を虞れられたものと見え、普ねく領内に向つて諭告を發せられた。その趣旨は『神儒佛の三教は東照公の兼ね行はれた所である。神道は正嚴にして清淨を本とし、儒道は誠直にして仁愛を旨とし、佛道は無我無欲にして慈悲を主とする。その道は異なつてゐるけれども、何れも國家に害のあるものではない。』と云ふのであつた。

一生の概觀

以上は光政公治績の大略である。公在世の間闔藩事なく、治績大に擧つて人民その慶福に賴つたが、寬永十二年六月、六十四歲の時に退隱し、天寶二年五月二十二日、遂に岡山城中に歿せられた。公の始めて岡山城に入て德政を布きしより、死に逮るまで實に五十有餘年、人民皆その德に懷き、卒去に際しては慟哭痛歎して業を廢するに至つた。公は幼にして父を喪つたが、母榊原氏は極めて淑德の高い人で、公を育つる爲には殆んど寢食を忘れた。その慈愛に兼ぬるに嚴正を以てした家庭の空氣は公をして不知不識の中に剛毅の念と篤實の情とを涵養せしめたのである。公の母氏に事ふるや至誠至孝居常愉色婉安を以て之に對して、つとめてその意に違はざらんことに心掛けられた。公は常に『孝經』を愛讀し、元旦試讀の書に每歲必らず『孝經』を用ゐ、その子弟には自筆の『孝經』各一本を頒つた。追遠の情また甚だ厚く、父祖の墳墓を和意谷に移して四時の祭祀を絕さなかつた。又其の女を京都の一條敎輔に嫁せしめ、參覲の途次必らず京師を過つて天機を奉伺したのを見ても、如何に勤王の志の篤かつたか、分る。公がその生涯に於いて人民の欽仰を受け死後數百年を經て尙その餘德を慕ふもの、全く所以のないことではない。

名和長年想出の記

中央大學校長法學博士　奧田義人

名和長年の事蹟に就いては、今更こゝに事新しく述べるまでもなく、大要は既に讀者の知るゝ通りである。專門の歷史家に云はせると、或は、その事蹟の幾部分が事實でないと云ひ、或は後の世の虛構が多分に混じて居るとも云ふ。併しながら、それ等はいづれも專門家の議論すべき所で、讀者に於いては、それが惡い事でない限り、唯その儘に信じて少しも差支ないと思ふ。それから——これは世の敎育家などに望むのであるが——年若き學生子弟に對して、忠義とか奉公とかいふ事を敎ふる爲に、徒らに抽象的な文字を讀ませたり書かせたりするのは何うかと思ふ。それよりは寧ろ古來の忠臣義士の事蹟を繪に描いて、それを朝夕彼等の眼に觸れさせた方が善くはあるまいか。余はその目的で、先年名和氏兄弟が後醍醐帝を伯州逢阪の港に奉迎するの圖を畫かしめ之を大幅に表裝して余が幼小の時敎を受けた郷里の小學校に寄附して直接幾多の兒童の目に觸れるやうな場所へ掛けて貰ふ事にした。

今名和系譜、その他の書によつて名和氏の系統を調べて見ると、その祖先は遠く村上天皇第

七の皇子一品式部卿具平親王より出て居る。即ち親王の長子師房始めて源姓を賜はり、官太政大臣に上つた。師房の子は右大臣顯房、顯房の子は中納言雅兼、雅兼の子は丹波守季房、季房の子は從五位下忠房で、伊勢の國に住つた。忠房の子は從五位下憲房、憲房の子は兵部少輔憲政、憲政の子は豪運と稱して山徒であつた。豪運の弟に一人の啞者があつて、これが但馬の國に住み、自から小野七郎任房と稱した。任房の子は行房。この行房が伯父の豪運の家を嗣いで昌運と稱し、同じく山徒であつた。昌運の子は昌明、窃かに京師に住み、山門の神輿入洛の時山徒を防禦した功によつて但馬の國に所領を賜はつた。昌明の子は行明、承久の亂に官軍に馳せ參じたる爲に北條氏によつて所領を奪はれ、伯耆の國に轉じて汗入郡長田の庄に住つた。行明の子は行盛、行盛の子は行高、この行高の代より村上の姓を名乘る事となつた。而して我が長年は、實にこの行高の長子で、同郡名和の庄に住んで居たのである。

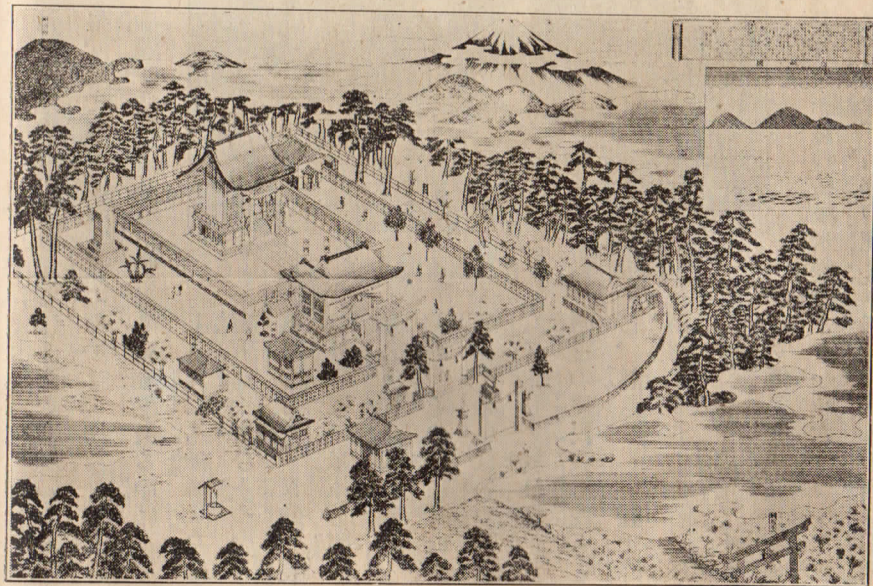
故に、長年は最初長高と稱した。それを長年と改めたのは、畏多くも後醍醐帝よりこの名乘を賜はつたからである。抑も、後醍醐帝が隱岐を逃れさせ給ひて千辛萬苦の末供奉の者共と一緒に漸く伯耆の國大坂の港(今は逢坂といふ、汗入八橋兩郡の境にあり、隱岐の神塚と稱す)に上陸遊ばされた時、成田小三郎といふものを勅使として、豫て勤王の志深しと聞召された名和の庄住人小太郎長高(即ち長年)を御呼寄せになつた。長高は有難く勅諚を拜承して『不思議にも斯かる時節に生れ遇ひて、萬乘の君に賴まれ奉る事、弓箭の面目生前の思出なり、急ぎ君の御供仕つて船上山へ馳せ上り、防矢仕るべし、事成らざる時は尸を軍門に暴すとも何か苦しかるべき。長高に於いては一定思切りたる上は、更に人の諫に拘はる可らず』と申し上げ、時を移さす一族郎黨二十餘騎を率ゐて逢阪の港に馳せ參じ、帝を己が馬に乘せ奉りて急ぎ船上山へ御案內致した。すると間もなく、隱岐判官清高及び能登守清秋等が各々二千餘騎の軍勢を以

て山の東西より來り攻め、長高等死守して遂に之を敗つた。主上、熟々諸將の働き振りを御覽あらせられ、御感斜ならず、他日の褒賞の驗にもと、御狩衣を少しづゝ剪らせ給ひて之を各々に賜はり、即夜長高を左衞門尉に任ぜらるゝと共に、又改めて長年といふ名乘を賜はつた。長高が長年と稱するに至つたのは此時からである。

昔 神武天皇が大和國を征伐し給ひし時に、山中の路頗ぶる險しく、皇師幾度か向ふ所に迷つた。そこで畏くも天祖天照大神が八咫烏を下し給ひ、皇師はこの烏の飛ぶ方向に從つて漸く菟田下縣に到着することが出來たと云ふ。所が、之に似寄つたことが、後醍醐帝の船上山に上られた時にも起つたと傳へられて居る。即はち帝が名和の一族を引連れて、將に船上山の行在に着かせられんとした時に、山中遽かにどよめいて數萬の烏飛び散る中に、一羽長け七八尺にも餘る大鳥があつて宙天高く舞ひ上つたと云はるる事である。又當時長年は、自分の家の米庫を開いて、其所より船上山に兵粮を運ばせたが、その前に彼は米一荷を運ぶものには各々五百錢を取らすべしと觸れ出したので、附近の住民我も我もと之に應じ、忽ちにして五千餘石を運び終はつたとある。然るに、その途中、路險くして人夫等荷の重さに堪えず、或る地點で各々一荷の兵粮米の中より一斗六升づゝを取り除いた。現今、名和の庄より二里ばかりの所に俗稱一斗六

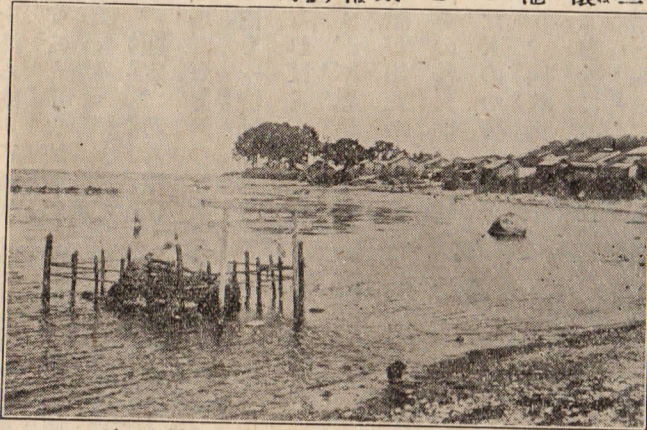
名和長年像(日本風俗史に依る)

升といふ地名のあるのは即ちその遺跡であると云ふ。

長年の戰死したのは、延元々年、足利尊氏の二度目の亂の時である。尊氏は一度勤王軍の爲に京師を追はれ、鎭西へ敗走したが、同年中に再び京師に向つて押寄せ主上も再び叡山へ臨幸遊ばされた。この長年は太夫判官義高以下の諸勢と共に輦輿を守護しまゐらせ、三十萬に餘る賊の大軍を引受けて京阪諸地に華々しく戰つた。楠木正成、新田義貞、結城親光等も皆この戰に參加し、多くは相前後して討死した。當時京童唄つて曰く『三木一草は天下無双』と。三木は即ち楠、伯耆、結城の三氏で、一草は即ち千種であるが、伯耆即ち長年を除くの外悉く討死した。そこで又京童私語して曰く『三木一草の中、三人既に世を去り、伯耆守唯一人となりけるよ』と。長年、之を聞いて無念やる方なく、この次の戰にこそ我れ必ず討死して地下の諸將に見えんものと、やがて來りし三條河原の大合戰に死力を盡して突戰し、遂に大宮（或は内野とも云ふ）に於いて痛手を負ひ、腹搔切つて名譽の戰

別格官幣社名和神社の見取圖

死を遂げたのである。

此の戰に於いて、名和氏の一族中、重なるものは、悉く戰死したのであるが、その中、故長年の弟信濃法眼源盛等は、手勢三百餘人と共に、後に征西大將軍懷良親王に供奉して九州に渡り、菊池武光の管内肥後國八代城に入つた。その後代々官軍に仕へ、所々に地を變へて住つたか、十數代を經たる太郎兵衛長興の時に至り、始めて柳川侯に召されてその臣下となつた。時に元和七年、所謂戰國時代の末期であつた。長興の子は長盛、長盛より四代目の十郎左衛門長庸の時に至り再び名和の姓に復して、以後長靖に至るまで、長年より丁度二十四代の血統を繼いだのである。この長靖と同時代に、江戸の幕府に増井氏といふものがあり、又水戸に久米氏といふものがあつたが、兩氏とも柳川に於ける名和氏の支族である。名族の末滅せずといふ可しである。

後醍醐帝が隱岐より逃れて來られ暫らく腰をかけて名和の來るのを待たれしと云ひ傳ふる御腰掛岩

既に述べた所の名和氏系譜といふものは、即ちこの柳川の名和氏の家に在つたもので、錦の袋に包みその上を生絹で掩うてあつた。餘程古いものと見え、所々腐蝕して、文字の分らぬ所がある。且つその文字は一様の書體でなく、所々異なる人の筆によつて書かれて居る。卷物の終りに押紙があつて、之れに『寛永十七庚辰年七月二十一日云々、伯耆右近大夫弟左兵衛尉長興に相傳ふる也』と書いてある。長興は即ち前述の如く始めて柳川侯に仕へた人である。この系譜には一場の面白い傳説が附隨

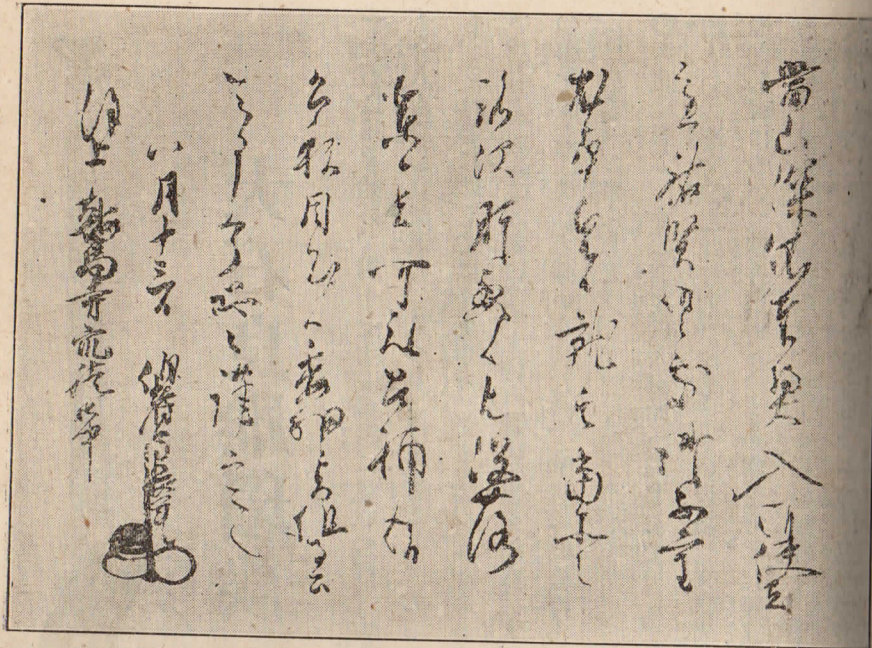
して居る。即ち、長年より八世の孫顯忠なるものは、一旦八代の城を沒落して長門の海上を渡る時、不圖暴風に會つて船將に覆へらんとした。すると水夫が顯忠に請うて曰く『斯かる難船には身命にも易へ難きほどの物を海に投じて神に祈られよ』と。顯定、乃ち重代の寶物たる此の系譜を海に投じて無事に海を渡つた。その後、寬正六年三月、名和氏の領內で一漁師が大きな魚を捕へた。餘りに珍らしい大魚なればとて、之を顯忠に獻じた所、その魚を割くに當り、不思議にもその腹中より例の長門の海に投じた系譜が出たので、人人顏見合せて驚いたと云ふ。所が、その後又顯輝の代となつて之を失ひ、一時何所へ行つたものか少しも分らなかつたが、その弟某の代となり、偶然再び名和の手に歸した。但し、行在或問といふ書物には、これを全然嘘であると云ひ、實際その系譜を見るに少しも潮のしみた痕がないと云つて居る。

名和氏は代々帆懸船を紋章として居るが、之についても又面白い由緒がある。長年が後醍醐帝を奉じて船上山に拔群の忠義を現はすと、主上は非常にそれを御喜びになつて、御手づから供奉の臣忠顯朝臣をして、帆懸船の畫を描かしめ給ひ、之を長年の家の紋章に賜はつたのである。その時又、長年が末代までも龜鑑に仕れとて、御宸筆の御文及び御歌を賜はつた。爰に謹んで之れを引用する事と致す。

漫々たる海上にいづくともなく漂ひて四日ばかりは過ぎぬ、二十七日の夕方にや、杵築の浦にて西風はげしく吹きていかなるべきにかと心騷ぎせしかども風にまかせしに、夜より波の上も靜かに明ぬればここかしこも見ゆるに、伯耆の湊に着きぬ、梶取もいまや力つきぬと云ふを、とかくして大阪といふ所につきぬ、こゝは荒磯にて釣船だにもまれなり、此の所のあるじといふ者も都にありければ、よしあしにつけてこたふべきものも無し、ともなる人ひとりふたりはなほ、人もとめにとて出でぬ、梶取もにげうせぬれば、あやしき苫の下にたゞひとりうつもきゐたる心の中いはむかたなし、直衣などを引裂きていまはかぎりと待居たるに、船のもとに人ひとりきたり、あらく舖もなきはいかなるにやとあやしきに忠顯を尋ねて御迎のよしを奏すぞ、嬉しなどはかゝるためしなぞいふべかんめる、中々其時は心も詞もおよぶべき限にあらず、おもひいづるたび每に、その氣味なほむれにあり、忠を致す輩いづれもおろそかなるべきにはあられども、さしあたりて待出でたりし心地なむ譬ふべきかたぞ無かりし。

名和長年の鞍馬寺衆徒に送りし書翰(鞍馬寺藏)

御製　忘れめやよるべも波のあら磯をみ船のうへにとめしこゝろは

長年が忠功後代の人にもしらせむが爲に記し置くなる、末々の君にもこれを見せ奉らば、いかゞおろかならむ　私の子孫までも、此の忠ばかりは朽じと思へば、正直を以て報國として行末久しくつかへ奉るべし。

今から考へると、何とも申上げやうのない畏多い次第である。長年の忠義もさる事ながら、帝の斯くまでに思召されたる御心の中こそ、我等子々孫々に傳へて決して忘れてはならぬ事である。

後年名和の庄の住民は長年の偉德を敬慕して一祠を建て、之を氏殿權現と稱して崇拜して居たが、その後又、延保五年十月に、領主池田光仲が更に社殿を增築し、社領をも附して之を祭つた。明治維新に至り縣社に列せられ、氏殿神社と改めたが、同十一年一月、更に別格官幣社に列せられ、名和神社と改稱したので、現今の名和神社は即ち昔の氏殿神社の幾度か改築せられたものである。猶この地は、昔長年の米庫のあつた所で、今でもなほ、地下數尺を掘ると當時の焦米が出て來るとの事である。

大石良雄瑣談

醫學博士　井上通泰

◎大石良雄を始め、四十七士の事蹟に就いては、古人も今人も詳しく記述し、且つ具さに批評もしてゐるから、それ等に關しては今更事々しく言ふ必要があるまい。——『學生』記者に『郷土偉人號』を出すから、大石の事を談して呉れと強いられた時、咄嗟の間に浮んだ考を述べる事にしよう。

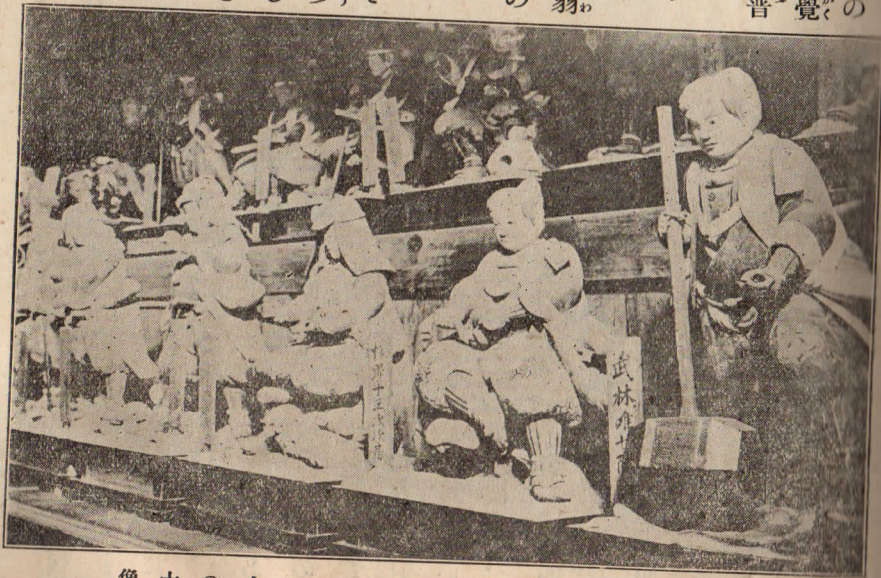
◎吾輩は思ふ、今の青年は大石始め四十七士から、忍耐といふ事を學んでは何うかと。つい近頃、文部省で倫理教育について寄合があり、その席上で出た雜談であるが、或る中學校に就き、新入生徒の缺點で、學校教育の參考に成る事を聞合はすと、一般に忍耐力が乏しく、剛毅の性が缺けてゐると云ふことであつた。これは單に一二校の事ではあるまいから忍耐力の乏しいことは、今の一般學生の習慣であると云ふことが出來る。

◎然らば日本人は、一體に忍耐力に乏しいかと云ふに必らずしも爾うでない樣である。日清、日露の兩役には、吾輩の友人も大分參加したが、その人々の話によると、決して忍耐力が弱いとは見られぬ。併し、それは一人々々の上の事ではなく、多數が寄り集まつた場合の事であり、且つ事件が非常特別の一大事件であるから、それを以て平生の場合を推知することは出來ぬ。

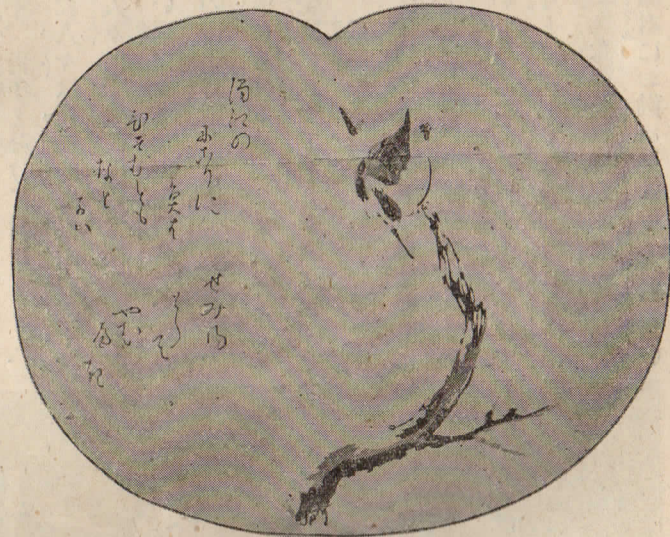
吾輩の見る所では、日本人は概して、平生の場合には個人の忍耐力が弱いやうである。非常の場合には、決心もあり、覺悟も違ふから、その行動も自から平時とは異つて來るが、普通の場合には忍耐力が餘り強くないやうに思はれる。

◎又年齢によつて、老年、中年、青年と分けて觀察すると、老年の人、即ち維新前に生れた人々は比較的に忍耐力強く、吾輩と同年輩の所謂『中年』の人々は、老人に比すれば稍々弱く、青年は更にそれよりも弱い樣だ。また眼を轉じて、今の青年と、これ等老中年の人々の青年時期とを比べて見ると、矢張り今の青年の方が弱いと信じられる。

◎吾輩は教育家でないから、全國に亘つて精しく調べた譯ではないが、姑らく東京、岡山、兵庫の各府縣に就いて見た少數の青年を基礎として、云へば、何れも怜悧で、禮儀も正しく從順の美德も具へてゐるやうであるが、唯だ一つ遺憾なとには、如何にも忍耐力が乏しい。學問は勿論人事上にかけても、飽き易く、倦み易く、一寸と無理をすれば神經衰弱に罹ると云ふ風であるが、言ふまでもなく是れは忍耐力の乏しい結果である。故に吾輩は青年諸君にお勸めをする。何を措い

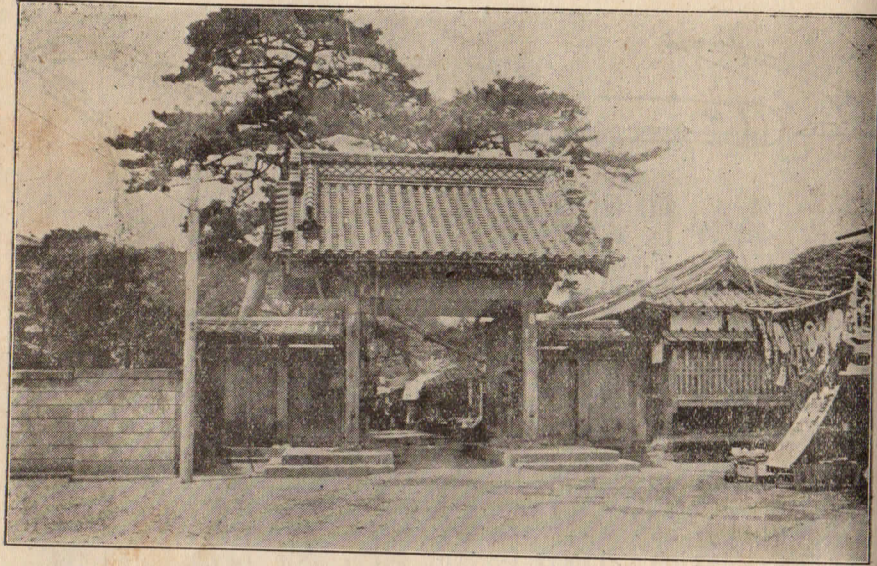
泉岳寺内にある四十七義士の木像

ても先づ第一に、大石良雄等四十七士の忍耐力を學んで貰ひ度いと。

○人は語らんが爲めに口を持つてゐる。言ふべき時には言はねばならぬが、無用の贅辯を弄するのは愚である。然るに今の青年は一般に、寡言のものよりも多舌のものが多い樣である。大石等四十七士に就いて學ぶべきことは甚だ多いが、中でも吾輩は、彼等が二年の間沈默を守つて、その計劃を秘密に附し了せたことは亦今の多舌なる青年の鑑とすべき所であらう。

○史家の説によれば若し四十七士が事を誤まつたならば、第二の義士が起たうと云ふ計畫があつた。無論それに關する往復文書等は殘つてゐないが、併し十分爾う信ずるに足る根據がある。―現に大石は赤穗退城後、復讎の同盟に加はらなかつた人と同居し或は交通したりして居た。彼が山科に居を卜したのは、進藤源四郎が同地出身の人であつたからそれを便つて往つたの。である。吾輩の觀る所を以てすれば、進藤は決して大石の計畫を知らなかつたとは云へない。

○これ等の點から推しても、四十七士以外、更に第二の『四十七士』のあつたことは、疑を容れる餘地のない事である。四十七士だけでも既に多數であるのに陰に潜んでゐた多數の義士が一齊に口を緘して長い間秘密を漏らさなかつたといふ事は實に敬服すべき事ではないか。一から十まで秘密〳〵も感心せぬが、多舌贅辯は決して事を成

大石良雄の畫(贊は木鷄尊者)

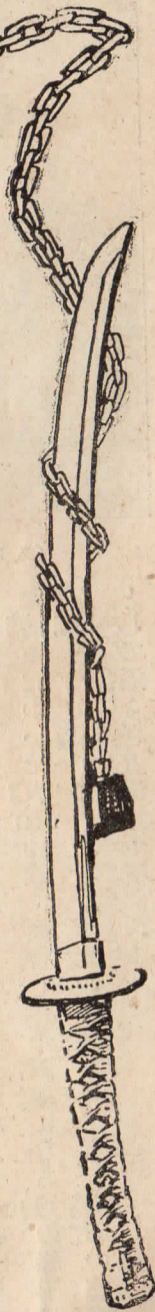
義士の夜討

これは芳虎の繪を山甚が彫刻したもので・全景を一目の下に見せしめるやうに書いた點に於いて優つてゐる・今日の寫實主義から見れば下らぬものかも知れぬが・面白味は舞臺面らしい所に在る（大石良雄記事參照）

芝高輪泉岳寺表門の光景(義士の墓は此奥に在る)

す所以ではない。吾輩は今の青年が此の點に於いても亦四十七士より學ぶ所あらんことを希望するものである。

◎以上は青年諸君が、大石良雄等四十七士より學ぶべきもの兩點を擧げたに過ぎない。四十七士の事蹟を吟味すれば青年の學ぶべき事は極めて多い。しかし古來、いひ古して珍らしくもないから今は言はぬことゝし、二三の異聞を紹介しよう。

◎良雄は俗說に由ると、備前から赤穗へ養子に來たものだなど云ふが、それはとんでもない間違である。此の訛傳は因は、母親が備前の人であつたからである。母親は備前の老臣池田出羽――池田侯の支族で、兒島郡天城の領主であつた。――の娘であつた。池田光政公の日記明曆三年十月の條に「出羽娘淺野內匠家老へ遣度由。可遣由申遣事」とあるは即ち良雄の母である。

◎蕃山先生の高弟に、北小路石見といふがあつた。此の人は進藤源四郞の親類であるが、その日記を見ると、或る日進藤を訪ねたついで大石良雄に面會して十四歲になる娘の緣附けを賴まれた事が書いてある。此の一條を見ても、大石の悠然として逼らざる氣象が覗はれる。

吉田松陰の松下村塾

中嶋靖九郎

幼時の印象

○『親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何と聞くらむ』と詠じて、吉田松陰が刑場の露と消えたのは、安政六年十月二十七日の事であるから、恰度予が十歳の時である。先生が幕命によつて江戸に檻送せられたのは同年五月二十五日。檻輿の將に萩を發せんとするや、門人、友人親戚は皆、涙を揮つて之を送つた。時は恰かも五月の末とて、雨下ること蕭々たり、陰雲天を鎖して悲歎に暮るゝ萩の城下は、全く火の消えたやうな有樣であつた。予は少年の事とて、僕に負はれて見送る筈であつたが、何かの故障でその意を果さなかつたのは、今想つても頗ぶる殘念に感ずる次第である。併し、先生檻送後、殊に刑死後の萩城人士が如何に愁情の深かつたかを思へば、先生の隱然たる勢力が如何に強かつたかも同時に窺へる次第である。

○予の家は萩に在り、先生の塾は郊外の松本村に在つた。その間が大分遠かつたので、予は日

日之に通ふことは出來なかつたが、月に何遍か日を極めて行くことにした。始め近所の知人から、『久阪義助(玄瑞)さんが吉田の塾へ行く故、お前さんも行かしやらんか』と云はれ、てく〳〵歩きで先生の塾へ行た。當時の松下村塾は志士の巢窟で、その後廟堂の上に立つて天下を料理をした人も、多くは當時の塾生であつたが、予の行つた日には居合はせてゐる人もなく、殊に予の訪ねて行つた久阪さんは不在であつた。

○併し上つて待つてゐると、綿服を着た、極く粗末な風をした、眼のきら〳〵した人が出て來て、『お前は本を讀むのか』と問はれた。これが即はち吉田松陰先生であつた。予は讀書子に成り度い旨を答へ、且つ今日始めて久阪氏を手賴つて來たと告げると、『何、久阪を尋ねて來た。爾うか、可し吾輩が敎へてやらう』と云つて、自から『國史略』を繙いて熱心に敎へて下さつた。

○けれども、先生は字義章句の事を說かれず、その裏面に躍動してゐる意味を語られた。知らぬ文字があつてもそんな事は構はぬと云ふ風に、僅か十歳の少年を捉へて、國家の大事を說き聞かされた。予は平凡なる鼻垂小僧であつたから、一時は呆氣に取られ、此の先生は、妙な敎へ方をなさると思つたが、彼是半時あまりも講義を聞いてゐる中、心が先生に吸ひ取られて了

吉田松陰の自贊肖像

つたやうな氣がして歸家つた。歸家つてからも本のことは思ひ出さず、先生のきら〳〵した眼と、强い、熱い、火のやうな先生の辯舌とが頭の中を往來して、予は全で夢心地でゐた。

○然るに間もなく、先生は江戸に檻送さるゝことゝなり、尋いで刑死せられたので、予は久阪玄瑞だの、馬島春海だのに經書の講義を聽くことに成つた。それ故、松陰先生の感化は、受けぬと云へば受けぬやうなものだが、殘つた人々から屢々先生の爲人を聞き、又先生の實兄杉民治から詳しい話を聞いて、先生の生ひ立や松下村塾の有樣などを知つた。

多士齊々たる門下生

○始め先生の國禁を犯して米艦に搭せんとするや、事露はれて捕へられ、一旦入獄の後、父杉百合之助の家に錮せられたが、安政三年七月に至つて、蟄居中塾を開いて家學山鹿流の兵法を子弟に授けることを許されたので、邸内の一小舍を以て講義の場所に充て、これを松下村塾と云はれた。

○表面の名義は軍學敎授であつたが、その實先生は時勢に必要なる知識を授け、ひたすら時勢の要求する活きた人物を養成することに努めた。それ故、藩の子弟は遠近を問はず爭つて之に入り、爲めに藩校明倫館の生徒は虛しからんとしたと云ふ。しかも、此の時、先生は年僅かに二十七歲であつた。

○こんな次第で、松下村塾の盛んなことは非常なもので、翌四年十一月五日には塾舍の增築をした。增築と云へば甚だ立派に聞えるが、實は四疊半と二疊との二間しかない古家を買ひ、先生と塾生とが一所になつて建て增したので、無論大工などは雇ひ入れない。品川彌二郎さんが鏝を持つて、壁を塗るといふやうな有樣であつた。

○しかも此の小ぽけな、吹けば飛ぶが如き松下村塾から、有爲の士が雲の如くに現はれた。敢て『雲の如く』と云ふ、決して誇張ではない。先生の門生の如何に多士齊々にして欝然天下の重を以て自任せしかを見よ。

彼等は皆短日月の間に、先生の心を體得し、先生の氣節に倣つて、一身以て國家に獻げ、一死以て國君に報いるの氣魄を養つた。見よ久阪玄瑞は京都で戰死したではないか。入江九一も亦戰場の露と消えたではないか。高杉晉作は磊塊の才を懷いて病死したでないか、寺島忠三郎は陣頭で命を殞したではないか。吉田年麿は三條橋畔池田屋に會して、天下の志士と國家の事を謀るの際、會津の捕吏に圍まれて可惜生命を棄てたではないか。異日大才を展べて君國に竭くし得可き先生の門下生は、實に十指二十指の屈し得可きところではなかつた。

○天佑を全うして生き殘つた人々には、木戸、前原、山田、山縣、伊藤、品川、野村(靖)の諸氏がある。前原は才を抱いて亂に僵れたけれども、他は皆廟堂の上に立つて國政に與かり、よくその才を展ぶることを得た。皆なこれ當年松下村塾の貧書生、意氣天を衝く豪膽の若侍であつた。

松陰の和歌

熱烈火の如き人物淘冶

○先生の門から、恁くの如く多數の傑物を出したのは全く先生が偉大なる感化力を有してゐられたからである、先生は全身至誠であつた。故に一言一行悉く門生を動かし、その熱烈火の如き性格を門生に體得することを得しめたのであつた。

○先生の敎育法は、決して今日のやうな、口先から耳元へ注ぎ込むやうなものでなく、心の底から心の底に傳へられたのである。所謂『以心傳心』で、時勢に必要なる知識と、千古に卓越する人格とを、熱誠と恩愛と

下門生の腸に沁み込ませたのである。師と云へども兄の如く、弟子と云へども友の如く、靄々たる和氣堂に滿つる間に於いて、幾十百の門生は先生の思想と人格とを飮み込んで了つた。

○先生は弟子を敎育するに當つて、その幼年なると青年なるとを問はず、凡て一時に打つて固めて自己の鑄型に流し込まうとせられた。即ち非常の時に非常の役に立つ人物を、一人たりとも早く多く造らうとせられた。先生が十歲の少年を捉へて、滔々として天下の形勢を說き、『群童に魁たるの始めである』と激勵せられたるが如き、凡倉敎育家の眼より見れば無法であらうが、これ先生の敎育の目的と、先生の熱烈の性質とを知る者には、毫も不可思議ではない。

○先生の敎育に熱心なことは非常なもので、聲涙共に下つたことは決して尠くなかつた。十二三歲の小兒に『國史略』や『日本外史』を敎へられ、楠公が湊川で討死する條下に到ると、情極まつてはら〳〵と落涙されたのは、當時塾に在つたものゝよく知るところである。

先生が和氣清麿や、楠正成や、大石良雄の事蹟を門弟に語られる時には、自身が清麿や、正成や、良雄になつて語られた。故にその一言一語は電氣の如く、直ちに門生の肺腑に透徹し、全身の痲痺を禁じ得なかつたのである。

○されば門弟は、先生とは異體同心で、皆先生の爲めに死せんことを願つてゐた。安政五年幕府の外交政策に異論を唱ふるもの多く、將軍繼嗣問題、和宮降嫁問題等の起るや、大老井伊直弼は反對派を撲滅せんと欲し尾張、越前兩藩主に隱居愼を命じ、水戸烈公を駒込の邸に幽閉せしのみならず、老中間部詮勝を上京せしめて、京都に集まれる尊王攘夷の徒を一網打盡せんとした。先生は之を聞いて大に憤り、門生を塾に集めて間部暗殺の謀を立てた。

○その時先生は眉昂り、眼瞋つて、鬼氣の人を襲ふものがあつた。『縱令、不幸にして事敗るゝも、以て天下の義憤を發するに足る』と云はれた時には、門生は皆慨然として事を共にせんと請ひ、十七人のものは血盟書を造つて出發の日を定めた。然るに藩の參政周布政之助は累を藩主に及ぼすを惧れ、その出發を延期せしめたる上、先生を囚へてその家に嚴錮せしめ、更に之を獄に投じた。

○先生の怒はさることであるが、門弟の憤もまた大したもので、品川彌二郎等八人の弟子は、先生の罪名を問ふと稱して有司の邸に詰めかけたが、有司は病と稱して之を謝したので『然らば病蓐に至つて逢はん』と云ひ、尻を据えて動かなかつたので、吏は潜匿して出なかつたのみか、翌日に至つて八人を幽した。先生の門弟に重んぜられ、信ぜられ、便らるゝことは實に恁くの如くであつた。

吉田松陰の筆蹟

○先生の江戸に送られた後の松下村塾は、全で洪水の後、火事の後のやうに寂寞であつた。七月五日に至つて先生は奉行所に送られ、九月五日に第二回の審問を受けた。有司問ふに、先生が梅田雲濱と密謀を企てたとは事實なるや否やを以てしたが、先生はから〳〵と打ち笑つて之を否認し、『予は曾て時勢論を大原卿に寄せ、又間部詮勝を邀擊しようとしたことがあるが、此の外には毫も罪せらるゝ所がない』と、臆する色なく述べたので有司は間部詮勝邀擊を要諫といふ意味に言ひ改めしめ、先生を輕典に處するにあらずやと思はれたが、十月七日に至つて橋本左内は刑斬せられ、同十六日には先生も奉行所に呼び出され口供書を讀み聞かせられた。此の時先生は到底も免られぬ運命だと覺られた。

悲壯なる最期

○仍つて先生は二十日に、永訣の書を作つて父母兄叔に贈つたが、その文中に『親思ふ心にまさる――』と云ふ歌があつたのである。又二十五日に筆を起して、『留魂錄』と云ふ一卷をものせられたが、その卷首には有名な

身はたとへ武藏の野邊に朽ちぬとも
　とゞめ置かましやまと魂

といふ歌を題せられた。而して此の書は翌二十六日に至つて稿を畢つたが、翌くれば二十七日、先生は遂に私に國事を議するといふ罪名の下に死罪の宣告を受けられた。

○で、先生は傳馬町の獄に居る同志の人々に別れを告げ、辭世の歌詩を三回まで大音聲に歌はれた。その歌は前掲『身はたとへ』といふのであつたが、詩は

我今爲レ國死。死不レ負二君親一。
悠々天地事。感照在二明神一。

と云ふのであつた。此の日、先生は頼三樹と共に小塚原に引出され、其處で斬に處せられたが、斬らるゝ時神色自若として平日に異らなかつたといふ。以て先生の豪膽を窺ふことが出來る。

○これで先生の肉身は終焉を告げた、されどその精神は今尚ほ躍々として活きてゐる。先生の傳馬町の獄に在るや、四箇月に亘つて、仔りに書を高杉、久阪、入江等に送り、且つ同獄の志士にも書を裁して、時事、人物、學問を論せられた。これ等の書は何れも不朽の言に滿ちて居り、これのみでも先生を欽仰せしめるに足ると云ふ。

○先生刑死の時、年僅かに三十歲。誠に惜しいことであるが、先生の敎訓を聞き、先生の感化を受けた門弟等は、その後皆世に立つて國家の爲に働らき、遂に明治維新の大業を翼贊することが出來た。明治二十二年二月に至り、先生は正四位を贈られたが、門弟たる品川彌二郎等は世田ケ谷に祠を立てゝ先生を祀り、永劫不滅の先生の靈を慰めた。不幸惡政の爲めに僵れられたけれども、死して餘慶あり、先生また以て瞑すべきである。

修學時代に於ける頼山陽

醫學博士　永井潜

第一　緒言

僕は安藝の出身と云ふので、山陽の事蹟をお話する依頼を受けた。併し單に藝州出身と云ふのみならば、先輩で外にいくらも適任者があるから、是非この人達にお讓するのであるが、僕は偶然にも山陽先生の郷地たる安藝竹原の產で、而かも頼家と僕の家とは緣者たる關係があるので、不肖をも顧みずお受をした次第である。けれども自分で山陽先生に就いて特に研究した事もないから、單に先輩の書かれたものや、古老から聞いた儘を寄せ集めて責を塞ぐに過ぎぬ。

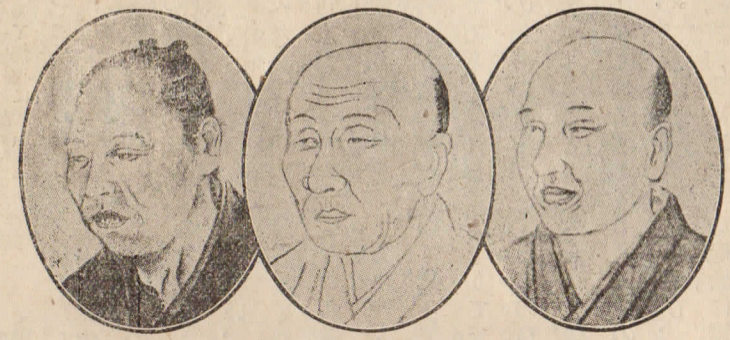
昔より名儒碩學は少くないが、恐らく山陽先生位廣く人に知られて持囃されてゐる學者は尠なからう。『鞭聲肅々』の詩は子供の劍舞にも眞先に吟はれる。手紙一通に三千金を投つた好事家もある、獨り日本に於いて持雜さるゝのみならず、紐育の圖書館には先生の肖像が飾られてある。殊に又聖恩枯骨に及んで、明治十四年、五十年の祭典には祭資料を下賜し給ひ、二十四年には正四位を追贈せられた。昔より偉大なる事業を成し遂げ、深淵なる學理を闡明にした人でも、いくらも世に知られぬ者がある。これを思へば山陽先生は實に幸福な人だと云はねばならぬ。由來瀨戸內海の風光が宇內に冠たることは、何人も爭はぬ所であるが、併し此の自然に反襯すべき人物と云はゞ、頗ぶる寥々たるの感があるが、幸に山陽の名を冠した此の一大文星があつて、中國の絢美なる山河は更に幾層の光彩を放つのである。

賴山陽の肖像

第二 家系

世には『鳶が鷹を産む』といふ諺あれど、それは異例で『瓜の蔓に茄子の生らぬ』のが本當である。偉人の出づるのは、その出づるに至る經路の歷然たるものがある。賴家は中々の名門で、三原の城主小早川家に仕へ、賴兼村といふ處に根據を構へてゐた歷然たる武士であつた。それ故『賴』と名乘つたのであるが、後故あつて竹原に移住し、染物屋を業とするに立ち至つた。幾代かの後に又十郎（名は惟質、亨翁と號す）と云ふのがあつて、五人の男兒を擧げたが、その中二男と三男とは夭死し、殘れる二人は揃ひも揃つて一廉の豪い人物となつた。長男は春水（名は惟寬、字は千秋、通稱彌太郎）二男は春風（名は惟彊、字は千齡、通稱松三郎）四男は杏坪（名は惟柔、字は千祺、通稱萬四郎）である。春水は即ち山陽の父で、經學を以て一世に鳴り藩侯の儒師となり、後には最高學府たる昌平黌の講師に擧げられた。春風は醫を業とし竹原の實家を守つたが、併しその本領は儒者であつた。杏坪は學者で、且つ有數の經世家であつた。三次と云ふ處の郡奉行に擧げられて頗ぶる治績あり、二宮尊德翁にも優つてゐると稱へられるに至つた。近時重田文學士の之に關する著書出で、忝くも天聽に達して從四位を贈られた事は、尙ほ諸人の耳に新たなる處である。凭樣に揃ひも揃つた三人の立派な子供を生ん

だ享翁その人も、亦た決して通り一邊の染物屋ではなかつた。彼は文事に耽り、殊に和歌俳句に秀でゝゐたが、その夫人は竹原の名門たる道工氏の出で、頗ぶる令名があつた。その間に凭くの如き立派な息子の出來た事は、決して怪しむに足らない。

由來竹原の地たる、少なからず篤學の士を出した處で、賴一家の起る三四十年前に、唐崎彥明（名は欽）といふ碩學が出て居る。此人は鄉の神官で、山崎闇齋の三高足たる三宅尚齋に就いて學び、鄉に歸つて人に敎ゆること十一年、後伊勢の長島侯に聘せられた。從つて闇齋派の學問が夙に竹原に流れ込んでゐた。彥明の孫に當る唐崎常陸介（號は赤齋）は熱烈な勤王家で、高山彥九郎と無二の親友であつた。話は少し橫徑に外れるが、山崎闇齋が嘗て或る大名の處で、文天祥の書いた『忠孝』の二大文字を得て、それを彥明に與へたことがある。赤齋の代に至つて此くの如き尊き書を私藏するは遺憾である。宜しく天下の人士に示して風敎の助となすべしと言つて、之を鄉社の大磐石の上に彫り附けた。其磐を千曳岩と名づけて、今も竹原の一名物となつてゐる。赤齋は王事に竭せし廉を以て、去る二十八年忝けなくも正四位を贈られた。此の外鹽谷道頤齋藤立適等といふ隱れたる豪い儒者も、賴以前に現はれてゐる。であるから斯樣な土地に生れ、斯樣な家庭に育てられた兄弟に、斯くの如き人物が出たのも決して偶然ではない。

賴杏坪　賴春水　菅茶山

春水は夙に神童の名あり。十八九歲の頃まで家庭敎育と自習とで學問を勵んだが、偶々その頃に病を獲て、治療旁々京から大阪に往つた。其當時の大阪は、今日の如き俗地ではなかつた。金力のある所、また文化の中心となつて、中井父子（甃庵及び其二子竹山履軒）の懷德堂が一世を風靡し又片山孝秋（北海）葛子琴等の牛耳を取れる混沌社なる詩會あり毫を鬪はして居た。春水の有爲の材は中井兄弟に知られ混沌社中に重せられ、終に大阪に足を留め、竹山の媒介によつて儒醫篠田德庵といふ篤學なる君子の長女靜子を娵つた。これが山陽の母、即はち後に梅颸と稱へらる丶賢婦人であつた。德庵は勤直なる學者で、殊に精神の修養を專らとする心學に心醉し

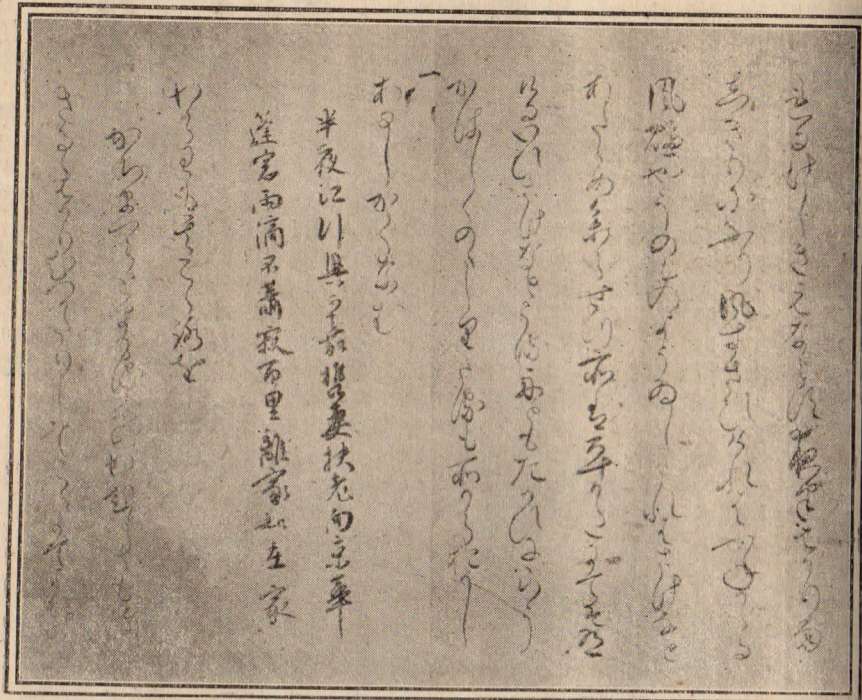
てゐたから、この家庭が何んなであつたかは推して知ることが出來る。この先夫人は柳子（淺川氏）と云つたが、體が弱くて子供が皆死んで了ふので、篠田家の血統が絶えては大變だと、良人に勸めて無理に妾を置かしめたが、この妾も柳子と前後して死んで了つた。で柳子は死ぬ前に來島氏の女を見立て丶、それを後妻に推選した。これが即ち梅颸の母である。女氣質はよく玆に表はれて居るではないか。梅颸の妹たる梅月は寛政の三博士たる尾藤二州の夫人となつて姉妹共に揃ひ揃つた佳遇を得たのは實にお目出度い話である。

梅颸夫人は眞に良妻賢母の模範とすべき人で、山陽先生の鴻業の一半は、此の夫人の力に負ふと云つても可い。加ふるに頗ぶる文筆の才あり、新婚以來死に逮るまでの經歷を、細大漏らさず日記に書いたものが、等身の卷となつて今も尚ほ保存せられてゐる。此れを見ると、良人に仕へ、子を育てる心掛の如何に細やかであつたかゞよく知れる。殊に行文の流暢なること丶文字の佳麗なること丶は、人をして三嘆せしめる者がある。此日記は山陽の傳記を編むに當つては、最も大切なる史料と認められてゐる。近時木崎好尚氏は之に基ついて『賴山陽と其母』なる好著述を世に公にして居る。

第三　生ひ立ち

山陽先生は此の才子佳人の間に生れた唯一の寧馨兒で、大阪の江戸堀で呱々の聲を擧げたのである。梅颸の日記によつて見ると、幼時から所謂『天才肌』の、弱々しい、神經質の子供であつたらしい。併し『栴檀は二葉より馨ばし』で、孩童の時から既に穎脫して居つた。六歲の時天を仰いで、母に向つて『天は何物であるか』と問ふた、梅颸は之に答へて、天は『廻り廻つて熄まざるものである』と云つたが、山陽は庭に飛び下りて天を仰いで『不思議だなア』と云つて、啼泣するもの良々之を久しうしたことは有名な話として傳へられて居る。

八九歲の頃から、武術を藩の武藝師範役たる築山棒盈に學び、又學問所へ入學した。此の歲、山陽は烈しい疱瘡に罹つて殆んど死に瀕したが、その際に於ける梅颸の心痛はよく日記の上に現はれてゐる。山陽は凭

梅颸夫人の日記(詩は春水の揮記に係る)

く正科の學修を始めたが、それよりも寧ろ興味を以て讀んだのは、『保元物語』、『平治物語』、『源平盛衰記』『大平記』などの軍記物語で、又好んで武者繪を見たり、遊ぶ時には城郭を築ひたり軍陣を形どつたりして喜んだと云ふ事である。雀百迄躍は止まぬ。『日本外史』の種子は、夙に此の水晶のやうなすみ透ほつた天才の腦漿に植ゑつけられたのである。讀書は餘程好きであつたものと見え、十二三の頃烈しい眼病に罹つて嚴しく書見を禁じられたにも拘はらず、隱れて書物を繙いたと云ふことである。十三歲の時、立志の意を述べた詩を作つた。

十有三春秋。逝者已如レ水。天地無二終始一。
人生有二生死一。安得レ類二古人一。千載列二青史一。

これに由つて見るも、山陽の詩才否な資材の、尋常一樣でなかつたことが知られる。

第四　青年時代

天才の青年時代は煩悶の時代であることが多い。山陽も亦其例に漏れなかつた。山陽は廣島に在つて、孜々として學習に餘念なかつたが、その時春水は、江戸に於いて昌平黌の講師たる命を受け、當時の碩儒たる柴野栗山とも懇意な間柄でなつた。而して山陽の天才を認めて、之に羅針板を與へたのは、實に此の雷名天下に轟き渡れる老大家であつた。栗山先生の年譜によると、其の五十七歳の秋、廣島より乃父の許に送り來た山陽の詩文を見て、早くも『此兒靈骨あり』と氣注て、春水に告げて云には、『此の寧馨兒をして、あたら詞文の人たらしめんよりは、寧ろ古今の歴史を讀んで有爲の實材たらしめよ。而してそれには先づ通鑑綱目位から始めるが可からう』山陽は此の言葉にあつて大に感奮激勵して、自から經世家たるの覺悟を決めたものらしい。嘗て山陽の五劍山を望んで作つた詩に、

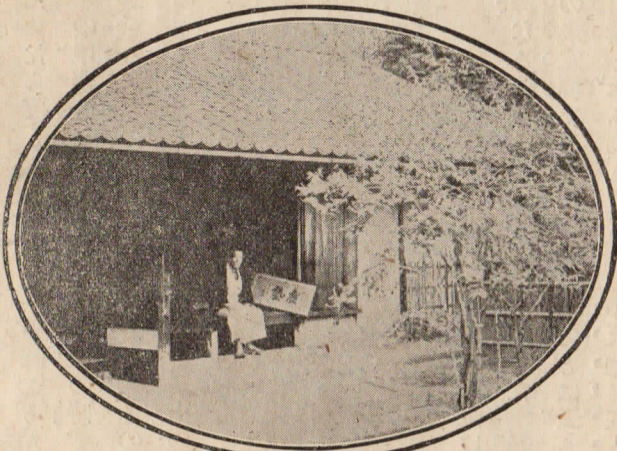
南望二讃岐州一。遙指二五劍山一。山峰如二列劍一。峭立衆巖端。正レ襟遙拜レ之。非レ山思二其人一。柴公吾父執。實産二出其間一。（中略）顧レ吾謂レ可レ教。朽木庶二雕剜一。當時貪二嬉樂一。悔不二屢往還一。前輩日已遠。從レ誰鞭二駑頑一。典刑今安在。山容獨巑岏。

といふのがある。之によつて見るも此の不屈豪邁の天才も如何に栗山には推服置く能はざる者があつたか分る。

梅颸の日記によると、青春期代の山陽は、一層天才的の異常の傾向を現はしたと見え、癇が高ぶるとか、狂氣のやうに成るとか、無言氣重しとか云ふ樣な言葉が散見してゐる。

山陽七歳の試筆

十四五歳の頃、蟲干に際して蘇東坡の史論を讀み、嘆じて曰はく『天地の間、又此の如き喜ぶべきの文あるか』と。爾後、蘇東坡を以て自から任ずるに至つたのは、誰しも知つてゐる有名な話である。天才が天才と握手するには、電機の陽と陰とが感應するよりももつと强く、もつと、迅速である。時や所の束縛を全く超絕して了ふものである。

十八歳の時、山陽は江戸へ修業に上つたが、その時代には最早此天才は一廉の發達を遂けて居た。昌平黌舍の内で、線香一本を燻らす間に、漢土の將帥を題に取つた詠史三十首を作つて傍人を驚かした位である。加ふるに山陽の身を寄せた義理の叔父たる尾藤二洲は、人も知る如く寛政の三博士（或は三助ともいふ。柴野彦助、古賀彌助、尾藤良佐、何れもスケが名前の下に附く。）の一人であり、經學よりも史學に長じてゐたと云ふから、此の際山陽の啓發せられた事は、非常に大なる者があつたと言はねばならぬ。山陽此時栗山にも會つた。功名燃ゆるが如き此若き天才が己が父執と尊崇した六十二歳の老博士に見えた時抑も如何なる會話が取り換はされたであらうか。吾人は覺えずゴエテとハイネの初對面を聯想する。併し此兩詩人は仲が惡かつたが、栗山と山陽は大仲好であつた。

廉塾（山陽の書齋は奥の間に在る）

山陽は或る事情の爲めに江戸に止まる事僅かに一年にして歸國を餘儀なくされた。歸國してから以來、殆んど醫すべからざる氣欝症——今日の所謂『煩悶病』に罹つた。こ

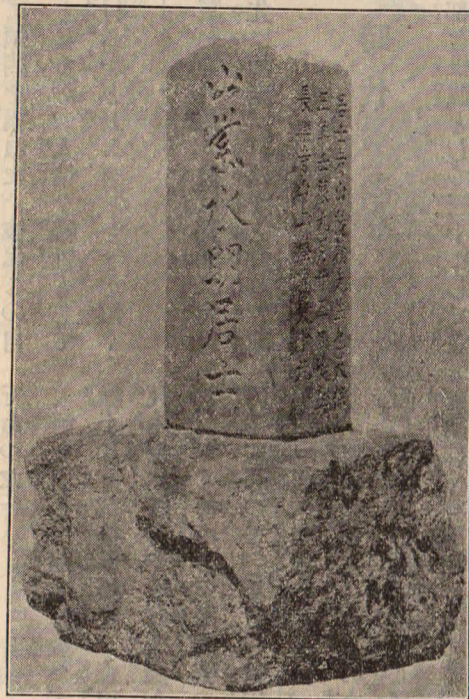
れは青年の時期には、誰でも多少經驗すべき危險なる心的狀態であるが、殊に天才的の山陽に於いては、その程度が非常に强かつたものらしい。乃で兩親は少からず心を碎いて、早く嫁でも持たせたらばと、藩醫御園氏の女淳子を迎へたが、更にその甲斐もなく盛に夜遊をして、遂に禁足の已むを得ざる程度に立ち至つた。偶々鄉里竹原に於ける春水の叔父傳五郎の凶事あつて、その弔詞の使に山陽が行く事になつたが、途中で何と思つてか忽焉として姿を隱して了つた。家では大騷ぎをして探した結果、京都にゐることを發見し山陽は捕へられて故國へ送り還され、還ると直ぐ座敷牢へ入れられた。この時代が所謂『隣二』と稱へた時代である。

二十三歲の時、蟄居中の山陽は母なる梅颸に一書を奉つた。それは即ち『日本外史』の未定稿であつた。かくて山陽は二十五歲の時に愈々廢嫡と云ふことになつた。これは山陽先生をして、畢生の大作をなさしめる爲め自由を宣告されたと同じで、形式上から云へば誠に悲しむべき事であるが、事實上より見れば大に賀すべき事であつたとも云へる。二十八歲の時には『日本外史』の骨子は全く出來上り、尙ほ『新論』(即ち後の『通議』)も殆んど脱稿してゐた。

三十歲の時、新らしい運命の手が山陽の頭に加へられた。と云ふのは當時中國の儒者として、重を遠近になした菅茶山の黃葉夕陽村舍の塾頭たるべく話が纒まつた事である。茶山は春水の無二の友達で、いたく春水の境遇に同情して、何うかして賴家の爲め、山陽の爲め、よき樣に取計らはうと思つてゐたが、側々己の塾を繼ぐべき適當の天才がなかつた所から、山陽を塾頭に聘して諸生を督せしめ、泡よくば自分の後繼とせようと持ちかけたで、春水は大に喜んで、早速篤く之に依賴した。乃で山陽はその塾に迎へられたが、有名な學舍とは云ふものゝ、規模は小さかつた。眞事神邊の小天地に在る一淺池は、到底此の大なる蛟龍を容るる事が出來なかつた。此の際に於ける輾轉反側しつゝあつた山陽の心事は心より同情すべきものがあつた。

その事 山陽から、彼の大なる保護者たる先師築山棒盈に宛てた手紙に詳しく讀まれるのである。

(前略)自身に是程の事はたしかに出來可申と存候事にて、尺寸の報を心懸居申候事に御座候。經書講釋等も不得手之義、得手と申候ては、史學と文章に御座候。是にて少々にても御國之御用に相立候義仕度、即籠居以來日本外史と申武家之記錄二十卷著述成就仕候へども、是は區々たる事にて、引用の書なども不自由、私心に滿不申愚父壯年之頃より、本朝編年之史輯申度志御座候處、官事繁多に而、十枚計致かけ候儘にて相止申候。私義幸隙人に御座候故、父の志を繼、此業を成就仕、日本にも必要の大典とは藝州の書物と人に呼せ申度念願に御座候。此義三都に居申候而、書物を廣く取集め、多聞の友を多く取不申候而は出來仕らぬ事に御座候。(中略)其上凡そ古より學者之業を成申地は、三都之外は無之候。如何なる達人にても、田舍藝は用に立不申候。闇齋、仁齋、徂徠など之樣の業は都會ならでは出來不申候。如此人にても左樣に候へば、まして凡人は猶更之事に候不肖の私に御座候へども、何卒右の場所へ出、名儒俊才に附合申候而、學業成就、名を天下に擧、末代までも藝州の何某と被呼候はゞ螢火にて月光を增候譬にて、少は御國の光とも可申候哉。(後略)

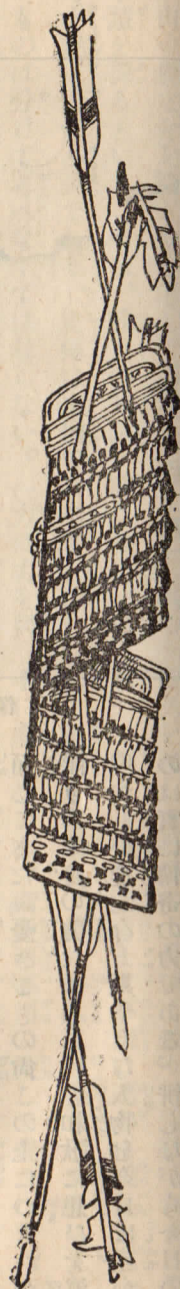
山陽遺髮塚(京都光林寺)

此の一篇の手紙によつて、如何に此の天才が、不遇の淵に沈んで、悶え〳〵てゐたかゞよく分る。父母も一先づ安神して居る。茶山先生もよく遇て呉れる。養嗣子にと荒かた話も纒りさうだ。併し止まらんか、空しく此一小村舍にかゞんで朽ち果てねばならぬ。福山邊の無學の役人共に菅太冲の養子として呼び捨てにされるのは迚も蟲が治まらぬ。夫は我慢するとしても自己の天職と信じた不覇

獨立千古不朽の大著述の將來は何となるであらう。去らんか重々苦勞をかけた父母の又の悲嘆はどうであらう。家の爲め身の爲に盡くして吳れた先生の厚意を水の泡にする譯だ。ア、何としやう、何としやう、何としやう。——山陽は煩悶に煩悶を累ねた。彼はこの自己を沒却して人情の犧牲となるか、人情を犧牲として自己の天職と信ずる所を行ふかと云ふヂレンマを解く爲めに輾轉反側した。

併し大鵬は遂に垂天の翼を伸べた。彼は到頭二度目の高飛をやつた。落着く先は何處、言はずと知れた京都——學問の叢淵！

第五　自立時代

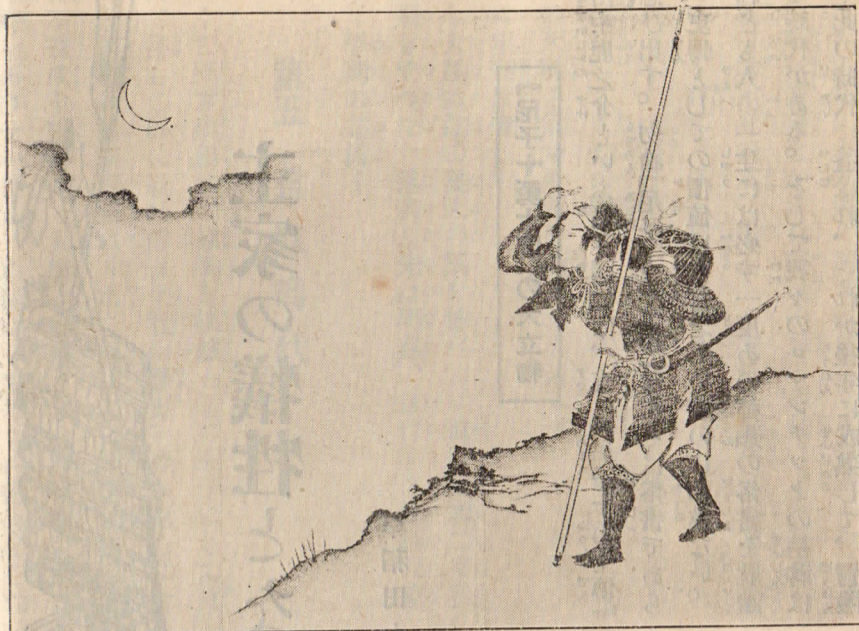
かくて天才山陽は、京都を根據として三十にして立つた、併しこれに就いては失敗の歷史を繰り返しはせぬかと國元の兩親親戚は非常に氣遣ひ、眞面目な友達は皆不贊成を唱へる。大鵬の心事を知らぬ世間の燕雀は冷評をあびせかける。山陽は一方ならぬ苦心をしたが、而志の齡に達した彼は最早艱苦に挫折する樣な薄志弱行の人でない。誘惑に弄ばるゝ樣な彼ではない。飽くまで初一念を貫徹せん爲めに、總ての障害と戰つて之を排擊し、遂にその目的を達することの出來る彼であつた。

帷を下して諸生に敎へてゐる間に名聲は日を追うて隆くなり、後藤松陰、森田節齋、齋藤拙堂、鹽谷宕陰江木鰐水等のやうな文豪が前後して門下に集まつて來た。斯くて中井父子凋落の後關西の文柄は自から山陽の手に移つて、小竹、竹田、中齋、竹洞、春琴、梅逸景樹の如き文雅の名星は、燦として此北斗の周圍を循り、旗鼓堂々遙に江戸の文壇と相拮抗するに至つた。而して春、烟雨時に來り卅六峰一抹畫の如く、箇々の鐘聲緩く花を出づるの時、秋、夕陽漸く沈まんとして暮色未だ至らず、山紫に水明かなるの處、瘦軀高臞眼光烱々たる偉人は、劍菱に舌を皷し、得意の琵琶歌を歌ひつゝ、悠々自適、畢生の大著述を成就したのである。

主家の犧牲となりし山中幸盛

早稻田大學敎授　島村抱月

『尼子十勇士傳』の大立物

山中鹿之介といふ名を聞けば、直に『尼子十勇士傳』を想ひ出す。勿論『尼子十勇士傳』なんぞは俗書であらう。史傳としての價値は甚だ乏しいものに相違ない。けれども人の一生には必ず一度あの種類の俗書を耽讀する時代がある。そして我々のロマンチックの精神は多く此の時代に養はれ、それが後年に成熟して、冒險的、獻身的な大事業になる。凡そ社會の事業は二面から進んで行くものである。殊に今日の社會にあつては凡ての事業がみな冒險的であれ、獻身的であれとは言ひ難い場合がある。冒險よりも寧ろ着實堅固の途を步んで行かなくてはならない事が多い。また獻身的といふよりも寧ろ自愛的に己れの身の貴い所以を先づ了解する必要のある場合が多い。併し此等の場合と相並んで、一面には冒險的、獻身的の精神も必ず無くてはな

『山中幸盛傳』に現はれたる山中幸盛の像

らない。社會が守成的秩序的狀態から出て、活動を要し、飛躍を要するに當つては、冒險の精神と獻身の精神とが其の原動力となるべきである。此の意味から我々が『尼子十勇士傳』等の傳奇的俗書に負ふところ頗る大なるは言ふを待たない。精確な歷史よりも、却つて此等の書物の方が國民の精神に功獻する所多しと言つてもよい位である。

傳奇的俗書のお蔭

されば山中鹿之介幸盛といふ一英雄が、今日我々の頭の中に生き傳はつてゐるとすれば、それは史傳の力よりも寧ろ傳奇的俗書のお蔭である。鹿の角の脇立に三日月を頂いた兜を着て、赤皮の鎧に身を固め、大身の槍を提げた剛勇無雙の鹿之介而してまた『憂きことの尙この上につもれかし、限りある身の力ためしに』と和歌に想ひを述べるゆかしい鹿之介、斯やうな人物を今日に生かすものは實に傳奇の力である。併しながら今日の我々

が山中鹿之介を論じやうとして『尼子十勇士傳』に其の事蹟を探るといふことは、我々の知識が許さない。傳奇小說は傳奇小說であり、史傳は史傳であつて、二つのものは分けて考へなくてはならない。一方は力を與へ、生命を與へるところの文學であり、一方は事實を與へ知識を與へるところの學術である。世に若し此の二つを完全に統一したものがあれば、夫は最も完全な史傳であらうが、さやうなものは容易に得られない。

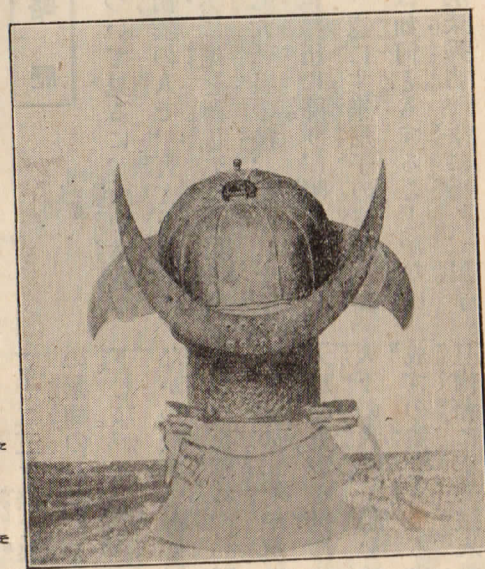
幸盛の略歷

今最も信憑すべき史傳について見るに、山中幸盛の一生には敎訓がある。彼は出雲の人で、天文十四年に生れ、十六歲で既に當時出雲に雄を稱してゐた尼子義久に仕へ、武勇の名を轟かした。其の後、殆ど二十年の間、或は毛利に降り、或は織田に降り、明智に屬し羽柴に屬して、千辛萬苦唯一意に主家尼子の恢復を圖つたが頽れかゝつた運命は如何ともすることかなはず、天正六年織田氏の下に羽柴秀吉の手に屬し、尼子勝久を擁して播磨の上月城に據り、强敵毛利元春等と戰つて利あらず、秀吉また事情に遮られ援兵を送らずして退去した爲め、終に勝久は自盡し、幸盛は元春の手に虜にせられ、備中河部川の渡しで殺された。時に年三十四。娘は石州津和野藩の祖龜井茲矩に嫁したといふ。また今の大阪の富豪鴻池家も遠く幸盛の裔であるといふ。實否は未だ考へない。

さて予はこゝで彼れ幸盛の傳の中から敎訓とすべきこと二三ヶ條を擧げやうと思ふ。第一は彼れが二十年の奮闘のあひだ、或時は剽盜、或時は浪人とまで身を下しながら、尼子一家のために盡すといふ一念を易へなかつた事である。之は彼れの一生が惡戰苦闘の連續であつた爲め、一層其の志を憐むの情を深くせしめる。其の志や眞に泣くべしである。けれども飜つて大局の上から見れば、彼れが尼子家の晩年に於いて、天下の大勢に眼を注ぎもつと根本の大處から其の志を成すの策を立てるのも、大丈夫の道でなかつたか。一旦僧籍にまで這入つた尼子の屬親を探し求めて、僅に

之によつて山陰の一隅に據らんとするに至つたのは、寧ろ彼れのために哀しむべき運命である。若し彼をして、當時戰國の常態に從ひ形勝の地に國を求めて、其武を伸べしめたら、山中幸盛は一尼子の隷臣として終へるものではなかつたかも知れない。而して後徐ろに尼子のために計るも未だ遲しとしないであらう。且つ斯くの如きは當時戰國の道德としては、必ずしも不忠不義でない譯である。併し是れは外から冷に觀た論で、幸盛自らの志は固より一旦の知遇に感じた尼子の家と永遠に別れ得なかつた點に、其の情誼の美しさを示してゐる。彼れの一代は論でなくして詩である。

單純の忠複雜の忠

山中幸盛の甲冑

最後に彼れが尼子の一族に其の忠義を更へなかつたのは、所謂忠が今日の忠と其內容を異にしてゐる一例である。昔はたゞ其の主として仕へる一人一族に獻身の誠を致して渝らなければ、それが即ち忠であつた。丁度今日忠婢忠僕等の語に於いて用ひられると同じ意味での忠義である。幸盛は此の意に於て洵に忠勇の士であつた。けれども若し彼れが天下の生民を塗炭の苦から救ふの志を之に加へたら、其の忠は形を變へたかも知れない。今日の忠は單に主として仕へる一人一族に誠を致すといふのみでは足りない。其の仕へる所の一人は即ち天下國家と同體なものでなくてはならぬ。一人に仕へるは即ち天下國家に仕へる所以でなくてはならぬ。主君に誠を致すのはやがて國家萬民に誠を致すのであるといふ信念に到達して、始めて其の忠の內容が充實する。戰國の世にあつては、其の相爭奪する所の一城一藩が直に天下國家であるかのやうにも見えたであらう、從つて今日の思想を以て、當時に強ゆることは出來ないのであつて、其の主を大事と思ふ點は、之もまた却つて忠を單純化したものとして美しいに相違ないが、併し今日の忠にはもつと複雜な信念の伴ふを要することも忘れてはならない。――之を要するに山中鹿之介の一代は、夫の南朝の忠臣等が成せし所を、尼子の一藩に於いて、成したのである。其の時、其の事、其の志、共に哀しむべき一篇の詩である。

仕ふる所に忠なりし細川頼之

貴族院議員　松岡康毅

十歳にして既に穎悟

細川頼之は頼春の子で、元德元年、參河の國に生れ、後父の領地なる阿波の國に移つた。十歳にして既に穎悟、屢々機智を以て傍人を驚かしたことがある。或る時父の許に諸大名集り、酒宴などして種々物語りに夜を更かしたが、その中の一人『例へば主人の使に赴く途中、圖らずも敵の仇に行き合ひたりとせば、その儘通り過ぎるがよいか、又は討つがよいか、萬一討ち損じて其の身も亡びなば如何あらん、忠孝の二道には何れが叶つて居るであらうか』と云ふのを、各々色々に考へて、これこそ一大事と、容易に言葉を出す者もない。その時頼之が傍より口を出して『左樣の仔細あるものは最初より主人に仕へぬがよろしい、主人を取つて後斯樣の是非を考へるは最早末の論である』と云つたので、一坐の人々はいづれも彼の機智に驚き且つ呆れたと云ふ。

武勇謀略に富む

長ずるに及び、武勇謀略に富み、讀書を好み、詩歌を善くし、殊に禪學に詳しかつた。元來細川氏は足利氏より出で、その緣故よりして代々足利將軍に仕へて來たが、頼之も亦義詮將軍に仕へ、正平十年より延文元年にかけて種々武功を立て、その結果右馬頭に任ぜられて威名を四國中國の地方に馳せた。幾もなく義詮將軍、病篤く、嗣子義滿、その後をつぐ事となつたが義滿はまだ丁年未滿で、萬一の場合には之を輔佐する人が必要である。諸將群議、頼之を適任とし、義詮將軍も亦これを然りとしたので、遂に彼を召す事となつた。頼之、上洛して義詮に謁すると、將軍の喜び一方ならず、直ちに義滿を傍に招き、我れ一子を卿に與ふ』と云ひ、又義滿に對しては頼之之を指して『我れ一父を汝に與ふ』と云つた。義滿唯々諾々、上下の人々始めて安堵したと云ふ。この一事は、如何に頼之が當時の人々より重んぜられて居たかを證するものであるが同時に之を以て直ちに賢明の主、例へば劉備の諸葛亮に於けるが如しと義詮を論ずることは出來ぬ。義詮は何れかと云へば庸劣の主である。彼が遠疎卑賤の者の中より頼之を拔擢したのは、單にその資格と門閥とを尙び、群臣の推薦に應じたるに過ぎぬ。

（一四九六）

幼主教導と行政改革

同年十二月、義詮薨じ、義滿その後を嗣ぎ、年始めて十歲、頼之は將軍家の一陪臣であるが、今や兵馬行政の權を一身に擔ひ、內は幼主を敎導し、外は老臣宿將を鎭御して、賢良を進めて姦佞を遠ざけ、財力を養ひ、風俗を正し、以て擧朝天下の改革を行つた。之を具體的に云へば、先づ第一着手として租稅の輕減を斷行し、從來諸大名が所得米の二十分の一を幕府へ納めたものを五十分の一となし、南都の隱士敎因、四國の隱士近藤平次兵衛盛政の二人を擧げて幼主の君側に侍せしめ、文武の兩道を世人に鼓吹すると共に、自から內法と云へる掟書を作つて君側の人に頒ち與へた。大日本史に『戒法五章』とあるは即ちこれである。一に曰く『主公に阿る事を戒む。』二に曰く『親を掩ひ疎を許き好んで仇家を誣陥する事を戒む。』三に曰く『善を善とせず、惡を惡とせず、愛憎を用ゐて人を是非する事を戒む。』四に曰く『功なくして賞を邀へ、才なくして祿を貪り、私に徇つて公を忘るゝ事を戒む。』五に曰く『動もすれば同列の美を掠め、自から進用せられん事を冀ひ、及び賄賂を受納して妄りに非才を薦むる事を戒む。』と。又、御制法三箇條といふものを書いて、普ねく天下の人に告げ、童坊を設けて幕府營中の士氣を鼓舞せしめた。而して彼の之を爲すや、常に諸老臣と意見を交換し、衆議の一致するに非ずんば決して世に施さなかつた。四人の評定役、即ち四職を置いて下民の訴訟を聽かしめ、自分も時々この四人を集めて是非曲直を明かにした。

細川頼之の像

再三の辭職と海南行

これより先き、義滿將軍十四歲の時、頼之は突然將軍家執事の任を辭したことがある。それは斯うである。或る年の夏、將軍盛宴を張つて大に公卿及び諸將士を會した。夜更け、酒酣なる時、諸人且つ歌ひ且つ舞つたので、將軍もやゝ寛ぎ思はず威儀を紊した。頼之これを見て、起つて將軍の袖を執り、『苟くも將軍たるものが衆人の喜戲につれて膝をくずすとは何事で御座る、以後御愼しみある樣に』と云つた。義滿深く之を恨み、宴果てた後、頼之を一室に召して『其方は臣下の身を以て我を辱むるとは何事ぞ、最早其方には用はない』と云ふ。頼之默して退き、門を閉ぢ、謹愼の意を表した。これが第一回の辭職である。間もなく、關白藤原良基の取なしで舊職に復ぜられ、次いで將軍に從つて九州に菊池氏

（一四九七）

を討ち、武功少なからず、將軍も非常に喜んで遠からず和泉守護職に任じた。然るに此の頃より賴之は徐々楠氏と歡を通じたので、將軍の忌む所となり、再び命によつて職を罷められ、讚岐に歸つて剃髮の上常久と號した。有名なる海南行の二十八字詩はこの時の賦である。曰く、

人生五十愧レ無レ功。花木春過夏既中。
滿室蒼蠅難ニ掃盡一。起尋ニ禪榻一臥ニ清風一。

思ふに、賴之の義滿を補導するには、力めてその知識を長じ、品行を正しくする等の事に注意したること勿論であるが、同時に義滿の威武を養ふことに最も力を盡したに相違ない。將軍を衆人環視の裡に切諫したのも恐らくはその爲で、圖らず怒りに遇ひ、その職を免ぜられたのは、或はこれ彼の本懷とする所であつたかも知れぬ。

溘焉として逝く

既にして賴之の寃罪は盡く明かとなり、義滿は再び父義詮の遺訓を思出して之と相見んことを思ひ、偶々西海征伐を機として讚岐の歌津に立寄り、こゝで賴之父子を召し、共に嚴島に詣でた。義滿歸洛の後、賴之を再用するの念益々止み難く、遂に命を發して之を召し、軍國の大事を參決せしめた。時に山名氏幕府に叛き、賴之これを內野に討つ。歷史に內野合戰とあるは即ちこれで、賴之はこの時大功を立て、その義子賴元に丹波國を與へられた。これ明德二年のことで、翌年三月二日、病に罹り溘焉として逝く。年六十四。臨終の際、執事の職にある義子賴元の大任に堪へ難きを察し、傍人に謂つて曰く『某死するの後は別に執事を撰んで之に任ずべし』と。言ひ畢つて瞑目す。義滿之を聞き、驚き且つ泣き、痛惜して翌日西山谷地藏院に葬る。同年神器入洛の後、義滿內野の戰場に僧千人を集め、萬部經を誦せしめて山名氏一門の死者の靈を祭ると共に、又七日七夜の施行をして賴之の冥福を祈つたと云ふ。斯く彼は一身を以て天下の安危に任じ、幾度か困難に會ひ、幾度か之を切拔け、生死の間に泰然として自分の信ずる所を行つた。就中君臣上下の反覆常ならざりし世に於いて、飽迄もその仕ふる所に忠なりしことは誠に偉なりと謂ふべきである。又海南行の七絕の如き、この襟懷を想見するに足るべく、先輩の之を評して『雅致風韻。非下佗嘯ニ嘲花月一之比上』と云つたのも實に過言ではないと思ふ。

海南の奇傑坂本龍馬

貴族院議員　千頭清臣

諸先輩の坂本評

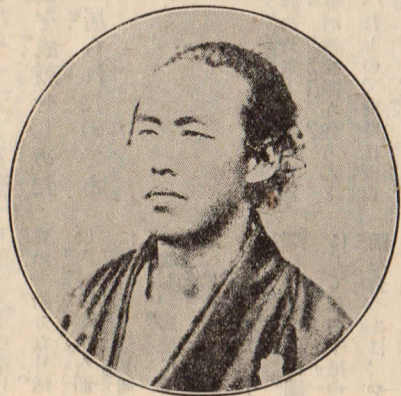
松方侯、嘗て余に語つて曰く『坂本は實に非凡なる人間であつた、思慮の深い、膽略に富める、將來の見えた人物であつた』と。而して侯は、維新當時坂本先輩等と共に東西に奔走し、國家の爲に種々盡力された方である。又、大久保一翁氏の曰く『坂本は土佐隨一の英雄である、彼は謂はゞ大西鄉の拔目の無い男であつた』と。而して此の大久保氏も、生前親しく坂本等と會ひ、大に天下の事を議した人である。次にその昔海援隊の一人で、自から坂本の幕下に在られたる關男爵の坂本評に曰く『坂本は一種の社會開墾者で、常に不撓不屈の精神を以て社會の開拓に從事した人である。而して或る點より見れば、西鄉よりも勝れて居たかも知れぬ』と。最後に、これ等の批評中に屢々引合に出されたる薩南の偉人西鄉南洲翁は、坂本に對して如何なる批評を下して居る乎。翁の曰く『自分は今迄天下の有志とか何とか澤

山の人に出會したるも、土佐の坂本ほど度量の大きい男は無い、一向測量の出來ぬ大度量の人物である』と。

『當時天下の人物と云へば』

坂本先輩が當時天下の豪傑であつた事は、以上の諸評に於いて一班を知り得るが、爰に面白きは、先生自身の偉人觀である。先生在世中、その兄權平に送られたる書翰中に曰く、『當時天下の人物と云へば、德川にては大久保一翁、勝安房守、越前にては光岡八郎、長谷部勘右衞門、肥後にては橫井平四郎、薩摩にては小松帶刀、西郷隆盛、長州にては桂小五郎、高杉晉作』と。而して右の中、坂本一生の事業に最も關係深き勝海舟翁及び南洲翁に對し、坂本は如何にこれを評した乎。先生、初めて海舟翁を訪ね、非常にその識見に服し、改めて師弟の關係を結ばれた後間もなく、郷里の姉お乙女に對して送れる手紙中に曰く『今にては日本第一の人物勝麟太郎といふ人に弟子入り致し、日々兼て思付く所をせい出致し居り候』云々と。即ち先生は海舟翁を以て當時日本第一の人物と見て居られたやうである。次に西郷に對しては如何。先生がまだ海舟翁の塾に居られた時の事、一日薩摩より南洲翁上京(京都)せりとの事を聞き、勝の內意を受けて直ちに翁に會はれた。然るに、會見後二日經ても三日經ても何等南洲のことを云はぬ。海舟、堪りかね、坂本に向ひ『西鄉は如何なる人物であつたか』と尋ねたる所、先生は肅然襟を正して曰く『西鄉といふ男は馬鹿である、大馬鹿である、然るにその馬鹿の幅が相分り不申候、大きく叩けば大きく鳴り、小さく打てば小さな音を發する、唯恨むらくは鐘つく撞木の手ごたへの薄かりしを』と。所で、海舟翁も流石は幕府の俊傑である、その後『亡友帖』といふ書物に當時の感想を記して曰く『評したる人も評したる人、評せられたる人も亦評せられたる人』と。兩氏の言、共に不得要領なるが如くにして、實は大に要領を得て居る。英雄、英雄を知るとは、即ち如斯きことを謂ふのであらう。

將に將たるの才

抑も坂本の生れたのは、天保六年十月十五日、所は高知市本町筋、現今では木屋といふ旅館の在る所である。先生は十九歳の時大志を抱いて江戸に出たが、それ迄はすべて此地の生家に教育されたので、彼を知る多くの人々の傳ふる所によれば、十四歳までの坂本は至つて平凡な少年であつたと。尤も、他日群雄を壓して將に將たるの才を發揮された方である故、平凡とは云ひながら、自からその間に群童と異なる偉人の特質のあつた事は疑ふ迄もない。就中、沈勇剛毅、よく事物の大體に通じて批判を誤らなかつたのは、その著しき特質であつた。先生、最初武術を學び、後に學問をも多少研究されたが、一日友人某、先生の讀書を始めたとの事を聞き、こは珍らしやと態々訪問した。その時坂本は確か通鑑綱目を讀んで居られたと云ふが、友人、その傍にあつて先生の讀誦するを聞くと、その讀み方が頗ぶる亂暴で殆ど意味さへ通せぬ有様、友人は少なからず驚き『坂本、貴様の讀書は實に亂暴極る、それで意味が解るか』と云ふと、先生平然として答へて曰く『これでも意味は解て居る』と。友人『然らば拙者の眼の前でこれを講義して見給へ』と云ふ。先生は早速聲を揚げて講義を始めた。するとその講義が實に立派で、友人は舌を卷いて驚き感じたと云ふ。又、後に至り、自から書物に親しむの暇なき爲め、某蘭學者に就き、和蘭の政體を論じたる書の講義を聽かれたことがある。その時、坂本先生は、時々師の講義を遮ぎり『唯今御講義の箇所は、原書の意味と相違するやうに思はるゝが、御考如何と』云ふので、師某は大に立腹し『足下

坂本龍馬肖像

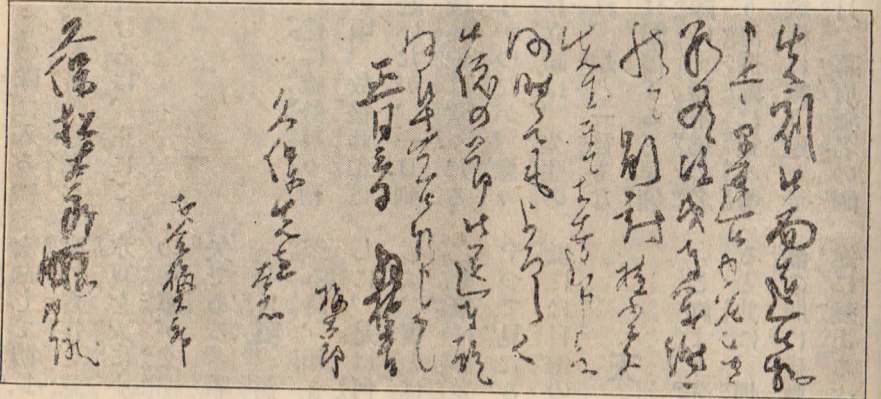
は門弟ではないか、知りもせぬ癖に實に怪しからぬ事をいふ』と答へる。坂本曰く『否、先生の講義では前後の意味が通せぬでは御座らぬか』と。そこで某もよく原書に就いて調べて見ると、成程坂本のいふ如く實は意味を取り違へて講義したのであつたと云ふ。これある哉、これある哉、後年海援隊長となつて天下を驚かし、薩長聯合に奔走して維新の大業を成就せしめたる偉人の素地は既にこの頃より倶へて居られたのである。

汗血千里の駒

さて先生は、三度目に江戸へ出た時、初めて勝海舟翁と相識るに至つたのであるが、この會見こそ、他日先生が世界の海援隊を作らんと豪語し、一時南海の海上王となつたる動機を與へたもので同時に面白い逸話が傳へられて居る。當時先生は千葉重太郎といふ劍客と同宿して居たが、一日、重太郎より海舟翁の開國論者たることを聞き、二人伴れ立つて翁を氷川の邸に訪問した。其時勝は、別室の床中より頭を出し『御覽の如く數日來病氣で、甚だ失敬ではあるが何卒こゝへ通られたい』と枕元を指した。二人は室外に腰の刀を置いて入らうとすると、翁は重ねて『この頃は兎角物騷である故御構ひなく刀を持つて御入りあれ』と云はれたので、二人は其儘翁の枕頭に進んだ。翁は靜かに床上に起上り、さて突然坂本に對して曰く『坂本氏。足下は拙者を殺しに參られたな？』と。流石の坂本もこれには不意を打たれ『いや、何、それは』とうまく言ひ拔けようとしたが、咄嗟の場合で何とも言葉が出ぬ。それで勝の曰く『私の一命は潔よく君等に進上する、然し私も多少天下の事に對して持論がある、故にそれを一通り御聞きの上、更めて斬るなり活かすなり足下の御隨意にされたい』と。これより勝は內外の事情を滔々と述べ、開國の必要、軍艦の勢力等を說いた。是に於いて、最初暗殺の望を抱いて勝を訪問したる坂本は、盡く勝の說に服し、即座にその門弟となる契約を結んだのである。昔支那の韓退之、馬說を作り嘆じて曰く『眞に馬なき乎、眞に馬を識らざる乎』と。馬は常にあり、然るに伯樂なし。伯樂なくんば、汗血千里の駒と雖も、遂に世に識られずして終はるのである。天下の伯樂、勝海舟幸にして此の千里の駒龍馬と相識るに至つた。風雲を叱咤し、回天の壯圖を企つるは、やがて彼等の目前に迫つて來たのである。

『海外の志ある者』

この時に當り天下は麻の如く亂れ、尊王攘夷、開國貿易、佐幕討幕等の諸論國中に沸騰し、雄藩互に反目して、今にも砲火開かれんとする有樣、苟くも國家の念ある志士は、諸方東西に奔走して各々その目的を達せん事に努力して居た。わが坂本先生も、最初はこの志士の一人で、藩の浪人となるをも顧みずに江戶へ出て來たのであるが、さて、一たび勝海舟に會ひ滔々內外の時勢を說かるゝに及んで、飜然自から悟る所あり、以後數年間は風雲を餘所に見て、只管航海術、海軍の編成等を研究し、機會ある每にこれを諸國の有志に傳へた。曾て越前の春嶽公に問うて曰く『幕府は果して尊王の精神ありや否や』と。公答へて曰く『然り』と。先生重ねて問ふ。然らば幕府は固く帝都を警護せざる可らず、

坂本龍馬の久保松太郎に與へたる書牘

之を爲すには須らく先づ攝津の近海に砲臺を築くの必要あり、これ即ち海軍所設立の要旨』と。春嶽公大に先生の卓見に感じ、幕府に說いて遂に海軍所を設けしめ、海舟翁をしてこれが奉行たらしめた。そこで、翁と先生とは相携へて大阪に下り、翁は海軍所創設と同時に塾を開き、先生は有志を說いてこれが塾生たらしめた。これ即ち海援隊の端緒で、實に今日の日本の海軍の基礎とも云はるゝものである。然るに間もなく勝は幕府の嫌疑を受けて江戶に召還され、先生は塾生の一部分を率ゐて自から海援隊長となられたのである。當時海援隊の規約の一節に曰く『本藩（土佐）を脫せる者、及び

他藩を脫せる者、海外の志ある者、この隊に入る』と。又曰く『運輸、財利、開拓、投機、本藩の應援をなすを以て主とす』と。意氣、世界を呑むとは、正にこの事である。

世界的日本主義

海援隊の勢力は次第に盛大となり、遂に威勢赫々南海の波上に覇を稱するに至つた。その頃、故後藤伯は藩命を帶びて汽船買入の爲に長崎に赴いたが、一日刺を通じて坂本に面會を求めた。當時後藤伯は堂々たる藩の重役、坂本は一個の浪人に過ぎなかつたが、愈々面會するに及び、伯の狹隘なる國家存立論は、先生の雄偉なる世界的日本主義に壓倒せられ、殆ど一言もなく降參したやうである。そこで、伯は歸藩すると早速當路の諸公に說き、以後坂本の海援隊に土藩附屬の名義を假すやうに取計らつた。これより海援隊は益々勢力を得、薩南、馬關、內海の沿岸を縱橫に乘り廻して獨り威を逞うしたるが、慶應三年七月、幕府無名の師を起して防長二藩を攻むるや、先生は長州の陸援隊長高杉晉作と意志を通じて同藩の軍艦を指揮し、幕府の水軍を大に小倉附近の海上に破つた。これ實に吾が國の海軍が文明の利器を用ゐて勝敗を實地に試みたる嚆矢である。戰後、先生、兄の權平に一書を送りて曰く『七月頃、蒸汽（櫻島丸）を以て薩州より長州へ使者に至る時、賴まれて無據長州の軍艦を率ゐて戰爭せしに、是は何の事もなく面白きことにありし。惣て咄しは、實とは相違すれども、軍は別て然るものなり。之を筆にし差上げても、實となさずやも知れず、一度やつて見たる人なれば咄しが出來る』と。而して此の手紙には自筆の戰圖が添へてあつた。

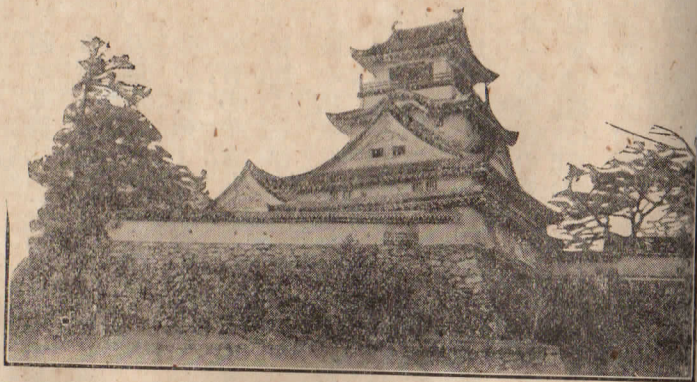
天一人の英物を下す

これより先き、討幕、攘夷の議論國內に喧しくなると共に、偶々京都守備、開港貿易等の事より薩長兩藩の間に確執を生じ、諸藩の有志は恟々としてその前途に變あるべきを豫想した。この時に當り、天一人の

英物を下す、即ち坂本龍馬である。先生は嘗て薩州の西鄉、小松等に會ひ、爾來親密に交際して來たるのみならず、その生國の土佐なるを以て、この間に處するには極めて好都合の位置にあつたのである。先生の曰く『今や天下亂る、而して人才無し、八十餘州の諸侯無氣無力、共に謀るに足らず、薩長調和し、三藩（即ち土藩を併せて）聯合せざれば天下の事亦爲すべからざる也』と。そこで前には薩藩の客となつて頻りに西鄉、吉井（幸輔）等を說き、後には又自から長州に赴いて三條公に謁し、力を盡して薩長調和の策を獻言した。公も之を諒とし、機を見て、西鄉、桂（後の木戶公）等と共に一所に會し、愈々聯合の密約を結ばうと云はれたので、先生は先づ馬關に至り、今の土方伯や桂などに出會ひ、一方同志の中岡愼太郎を薩州に遣はし、日を期して西鄉翁を一同の居る場所に連れて來ることにした。所が、期日に至りて西鄉來らず、獨り中岡のみが歸つて來た。坂本等その故を尋ねると、中岡の曰く『西鄉、余と共に來り、佐賀關に到つて忽ち土佐沖に向ひ、京都に赴いた』との事。桂は之を聞きて大に立腹し、直ちに山口に引返したので、薩長再び相反目するの形勢となつた。

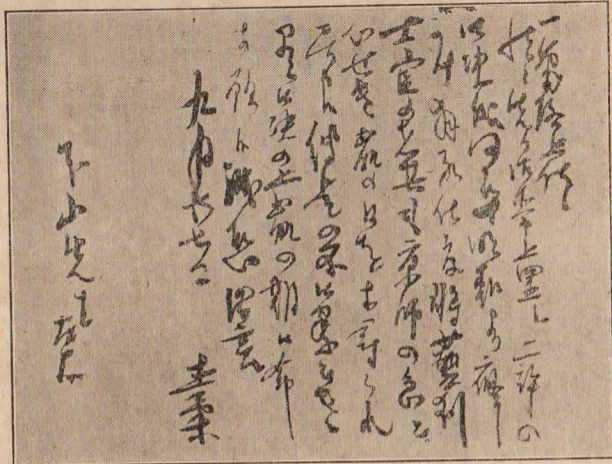
舊怨釋けて歡故の如し

先生は、慨然として中岡に對して曰く『吾れ桂を此地に會せしむるや、百方運動して漸く事成らんとせり、然るに西鄉の擧動已に此の如し、長人の薩人を憎むこと、前日に數倍せむ、誠に天下の憂也、願はくば君諸有志と謀り、更に會盟の期を作られよ、余はこれより直ちに京都に上り、大に南洲に說く所あらん』と。そこ

高知城（慶長六年山內一豐の築造に係る）

で、中岡は再び長人の間に奔走を開始し、先生は間もなく京都に赴き、西鄕、大久保、吉井等を說いて彼等の承諾を得、再び長州に下り、又々京都に上つて終に薩邸に於いてこれ等兩藩の代表者と會せしめ、自身もその席に臨み、胸襟を開き談笑の間に首尾よく聯合の大密約を結ばしめた。宿疑氷解すれば、舊怨釋けて歡故の如し。諸豪の襟懷、今更ながら嘆稱に堪えぬ次第である。

維新史上の特功

薩長聯合、これ實に維新史上特筆すべき出來事で、この密約なかりせば、王政復古の大事業も、或は中途にして挫折したかも知れぬのである。而して、我が坂本先生は、徹頭徹尾この出來事の原動力であつた。これが爲に、先生は東西南北に奔走し、身に迫る危險をも恐れず、日夜營々として働いた。その

坂本龍馬書束（養成社所藏）

結果幕府より仇敵の如くつけねらはれ、一たびは伏見寺田屋の奥二階に於いて、幕吏十數人の爲に襲はれ、二たびは京都河原町の某商店の二階に刺客の討入る所となつて、遂にこゝに非業の最後を遂げられた。最初、先生の長州より京都に上り、薩長の有志を會して二藩聯合の密約を結ばしむるや、直ちに十一箇條の建議案を草して之を後藤伯に示し、伯は之を携へて土佐に歸り、容堂公に謁して藩論を一定せしむる事となつた。此間に先生は長州に赴き、萬一の場合の爲に英銃一千挺を購入して、途中土佐に寄り、更に京都に上つた。この時後藤伯も既に京都に在り、かの十一箇條の建議案は容堂公の裁下を經て直ちに將軍に献ぜられた。然るに幕

府の諸侯、異論紛々、將軍も之を決する能はず、徒らに時日を過す間に、薩長は既に擧兵の議を決し、その一部はやがて三田尻に會するといふ報を得たので、先生は終に最後の決斷をされた。即ち、慶應三年十月十三日を以て開かるゝ將軍御前會議に於いて、事若し成らずば列席の後藤伯をして一刀兩斷の處置に出でしめようとするのである。當時先生より伯に送れる書中に曰く『萬一行はれざれば固より必死の覺悟故、御下城無之時には海援隊一手を以て大樹公の參内を道路に待受け、社稷の爲に不倶戴天の讎を報じ、事の成否に論なく先生に地下に御面會仕候』と。すると同日夕刻、伯より一封の飛報が來た。曰く『唯今下城、今日の趣取敢ず申上げ奉り候、大樹公政權を朝廷に歸すの號令を示せり。此事を明日奏問、明後日敕許を得て直樣政事堂を設け、上院下院を創業する事に運べり、實に千歳の一遇、天下萬姓大慶之に過ぎず、此段取敢えず申上げ奉り候』と。即ち大政奉還は議決され、先生多年の苦心は玆に漸くその結果を現はし始めた。

寶刀天下の名士を斬る

然るに不幸にして、その後約一月を經たる十一月十四日の夜、先生は萬斛の恨を呑んで幕府の刺客の爲に斃されたのである。昔、上杉謙信は敵將武田信玄の死を聞き、箸を投じて慟哭して曰く『好敵手、終に逝く乎』と。凡そ英雄豪傑とも云はるゝ者は、味方千萬の人より偉人と崇めらるゝのみならず、時には敵方の人よりも、その人物事業を尊敬せらるゝものと見え、先生を刺した近藤勇（或は靜岡の人今井某ともいふ）も後に友人に一書を送つて曰く『重代の寶刀、天下の名士を斬る、斬れ味頗ぶる佳し』と。最後に、坂本對西鄕の逸話を一つ述べて、この話を終はる。曾て陸奥伯上野精養軒に於いて中島信行氏等に語つて曰く『坂本が生きて居ると、今の薩長人などは青菜に鹽だれ、維新前、愈々新政體云々の議盛んなる時、坂本は大政奉還後の政府の役割を作り、之を携へて西鄕を訪れた。座に大久保、小松等が居た、西鄕は坂本の手より役割を取つて見て頤きながら之を大久保に渡した、その時坂本は、椽の柱に靠り膝を組み、腕を拱いて居たが、西鄕は之に向ひ『時に坂本君、君の名は役割中に無いやうぢやが、一體何をやるつもりか』と尋ねると、坂本の曰く『私は役人は厭だ、朝何時に出て晩何時に歸るなどといふ事は到底出來ぬ、土佐いかに小國なりと雖も、役人に成る者は僕以外に澤山ある』と、そこで、西鄕重ねて『では、貴下は役人以外に何をやろのか』と尋ねると『左樣、世界の海援隊でもやろつもりだ』と答へた。流石の西鄕もこれには默つて了つたので、この時は坂本の方が西鄕よりも一層の大人物のやうに思はれた』と。

弘法大師の片影

文學博士　谷本富

♣

古今獨步の大人格

今度富山房から雜誌『學生』の別刊として『鄉土偉人號』とか謂ふものを出す事に成つたさうで、自分にも弘法大師に就いて何か書いて呉れよと云ふ註文があつた。君は今弘法といふ噂だから、是非共といふ書添さへあつた。如何にも自分は弘法大師と同國である、併しそれで以て自分を今弘法など云ふことは、固より敢て當らない。否弘法大師の如きは、元來決して我が鄉里の偉人として、紹介すべき性質のものではなく、廣く日本帝國隨一の豪傑として尊敬すべきもので、先年京都の眞言宗總本山とも謂つべき、東寺の大學講堂に於ける大師の降誕會に招かれた時は、自分は『日本文明史上に於ける弘法大師』と云ふ題で、言語學上、文學上、美術上、書道上、宗教上、哲學上、教育上、並に經濟上各般の方面より仔細に大師の功德を研究し四時間に亘る一大演說を試みた事がある。その筆記は東京の六盟館より出版し、尚ほ英字新聞『ザ・ジャッパン・クロニクル』紙上にも丁寧に譯載し、終に單行本として海外に頒布した。何はともあれ、自分は青年諸君が弘法大師を視るに、啻に抹香臭き宗教上の一人物を以てせず、實に孰れの方面に於ても、諸君の手本として敬慕すべき古今獨步の大人格だとして、注意せられんとを需めるものである。

♣

大師靈跡八十八處

弘法大師は實に西讃多度郡に生れた、今は仲多度郡と呼んで居る。其處に善通寺といふ大きな寺がある。一名を誕生院といふのは、大師の生れた所といふ意味ぢやさうな。色々國寶となつて居る珍らしい遺物もある。近頃は第十一師團が置かれたので、寒村遽に變じて繁華の市街となり、往年の面目は頗ぶる毀損せられた樣だが、尚ほ寺門に入りて諸堂を巡拜すれば、必ず一種の神々しき感想に打たれやう。そして又程遠からぬ所に別に屏風が浦といふ所もあつて、誕生地爭ひをして居るのも面白い。『二度と彌谷金藏寺』と云へども決して嫌な所でなく、山路稍々險なれども登山の價値は十分にある。況んや琴平と謂ひ、觀音寺と謂ひ、附近名所太だ多きをや。讃岐、阿波、伊豫、土佐四國通じて大師の靈跡八十八箇所あり、陽春に凉秋に一遊すれば興味多く而かも或は深山に、或は幽谷に、或は海濱に、所々散在するを以て、避暑に便なる所も多き筈である。

弘法大師御初産湯井戸

♣

東寺に於ける遺物陳列

曾て京都に遊ばれた諸君は七條驛の南西にこんもりした森があつて一つの瀟洒たる塔が聳えてゐるのを觀たらう。あれが東寺で、本名は敎王護國寺と謂ふさうな。東寺と呼ぶのは、當時王城の入口、即ち夫の渡邊綱の鬼退治で有名な羅生門の東側に立てられたからで、同じく西側には之と相對して西寺と謂ふのがあつた。東寺は弘法大師これに居り、西寺には大師の敎敵守敏僧都が居た。併し守敏は到底大師の敵にあらず、在世の時より餘り振はなかつたらしいが、その後間もなく寺は燒失して、今は僅に田畝の間に礎石や古瓦が殘つて居るに過ぎぬ。之に反して、東寺の方は現に講堂や、金堂や、幾多の堂塔が大小羅列し、いづれも多大の國寶を藏し、特に近頃陳列館が開かれて、參詣者が絕えぬ。

弘法大師（伊豆船若寺藏）

♣

高野山は滿山名所

若し更に暇あらば鐵路南して高野山に遊ばれん事を切望する。大和より行くもよく、和泉乃至河內より行くもよからん。山は實に大師永眠の地にして、祖廟儼として存するあり、廟に接して古今幾十萬の墳墓がある。明智光秀の墓石は、兎角破れて全きを得ずと云ふなど、色々耳新らしい傳說も聞けよう。女人堂に男尊女卑の昔時を偲ばゞ、可憐なる刈萱童子は髣髴として諸君の眼前に現出す可し。金剛峯寺には大師眞筆の書畫多く、いろは歌の手稿さへ在り。而して其の柳の間とやらは豐臣秀次最後の所と聞かば、誰人も斷腸の思なきを得まい。幾十の寺坊、皆所緣に由りて旅人を宿泊す、料理の精進なるも珍らしく、接待の丁寧なるは嬉しい。滿山名所舊蹟櫛比すと云も可なる程にて、春の花より新綠に杜鵑を聽くも妙なるべく、秋の月に因みて落葉の鹿鳴を耳にするも面白かるべけれども特に盛夏暑熱を知らずといふに至つては學生諸君の好避暑地ではないか。

♣

英靈は國中に遍在する

行矣！青年學生諸君、我が弘法大師は今を距る千百三十九年の昔、光仁天皇の寶龜五年六月十五日に生れ、やがて仁明天皇の承和二年三月二十一日に、享年六十一歳にて入定せられたのであるが、肉身は石室に瘞められたれども、英靈は永く國中に遍在して、到る處に諸君を接受せられるであらう。諸君は斯の英靈に接し、感奮興起して各々帝國將來の文明に多少の貢献を爲すことを志ざさずや。關東關西到る處、所謂『四國八十八箇所』を模設するあり、責めてはそれにても巡禮して、無意味の散歩を意味あるものとせられては何うです。

弘法大師眞筆（いろは歌）

弘法大師の家柄は地方の名門で、親戚にも亦學者として聞えた人が少くない。併し大

師の時には、家道は決して左樣に多く振はず、從つて大師は隨分窮乏して苦學せられた樣子ぢや。勿論苦學と謂ても、牛乳や新聞の配達はせず、人力車は尙更ら曳かず只時には紙筆に窮されたる事もある樣である。

不世出の天才

弘法大師は確に天才である。幼少より慧敏で、父母も厚く之を寵愛し、囑望する所多かりし樣ぢや。

併し如何に天才なればとて刻苦勉强せざれば、固より大成するに由なきことを思はねばならぬ。大師は先づ京都に上り、大學に入つて漢學を學び、それから又竊かに佛學に志して良師を求め、石淵の勤操僧正に逢うて懇篤なる面命耳提を蒙つたといふ事である。大師のまだ年若かりし時に、土佐の室戸崎や、阿波の大龍嶽などで、一心不亂に冥想默禱して成業を努められた雄姿は、今も尙ほ吾等の眼前に浮んで渴仰に堪へない所である。

大師一生涯の奇蹟

弘法大師の生涯には種々の奇蹟がある、諸君は恐らくそれを信じまい。自分も概ね不信である。否、不信のみならず、それには却て相應の理窟ある事ぢやと一々說明を試たこともある。例之、夫の大師は口と兩手兩足に筆をはさみて、一時に五字を書いたから五筆和尙と謂ふなど言傳へたるは誇語に過ぎてゐる。それは大師は韓方明といふ人の五種の筆法に通ぜられたといふ事實を神變化したのであらう。應天門の額面に一點を脫した事を後に發見し、高所に筆を抛つて宛も打ち得たといふのも、抛筆法と謂ふ筆法で應字を書いたといふ事の誤解である。併し自分の見る所では、そんな區々たる手品然たる奇蹟よりも、大師一生の大功績こそ眞に奇蹟であると思はれる。

弘法大師の生れたる善通寺の赤門

學問文藝通せざる無し

弘法大師は和漢の學に通じ、顯密兩種の佛敎に精しく、詩に巧に、文に巧に、書に巧に、繪畫彫刻一つとして能くせざるはなく、剩さへ梵語にも造詣がある、詩文書畫、巧みと謂つても、それは又非常なもので、本家本元の唐人も遠く及ばぬと云ふ程である。支那留學中特に皇帝の命を蒙つて、朝廷殿上の王羲之の筆を補つたといふ話さへある。自分は固より必ずしも是れからの青年諸君に、漢詩漢文乃至書畫を巧に習へとは望む者ではない。併し諸君が英語を學び英文を綴るにしても、何卒英米の人々と擇ばぬ程になれよと云ふのである。現に大師は唐詩即ち支那語にも熟達してゐたらしい。所謂和習だら〳〵の、ブッキシュな英語ではこまる。

弘法大師は又大雄辯家であつたと想はれる。曾て清涼殿上で講演した時は、忽ち金光を放つて畏くも主上を始め奉り、百官衆僧一同アッと拜伏したと言はれて居る。是れは少々怪しいが、併し自分はこれを事實と認めて、上下一同大師の雄辯に感服した事を、美的形容したものと見える。此の點も今後の青年諸君は大に習はなければなるまい。

尚ほ大師の事跡について一つ諸君にお話致したい事は、大師は青年の時より遊歷探蹟を好まれ、早く近畿四國中國地方に通曉せられて居た事で、その後に朝廷から特に高野の山を申受けて開基したのも、色々不思議な傳說は扨て措き、自分は先づ大師の地理的素養に歸さうと思ふ。地理を知らんでは何事も所謂畠水練たるを免れまい。

大成功の因は支那留學

弘法大師の爾く大成功を致されたのは主として支那留學に由る。それは古今變りはない。併し大師の頃は交通太だ不便で、支那の上海邊まで行くにも、大阪神戸のあたりから出帆して、海路數箇月を要する事が稀れでなかつた。現に大師も往途には五月に出で十二月の末に漸く長安の都に入つた樣である。自分は一昨年海外再遊の時は、五月に發して翌年一月に歸朝したから、略ぼ大師の往途と同じ日數だが、自分は其間に歐米各國を漫遊し倫敦や紐育には相應に長く逗留をした。諸君は斯樣に便利の世の中に生れながら、因循姑息では大師に恥かしくはないか。

大師に關する書籍

弘法大師の事を書いたものは色々ある。須藤南翠といふ人の『空海』など分り易くてよからう。又佐伯曼茶羅師の『南無大師』も精しくて好い。『弘法大師全集』五卷は、實に大師の事業の浩大なる事を證明して餘あらう。但し青年諸君には分り惡いかも知れぬ。兎に角自分は諸君が此の際、先づ便宜大師の靈跡を巡拜せられん事を切望する。因に弘法大師の一族には、大師號を授けられたるもの數人あつた。否現今眞言宗に於いて、管長とか門跡とか、その他高僧大德と稱せらるゝ者に讃岐出身の多い事は、吾等竊に郷里の誇りとする所である偉人の感化眞に偉なりと謂つべしだ。諸君奮發し給へ。南無大師遍照金剛〱。

元寇役の勇士河野通有

廣島高等師範學校教授
藤岡繼平

一　文永弘安の危機

人も知る今より六百四十年の昔、時は文永十一年の秋、蒙古高麗の艨艟が我が西海を壓せし時、日頃鍛ひし鎭西皁人の覺悟は如何。黑敵來襲は何れも豫ねて期したる所、皆勇奮戰場に馳せ向ひ、目に物見せんの覺悟は案外、まづ驚かされしは彼の武器。彼には弓矢飛道具の外に鐵砲あり、所謂石火矢の類にて、其の音迅雷の如く、砂石を飛ばして邊り濛々、流石の勇士も是には聊か辟易した。其の上彼我戰術の相違は、大に我に不利である。我は源平以來一騎打の戰爭に馴れて、陣頭馬を進めて『我こそは桓武天皇何代の孫――』を名乘らねば勇士の面目を失ふ習ひ、彼は是等に頓着あらばこそ、整々隊伍を組んで、大皷や鑼や鬨の聲、部將指命の下に、一進一退駈引自在、我が人馬是にも聊か度を失つた。されば、挺身奮擊、血肉を國家に捧げた壯士は少なからねど、全軍苦鬪の程は思ひ遣られる。處が幸ひ、暴風一夜吹きすさんで、敵船多く碎け散り、殘賊怖れて皆遁げ去つた。さあかうなると、戰鬪利あるにも拘はらず、天候の妨げに大失敗を取つた敵は遺憾遣る方なく、再擧來襲は疑ない。故に勇敢なる相模太郎時宗は、邊海の防備と共に、いつそ我から彼の異國を進擊して、先を制しようかとの雄心をも起して、一時外征の計畫をも〱怠りなかりしも、國の實力未だ遠征に副はざるを悟つてよりは、爾後專ら西海の防備に全

尚ほ大師の事跡について一つ諸君にお話致したい事は、大師は青年の時より遊歴探蹟を好まれ、早く近畿四國中國地方に通曉せられて居た事で、その後に朝廷から特に高野の山を申受けて開基したのも、色々不思議な傳説は扨て措き、自分は先づ大師の地理的素養に歸さうと思ふ。地理を知らんでは何事も所謂畠水練たるを免れまい。

大成功の因は支那留學

弘法大師の爾く大成功を致されたのは主として支那留學に由る。それは古今變りはない。併し大師の頃は交通太だ不便で、支那の上海邊まで行くにも、大阪神戸のあたりから出帆して、海路數箇月を要する事が稀れでなかつた。現に大師も往途には五月に出で十二月の末に漸く長安の都に入つた樣である。自分は一昨年海外再遊の時は、五月に發して翌年一月に歸朝したから、略ぼ大師の往途と同じ日數だが、自分は其間に歐米各國を漫遊し倫敦や紐育には相應に長く逗留をした。諸君は斯樣に便利の世の中に生れながら、因循姑息では大師に恥かしくはないか。

大師に關する書籍

弘法大師の事を書いたものは色々ある。須藤南翠といふ人の『空海』など分り易くてよからう。又佐伯曼茶羅師の『南無大師』も精しくて好い。『弘法大師全集』五卷は、實に大師の事業の浩大なる事を證明して餘あらう。但し青年諸君には分り惡いかも知れぬ。兎に角自分は諸君が此の際、先づ便宜大師の靈跡を巡拜せられん事を切望する。因に弘法大師の一族には、大師號を授けられたるもの數人あつた。否現今眞言宗に於いて、管長とか門跡とか、その他高僧大德と稱せらるゝ者に讃岐出身の多い事は、吾等竊に郷里の誇りとする所である偉人の感化眞に偉なりと謂つべしだ。諸君奮發し給へ。南無大師遍照金剛〳〵。

元寇役の勇士 河野通有

廣島高等師範學校教授 藤岡繼平

一 文永弘安の危機

人も知る今より六百四十年の昔、時は文永十一年の秋、蒙古高麗の艨艟が我が西海を壓せし時、日頃鍛ひし鎭西隼人の覺悟は如何。黑敵來襲は何れも豫れて期したる所、皆勇奮戰場に馳せ向ひ、目に物見せんの覺悟は案外、まづ驚かされしは彼の武器、彼には弓矢飛道具の外に鐵砲あり、所謂石火矢の類にて、其の音迅雷の如く、砂石を飛ばして邊り濛々、流石の勇士も是には聊か辟易した。其の上彼我戰術の相違は、大に我に不利である。我は源平以來一騎打の戰爭に馴れて、陣頭馬を進めて『我こそは桓武天皇何代の孫――』を名乘らねば勇士の面目を失ふ習ひ、彼は是等に頓着あらばこそ、整々隊伍を組んで、大皷や鑼や鬨の聲、部將指命の下に、一進一退駈引自在、我が人馬是にも聊か度を失つた。されば、挺身奮擊、血肉を國家に捧げた壯士は少なからねど、全軍苦闘の程は思ひ遣られる。處が幸ひ、暴風一夜吹きすさんで、敵船多く碎け散り、殘賊怖れて皆遁げ去つた。さあかうなると、戰闘利あるにも拘はらず、天候の妨げに大失敗を取つた敵は遺憾遣る方なく、再擧來襲は疑ない。故に勇敢なる相模太郎時宗は、邊海の防備と共に、いつそ我から彼の異國を進擊して、先を制しようかとの雄心をも起して、一時外征の計畫をもく怠りなかりしも、國の實力未だ遠征に副はざるを悟つてよりは、爾後專ら西海の防備に全

力を注いた。或は一族北條實政を九國の探題に任じ、或は中國關東の將士を西海に派遣して、鎭西の警備に充てた中にも、前役彼の戰術と飛道具とに懲りたる我は、彼の上陸を妨げて、再び彼獨特の長技を振はしめざる爲めには、亦特別の設備を計らればならぬ。即ち博多沿岸の石壘築造の大工事は是で、西は志摩郡今津の草場山より、東は宗像郡勝浦に至る一帶の沿岸、要所々々には悉く石壘を築き、地勢に從うて高低を計り、低きも數尺高きは一丈餘に達し、蜿蜒二十五里の間に連なつて居る。こんな防備は開闢以來未曾有の例で、譬へて云はゞ日本の萬里の長城である。然かも、其の石壘の築き方が面白いので、岸に面しては直立壁の如く、容易に敵の攀登を許さず、內陸地に向つては、頗ぶる傾斜を緩くして、人馬の昇降に便にしてあるから、スワと云はゞ、勇士馬を駈つて忽ち壘上に顯はれ、下げ矢に賊艦を射、機を見ては駿馬に一鞭、忽ち壘下に降り得る樣な次第で、中々意匠を凝らしたものである。斯かる堅固な防禦を賴みに、全國の壯士は倍舊の勇氣を以て『今度こそは』も異敵を待つたが、果して前役から八年目の弘安四年六月五日、十餘萬の大軍一時に、博多の灣頭能古、志賀島に押寄せて、一擧先年の失敗を償はんとした。眞に是れ國家存亡の危機我が勇士の面目今果して如何。

二　河野通有の素性

巨口を開いて我を一呑みにせんとする十萬の大敵、果して我が武夫を怖れしめたか、否々、金甌無缺の神國、嘗て一指を異國人に加へしめざるてふ國民の名譽心と義憤は、却つて之が爲めに振ひ、そは頓て幕府の強硬なる態度、武夫の奮起となつて顯はれたのである。さらば、此の危機に際しては、一死國難に殉ずる忠勇の武夫は、決して其の人に乏しくない。中にも、伊豫の國の住人河野通有の如きは、其の隨一である。抑も河野の源流に溯れば、皇祖神武の功臣饒速日の命より出で、傳へ〳〵て中興の宗通信に至る。通信は夙く源氏に屬いて、父の仇西寂を討ち、或は源九郞判官に西海に從ひ、或は奥州征伐に右大將賴朝に從うて、その建てたる高い功勳は、遂に伊豫一國の守護職をすら得たる上、當時飛ぶ鳥を落す威勢ある執權北條時政の女婿となり、其の腹の通久は、承久の役、宇治川の先陣に譽れを揚げ、工藤一﨟祐經の女の腹に生ませたるが藏人通繼、その子が即ち六郞通有であるから、父祖代々の武勇に、母方勇悍の血潮さへ加はつて、そ

の驍勇は實に先天的である。恰も彼が廿五歳の男盛り、血沸き腕鳴る年頃に、遙かに聞えし西海の變、いで戰場とはやるとも、海山隔てゝ機は既に逸す。定めし髀肉の歎に堪へざつた事であらう。處が、程なく京都から、西海防備の勅命が其の家に下つたので、待ちに待つたる通有の一族は、直ちに此の徵に應じた。通有今や本國出發に際し、深く神明に誓つて曰く、『吾不幸にして文永の役に會せず、今より十年の中に蒙古寄せ來らずば、我れより進んで異國に渡らんのみ。』と眞に意氣天を衝くの語。男子既に此の意氣あり、十萬の大軍何のものかは。

三　神明の加護を確信す

一度決心の臍を堅めたる通有に就いて、また一面當時彼が一家の境遇を思へ。曾祖通信、豫州一國守護の權威を振ひしも、一旦愛孫（孫通秀は後鳥羽院西面の武士）の緣に引かれて、承久の役北條に手向ひしより、其の身は奥州に流され、領地は忽ち沒收せられ、唯だ實子通久の戰功に依つて、漸やく豫州久米郡石井の一鄕を保つばかり、通有も亦こゝの住人に過ぎぬ。故に家勢挽回の謀は、必らず勇士の念頭を往來したであらう。然かも、彼の驍勇は父祖の血潮より受け、異敵報復の念は、素より國民的義憤に基つく。博多灣頭、通有をして花々しい一幕の活劇を演せしむるは、眞に期して待つべきである。況んや彼が神明に對する敬虔なる信念は、一層彼が心

河野通有像（蒙古襲來繪詞によろ）

膽を強くした。蓋し伊豫には昔より、靈顯著しき三島大明神鎭座ましく\て、河野氏は祖宗に末永く之を守護神と仰いでゐるので、通有も始終渇仰して、武運の長久を祈り、或は神符を燒き其の灰を飮んで、家運の隆盛を誓つた。現に此の役にも、此の明神の靈顯によつて功名を立てた由が、ものに見える。即はち、斯樣な神明の加護といふ堅い信念が、通有をして能く戰はしめた所以である。否な、文永に神風を感じたる國民は、皆神佛冥護の信念を強くしたので、其の元氣が頓て異敵掃蕩の功を顯はしたのである。いでや、愈々通有が博多灣頭の活劇を物語らんかな。

四　博多灣頭の一大活劇

我が勇士が待ちに待つたる異敵は來りぬ。然かも上下二十五里の長城は、流石其の効を顯はして、敵艦容易く近寄りかね、味方亦文永の手並を知れば、是も迂濶に手出しはせぬ。時に此の靜寂を破つて、敵味方を驚歎せしめたのは、實に決死隊の奮進である。中にも通有一族の覺悟は又格別で、其の陣の構へ、殊更石壘を背として、海の面一重の幕を打ち繞らすは、是れ一は味方の逃道を塞いで、主從決心の臍を堅め、一は敵を容易く引き入れて、勝負を一戰に決せんとの覺悟、是れぞ河野の後築地と傳へて、陣中に持て囃されたのでも、其の決心の程が知られるのである。然し敵も用心深く、中々岸に近寄らぬので、今や敵艦夜襲の冒險は企てられ、一夜夜陰に乘じて、二艘の輕舸は秘かに岸を離れた。船の主は云はずと知れし河野六郎通

『蒙古襲來繪詞』に現はれたる石壘上の我が將士

有、當年まさに三十二歳、其の日着せし直垂は、曾祖四郎通信が、嘗て九郎判官に從うて平家を伐ちし由緒のよろひ、腰に帶せし大太刀は、大和國壽命の作、嫡子八郎通忠は花の蕾の十四歳、憑む所の伯父伯耆守通時は、戰慣れし年功の武夫其の他一族郎黨の決死隊、巨山の如き大艦目懸けて押寄すれば、用心嚴しき敵艦は、早くも之を看悟りて、散々射下す矢さきに當り、柱と賴む通時も大事の手負、あはれ蕾の八郎さへ矢疵に傷めど敢てひるまず、忽ち斃る究竟の若黨四五人、答矢を射たる健氣さよ。通有其の身も石弓に左の肩を強く打たれ、弓引くべきにも力なく、然かも見上ぐる大艦に寄りつく術もあらばこそ、やをら片手に太刀提げ、帆柱切つて蒙古の船に渡しかけ、勇士の面々我れ先きにと、敵艦中に乘移り、あわて犇く敵の中、こゝを先途と散々に斬つて廻れば、打ち取る頭はかず知れず、中にも、敵の大將と覺しき王冠着けたる大男を生捕りにして我船にしめつけ、敵船に火をかけ、凱歌を擧げて悠々引擧げた。如何に勇壯悽絕ではありませぬか。讀者諸君、斯かる通有の擧動を以て、野猪的無謀の行動と見る勿れ、前述通有の義憤と奮勵が、此の冒險を敢てせしめたので、其の効果は決して少々でない。斯くの如き大和男子の勇壯は、流石獰猛なる敵の心膽を寒からしめ、遂には彼が四千の艨艟、舳艫相銜んで遙かの沖に漕ぎ戾して肥前鷹島に據るに至つた。そこへ閏七月朔日の夜、例の神風が吹きすさんで、賊船悉く漂蕩し、我が軍之に乘じたから堪らない、御苦勞にも、我に屯田永住の

準備までした來た將卒も、其の大部分は海底の藻屑となつたのである。して見れば、通有等の壯擧が敵軍の鋭氣を挫いて、敵艦覆滅に一動機を與へて居る功は頗ぶる大きいので、近く日露の役、旅順港口を閉塞した決死隊にも、決して讓らぬ大功で、通有の殊勳は優に金鵄勳章にも値するのである。否、銅像を建てゝ遣つても可いのである。

河野の旗さし（蒙古襲來繪詞所載）

五　功成り名遂ぐ武士の本懷

通有の右の壯擧には、勿論多大の犧牲を拂つた。通有父子の疵は幸ひ癒えたれど、通時は遂に船中に戰死し、其の外一族郞等の斃れた者も少くなかつたが、是れも畢竟お國の爲め。高き武名を揚げて、本國豫州に凱旋し、檎にした敵將の頭は刎ねて、當家の家人久萬彌太郞成俊に持たせ、京都に上つて闕下に獻じ、難有き御感賞を蒙りたる上、軍忠拔群の廉を以て、其の恩賞として、肥前神崎庄、肥後の一部、豫州山崎庄等、三百餘町の御加增をいたゞき、對馬守に任ぜられて、近來振はぬ家勢を始めて挽回した。そこで、通有の諸子は、此後諸方に領土を廣め、風早河野の舊邑を始めとして、遙かに力を豫州の南部に延ばし、玉生、中山、由並（此の三庄は何れも伊豫郡に在る）の諸方を領して、遂には伊豫一國の總領となつたのも、畢竟通有の家勢回復が動機となつたのである。今東豫の多賀村字北條に、長福寺といふ古刹がある、これは通有が、此の一に戰死した幾多精靈の追福の爲めに創建したるもので勇士が優しい情の跡は、今も立派に殘つてゐる。通有こそ眞に天晴の勇士、一家の面目。蓋し武士の本懷此に過ぐるものはなからう。當今の青年諸君、海に陸に國家の干城を以て任ずる者、まさに通有を鏡とすべきは素より、又他日何れの業に從はんとする者も、社會に立つては、常に通有の心懸けと奮鬪とを期せればならぬ。

弘法大師遺蹟

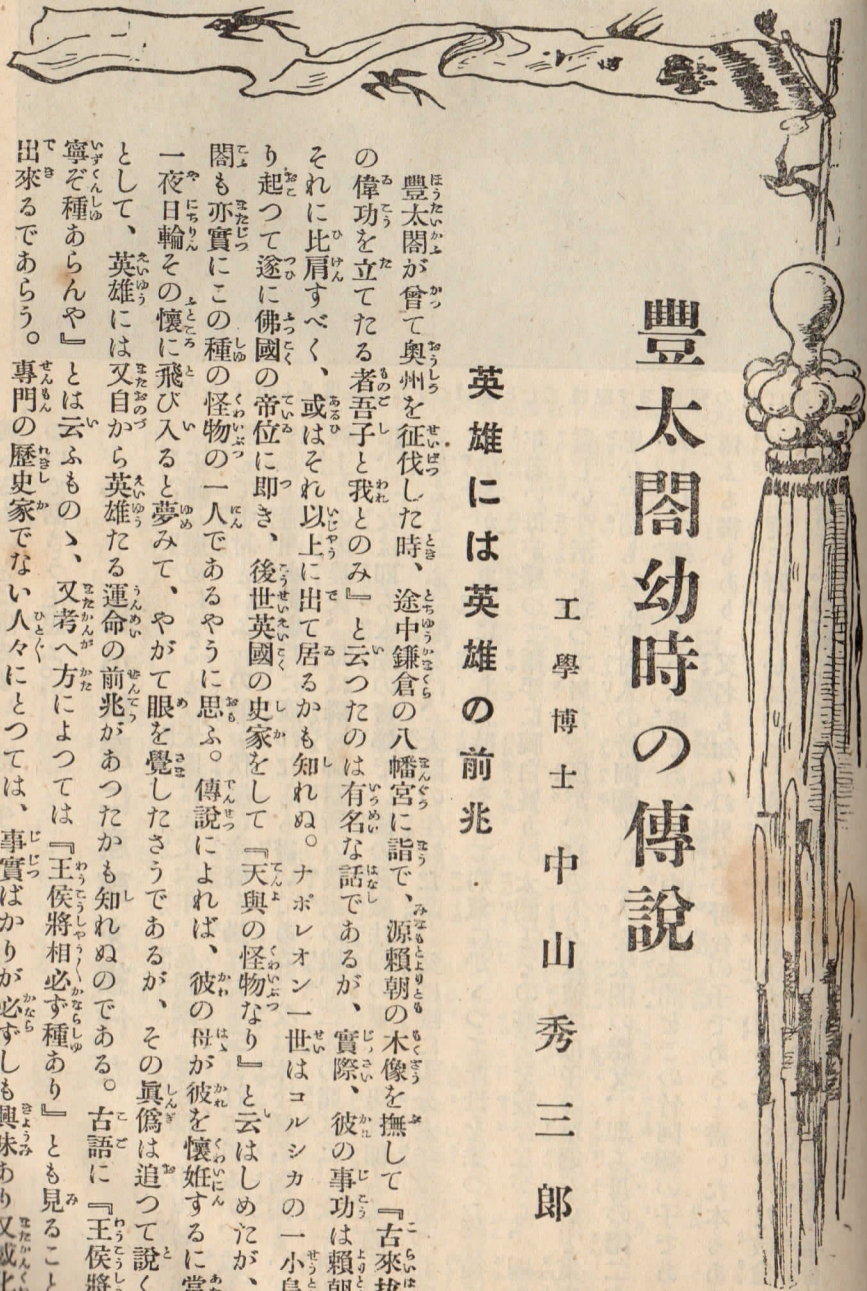
上は大師の父佐伯善通卿の廟・下の右は善通寺に於ける仁孝天皇勅願所五重の塔・左は同寺御影の松と御影の池で・何れも大師と關係淺からざる遺跡である（谷本博士記事參照）

豐太閤幼時の傳説

工學博士 中山秀三郎

英雄には英雄の前兆

豐太閤が曾て奧州を征伐した時、途中鎌倉の八幡宮に詣で、源頼朝の木像を撫して『古來拔群の偉功を立てたる者吾子と我とのみ』と云つたのは有名な話であるが、實際、彼の事功は頼朝のそれに比肩すべく、或はそれ以上に出て居るかも知れぬ。ナポレオン一世はコルシカの一小島より起つて遂に佛國の帝位に即き、後世英國の史家をして『天與の怪物なり』と云はしめたが、太閤も亦實にこの種の怪物の一人であるやうに思ふ。傳説によれば、彼の母が彼を懷妊するに當り一夜日輪その懷に飛び入ると夢みて、やがて眼を覺したさうであるが、その眞僞は追つて說く事として、英雄には又自から英雄たる運命の前兆があつたかも知れぬのである。古語に『王侯將相寧ぞ種あらんや』とは云ふものゝ、又考へ方によつては『王侯將相必ず種あり』とも見ることが出來るであらう。專門の歷史家でない人々にとつては、事實ばかりが必ずしも興味あり又感化を

秀吉を下司より出世したうつけ者として睥睨する先輩の前に節を屈して傲慢なる柴田勝家の腰を揉みつつある大偉人秀吉

與へるものとは限るまい。故に爰には、太閤の幼時に關する二三の傳說について話さうと思ふ。

賤が伏屋に產聲を揚げた

正確な歷史によると、太閤は天文六年、尾張國、愛知郡、中々村（通常略して中村といふ）の賤が伏屋に產聲を揚げたと云はれて居るが、或る書には、清洲水野郷戶に產れたとも書いてある。父は木下彌右衛門といふ足輕上りの老農夫、母は隣村御器所の農家の娘、二人の間には一女一男が生れ、一女は即ち太閤の實姉で、後の武藏法印の妻、一男は即ち太閤その人であると云ふ。然るに、太閤の生れた時、父は既に大分老年であつたので子供等が八九歲に達した時、やがて病氣にかゝつて此世を去つた。後には年若い母が殘つて兩手に腕白盛りの太閤とその姉とを養ひながら、極めて貧しい生活を送つて居た。所が、村の人々は彼等母子の境遇をいと氣毒に思ひ、間もなく同村人の竹阿彌といふ人を太閤の繼父、即ち母の第二の良人として遣つたといふ事であるが、中には太閤をこの竹阿彌の子であると傳ふる書もあり、又名も知れぬ男女の野合の子であると書いた本もある。尤も、爰に野合といふのは、今日一般の世人が用ゐて居るやうな破倫の意味ではなく、老齡にして婚期を過ぎた男子が、妙齡の處女を娶る場合とか

又は貧家の婚儀で表向に儀式を擧げぬ場合とかを指したもので、孔子を野合の子といふのも全くこの意味に於いてださうである。

日輪母の懷に入る

飜つて、太閤の母が太閤を懷姙するに當り、日輪云々の夢を見たといふ說を考へて見るに、これ勿論當時の人の虛構か、又は後人の太閤を崇拜する餘りに作つた妄說であらうとは、今日何人も疑はぬ所であるが、或る書には、太閤自身がこれを屢々人に對して語つたと傳へてある。彼が明の使者に語つた言葉の中に次のやうな事がある。曰く『予が慈母懷胎の初、日輪胎中に入ると夢み、覺めて後驚愕して相士に即いて之を卜せしめけるに曰く、天に二日無し、德輝四海に彌るの喜瑞也。故に壯年に及びて夙夜に世を憂ひ、國を愁ひ、再び聖明を神代に會復し、威名を萬代に遺さんと之を思ひて止まず、纔に十數一年を經て、凶徒姦黨を族滅し、而して城を攻めて拔かざる無く、敵陣を廢せざる無く、乖心有る者自から消亡せり。已にして國富み家娛み、民其の所を得て、心の會する所、遂げずといふ事無し。予が力に非ず、天の授くる所也』と。又今の臺灣や西班牙の國王に寄せた書中に、往々これに似寄りの言葉がある。して見ると、日輪の夢は果して事實であらうか。

一種の人心收攬術

専門の歴史家に聞くと、これは事實でも何でもないので、單に太閤が敵國の使者に對する嚇し文句、謂はば一種の人心收攬術を施したものであると云ふ。昔支那の陳渉といふ人が、兵を擧げて天下を奪はんとするや、先づ檄文を草して『陳渉王たらん』と云はしめたさうであるが、太閤の日輪を振廻はしたのも、恐らくはこの種の手段であつたであらう。さればこそ、彼は自分の血統を賤しい農家の子であると云はずに、畏多くも天胤であると稱へた。即ち、彼が嘗て天下を統一するや、初めて時の天皇に拜謁を許され、その歸途某所で公卿の面々に會ひ、尤もらしい顔付をして語つて曰く『我は尾州の草澤より出でたり。故に百姓の事は知つて居るが、筆硯の事は一向存せぬ。而して今禁闕に上る。これ實に萬代の榮譽である。然し、予の母は嘗て内裡の内庖に婢となり、一夜圖らずも寢殿に侍し、その夜夢に、萬千の被函天上に飛翔り、伊勢よりして播磨に至れるを見、又重ねて、千早振神のみてぐら手に取りてと夢み、而して後我を懷胎した云々』と。人心收攬術もこゝに至つては實に極端であるが、亂世の事とて、云ふ當人も、聞く公卿達も、別に何とも思はなかつたのであらう。

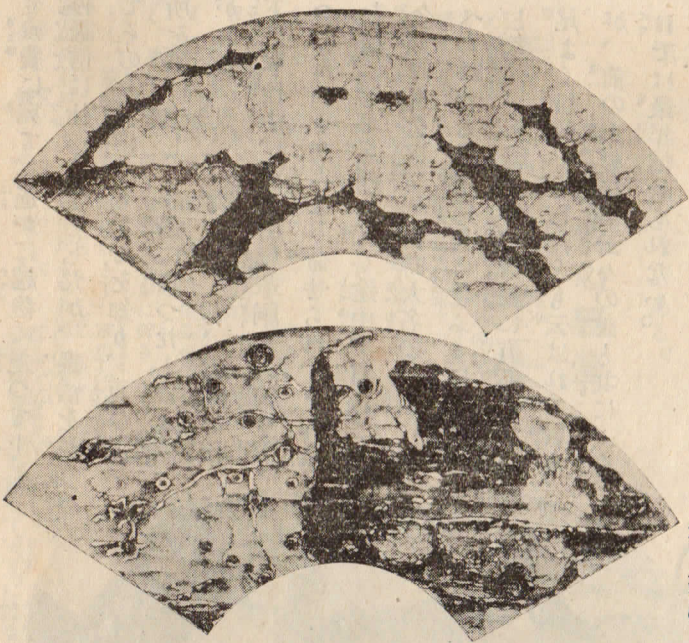
惡戯小僧の狙公

太閤の幼名は、或は日吉丸と云ひ、或は小竹と云つたともあるが、足輕の子に日吉丸の名は少し妙であらうし、小竹は太閤を竹阿彌の子であると傳へた書よりの誤傳であらう。從つて本統の幼名は、何と稱へたものか、今正確にこれを知ることは出來ぬ。唯、附近の人々より狙、狙と云はれたのは事實であるらしい。即ち彼の容貌擧動等より聯想された綽名であらう。十歳前後の狙公は頗ぶる惡戯小僧で、家に在つては母を泣かせ、外へ出ては附近の子供を苦しめ、附近の人々よりは毛蟲の如く嫌はれた。そこで、母は已を得ず寺へ入れて敎育させて見たが、太閤は依然たるお山の大將

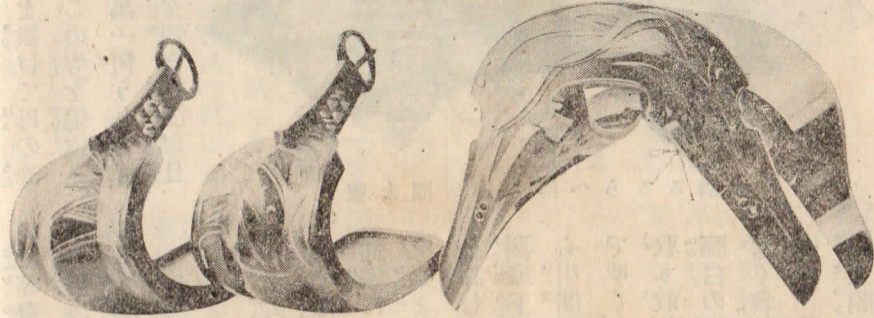
で、寺僧も遂に呆れ果て、やがて口實を設けて母の許へ送り返した。俗書によると、太閤がこの寺を追返された時、寺僧を捕へて大駄々をこね、萬一何うしても自分を家に返すとならば、忽ちこの寺を燒き拂ひ、且つ汝等青坊子を盡く屠戮すべしと嚇したので、坊子達は今更のやうに面喰らひ、美衣と扇面とを與へ、頓首して太閤に謝つたと云ふ事である。

豊太閤所持と傳へらるる扇面

桶革胴丸の事件

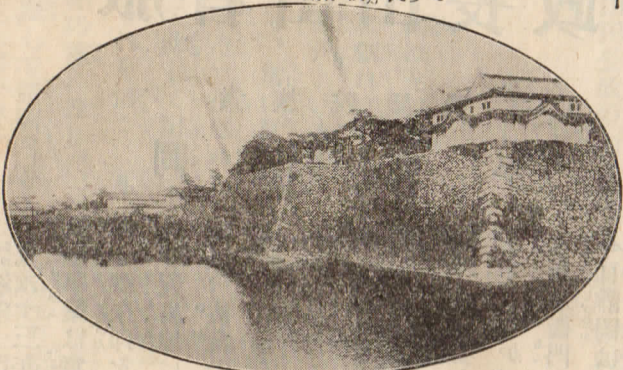
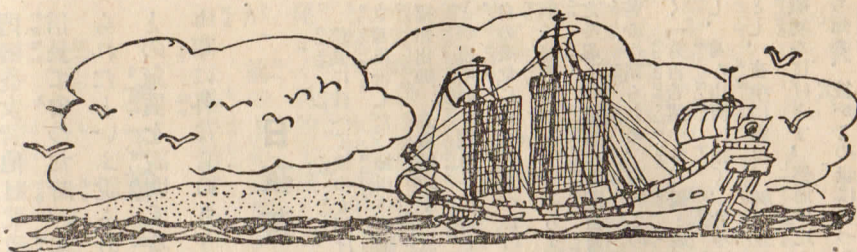
天文二十一年、太閤十六歳の時、一日彼は慨然として母に向ひ『小子、不肖ながらこれより家を去り武家に仕へて大に家名を揚げんとす、願はくは將來を樂まれて之を許し給へ』と。母は涙ながらにこれを許した。彼は飄然として中々村の伏屋を出で、清洲城下に入りて縫針を買ひ、これを道々商なひながら引間、即ち今の濱松の城下に赴いた。すると此所でゆくりなくも松下嘉兵衞之綱といふ人に拾はれ、取り敢えずその草履取となつた。居る事二年許り、腕白の太閤は理財の術に長けて居るといふので間もなく會計の任に當てられたが、相變らず朋輩と衝突して、遂には又此所をも去らねばならなかつた。當時太閤は、松下の短刀及び黄金若干を窃取して、之

を旅費に宛て、遙かに越後に走つて上杉謙信に仕へやうとしたが、謙信を見てその大器にあらざるを知り、再び其所を逃げ出して故鄕に歸つたといふ說がある。又、一說によると、太閤が松下に奉仕中、或る時桶革胴丸の鎧を買つて來いと主人より命ぜられ、その金を懷にして尾州へ行く途中、寧ろこの金で身邊を粧ひ、當時大名の一人に數へられたる織田信長に仕ふるに如かずと考へ、永祿元年、信長に直訴して首尾よく目的を達したとも云はれて居るが、前の上杉鎌信云々の說と共に、今日では最早信ぜられない。

木下藤吉郎と改名

松下の許を去つた太閤は、先づ尾州に歸つて清洲城下に入り、舊知一若(信長の小人頭)なる者に會つて種々事情を告げ、折もあらば信長に推薦して呉れよと頼んで置いて、やがて生家へ歸つた。家を出てより丁度三年目である。母の喜びは如何ばかりであつたか知れぬ。これより五年間は。太閤も母と共に貧しい家に寢起して居た。すると、やがて一若の推薦によつて信長より召され、例によつてその草履取となり、名を木下藤吉郎と改めた。時に、彼は二十三歲であつた。所がこゝに面白い傳說がある。太閤がまだ松下嘉兵衛の許にあつた時、人の世話によつて妻を娶つたが、さて愈松下氏を辭するに臨み、その妻をも永久に去らしめた。その時庭上に大黑の小像を投げつけて、之を妻に見せたといふ事である。然るに、實際太閤が妻を娶つたのは桶狹間の戰の後で、妻の身分は、淺野又右衞

豐臣秀吉の用ゐたる鞍と鐙

門の養女、他日北政所となつた人である。又、初めて信長に會つた時、太閤は頭から信長の爲に小便をかけられたといふ說もあるが、これも前同様、信長と太閤との氣質を說明する爲のいゝ加減な作り事に外ならぬさうである。

日夜苦心經營

信長に仕へて後の太閤は、殆ど一瀉千里の勢で立身出世した。姉川の快戰、長島の亂、北陸征伐播州出陣、鳥取城攻擊、高松城水攻、山崎の決戰と疾風の如く戰場を往來して遂に天下を統一し關白の榮位にまでも上つたのであるが、これ等は皆既に諸君の知る所であらうから、こゝにはすべて之を畧し、最後に太閤自身をして信長奉仕時代の苦心を語らしめ、以てこの話を終らうと思ふ。曰く『秀吉若輩の時、孤と成りて信長公の幕下に屬し、身を山野に捨て、骨を海岸に碎き、干戈を枕とし、夜半に寢ね、夙におきて、軍忠をつくし、戰功をはげます、然而中比より君恩を蒙り、人に名を知らる』と。即ち知る、彼がこの世に出づるや、逆賊明智光秀を誅して天下に號令する迄は、實に人知れぬ艱難辛苦を嘗めたので、今日世人が輕卒に信ずる如く、決して一朝にしてその名を成し、その功を遂げたのでは無いのである。從つてこの二十八九年間といふものは、毎日朝は未明に床を離れ、夜は大抵十二時を過ぎて後寢に就き、その間凡そ三時間が四時間に過ぎなかつた。又、曾て小身の頃、一夜同僚より他日の志を語れと云はれた時、之に對して『我は今刻苦經營して僅かに三百石の身の上なり願はくば、更に三百石を加へらるゝの日あらん事を』と答へたので、同僚は大にその志の小なるを嘲つたと云ひ、又、挿繪にもある如く、或る時傲慢なる柴田勝家の腰を揉みながら、列席の先輩より『下司より出世したうつけ者よ』と罵られたにも拘らず凝乎と忍耐して怒りを現はさなかつたと云ふが、何ぞ計らん、この下司より出世したる小志の青二才が、遂に關白の榮位にまで進まんとは。徒らに空拳に唾して成功々々と空想に耽けるの徒は、之を聞いて正に塊死すべきであらう。――因に云ふ、卷首に揭げた太閤直訴の圖は、彼がまだ志を得ずして所々を放浪して居た時分、一日矢矧橋上に通りかゝつた野武士蜂須賀小六の槍の小尻を捕へ是非自分を部下にせよと迫つたといふ傳說を描いたものである。

大阪城の光景

南方亞細亞征服者山田長政

貴族院議員
岡田良平

鎖國前の駿府の貿易

寛永十三年、御朱印船の制を廢するまでの我が邦の航海事業は實に盛んなもので、寛永元年丈でも異國渡海の御朱印を受けたものが百六十四艘あつた。慶長以後の貿易地は、單に九州のみならず、泉州堺浦でも行はれ、彼我の取引は中々盛んなものであつたが、家康は何うかして外國船を關東へ引附けようと思ひ、その計畫をしたこともあつた。既に家康にして左程貿易に熱心であるとすれば、その居城のある駿府の商人もまた之に感化せられぬ筈はない、當時の駿府の商人には海外と貿易を營んで巨利を博したものも少なくないやうであるが、中でも瀧左右衞門、太田次郎右衞門、松木新左衞門、友野與左衞門等は有名なものであつた。今日靜岡は製茶の一大市場で、その附近にある清水港から輸出する製茶の價格は、日本の輸出品中重要の位地を占めてゐるが、顧ふに德川氏の初葉に於ける駿府の商況は、今日にも增して活潑々地であつたことであらう。當時の海外渡航者は、皆商業を目的として、交趾、暹羅、東京、柬埔寨等へ航行したもので、何れも可成の成功をしたであらうが、中にも徒手空拳にして暹羅へ渡り、奄普羅の高位に上つた山田長政の如きは蓋しこれを偉人と謂はなければならぬ。

藁科郷の餓鬼大將

長政の傳記は各書の記載が區々で、何れを確實とすべきか分らぬが、最も信憑すべきものに依れば、その父は山田清兵衞と云ひ、駿河國安倍郡藁科といふ處の農夫であつた。子供の時分から腕白者で、常に村内の群童を集めて餓鬼大將となり、自分の命令に從はぬものは容赦なく責め懲らした。兩親は持て餘して出家にしようと思つてゐると、長政は早くもそれを悟つて家を飛び出し、駿府宮ヶ崎町の親戚嘉兵衞の家に投じた。長ずるに及んで劍書を學び、大志を抱藏して諸國漫遊の途に上つたが、到る處志を果さずして再び駿府に還つた。或る人彼の志を憐んで、紀州侯に仕官を勸めた所、『厚意の程は重々辱けないけれど、拙者の所願は國主となる事、國主への奉公は眞平で御座る』と云つて聞き入れず、海外に渡つて大志を遂げんと思ひ、土地の貿易商たる瀧、太田の二人に、隨行渡唐せんことを求めた。二人は豫ねて長政の亂暴なことを知つてゐる。此んな者を連れて往つては何事を仕出來すかも知れぬと、體よく斷はつて了つたが、斷はり切れぬのは長政の野心慾望！『宜しい、その儀ならば』と思ひ切つた樣な顏をして二人に分れ、一足先に大坂へ往つて二人の來るのを待つてゐた。間もなく二人が來たので、之を途に邀へて切に同行を請ひ、遂にその船に搭じて高砂(臺灣)に渡つた。

暹羅國の革命騷ぎ

西暦五十年高德ハタマラツト始めて都をサンカロクの地に奠めてより、王統五百歲連綿として續き、人民は一時フラ、ルアング大王の治政に鼓腹擊壤したが、大王去つて治政も亦夢の如く消え、第一王朝の第一世ウトン王々位に即き、傳へて十七世チラートト王に到つたが、同王一度ベキユ王と干戈を交へて一敗地に塗れし以來、兵亂相踵ぎて人民は塗

炭に苦しんでゐたが、二十一世に至つて一大偉人現出し、暹羅をしてその大を加へしめた。此の偉人こそは靈山ブラバスの麓に於いて、釋尊の足跡を發見したと傳へらる丶高僧フラ・シリ、ニセンタムその人で、史家が呼んで第二の王朝となすものである。しかも尚ほ前朝の遺臣は到る處に潜んで、隙あらば新政を覆さんものと、秘かにその機の到るのを待つてゐた。當時アジュア城外のメナン河に沿うた地に、日本街と稱する一區域があり、徳川氏に敗られし數百の豐臣黨が、其處に根城を構へて漂浪的生活を送つてゐた。その頃は南洋・廣東・定海などに頻繁なる航海が行はれて、相互の間に各地の狀況が傳へられた。――而して長政は高砂に在つて暹羅の變を聞き、好機逸すべからずと手に唾して起ち、便船に乘じて暹羅に向つた。

緋縅の鎧金の鍬形の冑

長政がアジュアに入つた時、暹羅は隣國の六昆と合戰中で、勝ち誇つたる敵兵が潮の如く城外數里の地に押寄せ來つた。一日長政高邱に上り、兩軍の陣地を俯瞰して曰く、『暹羅軍必らず敗れん』と。戰終れば果してその言の如くであつたので、日本街の面々は彼の眼識の非凡なるに敬服した。その後間もなく彼は國王に招聘せられ、その軍を統監することになつたので、居留民の長者津田又左衛門と謀り、健兒六百を提げて戰場に馳驅した。その時彼の扮裝は、緋縅の鎧に身を固め、頭には金色燦爛たる鍬形の兜を戴き、腰には五尺の大太刀を佩いて、采配ふりつ丶軍の先頭に立つた。暹羅の軍兵二千人また、日本風の武具を持つて日本人軍の後に續いて進む。これを見て取つたる六昆の兵、『勇猛無比の日本人、暹羅を助くると覺し』と、戰ふ勇氣もなく色めき渡つた所を、遮二無二吶喊して斬り廻し、突き散らし、踏み倒したる上、その副將をさへ擒にした。國王大に喜び直ちに長政を上將軍に拜し、六昆の再擧軍に當らしめたが、これ亦暹羅軍の大勝利で、長政は長驅して六昆の國都に入り、その王を生擒にして凱旋した。

六昆の國王暹羅の大臣

是に於いて國王は、長政を六昆の國王となし、暹羅の大臣を兼任せしめ、その女を以て之に娶はした。印度の諸國は暹羅の勝利を祝する爲めに、使節をアジュアに送つて來た。長政の名は南方亞細亞に響いて、勢威宛がら旭日の昇るが如きものがあつた。間もなく呂宋船の來寇あり、彼は奇籌妙策を以て之を全滅せしめ、當時呂宋附近に占據せし白人をして、心沮み氣臆するに至らしめた。その功によつて彼は更に逸比留をも與へられ、その太守となつた。恰かも好し駿府の貿易商桑名屋清右衛門、富田屋五郎右衛門の二人が暹羅へ來たので、彼は六昆國王、逸比留太守、兼暹羅大臣の資格を以て二人を引見し、壯嚴なる儀式によつて權威を示したる後、慈愛の籠れる言葉を盡して二人を慰めた。二人は且つ畏れ、且つ喜んでその旅宿へ歸つたが、間もなく紋服短袴の一日本人が訪ねて來た。何者かと見れば六昆の國王なので、二人は驚いて低頭平身して先程の恩を謝すると、國王はつか〱と寄り來つて、ポンと二人の肩を叩き、『貴殿等は拙者を知らぬか。拙者こそは貴殿等に疎んぜられた藁科郷の山田仁左衛門で御座る』と云つたので、二人は二度吃驚してその膽を潰して了つた。

山田長政畫像（淺間神社所藏）

淺間神社へ奉納の額

膽を潰した清右衛門、五郎右衛門の二人に托して、長政は駿府なる淺間神社へ一枚の額を奉獻せしめたが、その後明和の火災に此の額は燒失して、今は模寫圖しか殘つて居らぬ。文中に挿んだのはその寫眞版であるが、圖は當時の軍艦を描いたもので、文句は、

奉挂。御立願成就具備之所。

當國生。今天竺暹羅國住居。

寬永三丙寅年二月吉日。

山田仁左衞門尉長政。

とある。これと同樣に今一つ、長政の肖像が淺間神社に藏められてゐるが、これも恐らく長政が獻上したものであらう。雄心落々、彈丸黑子の地に太平の夢を貪ぼるに堪へず、手に唾して波濤萬里の南洋に向つた長政も、尙ほ一片懷鄕の情があつたものと見える。――

これより先き、元和七年、暹羅國王が使節を我國に遣して國書方物を献せしめた際にも、長政は國書に副へて書を土井大炊介利勝に贈つた。

乍レ恐欽奉二言上一候。爰許從二屋形一御上樣え。以二金札一被二申上一候之條。萬々御上樣可レ然御取成奉レ願候。使者暹仁二人。井伊藤久太夫。被二指遣一候之條。乍レ恐可レ被レ得二尊意一候。爰許從二屋形一御上樣え御進物。以二注文一申上候之條。御披露奉レ願候。隨而乏劣之儀御座候得共。鮫二本。煙硝二百斤。致二進上一候。憲奉レ表二御祝儀一許に候。誠惶敬白。

元和七年卯月十一日　　山田仁左衞門尉長政

從二暹羅國一

進上

大炊樣御小姓衆中御披露

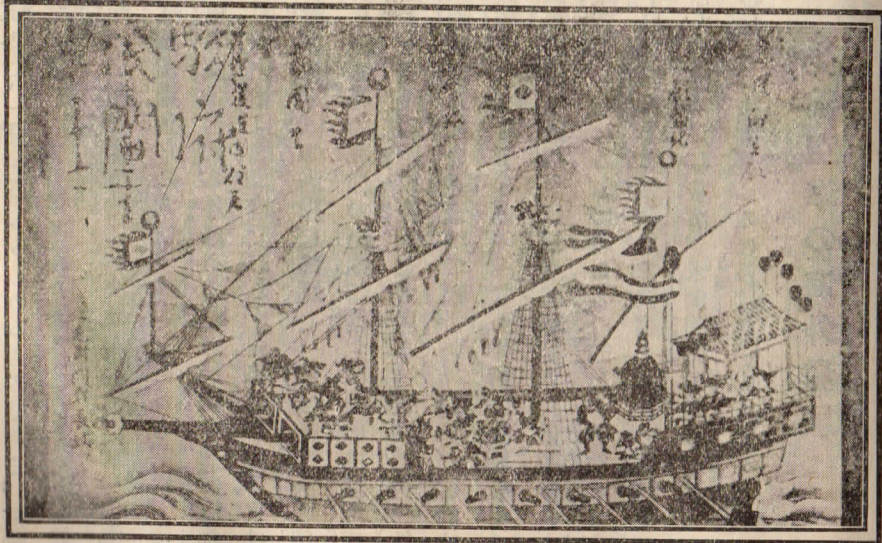
と云ふ書面であつたが、國書に對しては將軍秀忠から答書があり、且つ贈り物數點を使者に附して國王に報せしめた。

憐む可し英雄の末路

我が寬永五年夏五月、英主病革りて、將に殂せんとするや、長政及び宰相スクリスウオングを枕元に招いて後事を托した。國王殂落の後、新王ヲタロットは年僅かに十三にして位に即いたが、その政は王妃が攝することゝなつたので、長政は逸比留の城に歸臥した。然るに王妃は年若き宰相スクリスウオングを近づけ、鴆毒をすゝめて王を弑した、宰相は自立せんとして長政の心を探つたところ、彼は頑として先王の弟を立つべきことを主張したので、宰相も王妃も止むなく之を擁立したが、間もなく久留園の精舍に放逐せられ、宰相は宮中に在つて權威を擅まにしてゐた。その頃誰いふとなく、長政が倭兵を率ゐて王城に迫り、君側の姦を清めると云ふ噂が立つたので、スクリスウオングは大

に驚き、王妃と謀つて辯才の士チャントホウを長政の許に遣らしめた。王妃の密旨と云ふのは、長政の子アイムには太泥國を與へ、長政には王都に來つて早く政務を總攬せよとあつたので、使者を旅館に訪うて恩賜の優渥なるを拜謝したが、その夜の宴會に飲み干した盃の中には、何んな毒が盛られてゐるのか、彼が枕を蹴つて起つた時には、滿口の血が、のめ〳〵と外に流れ出てゐた。かくの如くにして英雄長政の最後の幕は閉された、何と悲慘ではないか。

靜岡人の慣海性

長政の頃靜岡人の間に熾盛であつた海上冒險の意氣は、鎖國令の發布に依つて非常の打擊を受けたが、併し一時潛伏したに止まり、決して根絕したのではなかつた。今より六七十年も前に咸臨丸と稱する一小艦に乘じ、毫も外人の力を假らずして大平洋を橫斷したのは、靜岡出身の少壯士官ではなかつたか。戊辰の役回天丸と稱する一小船を以て、陸中宮古港に官軍の一大艦隊を襲擊し、その旗艦を捕獲せんと試みたのも、矢張り靜岡人ではなかつたか。彼等は幸か不幸かその目的を達することは出來なかつたが、その勇氣と、艦體を全うして悠々と引上げた技倆とは、敵をして感嘆を禁ずる能はざらしめた。又函館灣頭敗殘の艦隊を以て、數時間に亘つて精鋭なる官軍の艦隊と決戰し、敵の一船を爆

靜岡淺間神社にある山田長政奉納の暹羅軍艦圖額

沈し、數艦を傷けたるも彼等ではなかつたか。彼等が順逆を誤まつたのは惜むべきであるが、その行動は海上冒險の意氣が、一時的抑壓の爲め消滅したのでないことを證明して餘りある。併し海上冒險の意氣は獨り靜岡人に特有なるものではなく、寧ろ日本人の國民性であるとは、最近の戰役に於いても屢々證明せられた。今や我が國民は徒らに太平を樂しんでゐるべき時ではない。盛んに固有の國民性を發揮すべき秋ではないか。

勇敢なる殖民軍の急先鋒

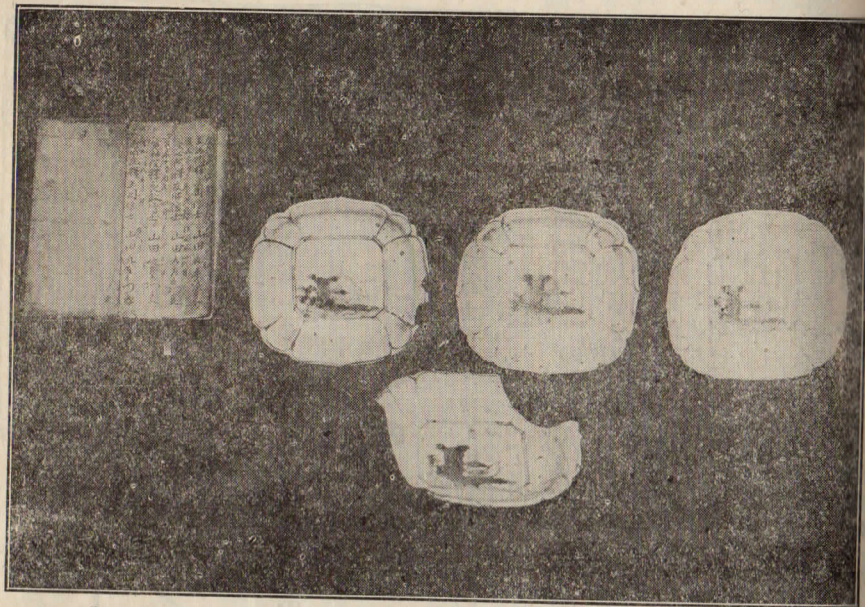
今日朝野の識者を腦殺せしめつゝある問題は、米價の騰貴と輸入超過とである。人口五千萬に對する五千萬石の産米は、平時に於いてすら十分とは謂へぬ。況んや少しく凶荒に遇へば、忽ち米價の暴騰を來すは自然の數である。或る人は輸入稅の廢止に依つて、米價の調節を計らうと策するが、これ畢竟姑息の計たるに過ぎぬ。何となれば外米の輸入に依つて米價の騰貴を防がんとすれば、一方に於いては內地の産米を減じ一方に於いては益々輸入超過の勢を甚しからしめるのは明らかなことで、第一問の解決を爲さんとして、第二問の解決を、一層困難ならしめるものである。所謂『前門虎を防いで後門狼を進むる』の類ではないか。されば此の二問を根本的に解決せんには、盛んに海外發展を試み、過剩なる人口の疎通を計ると共に、海外貿易市場の擴張を計る外はあるまい。現今我が國海外發展者の急先鋒は醜業婦である。彼等は今や、東は太平洋を渡りて米國の沿岸に蟠踞し、西は一面海峽殖民地印度を經て亞弗利加の南端に達し、一面は滿洲浦鹽の方面より貝湖以西に侵入して居る。實に彼等の領地には太陽が沒しないと云つてもよい。彼等の行動は固より賞賛すべきことでないのみならず實に國辱である。併し彼等の冒險的勇氣に至つては、六尺の男子をして後に瞠若たらしむるものがある。若しも敎育ある有爲の青年が、彼等の勇氣を以て彼等と同一の領地を開拓することが出來たならば、米價問題の如き、輸入超過問題の如き、毫も憂ふるに及ばないのである。

徒手空拳の海外發展

山田長政の送り來りし方物及び過去牒（山田元吉氏藏）

海外發展には必らずしも多額の資本を要しない、否寧ろ徒手空拳は海外發展の秘訣である。海外發展に於いて最も成功したる米國人の如きは、多く徒手空拳を以て彼等の運命を開拓したのである。彼等は單身新開地に臨み刻苦數年の間に新開地に關する經驗を得ると同時に、多少の資金を蓄積し、それを基礎として彼等の運命を開拓するに至つたのである。殖民地の發展は、殖民地の力に依るべしとは、彼等の信條である。されば有爲の青年は徒らに內地の小天地に跼蹐して就職難の嘆をなさんよりも、進んで海外發展の策を講ずるが可い。聞く所によれば、獨逸人が海外に植民をなすに當つては、先づ第一に墳墓の地を購求すると云ふ。之はつまり其處で死ぬ覺悟をするので、所謂『業若不成死不還』の決心を示すものである。此の決心と、此の勇氣とさへあれば、海外發展は必らずしも難事ではない。資本の缺乏の如き、毫も憂とするなす勿れ、唯だ勇氣と忍耐の缺乏を憂へよ。山田長政の如きは、今日の時運に對しては、實に好個の模範的偉人ではないか。

櫻井驛の訣別

これは一勇齋芳藤の筆で・泉市から出版せられた錦畫である・寫實的の價値は少ないが・當時の状況を髣髴たらしめる點が面白い（楠正成記事參照）

幽居時代の岩倉具視公

宮内省御用係　多田好問

劍の如き人格

『三條公は玉の如く、岩倉公は劍の如し、之を照し給ふに聖上の鏡を以てす。何ぞ天下の事成ならざるを憂へんや。』とは、贈從一位木戸公が嘗て語られたところである。顧へば岩倉公は大節善斷實に劍の如き人であつた。公の一生は苦戰奮鬪の歴史である。十六歳にして始めて王政復古の大志を立てられた以來、薨去に逮るまで一日として皇室と帝國との事を忘るゝことなく、盤根錯節を排除して國家の爲めに盡瘁し、政敵四塞して迫害を受くるも毫も志節を變ぜず、斷乎として自己の信ずる所を行ひ、維新の鴻圖を翼賛せられた功績に至つては、古の賢宰相も遠く及ばぬ所であつた。而して斯くの如き大業、斯くの如き偉勳は、實に公が政敵の迫害を蒙むられて洛中を逐はれ、洛北岩倉村に幽居せられた時代に於いて籌畫せられたものである。維新の廟堂に於ける公の活動は、燦爛人目を眩するものありと雖ども、公の一生を通觀すれば、

その骨子は岩倉村幽居の時代に在る。

政敵の迫害を蒙る

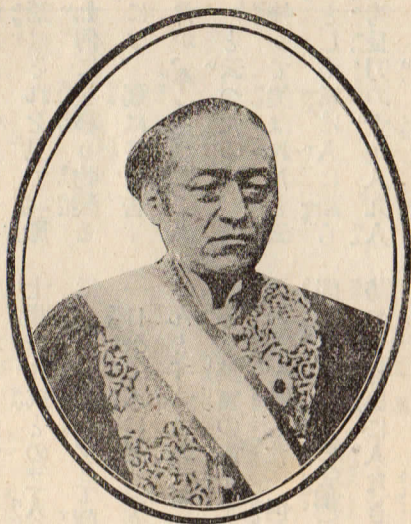
嘉永癸丑以來幕府の威力次第に衰へ、外國の事起つてからは政權全く地に墮ち、列藩の心を皇室に寄する者が次第に增して來た。廷臣また此の機會に乘じて皇權を收復せんと、畫策をさ〳〵怠りなかつた。安政五年四月井伊直弼朝臣大老となり、七月に至つて米國との條約を締結し、尋で露西亞、英吉利とも互市を約するや、朝廷と幕府との軋轢は益々甚しく國論沸騰して志士が四方に起ること〻なつた。玆に於いてか公武合體說が現はれて、朝廷と幕府とが協和して國難に當らうと云ふ事になつた。その第一着として、孝明天皇の皇妹和宮が、將軍德川家茂公へ御降嫁あらせられた。岩倉公はその時和宮に扈從して東下し、幕府老中に面諭して將軍自筆の誓書を上つて、朝廷に貳心なきことを誓はしめた。是れが德川幕府ありて以來曾て無き所の事柄である。文久二年四月に至りて薩摩藩の島津和泉(故久光公)入京して國事に周旋せんことを奏聞するや、京阪間に屯集せる在野の志士は、和泉を擁して盟主となし、關白九條尙忠公及び所司代酒井忠義朝臣を斃して天下人心を鼓舞せんことを圖つた。尋いで長門藩主毛利慶親朝臣また入京し、國政改革の實を擧げんことを圖つた。是に於いて形勢一變し、在野の志士は皆爭うて、親王公卿の門に出入し、尊王攘夷の論を立て、且つ過激の言を以て人心を煽動するに努めた。彼等は岩倉公が、內大臣久我建通公、千種有文、富小路敬直の兩朝臣と和宮降嫁の議に參與せられしことを憎み、目して佐幕の大奸となし、關白近衞忠熈公に說いて、岩倉公等を貶黜せんことを求めた。又越後の處士本間精一郎なる者も、正親町三條實愛卿に謁して公を排斥すべきことを說いた。そこで實愛卿は中山忠能卿と相計り、內奏して公の近習たることを罷めしめたが、志士等はそれでも承知せず、遂に近衞關白をして、公に蟄居を命じ解官落飾を請はしめた。しかも尙は志士等は之にも滿足せず、匿名書を公の邸內に投じて、

速かに洛中を立退かざれば、その首領を四條磧に肆さんとの意を示した。公は省みて何等の疚しい所はないが、今徒らに彼等の毒手に斃れては、寃枉終に雪ぐの期なかるべきを思ひ、父具慶卿と相談の上、九月十三日の夜を以て難を西加茂の靈源寺に避け、其十五日に至つて、岩倉氏祖先の祠堂を拜し、剃髮して僧形となられた。

葉室の西芳寺に寓す

折りしも秋晩釆篁の時にて、靈源寺は都人多く遊びに來り、潛匿に便ならざるゆゑ、曾て祖叔父靖翁の住持たりし丹波常照寺に赴かんと、靖翁に請うて共に之に赴かれんとせられた。途中で靖翁が、先づ葉室の西芳寺に行かうと云はれたので、相携えて同寺に往かれた。寺主の神湫は父具慶卿の猶子である。公の異裝を見て大に驚き『折角ではあるが、近日夢窓國師の法會があるから、避難には都合が惡からう』と云ふ。『ではは法會の濟んだ後に又來やう』と、公は頭に黑塗の笠、足に草鞋、行脚僧の姿に窶して西芳寺を出で、迂回して靖翁の住居なる洛東岡崎村の永陽庵に往かれた。その翌日、靖翁は老僕をつれて外に出たので、公は自から飯を炊かれたが、生れて始めて薪水の勞を取られたのであるから、釜底の米粒は黑焦となり、釜口の米粒は爛熟してお粥の如くなつた。日暮に靖翁は歸り來つて、公と共に之を食ひ、大笑をした。既にして神湫來つて法會の終りしことを告げ、公を伴うて西芳寺の後園にある茅蘆に寓せしめた。公は雛僧と共に箒を縛し、井水を汲んで洒掃に從事せられた。神湫は公の無聊を慰めんと、茗器を室中に具へたところ、公は手づから小鋸を執つて茶博士の用法の如く長短を揃へて炭を截られたので、炭屑が飛散して鬚眉が眞黑になつた。神湫之を見て『てッきり崑崙奴のやうだ』と云つた。公は又四肢を強健にする積りで、破笠を戴き、糞桶を擔ひ、長柄杓を執つて肥料を菜圃に灌がれた。老僕はその姿を見て、全で案山子が風に搖ぐやうに御座りまする』と云つて呵々と笑つた。公之を聞き大息して曰はく、『斯くの如きの些事も、之を爲すに慣れざれば他人の笑を招く。况んやこれより大なるものに於いてをや』と。

『乾坤大度吾を容るゝ處なし』

九月二十五日に至つて、近衛關白より公の洛中住居を禁止するの命令が來たので、公は洛北岩倉村の藤屋藤五郎の廬を借り、十月に入つて其の廬へ移られた。廬は六疊、四疊半、三疊の三室で、僅に風雨を庇ふに足るとは云へ、年久しく人が住まなかつたので、簷は破れ柱は傾きて宛然狐狸の巣窟！　然るに數日を經て、藤五郎は卒然と廬を貸すことは出來ぬ、明けてくれと云うて來たので、公は天を仰いで歎じて、『乾坤大度なりと雖も、尚ほ吾を容るゝこと能はざるか』と云はれた。偶々近隣に住してゐた實相院門跡坊官芝坊法印澄昇之を聞いて大に公を憫み、懇々と藤五郎を諭してその廬を用立てしめた。その時公に從ふものは老僕一人であつたから、老僕が外へ出れば公は親から水を汲み薪を運んで、厨下の事を治めざるを得なかつた。で、先般薨ぜられた具定公や、三男の具經朝臣が時々來り侍して薪水の勞を執られた。

岩倉具視公肖像

激徒公の身邊を窺ふ

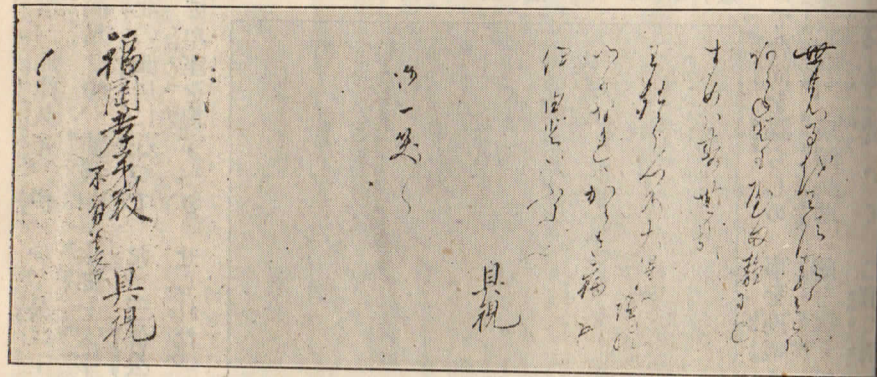
かくしてその冬も過ぎ、翌くれば文久三年癸亥の歲、公は岩倉村に閑居して、書を繙き古人を友としてその日〳〵を送つてゐられたが、激徒屢々去來して公の居を窺ひ、その門墻を斫らんとする形狀があるので、村民は窃かに之を公に報じ、一身の保護に注意せんことを勸告した。父の具慶卿もまた

之を聞き、手書を公に寄せて移轉を勸められたので、公は洛北花園村の農九兵衞の家に寓することにせられた。九兵衞は公の乳母の夫である。既に年老ひて耳が聾してゐる。或る日公は坐つて草鞋を造つてゐる九兵衞の側に來て、色々世間話をせられたが、恰度停午で群鷄が首を昂げて鳴いた。九兵衞爺はそれを見て、『殿樣、儚ない浮世で御座ります。如何に星移り物變る世の中とは申せ、僕等の壯い時分には、鷄は時を告くる時に必らず聲を出して鳴きましたが、今は皆默つて、唯だ欠伸する許りで御座りまする』と云つたので、流石の公も可笑しくて堪らず、口を掩うて笑はれたと云ふが、此の事は後々までも笑ひ草として常に人に語られた。九兵衞と談話の最中に、短袴長刀の士が八九人入り來つて火を乞ひ烟を喫し、眼を四方に配つて公を窺つてゐるやうなので、公は身を庋内に隱して之を避けられた。で、是より後は岩倉村と、花園村との間を往來して、その蹤跡を韜晦してゐられたが、三條公等が長門に奔らるゝに及んで京都の形勢一變し、また激徒の公を窺ふものがないやうに成つた。

志士漸く幽居に集る

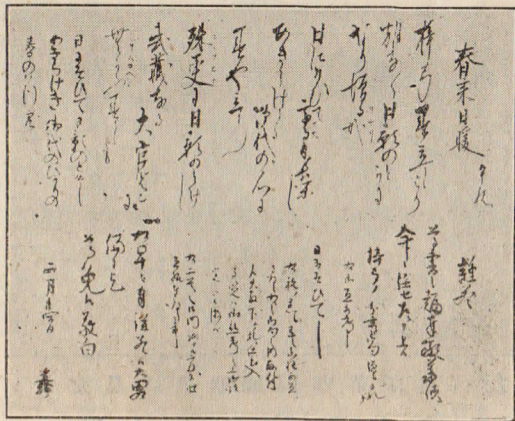
然れども在野の志士に至つては、殆んど全く公を信ずる者がなかつた。獨り非藏人松尾但馬と、京都の處士藤井九成との二人は、衷心から公に信服してゐたので、時々公を訪うて朝幕の間に於ける事情を報告した。一日公二人に語つて曰はく、『吾國家の爲めに微忠を致さんとするも、手足の之を扶くるものなきを如何せん。卿等は眞實の志士を拉し來れ』と。但馬等は許諾して公の許を辭した。但馬の友人に水戸の人で、小林彥次郞(今の香川敬三伯)といふものがあつた。但馬の家を訪ねて廷臣に人なきを歎じた時、『否、岩倉入道は異常の器であるが、惜い事には大奸の名を負うて北山に屛居してゐられる。足下、請ふ予に欺かるゝと想ひ、往いて之と國事を論ずる氣はないか。』と但馬が云ふ、九成も亦た慫慂して已まぬ。乃で彥次郞は九成と共に公の幽居を訪ひ、始めて公が當世の人傑たることを知り、

寓に還つて竊かに以爲らく、『鎭西には三條氏あり、洛北には岩倉氏あり、二氏協力皇謨を參畫せん乎、國家の大事を濟すは掌を反すが如くならん』と。土佐藩人橋本鐵猪(後に大橋愼三と云ふ)を誘うて公に謁せしめた。かくて公は重く兩人を用ゐられたので、諸國の志士風を聞いて陸續として來り附した。これ實に慶應元年のことであつた。その後公は又三上兵部(故三宮義胤男)を介して、その師玉松操(贈從三位玉松眞弘卿)なるものを招き、屢々これと機事を計議せられた。

大久保一藏等と會談す

慶應元年九月防長再征の事あり、將軍德川家茂公大坂城に陣するや、英佛米蘭の公使軍艦を率ゐて大阪灣に入り、速に江戶大阪兵庫新潟を開放せんことを請ふたのが元で、家茂公は將軍職を一橋慶喜卿に讓らんとし、東海道より江戶に還らんとして途次勅命により京都二條城に入り、條約の勅許を賜はらんことを奏請した。朝廷は兵庫を除くの外悉く之を許されて、家茂公の辭表を却下せしめ給ふた。然るに翌二年、家茂公薨じて慶喜卿將軍職を襲ぐことゝなり、其の冬天皇また崩御あらせられたので、翌三年正月九日を以て先帝は踐祚の禮を行はせられ、關白二條齊敬公が攝政の大任を受けられた。三月慶喜卿がまた兵庫開港の勅許を奏請したので、攝政齊敬公は諸藩主に命じて、上京してその可否を上言せ

岩倉具視の歌(福岡孝弟に與へたる書翰)

しめられたが、松平慶永卿、山内豐信、島津久光、伊達宗城の三朝臣は、攝政のなす所に滿足せず、前後相繼いでその國に就いた。岩倉公は洛北の幽居に在つて此の形情を諜知し、愈々幕府を廢して皇室を興すべき機會が來たと、中御門經之卿と計議し、王政復古の大策を中山忠能、正親町三條實愛の二卿に說きてその合意を求め、一面薩摩藩の小松帶刀、西郷吉之助(隆盛卿)、大久保一藏(利通公)と謀つて、帶刀等をして島津久光朝臣を說かしめた。會々安藝藩の世子松平茂勳朝臣家老辻將曹(故辻維岳男)を從へて京都に在つたので、帶刀等は之に說いて左袒することを約せしめた。久光朝臣は又一藏を長門に遣はし、毛利氏父子に告げて合同を謀らしめたので、毛利氏は藩臣木戸準一郎(孝允卿)、廣澤兵助(眞臣卿)に命じて一藏と會商せしめた。是に於いてか、公は土佐藩の坂本龍馬、中岡愼太郎と商議し、愼太郎を太宰府に遣して三條公に大擧の意を告げしめた。三條公は之に贊成せられて、岩倉公と始めて合同せられた。

岩倉具視の和歌(福羽美靜の藏書)

岩倉村別莊に於ける討幕の謀議

十月大久保一藏は、長門藩士品川彌次郎(後子爵となる)と共に中御門氏の岩倉村別莊に來り、岩倉公、經之卿と共に討幕の順序を謀議し、且つ太政官職制案を示して、有栖川帥宮(熾仁親王)を知太政官事となし、仁和寺宮(後に小松宮彰仁親王)を征討大將軍となさん事を商議された。二日の後一藏等は安藝藩の植田乙次郎を携えて中御門氏の邸に來り、中山忠能及び經之の二卿に謁して薩長藝三藩聯盟の決議要目を上つつたので、忠能卿は一藏等に諭して急遽藩主を上京せしめんことを求められた。その日帶刀、吉之助、一藏は連署して討幕の勅書を三藩に降さんことを請ふた故、公は王政復古大學の奏議を忠能卿に託して之を御前に上らしめた。而して忠能、實愛、經之の三卿と商議して、討幕の詔書を先づ薩長二藩に下すことに決し、忠能卿は密奏宸裁を經た後、實愛卿は一藏を忠能卿は兵助をその邸に召見して、討幕の詔書と錦旗とを授けられた。然るにその翌日即ち十四日に至つて、將軍慶喜公は上表して政權を奉還したので、忠能卿等は密勅を受けて、薩長二藩に討幕の實行を中止することを命ぜられた。

王政復古の大策斷行

是時に當つて、土佐藩の後藤象次郎(後に伯爵)、福岡藤次(今の孝弟子)等、松平慶永卿に說くに、在京列藩主の會議を開いて王政の基礎を確立し、慶喜公が政權奉還の實行を輔翼せんことを以てした。慶永卿之を可とし、藩人中根雪江等をして象次郎と共に尾張、肥後、薩摩、安藝等の諸藩を說かしめた。忠能、實愛二卿之を聞いて攝政齊敬公に列藩主會議の朝命を下さん事を求められたが、齊敬公が辭職の意ある旨を答へて之に應ぜられなかつた。岩倉公は空しく時日を遷延するを憂へ、大久保一藏をして忠能、實能の二卿を說かしめ、その夜微行して中山氏邸に至り、二卿と會合して、『今は非常の秋である、常軌を墨守してゐては大事を爲すに足らぬ。宜しく一刀兩斷の處分に出で、大革新を決行しなければならぬ。即ち朝廷より王政復古斷行の大號令を喚發し、その當日には攝政議傳兩役及び國事掛の參朝を停止して新政府建設上扞格のないやうにせねばならぬ』と云はれた。忠能卿は之を否とし、『尾越二老をして先づ列藩會議を開かんことを攝政に促さしめ、若し尙ほ之を聽かざればその時こそは岩倉氏の議に從はん』と述べられたので、公は餘儀なく一時その意に從ふことゝせられた。その翌日一藏之を聞いて忠能卿の緩漫を憤り、直ちに之に謁して前夜の論を撤して岩倉公の議に從はんことを勸めた。忠能卿も大にその非を悟り、一藏の言に從ふ旨を答へられた。一藏は雀躍して直ちに岩倉公の邸に抵り、此の由を告げたので、公は手を拍つて、王政復古斷行の大號令を發すべき期の近づいたことを悅ばれた。而して十二月九日に至つて、勅使千種任朝臣、寺町の岩倉邸に臨み、具視公の蟄居を免じ、復飾參朝すべしとの宣旨を授けられた。此の時の公の喜びは如何であつたらう。嘗て艸する所の王政復古の大號令を始め文書一函を携帶せられて公は即刻參朝し、今日王政復古の大策を斷行すべき由を奏上し、部下に命じて發令の準備をなさしめた。その活動の活潑なる疾風迅雷も啻ならず、木戸公が『劍の如し』との評言は眞に、剴切なることを覺えしめる。是に至つて明治維新の大業始めて緒に就いた。王政復古の大號令は前に述べた玉松操の起草にかゝり、其の旨は神武創業に基づくとは云ふ、一語に在つて、これが未曾有の大革新の行はれた根礎である。

楠木正成の筆蹟に就て

史料編纂官　藤田明

國史上の偉大なる人物

私の鄕里は大阪府である。我が大阪府から國史上特に偉大なる人物で、崇高なる人格を有して居る楠木正成公の出て居るのは、蓋し最も誇と致す所である。建武中興時代の歴史を讀み、公が笠置山に參候し勅旨を拜承して以來、湊川の戰死に至るまで、十年一日の如く、紛々たる世に於いて勃々たる野心を包藏せる人々の間に交つて、獨り正義の下に其の節を致し誠を盡したことを知つては、何人でもその誠忠無私で、天日と共に輝いてをる事蹟に接して、感嘆の意を表せぬ人はあるまい。實に正成公一世の事歴は、世の模範となり千古の龜鑑となるものである。然るに、公の事蹟は世間の人によつて屢々繰返されて、殆んど知らぬ人はない。赤阪千劔破の籠城や、湊川に於ける奮闘は、實に國史上最も壯烈であつて、最も大和魂を發揮したものである。是等については今叙述する必要はない。それで私は、今公の一生の間に於ける遺物としてのその筆

蹟についてお話致さうと思ふ。

偉人の面影を徴すべき材料

正成はかゝる偉大なる人物であるが、その歿して後は實に氣の毒な有様になつた。足利方の勢がます〳〵盛んで、宮方は日に衰へて、吉野の朝廷もだん〳〵衰微し、所謂『南風競はぬ』有様になり正成の後なる子正行も四條畷の戰に死し、その弟正儀は足利方へ赴くといふ樣な風で、頗ぶる振はぬ事になつたので、その子孫も全く分らぬやうになつてしまつた譯である。從つて公が生前に書かれたものは、殆んど殘つて居るものはないと申しても宜しい位である。總じて足利方の材料は多く殘れるに拘はらず、宮方に關するものは甚だ缺乏して、朝廷のものは素より、諸將に關するものも今に傳來して居るものは甚だ少いのである。武家方の材料が九分なれば、宮方の材料は一分にも足らぬ程である。自然公のやうな子孫も明らかでない人の史料については、一層乏しいのである。公の閲歴に關しては、主として『太平記』によつて知られるのであるが、武家方の書物なる『梅松論』にも賢才武略の勇士とはかやうな者をいふのである、敵も味方も惜まぬ人ぞ無かりけるといふやうに書いて、公は生前から既に偉大なる人格として、一般に認められてゐた人である。然るにこの大人格の面影を徴すべき材料となる公の日記書狀類の殘つて居るものゝ少ないのは、實に遺憾の極である。正成の名が高くなり、世に追慕せらるゝに從つて、彼處にも此處にも、公の後裔なりとて、系圖を提出する者があるが、多くは不確なもので、後世のものである。系圖のみならず、書狀筆蹟などゝ申

楠木正成肖像（これは觀心寺藏版の版畫で・今一つ別の肖像も行はれてゐる）

して世に澤山あるが、僞筆のものが甚だ多いのである。僞筆の多いといふ事は、最負の引倒しの感があるが、その僞筆の多いといふ事は、いかに公が後の世の人に追慕され、公の書かれたものが世に珍重されてをるかゞ分る次第である。恰も菅原道眞公の筆蹟といふものが、世に珍重されて居るが、未だ以て眞物が發見されないのと同樣である。

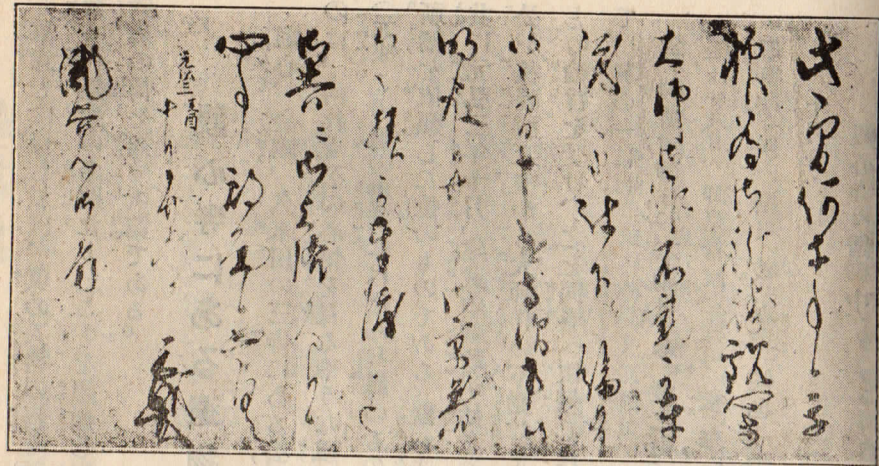
法華經の奥書

然し、公の筆蹟として眞物の傳へられて居るものも全くない譯ではない。河内の金剛寺と觀心寺、和泉の久米田寺とに殘つてをるものがある。金剛寺、觀心寺は楠木氏の根據地たる東條に近くあつて、また後には後村上天皇も御臨幸になつて暫く御所にもなつた由緒のある寺で、吉野朝廷の御崇敬もあつた寺であるから、この兩寺に數通の祈禱に關する書狀が殘つて居る。久米田寺は和泉國にあつて、奈良時代以來の古刹であつて、楠木氏領内の一大寺であるから、こゝにも一通の公の書狀が傳はつてをる。併しこれも祈禱に關したものであつて、公の精神などを發揮したものでない。是等は何れも國寶になつてをつて、公の筆蹟として其の立派な強い潔い筆つきを見て、人格を追慕することが出來るが、其の内容に至つてはたゞ祈禱を依賴した事に過ぎないのは、如何にも殘念である。今一つ公の自筆と認められてをる淡路洲本の今田經知氏の所藏にかゝる公の法華經奥書といふものがある。その如何なる理由でこゝに傳はつたかは分らぬが、蓋し元は河内邊の某社に傳はつたものが、轉轉して同氏の手に入つたものであらう。その文章は凡そ左の如くである。

夫法華經者。五時之肝心。一乘之腑臟也。據斯三世之導師。以此經爲出世之本懷。八部冥衆。以此典爲護國之依憑。就中本朝一州國機純熟。宗廟社稷護持感應。僧史所載縡具縑緗。爰正成忝仰朝憲。敵對逆徒之刻。天下屬靜謐心事若相協者。毎日於當社寶前可轉讀一品之由。立願先畢。仍新寫一部所果宿念如件。敬白。

楠正成の書翰（河内觀心寺の所藏で上の日付の年號が加筆してある）

建武二年八月廿五日　從五位行左衞門少尉兼河内守橘朝臣正成敬白

この法華經は、何時の世にか散佚して、今は僅に奥書のみ切り離されて遺存してをるのであるが、頗ぶる謹嚴な書風で、外に比較するものがないから、全く確かとは分らぬが、物の性質から考へて見て、恐らく公の自筆と思はれるので、其の文意では曩に後醍醐天皇の勅を奉じて、北條氏を討伐する軍を起し、その出發に臨みて某社（石清水八幡宮といふ説）に戰勝を祈り、敵徒を降伏して天下靜謐に歸し、心事相協ひたる後には、毎日寶前に於いて法華經一品を轉讀することを誓つたが、今その祈願が成就したから、法華經一部を新寫して當初自から誓つた所を果すといふことで、當時に於ける諸將の祈願文の類と別に變つた所もないものであるが、公が北條氏の討伐に非常の苦心を積み、一方には軍馬の間に奔走し、逆徒の誅伐に力を盡すと共に、一方にはかく社前に祈禱して、經文を寫し、其の成功を祈り、立願を果した譯で、公の誠忠なる精神はこの願文の中によく現はれて居り、非常に趣味深く感ずるのである。同じく祈願文でも、尊氏や直義のものは、其の根本的精神に於いて全く背馳するので、其の感が甚だ薄くあるが、公の願文を見、其の謹嚴なる書風

と筆意とに接しては、其の人格の程も知られ、建武中興時代無比の名將たりしことを想像し得られ、層一層欽慕の情を起す次第である。

觀心寺にある遺物

觀心、金剛、久米田の三寺にある公の書狀といふものは、何れも公の心情を見るやうな風のものではなく（元來この頃の書狀にはそんな風のものが少い。）單に祈禱を依賴した位のものである。觀心寺にある二通は、共に元弘三年十月、建武の新政が始まつた時のもので、公が後醍醐天皇から大師作の不動尊を京都へ送り奉れとの綸旨を受け、之を同寺へ依賴した時の簡單な書狀で、其の一には、

爲ニ御祈禱御作一。不動可レ奉レ渡之由。綸旨如レ此。明後日廿八日。御京着候之樣可レ被レ奉レ渡候。可レ被レ止ニ置御座一候。則可レ被ニ返遣一候也。恐々謹言。

十月廿六日　正成（花押）

觀心寺々僧御中

思ふに、觀心寺は正成には最も緣の深い寺で、その幼時にはこゝで學問をして居つたといふ傳へもある所であつて、最も密接な關係がある。さればこの書狀は、公が天皇の御親任を受けてをつた時に、勅命を奉じて御祈禱の爲に大師作の不動尊を寺から進めしたものである。簡單なる書狀ではあるが、これで公が天皇に對し奉り、その鄉里の寺院にも祈り、誠心誠意盡し奉つた有樣が髣髴として、この書狀の言外に現はれて居る。また金剛寺には三通の書狀があるが、その中の二通は寺で祈禱をして、お經の卷數を通知して來た時の寺への禮狀に過ぎぬ。今一通は護良親王の令旨に從ひ、祈禱を勵まし、且つ北條氏の兵がこの寺內へ亂入し、城を構へて合戰せんとせる風聞あれば、寺家は一同して之を入らしむべからざることを通知した書狀で、恐らく元弘三年の事であらう。

關東凶徒等。亂ニ入當寺一。構ニ城墎一。可レ致ニ合戰一之由其聞候。若事實候者。以ニ寺家一同之儀一。不レ被レ入レ立候者尤可レ宜候哉。御祈禱事。又先度被レ下ニ令旨一候

之上者。相構面々可レ被レ懸ニ御意一候。恐々謹言。

二月廿三日　左衞門尉正成（花押）

謹上　金剛寺衆徒御中

といふ書狀である。金剛寺も古い寺で、楠木氏とは緣の深い寺である。さればこゝにも屢々祈禱を依賴し、戰勝を祈り、或は護良親王の令旨を奉じて、祈願を籠めた事もあつたので、かく公の書狀が保存されて居るのである。

久米田寺に遺れる筆蹟

久米田寺には僅かに一通しかないが、護良親王の令旨を奉じて、寺へ與へた書狀で、

當寺幷於ニ寺領等一。不レ可レ有ニ官兵之狼籍一由事。令旨申進候。此上者彌可下令レ抽ニ御祈禱之忠勤一賜上候哉。

楠氏最後の遺跡（廣嚴寺）

恐惶謹言。

正月五日　左衞門尉正成（花押）

進上　久米田寺　御侍者

といふので、矢張この寺にも祈禱をなさしめ、寺境及び寺領内に官軍の兵士の入り込みて亂暴をなさぬやう、取締りて寺に迷惑をかけぬやう、令旨を奉じて安心せしめ、その代りに祈禱の精誠を抽づるやう命令した書狀で、これまた元弘三年正月のものであつて、まさに千劒破城に據つて北條の大軍を引受けて居つた頃のものである。即ち大塔宮護良親王の令旨を奉じて、戰爭の成功を祈つた時のもので、簡單なる書狀ながら、之を『太平記』や『梅松論』などに照らし合はせて、公の純忠至誠の情が自らよく現はれてをるのである。殊にその謹直にして意志の鞏固を示す筆蹟は、轉た其の

人格を察せられて、頗ぶる趣味深く感せざるを得ないのである。

遺言狀は贋物

右申した通り、公の筆蹟と申すものは、たゞこれ丈しかない。この外に見つかれば非常な珍物である。我々は何處かで發見されんことを希望して居るのである。こんな風であるから、僞筆もなか〳〵多いので、殊に方々に珍重して居る正成の遺言狀といふものがあるが、宛名は楠庄五郎殿とあつて、中の文言には今度隼人を差遣す事餘の儀にあらず、我等最期近々と覺え候、貴殿成長の器量見屆たけれ共、義の重きところ更に遁れ難し、彌よ忠孝の道を盡し、勤學怠りなく成長せよ、我等心中察せらるべしといふ樣な意のもので、この遺言狀が方々にある。一體同文の遺言狀が方々にあると申す事が、既に何うかと思はれるのみならず、年號といひ、記事といひ、辻褄の合はぬ事が多いのである。

滔々として皆僞筆

この外に、この種のものは、まだ世間になか〳〵數多いのである。實にかゝるものでは、却つて公の價値を失はしむるものであるが、これでも世間では非常に珍重する次第であるのを以て見れば、公の世に追慕されて居らるゝ事がいかに甚だしいかゞ分る譯である。私は正確なる歷史事實の上から見て、益々公の至誠至忠を欽慕すると共に、世間で餘り多く知られない公の遺物たる筆蹟について述べたのである。公の筆蹟がかく多く殘つてゐないのは、實に遺憾千萬ではあるが、既に公の肖像も今は徵することが出來ぬ有樣で、一般吉野方の材料は乏しいのであるから、致方がないのである。僅かに殘つてをるこの數通の文書で、公の一面を窺ふことが出來るのは、寧ろ幸といはねばならぬ。私は國史上の無比の偉人につき、世に多く知られて居らぬ方面を概略紹介して、その人を追慕せしむる料に供へて置くのである。

本居宣長翁精力観

侍講文學博士　本居豊穎

＊　＊　＊　＊　＊　＊

○本居宣長の事蹟に關しては、既に種々の書物が出てゐて、經歷は勿論、事業、學問なども、詳しく系統的に調べてある。讀者諸君の中にも、恐らくこれ等を讀んだ方があるだらうし、讀まないにしても輪廓だけは知つて居るだらうから、今更事珍らしく述べるまでもあるまい。併し强つてとの御依賴であるから、これも知る人は知つてゐる事でゐるが、二つ三つ、宣長の精力の非凡であつたことを話し、今の世の青年が大にこれから學ぶ所あらんことを希望する。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

○宣長の精力の强大であつたことは、今更說明するまでもなく、その事業それ自身が說明してゐるが、極く具體的に二三の例證を擧げて見よう。第一に驚かるゝのはその原稿である。宣長の著書は『古事記傳』を始めとして百數十卷の多數に上つてゐるが、その草稿は今

本居春庭　本居大平　本居内遠

ば、遣りかけては廢し、遣りかけては廢すのが普通であるが、假りに一日も缺かないとした處で、忙がしい時とか、急ぎの場合とかには、字をぞんざいに書いたり、或は知らず〳〵文體が變つたりするものであるが、宣長のは三者共完全で、日も缺けてゐねば、字體も文體もずつと一貫して毫も紊れてゐない。これは却々凡人の模すべからざる所である。――これ等の點から觀ると、常住不斷氣を注けて、敢て過失なからんことを期してゐられたものと見える。

○此の要領を得た、言ひ換ふれば秩序があり、規矩があり、物事を妄りに取扱はぬと云ふ點が、宣長の最も敬服に値する所である。これ等のことは一見何でもないやうに見えるが、その實非常な決心を要することで、到底普通の人の模すべからざる所である。無論幾多先哲の中には、詳細な日記をつけた人もあるが、どうもそれが長く續いて居ない。一體、人は非常特別の場合には、非常な勇氣を以て事に當るから、非常な事を仕出來すことが出來るが、平生同じやうな事を幾度も繰返すと云ふ事は困難である。然るに宣長は此の困難を排して、四十年間一日も廢せずに日記をつけた。以て宣長の忍耐力、持久力に富んでゐたとが窺はれる。

飯沼慾齋の『草木圖説』

理學博士　三好　學

記者曰はく、今度の投票の結果を見ると、岐阜縣では飯沼慾齋が最高點であつた。美濃の人物としては、文學の方面に於いて林述齋、佐藤一齋の諸先生あり。科學の方面に於いては、飯沼慾齋先生の如き確かに出色の人物であるが、先生は伊勢龜山の出身である。併し弱冠にして郷里を去つて美濃大垣に來り、其の一生の大部分を同地で送られたから、それを美濃の人物と見るに於いて毫も差支はない。慾齋の植物に關する智識は該博精緻で、その著はした『草木圖説』は影響を後世に遺し、今尚ほ貴重なる書物の一つとして、識者の間に用ゐられてゐる。記者は三好博士に請うて、同書に關する談話を聞くとを得たのを喜ぶ。

★

飯沼慾齋先生の『草木圖說』は、草の部二十卷、木の部十卷ある。その外にも禾本科、莎草科等を作る積りであつたが、それは果さなかつた。木の部は原稿は既に出來てゐるが、未だ出版の運びに至らなかつた。草の部二十卷は安政三年に出版せられたが、この書は當時我が邦で知れてゐた草木の種類を、一々自ら寫生して解說をつけたので、その編纂出版には非常な勞力を費されたものである。

★

此の書の草の部が出版に成つた後、多少類似の書物の出來たものがあるが、何れも此の書の如く多くの種類を擧げて、親切丁寧に說明したものでない。此の書は出版以來、廣く本草家の參考となつたもので、その後明治七年に田中芳男氏が訂正出版せられ、それが久しく世間に行はれてゐたが、原木版燒失の後此の書の供給が絕たれ、從つて古本としての本書の價格が非常に騰貴して、學者に不便を感じさせた。然るに去る四十年に牧野富太郎氏が、更に此の書を增訂して、已にその一半を公にし、世の希望を滿たすことになつたのは喜ぶべきことである。

飯沼慾齋肖照

★

『草木圖說』の分類の方法は、林氏二十四綱によつたもので、素より今日の如き學術的分類ではないが、併し種類を引出すには甚だ便利で、殊に寫生圖が眞に迫つて居るから、初學の人と雖ども此の書によつて、よく路傍田畔に生えてゐる草の名を知ることが出來る。これが此の書の大に世に行はれた理由の一つである。

『草木圖說』に現はれしクサアヂサイ

★

昔から有名な本草家としては、小野蘭山の如く博聞强記にして『本草啓蒙』の如き浩瀚の著述をなし、名を東西に馳せたものがあり、又その後に於いても、著名の本草家に乏しくはないが、而かも後世に遺る大著述を成して、わが邦の植物の種類を記載し、日本植物志の基礎を作り、多大の貢獻を遂げた點では、先生に比肩すべきものは少ない。

★

現今の如き學問の進步した時では、素より往時に比して研究の方法が甚だ精密となつてゐるが、併し、今日と雖ども、此の『草木圖說』の如き書物を作るのは容易ならざる事業で、數十年の歲月と、非常なる勞力とを費すにあらざれば、到底これを完成することは出來ぬ。飯沼慾齋の如き篤學の人で、專門學上の造詣深く、且つ非常に健康で、一意專心に一つの事業を完成することに氣力を注ぎ得るものでなければ、此の書の如きは迚も作り得られぬ所であらう。此の點から觀ても、先生の事業は大に敬服すべきものと思ふ。

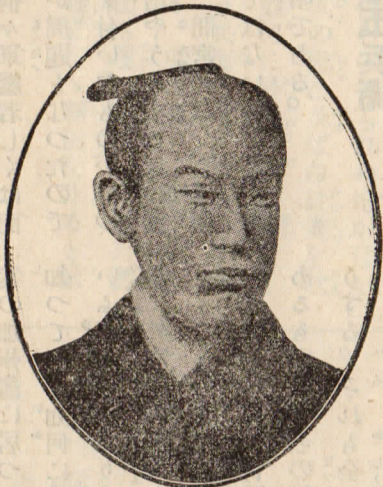
國禁を犯して雄飛したる錢屋五兵衛

文學博士　三宅雪嶺

幕府に睨まれたる加州藩

加州藩は德川幕府に睨まれ、唯さへ嫌疑を恐れ祕密を事としたのに、錢屋の事は種々重大の關係あるを以て、之を刑に處すると共に、成るべく事實の世に傳はらぬやうに努めた。若し事實の今少しく審かに世に知れて居るならば、經營事業の全國に及び、猶外國とも關係があるので、頗る興味を促すのであるが、如何にも事實の確むべきものに乏しい。然し種々の傳說と、僅かばかりの記錄と、五兵衛の遺跡と稱せらるゝものとに徵しても、其大要は知ることが出來る。

岩崎よりも規模雄大

五兵衛は淸水屋と稱し、錢屋を業としたので、それが遂に通り名となつた。今で云へば銀行業である。全く素手で飛出したのではなく、何程か金もあつたのであるが、五兵衛一代に大に雄飛し、岩崎が土州藩及び明治政府と結托して成し遂げた所のものを、單に加州藩と結托して成し遂げ、規模の大なるに於いて更にその上に出たのである。然し謂はゞ危險を冒して富を作つたのである。紀文が暴風を冒して蜜柑船を江戸に着けて大儲けをしたやうに、國禁を犯して千石以上の船を造り、內國の取引をすると共に、外國人と貿易したのである。藩にあつては用達であつた。又、船を預かつて居つた。銀行業と船舶業とを兼ねたやうなものであつて、藩の財政に便利を與へ、藩の名に於いて信用を他の地方に植ゑ付けた。何所まで藩に托せられ、何所から勝手に藩の名を用ゐたかは明白でない、恐らく藩の係役から委任を得て、自由に名義を使ひ得た所もあらう。

三十餘箇所に支店を設く

然し、兎に角、藩の名で船を泛べ、盛んに各地に取引した。當時の宮腰(今の金石)に本店を置き、神戸に重なる支店を置き、松前から長崎まで要地に支店を設け、都合三十餘ヶ所に及んだ。神戸にその遺跡と傳ふるもので些か察すべき所がある。然し海外貿易は國禁の嚴なるものであつて、何所で取引したかは今遽かに分らぬ。種々の外國品が、藩及び他の地方に殘つて居るのは、單に長崎から來たものではあるまい。もし外人と直取引をせんとするならば、事は必ずしも困難でなかつた。北海道でさへ今の如く人が往來して居らぬ。全く人跡の絕えた所が多かつた。

錢屋五兵衛

そして當時歐洲に於いても新領地を得るが爲め、新航路を開くが爲め、頻りに探檢船を出し、ラペローズ(La Perouse)が北海道と樺太との間を過ぎ、爾後ラペローズ海峽の名を地圖に記する事となつたのは、五兵衛十七歲の時である。ラペローズ

の外にも、日本の近海に寄つたものは多い。クック(Cook)のハワイで殺されたのは其少し以前である。鯨船も隨分來て居る。日本海に鯨が多く、殆ど船の通行するに困難を感ずる程のこともあつたので、その捕獲に來た船は幾つあるか知れぬ。偶々軍艦若しくは商船の陸地に立寄り薪水を求めるのが問題となつたのである。日本でも、早くもこの邊に氣付いたものがあつた。五兵衛の出た頃は既に海外に出やうとする者の續々現はれた時代である。近藤重藏、間宮林藏、高田屋嘉兵衛等、皆それである。探檢家ではないが、渡邊華山、高野長英等の出たのも亦その頃である。

機敏にして大膽なる五兵衛

然し、自から貿易に從事して巨利を博したのは、主として五兵衛である。高田屋嘉兵衛も貿易家であつたが、五兵衛とは比べものにはならぬ。鎖國時代に最も鎖國的なる加州藩からして、突飛なる貿易家の飛出したのは不思議なやうであるが、これ等の事は世に有り勝ちである。東京に生れたものは東京の町を知らず、京都に生れたものは京都の名所を知らぬのが多くて、之を知るのは却つて田舍人である。片田舍から出てあまりの面白さに頻りにかけずり廻るのである。引込思案の加州藩に居つて、船で自由に世界を歩けることを知つては、如何にも面白く感じ、一つ大仕事をせうといふ氣が起つたりするのである。長崎に生れて居ると常に外國船の出入を見て、何の面白味も感せず、そのまゝになつて了ふ。始めて外國船を見るものは實に面白さに堪へぬ。冒險心のないものは兎も角も、その心あるものは、その船に乘つて見たくて堪らなくなつたりする。それも全く船に緣故なければ其の儘に過ぎるが、五兵衛は加州藩に生れても船着きの宮腰に居るのである。港はなくても船着きは船着きである。何程か船を見たり聞いたり又乘つたりする機會がある。機敏にして大膽なる彼は、何事か見覺えた所で、大仕事、大儲けの出來ることを思ひ、遂に之を實行するに至つたのである。

事毎に成功す

藩の御用達として金の融通はよく、役人に於いても五兵衛ならではといふ程になつて居り、天保の饑饉、大鹽の大阪で燒打をした時でも、自由に米を運び來つて、藩內に左程の困苦を覺えさせなんだ。既に藩は五兵衛に任せ、五兵衛はまた任されて、到る所として儲けの得られぬ地がないといふ有樣となつた。然し、本來人の思ひ及ばぬ計畫を敢てして大儲けをしたのであつて、如何に計畫が圖に當るとて、一寸して過失なしとはせぬ。五兵衛は殆ど事毎に計畫通りに運び、次から次と工夫をする。兎角調子に乘つて失敗するものゝ多いと同じく、五兵衛も遂に粗漏な計畫を實行する事になつた。即ち河北潟を埋立てゝ新田を作ると云ふのである。

河北潟埋立の大失敗

之を埋立てれば新田として頗る大なるものである。然し埋立工事は容易でない。今日の技術でも容易でない。所が

錢屋五兵衛の船海外と密貿易をなす圖

之を埋立てやうとして、コンクリートで固めるやうに石灰で固めやうとした。然し、工事はよく運ばずに、石灰及び之と共に用ゐた油の爲に魚が死んで浮んだ。魚はタヾ取りするヿが出來る、拾ひもの同樣である。漁師は大喜びで之を金澤に賣つた。市民は中毒して死んだものが少くない。所で騷ぎになつた。之を取り調べる段になると、五兵衛のなし來つた所のものをも公にするの已を得ざるに至るのである。近くは江戸城の燒けて、會津侯が再建の役を仰付つて居る。所が、侯が材木を切り出さうとすれば、加州藩の名で五兵衛が買ひ占めて居る。會津侯より加州藩に掛合がある。事愈々面倒である。

牢死の後鹽漬けとなる

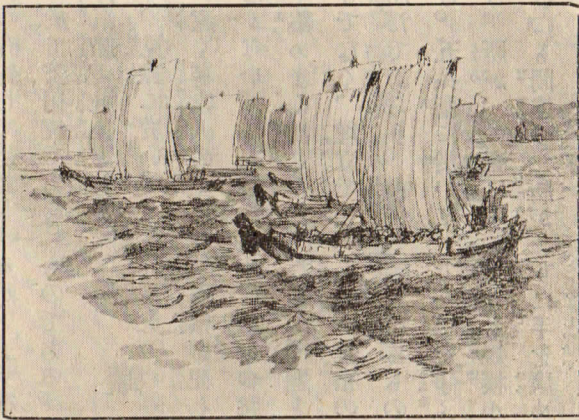
所で、國禁を犯して海外に貿易したのも由々しき大事である。加州藩で知つての事であるとすれば、唯は置かれぬ。これ迄五兵衛は藩の財政に缺くべからざるものであつたが、事面倒となつては、五兵衛が富んで居る丈け愈々疑問が多い。而して五兵衛の富んだと共に、その贅澤も一通りでない。市民は面白く思はなんだ。所へ、偶々中毒事件が起つて、五兵衛を敵のやうに思込んだ。藩の役人は、前からの行きがゝりを知つて居るが、市民が騷ぎ立てゝ、五兵衛の餘計の事まで幕府に知れ渡つては大變であると云つて、之を獄に下した。五兵衛は幾くもなく獄中で死んだ。一族を獄に入れ、その重なるものを磔刑に處し、五兵衛の死骸をも鹽漬けにして置いて之を磔刑にした。悉く錢屋一族の不屈な始末といふ事にして、幕府の疑を蒙らぬやうになつたが、今の法律に照らせば、殆ど話にならぬやうな事である。悉く財産を沒收するに至つては猶更の事であつて、その財産の記錄に殘つて居る丈けでも隨分莫大なものである。之を沒收して如何にしたかも疑問の儘に殘つて居る。五兵衛の事は、國禁に關る限り世に公にせられぬ。或は米國へも行つたとの說もあるが、何とも云はれぬ。世間で知れて居る事は、主に河北潟埋立事件である。金儲けの爲に、人の死ぬのをも

顧みなんだといふ事である。海外貿易の事は、後に至つて漸く知れたのである。知れて見れば、その經營の雄大なる、實に驚くばかりであるが、藩に知れた所では、單に惡い事をして儲けたものと云ふに過ぎなんだのである。

不思議なる大野の辨吉

明治の初め、大野に一人の老人が住んで居つた。小さな小屋に蓆を立てゝ、丁度犬の小屋の大きなやうなものである。汚なくて座はる事も出來ぬやうな所である。名も唯大野の辨吉といふ丈である。然し當時舶來の器械で修繕に苦しんだのは、この所へ持つて行けば苦もなく修繕する。そして既に今日用ゐるやうな裁縫器械をも作つて居る。金で蟬を作つて之を飛ばす、障子に止まつてジリ〳〵と音をさせる。恰かも鳴くやうである。器械の製作に長ずる事に於いては、實に不思議といふべき程であつて全國に類がなからう。その何者であるかは、遂に詳しく分らぬ。これ五兵衛に知識を授けた者であるといふ事であるが、その何れ丈けの關係あつたかは分らぬ。

加州藩の船海を蔽うて渡る

安田と淺野とを合せた人物

五兵衛の事は何うもよく知らぬ。唯僅かに大體を察する許りである。維新後、五兵衛の營業した加州沿岸から廣海及び大屋が出て居る。船舶業に於いて全國に有數なものであつて、後に多額納稅者として貴族院議員に爲つた。一人は先日裁判沙汰になつた。そして舊加州藩なる越中から安田善次郎、淺野總一郎が出て居

る。孰れかといへば、五兵衞は、安田と淺野とを合せた人物らしい所がある。安田のやうに順序を追つて經營するにも長じ、淺野のやうに己れの直覺して是認した所を斷行する所もある。銀行業に於て安田位であらうが、船舶業で淺野位でない、東洋汽船の社長として更に大に發展するであらう。而して、見識に於いて、膽力に於いて、經營の才に於いて、遠く尋常人の上に出て居りながら、性格の缺點が少なくない。もし五兵衞にして、富んで傲る事なく、よく集めよく散じたならば、更に事業の見るべきある許りでなく、埋立で失敗するとも、彼の如き最後を見なんだであらう。市民の中毒したのは偶然の出來事である。五兵衞に於いて相當の金を出さば、事濟むのである。所が、一齊に五兵衞を怨んで止まなんだのは、怨むにも間違つた所があるが、恨まれても仕方のない所もある。五兵衞は八十二歳で牢死して、子孫斷絶した。壽長くして恥多いものとなつた。然し人に咎められたのは最後數年間の事である。その間、全國を濶歩し海外を相手にして事業をなした。かの高島嘉右衞門の如きも、國禁を犯して、金貨を海外に輸出して大儲けしたと云ふことであるが、五兵衞はそれよりも遙かに大なることをやつたものである。

蟻垤に躓づく

國禁を犯したのは惡いが、國禁そのものが善かつたか、惡かつたかも疑問である。今から見れば、高島のことが問題とならぬが如く、五兵衞のことも問題とならぬ。性格の如何を別にすれば、五兵衞の如く事業の雄大なるものは、その後求むるに難い。岩崎は富全國で一二を爭ふに至つた。然し事業から云へば、五兵衞よりも規模小なりと云はざるを得ぬ。唯五兵衞はあまりに手を廣めて失敗した。而して失敗しなくともよい所で失敗した。即はち泰山に躓かずして蟻垤に躓いたと云ふべきところもある、事業の極めて盛んにして、末路の極めて慘憺たる丈けでも、他に例のないのである。

盛名一代に畢れる紀文大盡

農商務省特許局長　中松盛雄

寧ろ東京で名高い人

私が紀州人であるから、紀の國屋文左衞門即ち紀文大盡のことを話せといふのであるが、實の所紀文は紀州にその事蹟を殘して居ない。これは私の寡聞かも知れぬが、二三の書を讀んだ所でも、彼の生地が齟齬して居るのみならず、彼の出身を徵する事蹟は紀州には無いやうである。彼の舞臺は江戸であつた故彼は寧ろ東京で名高い人で、その印象は、却つて紀州人の頭に明確に映つて居ないのであらう。故にこの話は私に稍々適當でないやうに思はれる。併しながら、紀文の紀州人であることは勿論、又紀州の　物を以て一攫千金の大分限者となつた端緒をなしたことも事實と認められる、加之榮枯盛衰の劇變ありし彼の生活に付き、觀察することは私に於て興味あることゝ思ふ。

相反する二種の氣象

一體、何所の土地にも、必ず保守的氣象と之に相反する進取的氣象とが對立するもので、紀州には殊にそれが著しいやうである。一方は何事にも引込思案、控へ目にする氣風で、他方は飽迄も現狀に滿足せず、前きへ前きへと進取の道を講ずる氣象である。この思想の兩極端は、殊に紀州に甚しく現はれて居ると思ふ。而して之には、歷史上の理由もあり、又、氣候風土の關係もありはせぬか。歷史を見ると、紀州といふ所は他の土地に比して早く開けて居る。紀州に存する神社佛閣、名所古跡の來歷由緒を調べても能く分かる。從つて政治上、文明上の血液が社會中心の鼓動に伴うて上古より紀州に及んで居たやうである。併し土地は京阪地方と近接して居れど僻在して居る故、活動の衝に當らず、寧ろ傍觀の地位に立ち、惡事を爲した者或は落武者の隱場所となつたと抔が多い。紀州人が歷史上大々的奮鬪を爲した機會が極めて尠かつた。而して其南部地方は宛から溫室の如くであるから、人々は其影響を受けて、保守的に流れ易く、平穩無事を希ふ性質を帶びて來た。加ふるに海に魚類多く、陸に農林の產物等豐かであるので、古より生活の苦痛を感ずること少かつた。即ち政治的及天然的の壓迫も稀であつたので人々は自ら反抗力を失ひ、その結果次第に保守、因循に傾いたのであらう。けれ共、他の一面より見ると、早く開けた人民で一種の自負心がある。且、背後には高山峻嶺を負ひ、其景色到る所壯嚴である。前面には茫漠たる大洋を控へ、狂浪怒濤、日夜逆卷く、その結果は、山の奧、海の面に何物かの存在を暗示し、雄大進取の氣象を養はしめたのである。而して、これ又やがて彼等の向上心を刺戟し、企業的、若くは冒險的精神を鼓吹せしめたる理由ではあるまいか。古昔地中海の東岸に位し、レバノンの山を脊負ひて立ちたるフエニシヤ人が、特別進步的の人種にあらざりしも、航海植民の事業を爲したることが、丁度紀州人の事業に髣髴たるものである。概して紀州人は平穩な人民であるが、時として突飛的の働を爲すものであると謂ふことが、右の説明によりて解せらるゝと思ふ。

産業に現はれたる紀州氣質

政治上の事は暫く措いて謂はず、産業上に就て視るに、紀州は近年まで甚だ振はなかつた。紀州人の努力によりて出來たものは、僅かに綿ネル事業であるが、これとても尚内地に供給するに止まり未だ外國に輸出するには至らぬ。その他木材、蜜柑等すべて漸次進歩はして居るが、概して保守的、消極的に舊態を存して居るやうである。然らば、紀州人の事業はすべて斯ういふ有樣かと云ふと、其土地を離れた人は、案外の大活動をなし、土地に居る人の夢想だも及ばざる程のことをやつて居る者もある。例へば濱口吉右衛門氏の祖先も紀州を出た人で、今の銚子海岸を開き、こゝに殖民をなし開墾事業、醬油釀造事業を計畫し、以て今日繁榮の基礎を作つたと云はれて居る。又、栖原角兵衛なる人の祖先は、北海道、樺太の開墾のパイオニアーで、その漁場は實に盛大を極めたのである。又、維新後の海漕事業に岩橋萬藏といふ人がある。三菱の興る迄は、彼の名は非常なもので、一時は殆ど無競爭の地位に居つたと云はれて居る。更に近く例を取れば、現にハワイの殖民、南洋の眞珠採取、北米加州の農事、朝鮮の開拓等に從事するもの又は紀州人が極めて多いといふことである。而してこれ、取りも直さず一面の紀州人の性格を代表するもので、その他にも例を擧げ來れば中々多い。

俳人百家選に現はれし紀國屋文左衛門

蜜柑船の大成功

思ふに、紀州人全體は決して氣候風土等の狀態に征服さるゝもの許りでなく、之を超脫し、之を制御して

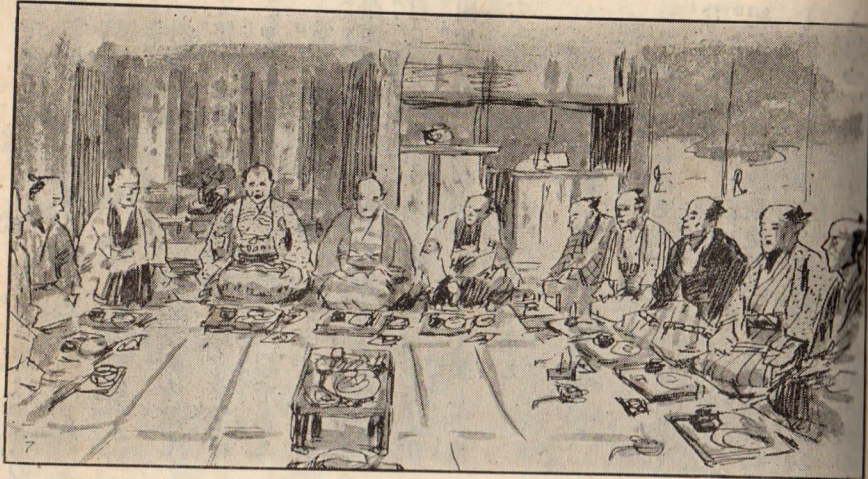
大に他國に活動を試みたものがあるらしい。而して、紀文大盡も恐らくは紀州人一方の氣象を代表する一人ではないと思ふ。口碑、傳說等によれば、彼は最初例の蜜柑船を品川沖につけて大に奇利を博したことが其成功の點と思ふ。即ち、天候險惡航海の出來ざりしときに乘して一艘の古船を買ひ、之れに土地の產物なる蜜柑を積み込み、決死の人々と共に沖に漕ぎ出でゝ熊野沖、遠州灘等の暴風激浪を突破して運よく江戶に着き、こゝで思はざる巨利を博したことが好運の始で、段々出世して當時の分限者の列に入つたものらしく思はれる。彼は蜜柑問屋に安んじたるものではない。進んでは當時第一流の材木商となり、上野根本中堂の建築を請負つて莫大の利益を占め、後には又、鑄錢の請負を命せられて巨利を博し、遂に金持として日本の金權史上目醒しい働を爲したものであらう。所謂奮闘生活、努力生活のかち得たる報酬であらう。人は生活難が今日に有て昔に無く、成功は昔に易くして今日に難きかの如く考ふる者があるが、必しも然うではない。

紀文の當時に在つても諸種の障礙あり、之を除去し之を乘り超えるとは中々困難であつたらうと思はれる。即ち武士には武士の階級、商人には商人の階級、金持には金持の階級があつて、赤手事業を企つることは殆んど出來なかつた樣に思はれる。よし好運であつたとは云へ、素性の知れざる田舍漢が大江戶の眞中に於て格式ある舊家と競爭を事とし、遂に之に打勝つて天下の利益を壟斷するに至つたのは、非常の天才と非凡の手腕とを具備したものでなかつたならば出來ないことゝ思ふ。思ふに運を天に任せて遠州灘の狂瀾を乘り切つた時よりも、その後材木商となり、鑄錢業と爲つた後の苦心の方が甚しかつたであらう。勿論世間を瞞着し、役人を籠絡したりする惡疎手段の數を盡したに相違なからうが、騎虎の勢如何とも致し難く、決勝點に急いだものと謂はなければならぬ。

馬鹿の限りを盡くす

斯く光明の方面より云へば、彼は實に奮闘場裡に於

佐久間象山の畫

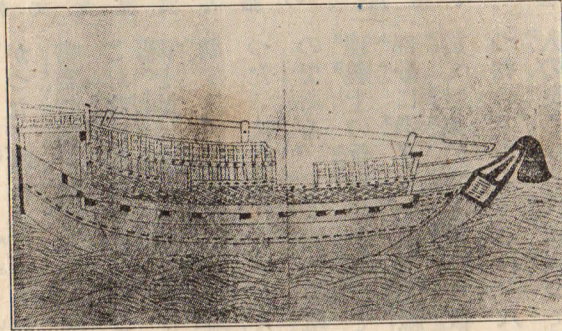
これは東京馬島杏雨氏の所藏に係るものである・象山は經世の才を抱いて・平生志を國家の安危に寄せたもの・書畫は畢竟・忙中閑日月の所產である・分りよく云へば道樂である・しかもその道樂が黑人を超絕して・神韻縹渺眞に逼るものあるに至つては・その多技多能多才なるに驚かざるを得ぬ・（宮本博士記事參照）

紀文大盡宴を張つて萬金を一擲す

て、月桂冠を載いたものである。併しながら人間は、成功すると同時に又一つ他の慾望を起すべきものであるが、彼も亦その選に漏れず。一旦成功すると、今日の所謂成金黨と謂はるゝを以て滿足しなかつた。彼れは江戸の趣味を解し來つた。彼れは今日の紳商の如く書畫骨黨を翫弄した。彼れは亦其角、一蝶抔の藝術品を保護した。

これ等は惡しき事にあらず寧ろ賞むべき事ならん。されど彼れは藝術を味ふ丈の素養を持たなかつた。彼れが最初世間を衒ひ野心を幇助する方便となせし風流韻事は、遂に彼を墮落せしむるの索繩と爲つた。彼れは江戸の商人に打勝ちしも、江戸の藝人の捕虜となつたのである。尤も當時の風俗は隨分淫蕩なるものであつた。時には赤穗義士の仇打などあつて、武士道の華を咲かしたこともあるが、一小部分に過ぎないで、元祿年間は頗る墮落した時代である。その間に於て巨萬の富を得たる彼は、其風俗習慣に溺れ、遊冶郎の標本となつたのである。これを八釜しくいふは、今更迂遠なやうであるが、今善き人の良心は時代に依つて變らぬ。昔し惡しきは今尙惡しく、今善きことは昔しも亦善かりしことである。彼れの暗黑面は彼れの光明點を掩うて餘りありと思ふ。彼れは實に惡所通ひで馬鹿の限りを盡し、其角、一蝶の如き一種の幇間に取卷かれて一宵千金の豪遊をなした

のである。故に一面より見る時は、彼の一生の事業も要するに花柳社會に虚榮を極めたといふに過ぎないかと思ふ『人は一代、名は末代』と云ふ語は、これ彼れの人生觀であると傳へ、其の生死を睹して集めたる富を土塊の如く散じて吝まざりしものを、彼の彼たる所以であると賞むるものあらば、果して其積りで自ら好んで陷りしものと認むることが出來るが、彼れ窮地に在りて果して悔なかりしかを私は疑ふのである。

富に對する觀念

右の批評は或る酷に失したかも知れない。けれ共、德川氏の時代に於ても紀文大盡は稗史情史等の外には論評に上らざりしものと思ふ。當時學者、譯者は紀文の成功を羨むべきものと思つて居なかつた。却て成功主義の盛なる今日に於て、人氣物となつたのは喜ぶべき現象と謂はれない。勿論富は卑しむべきものでない。若し、富の使用法にして宜しきを得てゐるならば、啻に其の人を幸福にし高尚にすのみならず、社會の進歩を促がし、國家の隆盛を持ち來たすものである。此意味に於て富を求むるの希望は大に奬勵すべきものである。けれども、其得たる富を以て只己れの慾望をのみ充たすことを努め、社會國家を顧みざるときは、其富は其人を賊するものである。惡しき結果を社會に殘すものである。米國人は最も多く富を欲する國民である。富の爲めに奮鬪する國民である。去りながら又能く富の使用法を解する國民である。カーネギーやロックフエラーの如きは、國家的、社會的若しは道德的紀念を殘すことに就て、頗る苦心して居る。然るに東洋の富豪は、富の使用法を解せぬものが多い。所

菱垣船の構造

謂金持の一生は極めて無意味である。紀文も莫大なる富を得、子孫を待たずして自己に費ひ果して元の杢阿彌になりしは、其積りで爲したることならば、案外淡泊なりと謂れんも、世の爲、國の爲何もならぬのである。即ち龍頭蛇尾の生涯で、その一擧して巨利を博したる、又一敗地に塗れて江湖に飄零したる、共にこれ偶然でなかつたかも知れぬ。運命の神は只一夜榮華の夢を彼に貪らしめたに過ぎない。

成功は外形に非ず

總體私は、日本人が甚だ高尚な人種で、金のことなどは意に介せぬ人間、利害打算に淡泊な人間であるといふ事を聞くが、昔はいざ知らず、今日の日本人は果して然うであるか何うか。私は、然うでないと思ふ。試みに世に行はれる著述、雜誌等を見ると、どれもこれも成功を賞め、奮鬪を歌ひ、相場投機に從事して多少儲けをした人々も成功者と呼び、手段を問はず、詐僞同樣のことをして富を得た者をも奮鬪家と稱して居るではないか。成程、人間が努力するは必要である。困難に對して、飽迄も之に打ち勝たんとする精神は、道德上大に必要である。遊んで樂をして居て金を儲け、地位を得るは所謂出來ぬ相談、もし出來るとすれば、それは厭ふべき事である。故に人は、生れてより死ぬまで、何うしても働かなくてはならぬ。併しながら思想は飽迄も高尚に保たれねばならぬ。又、踏むべき道は、何所までも正しくせねばならぬ。中には所謂逆取順守といふ戰國時代の言葉を奉ずるものもあるやうであるが、志ある青年の聞くべき言葉でない。姑息の思想に過ぎない。人の弱點を辯護するの言葉と謂つて差支ない。眞に勇氣ある人の探るべき方法にあらずと信ず。私の考では、金儲けも宜しい、大事業も結構である。併しながら外形に現はれた所が眞の成功ではない。人の價値は金力、人爵を以ては計り難いものである。勤勉の力、道德の力に依り得たる成功は眞の成功にして、其人の價値を取り消すとも奪ひ去ることも出來ぬのである。此の如き成功者多き國は最も有望なる國である。この意味に於て紀文などの成功談は餘り賞めたものでなからうと思ふ。文學、藝術の方面に多少の功はあつたとしても、同時に暗黑なる方面にも大なる跡を殘して居る。私は海外に於て幾多邦人が農業に商業に成功して居るものを見た。彼等の鄉國を出たる意氣は壯んなものであつたらう。恐くは紀文大盡を學んだものであらう。併しながら彼等は其奮鬪して得た富を兎角紀文流に使用せんとして居る。日本人は理想品性の卑しい人種として輕蔑せらるゝこと尠くないと聞く、外に大なる原因もあらうが、之が排日運動の口實になりたるやの話あり。啻に內地のみならず海外までも紀文の感化の殘れるは誠に遺憾の事である。私は我國民に對し人生をもつと眞面目に考へることを望み又青年諸君に對しては一層名譽心を熾んにすると同時に道德的觀念を失はざる樣希ふものである。

靈寵を信じて苦學したる佐久間象山

醫學博士　宮本叔

一　象山の麓に生る

象山先生の最も光彩ある事蹟は、その當時の歷史と密着して居るから、一夕の談話に之を悉くすことは不可能である。故にこゝには、その一生の一部分即ち少青年時期より壯年時期にかけての苦學を中心として前後の事を、少しばかり御話して見ようと思ふ。

先生の幼名は啓之助、二十八歲の時に修理と改められ、字は子明、青年時期には觀水道人、後に象山と號された。此號に就て先生は『象山とは陸象山を慕うて附けたのであらうと云ふ者もあるが、元來陸と自分とは已に其說を異にして居る。此號は象山々下に生れこゝに講學したから附けたのである』と家藏の象山記に附記されて居る。これは、其號の由來を述べて陽明學を信ずるものでないといふ事を明にする爲であつたらう。先生は今より百二年前、文化八年二月十一日に信州松代象山の麓裏町(今有樂町)に呱々の聲を揚げられ、二十三の時藩公の允を得て江戶に遊學し、林家の門に入り主として佐藤一齋について學び、數年ならずして大儒の群に入つたのである。先生が國事に關係されたのは三十一歲の頃からで、以後卓拔の識見と剛健の意志とに依つて天下を動かし、遂に元治元年即ち四十九年前の七月十一日京都に於て兇刄に斃れられたのである。

『予、年二十以後乃ち匹夫一國に繫るあるを知り、三十以後乃ち天下に繫るあるを知り、四十以後乃ち五世界に繫るあるを知る』とは先生の自贊であるが、眞に先生の一代を悉したものである。

二　三歲にして字を作す

先生の幼年時代に就ては所謂神童であつたと云うて色々の話が傳はつて居る。中には如何はしいものもないではないが、三歲の時他所で見た『禁』の一字を記憶して、筆を執つて書いたと云ふ事は、先生の友人坪井信道が先生に『三歲作字已稱奇』といふ句のある詩を贈つたので明かである。兎に角、先生が偉人たるの血脈を遺傳されて居たことは事實である。即ち先生のお父さんは佐久間一學、諱は國善、象山の麓神田川の端に居られたので神溪と號した。長沼流の槍術に長じ多數の門弟を有し、文學では周易に精しかつた。又書も上手で、私の近所などには神溪先生の書かれた碑が立つて居た。晚年に有名な眞田幸貫公に重く用ゐられた。象山先生が幸貫公よりお父さんに賜はつた手書の跋中にも『先臣國善、度量開曠、氣宇磊落、平生細事に檢らざるも、一旦命を奉じ城背の土功を督するや、兩歲にして成を告げ、經畫規度、初の素定の如し』云々とある。

三　偉人の血脈を承く

又、先生のお母さんは松代の近村寺尾村荒井某の女で、矢張中々の女丈夫、今の所謂賢母良妻であつた。此人は神溪先生の室が沒せられた後の妾であつたが、決して先生を若樣扱ひにせず、嚴しく養育した。その

訓誨の言などは、先生の詩文中にも屢々見えて居る。又、幸貫公が頓智的媒介で妾より神溪の正室、即ち象山の母とされたのを見ても、尋常一樣の女でない事が知れる。先生は、此のお父さんの五十六、お母さんの三十六位の時の子である。

先生の姉(同腹)北山某の妻女も亦一通りならぬ女丈夫で、其子の北山安世が同じく俊才、中には象山以上だと云ふものもあつた。然し惜しいことには夭死をした。所謂『天才とマニー』の類であらう。姉、即ち北山氏の女丈夫なる事は宮内省版の婦女鑑にも出て居るが象山が姉に送つた書簡にもその樣子が見える。即ち其の夫が歿し、子安世が幼少で家祿を減ぜられんとした時に、女の身を以て初めは藩老に嘆願し、後にはその非なるを唱へて爭つて聽かれず、遂に江戸迄來て藩公にお目通りを願ひ、直ちに嘆願もし、且藩政の大に亂れたる事情をも申上げんと企て、在京中なる象山に碓氷峠關所通行の手形を申受け送り呉るゝやう依頼した。此依頼状に對する象山の返書を見ると、女丈夫と偉人との面目が眼前に浮ぶやうである。曰く『一たんは驚いたが父大に喜びました、私も今は日本のせまき天下ながら天下の人に屈指さるゝ樣になつたに付て、あなたがもし男であらば、共々に講究琢磨し、學術共に古今未發の説をなし、海外へも傳へ候はんものを、あなたが御婦人で御相談も出來ぬのは殘念で堪らぬ。松代に居た時にもお母樣と毎度話して殘念に思うて居た。所が今度御身命を捨てられても御國家の爲に相成り度いといふ事を承り、實に女丈夫、男勝りの御所爲である事を知り、大に力を得ました』と。これは勿論手紙の大意を書き下したものである。原文はもつと上手に面白く長く書いてある。要するに先生は先天的に非凡な血をうけて居られたである。

四　郷里に於ける研鑽時代

七歳の時に學に就かれたと云ふが、十四歳位までの事は詳しく分らぬ。然し十五歳には易を象山の麓に讀むと云うて居るが、大に之に通ぜられたものと見え、已に古人の説に疑を挿み、『朱子以下象を談ずるもの多く、之を取るは予の解せざる所也』など、云うて居られる。十六歳の時に、藩の町田源右衛門といふ大家に算數を學ばれた。北澤正誠氏編の年譜によると、八日の間に略開平開立の法を窮めたとある。又、十七歳の時に毛奇齡の春秋占筮書に對して異論を挿み、占筮補正といふ書を著はした。之を見ると已に青年期の初期に於て其頭角を現はし初めて來たらしい。殊に明確なる頭腦を以て好んで易と算學とを學んだといふ事は、泰西の科學砲術等を理解する點に於て、國事の劃策等精密にして一點の空論なかりし點に於て、大に影響のあつた事と信ずる。

十八歳の時に神溪先生が隱居されて、先生が五兩五人扶持を以て家督をつぎ、二十一歳の時に幸貫公は先生の英邁の資なることを知られて其の子豊後守幸良の近習役としたが、自分の勉強がしたいと云ふので三ケ月餘で辭して了つた。天保三年、先生二十二歳の時、神溪先生は七十七歳で世を去られたのである。

此の十五歳から二十二歳までは先生の郷里に於ける研鑽時代で、前に云うた易學、數理の外、藩老鎌原桐山に洋學を、隱士竹庵に唐音を學んだ。竹庵は上田附近に隱栖して居たが、先生は松代より八里の路を遠しとせずして通學されたと云ふ。此頃餘程陽明學に傾かれて居たやうである。又、槍術は直接に嚴君の教を受けて、代稽古をする迄に上達して居たといふことである。

佐久間象山肖像

五　斷乎として所信を貫く

又、此の青年時期に於て已に何所迄もその所信を貫くといふ性質が現はれて居つた。春秋占筮書補正を著はして毛奇齡を攻擊したのもその一例である。天保三年に、時の大儒長野豐山が藩より招聘の内約あつてか松代竹山町に來て孟子を講じて居た時分、象山は『浩然之氣』に就て書を裁して大に豐山の説を駁擊した。豐山は、あの書生にこれ丈けの議論が書けるものでない、畢竟儒者桐山等の使嗾によるものに相違ないと不快の情を裏んで返事もせずに松代を去つた。江戸に來て所謂漢學書生であつた頃にも、學者として知られた先生方をやつつけたことが屢々ある。山田方谷翁などは、象山は恭謙の德を缺くから終りをよくしまいと評して居た。まだ先生の强情の一例がある。先生の二十歲位の時、槍術御覽の際師家の事故名簿を差出した。然るに從來の名簿と書式が變つたので、書き直しを命ぜられたが、先生は、これ迄の式が法に違うて居る、理屈に合はぬのであると云つて、頑として自説を枉げなかつたので、到頭藩公より『其方儀、元來恐心薄く、我儘憎長』云々で閉門に處せられたことがある。幸貫公が『修理は疵が多いが、然し英雄ぢや』と三村晴山に語られたが、この强情は確かにその疵の大部分をなすものだらう。自分でもそれをよく知つて居た。然し、頭腦明晰で、超凡の識見を有し、世の爲にその所信を斷行せんとするものには、所謂强情は免れぬ性質である。

六　勉强を抵當に借金

先生は、これ迄荐りに江戸遊學を希望して居られたが、二十三歲の冬始めて藩の允を得て江戸に來り、當時の林大學頭述齋の門に入り、專ら佐藤一齋について學んだが、倏ちにして一家をなし、詩文などは後に一齋も『文體高古にて法に熟し候事當今都下第一たる可し』と評した位である。その自慢は當時の先生の書簡にもほの見えて居る。

覺

金七兩也

右は私儀江府に罷り出で文學修行仕り度願ひ奉り候所早速仰付けられ候得共、從來勝手向不如意に付き入料にも差支候儀にて御座候を以て餘儀なく御無心申上候所、早速御聞濟み成され候て、殊に無利息に成し下され、金子慥かに落手、千萬難有く深く感銘仕り候義にて御座候、併し私修行の爲の故に箇樣の御深惠なも成し下され候儀にて御座候得ば自然私修行半途の怠惰な生じ學術成就仕らず候義も御座候へば、右の金子に利分御疊み成し下され、私頂戴物の内を以て數御取立て成し下され候樣希ひ奉り候、念の爲め如斯に御座候以上。

天保四年癸巳十一月　　佐久間修理

これは文面通り先生が遊學の爲の借金證文で、藩老矢澤監物に差出したものである。『佐久間先生は自分の勉强を抵當にしたよ』とは私共小供の時分から家兄などより戒められた言葉である。天下幾萬の學生諸君にこの證文の熟讀暗記を希望する。

留學約二年、二十六歲の二月には已に一家をなして松代に歸り、三年間專ら學政に携はりて子弟を敎育し學政改革などを試みたが、先生の所謂『子供の世話』もその素志でないので、天保十年、即ち二十九歲の時に『天地間たま〳〵人と生れ出でながら世に功も之れ無く木石と同じく朽ち果て候はんも餘りに殘念に存じ奉り候得ば、迚もの御情を以て天下の人にも數へられ候樣罷り成り御用にも相立ち御厚恩の萬一を報じ奉り度願ひ奉り度候間、何分にも修行御暇下し置かれ候樣』云々と嘆願して再び江戸に遊學した。『驥神馳千里。鶴念在九皐。人而無大志。豈不恥羽毛。[illegible]

佐久間象山筆蹟

發求至道。促裝與翔翺。辛苦期報國。自誓此心牢』とは此の際紀行の第一首である。先生の御母さんが立派な人間になれと訓誨を加へたのも此門出の時である。着京後神田お玉ヶ池に五柳精舍といふ塾を開き、書生に學を講じて居られた。この塾の隣りは即ち梁川星巖の居で、星巖との親交もこの頃から始まつたので、これが後に先生の意見を京都の縉紳に吹入るゝ伏線となつて居る。

七 賢君名臣を知る

以上述べた所を時代別けにすると、十五歳から二十一歳迄が鄕里修學時期、即ち鄕里の俊才であつて、二十三歳の冬から二十六歳の二月迄が江戸留學時期、謂はゞ學校生活を卒業したのであるが、先生の實際の苦學は後の洋學研究時期である。さて、二十九歳で再び江戸に出られたが、當時英船の渡來、外國船打拂令等で世は騷々しくなりかけて來た。然しまだ先生の國事に關する意見などは餘り見當らぬやうである。北澤氏の象山先生年譜によると、三十歳の時滿淸鴉片の變を聞き、感憤邊防の策を講じたとある。その年頃が先生の國事に關する活動の端緒と見て宜しからう。既に述べたる如く自からも『三十以後乃ち天下に繫るあるを知る』と云うて居られる。然るに三十一歳の時に至つて愈々蟄龍の雲を得る時が來た。と云ふのは藩主幸貫公が水戸烈公等に推されて老中となり、防海の事に關係された事である。即ち公は先生に命じて海外の事情國防の策等を研究し、予が顧問たれと命ぜられたのであるこれが儒學の圈外に出で、西洋の學實用の學に入り『五十以後乃ち五世界に繫るあるを知る』と自信された程の活動の動機となつた。

こゝに鳥渡幸貫公の事を述べて置かう。公は、吾々が感應院樣と云うて尊信する方で、松平樂翁公の二男に生れ、後に眞田家の養子となられたが、之が父君の氣象を受つぎ頗ぶる英邁の方で、松代に入る前に、窃かに藩内を巡回して萬事を精察し、愈々入つて藩主となるや、種々の大改革を行つて、當時『白河の大泥水が押込んで眞田の稻をだいなしにする』と云ふ反對者からの落首があつた位だ。公は樂翁公の遺志をつぎ國防の志厚く、爲に水戸烈公は深く公を信じ、松浦、大關二候と併せて三益友と稱し、三人の像を畫かしめ、自から『治に居て亂を忘れず。武備相誇る。實に益友たり。長く國家を護る』と題された。これが後に眞田家の所藏となり、國民新聞社の志士遺墨展覽會にも出品された。公は自から國政に參與して國家の爲に國防を修めやうと云ふ考へで、藩臣等の藩家の恥辱なりとして反對せしにも拘らず、外樣大名を以て幕府の老中となられた。英雄英雄を知るで、象山は早くから公の眼識に上つて居て、江戸の游學も公の御蔭である。後に公が老中を止めて、象山を引き連れ國に歸られ、象山の知行を急に百石に上せられた時『閑叟(鍋島)

か修理を貸せといふ、若し貸したらば二人で何を仕出すか知れぬ』と云うて藩老の加祿に對する不平に釘を刺された。斯の如く公は象山を重用し、象山も亦賢君に心服して働いた。

八 自ら破門して歸る

偖て象山は幸貫公より『海防の要彼を熟知するより先なるはなく候へば是より歐羅巴諸州の記載に渉り彼の規綱政事兵制民俗、何によらず記憶まかり在り、顧問の用を致し申す可きとの義』を仰せ付けられたが、『その頃まで飜譯に成り居り候洋書の類取集め一讀仕り候義に御座候、然る所何程の義も相分らず、毎に隔靴搔痒の嘆を免れず候』と煩悶した。その翌年三十二歳の九月、公の命により藩士數名と韮山の江川坦庵先生に就いて高島流の砲術を學んだ。その時赤松氷谷に與へた手紙に『其門(江川)に入り候て研究致し候に益々實用これ有る事どもにて當今の武備これに過ぐ可らずと存候』と喜んで居るが、倏ちにして江川の敎ゆる所の卑近なるを看破し、將たる者の學ぶべき所に非ずと居る事四十日許りで自から破門して歸り、下曾根金三郎について更に砲術を學んだ。所が、當時蘭學の泰斗坪井信道が洋書を贈つたので、飜譯させて聞いて見ると、之れ迄苦心して傳書など寫したのは皆此等の書の飜譯に過ぎぬ事を知つて奮然洋學に志し、熱心に蘭學の稽古を初めた。當時の有樣を、先生をして語らしめて見よう。即ち先生が修業に

佐久間象山の畫

就いて厄介になつた松代の八田嘉衛門といふ人に送つた手紙に、

（前畧）御内筋も多くと申す内專らに取掛り候西洋學手廣のものに候故出精仕らず候ては果敢どりも致さず、且又これ迄一向心掛け候はぬ事にて所謂晩學に候故別して苦學仕らず候ては屆き申さず候に付、晝夜を限らず勉強仕り、夜分も冬夏に拘らず九ッ八ッに及び申候、去りながら右の苦の甲斐御座候て世に才子と申す程の人の一年の業と申すを六十日許りの日數にて事を了し候、一體は昨年六月二十一日より西洋原書を讀習ひ候所（中畧）全くの日を數へ候へば今日に至り候迄も猶一年には二ヶ月も不足に御座候、然る所近來は世に六かしき書といへども靜かに考へ讀み候へば大抵埒明き申候、之に依つて自身の益は勿論、御國家の御爲にも莫大相成候事是は大慶仕り候事に御座候（中畧）西洋火術と申すもの中々手廣の事にて其原書を讀み發明仕り候へば江川殿心得られ候位の事は僅かに高島何がしの傳へ候のみの畧々の法にて、西洋軍事實地に掛り候術の百分の一にも足り申さず候（中畧）尚原書につき詮義いたし候へば此表にて聞け候は猶僅かの事に候、西洋にて近來發明致し候軍法を始めとして研究仕り、一旦外寇の變御座候とも彼れの方を以て彼を防ぎ候樣仕り度く右之如く苦學仕り候事に御座候、是は外に讓り申すべき人も御座候べば自分の任と心得劬勞仕候事に御座候。

とある。又同藩の竹村七左衛門に送つた手紙にも『（前略）昨年來再び童子輩に罷り成り洋學に取掛り、此節宅に差置候黒川生歸省の事に候へば折々深川迄も麴町邊迄も風塵暑雨を避けず通ひ候て不明の所を探り申候樣に仕り、夜分も九ッを聞かずに臥せり候と申す事は是れなく候、斯くの如く餘計の苦勞も仕り候事、逸樂を願ひ候は人の常情に候へば小生とても其苦勞を喜び候事には之れ無く候へ共、此時に當り是にてすまぬ事と心付候事も天の靈寵によるに候へば、是を小にしては御國の干城にも相成り候爲に斯く仕り候て天の靈寵に答へ候樣仕り候にて御座候、此節洋學に寐食仕り候事敢て私の物好にて致し候事にては之無く候（下略）』とある。

即ち、先生は三十二歳で初めて黒川良庵より洋學を習ひ、黒川が二三ヶ月で加賀に歸らねばならぬので其後は獨學しつゝ東奔西走坪井、伊東（玄朴）、杉田（成卿）氏等に不足を補はれたのであらう。書簡中點を附した所は學生諸君の熟讀考慮を希望する。

佐久間象山の宮本愼助に與ふ手紙（宮本博士所藏）

九　天の靈寵を確信す

此洋學の力で、先生は兵學、砲術、銃砲、科學、醫學の外、西洋諸國治亂興亡の跡にも精通され、その精通された所を『御國家の御爲め』に施されたのである。先生は實に『御國家の御爲め』に勉強した。『御國家の御爲』と自分で思ひ付いたのも、又自分の精力のあるのも、すべて皆これ天の靈寵である、此の『靈寵に報いん爲め』に勉強した。『彼を知る』爲めに『彼の長を取つて他日彼を打ち申すべき』爲に勉強したのである。『天の靈寵を得』とは先生の始終云はれて居た所で、甚だ誇大に聞えるが　皇室の御爲め、日本國の爲め、恐多くも　孝明天皇樣まで自分の說を申上げ、御志を飜し奉らんとして、京都で殺さるゝ迄、此の所信は終始一貫して居る。――以上私は甚だ簡略ながら象山先生の生立と爲人と勉學の有樣とを御話した。これから愈々先生の光彩ある事業を話すべき順序であるが餘り長くなるから今回はこれで擱筆する。

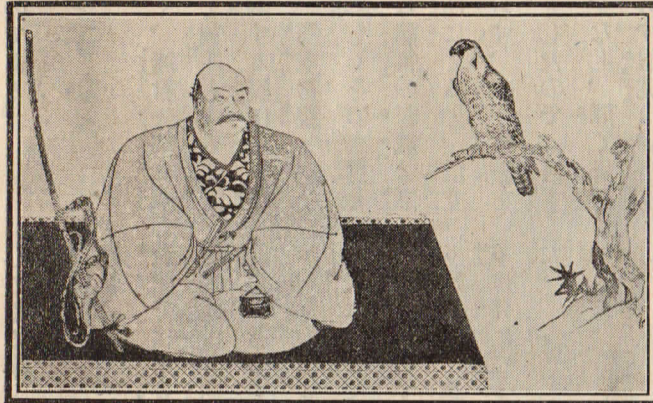
武田信玄の後世に遺せし影響

日本勸業銀行總裁 志村源太郎

甲州は自足の國

地圖で見れば甲州は峰巒重疊して、仕樣のない國のやうに思はれるが、足一たび其の地を踏んだものは、甲州が存外豐穰の地であることに氣注かう。成程甲州は山國で、四周には高山が取り繞らしてゐるが、甲府附近は一帶の平地で、釜無、笛吹の二川その間を灌漑し、所謂『甲府平』をなして居る。且つ一帶に土地が高いので、空氣が乾燥して暑氣も強く寒氣も甚しからず、大氣の流動が山脈に遮ぎられる爲めに風害は少ない。氣候既に恁くの如くであるから、米作は甚だよく、綿も出來れば煙草も出來る。その地積は素より廣くはないが、地味が膏腴であるから、葡萄を始め、柿、栗など何でも稔れる。果物は『甲州の八珍果』と謂つて施設さへ宜しければ富力に於いて獨立することが出來る。支那で云へば先づ四川省のやうな所で、經濟上自立することの出來る國柄である。更に軍略上の點から見ると、四圍には山があつて四方より侵略することは出來ぬが、北西は釜無川に沿うて信州の高原に通じ、南方は富士川に沿うて駿州の沃野に出ることも出來、形勝下一の觀がある。徳川氏の如き亦此の點に着眼し、武田氏亡滅後大名を封せず、天領として勤番を置くことにしてゐた。之に依つて之を見るも、甲州が如何に形勝の地であるかゞ分る。而して武田信玄は、實に此の地に據つて威名を四方に馳せたのである。

新羅三郎の後裔

予は素と甲州の出身であるが、幼少の時に郷里を離れたので、地理にも詳しくなく、また武田信玄に對する印象も甚だ深くない。均しく甲州とは云へ、予の郷里は都留郡の桂村である。都留は巨摩、八代、山梨と地勢を異にして、笹子峠及御阪山脈によつて他の三郡と劃られてゐるので、昔から或は相模につき、或は駿河に通ずると云ふ風で、甲州『國中』との關係が比較的に少なく、從つて機山公の影響感化も甚だ多くはない。それや此れやで予は深く信玄の事を知らぬが、折角のお求めなれば二三の感じた事共を話すことゝしよう。――前にも云つた如く、信玄は經濟上に於いては獨立し、軍略上に於いては要害の堅固な處を根據地としたのであるが、その祖先は新羅三郎義光に出て居る。義光の曾孫信義は以仁王の令旨を奉じて起ち、頼朝を援けて功を成さしめた人。爾後代々甲州に住んで連綿信玄に至つたのであるが、地の利を得てゐる爲めに四方より侵略されず、永年の間平和を保つことが出來たので、自然國用

武田信玄像（東京帝大史料編纂掛蒐集）

充實して外に展ぶるの力を養ひ得たのである。

信玄果して不孝の子か

信玄の事蹟は予が細說する迄もなく、諸君先刻御承知の事であらうが、貴誌の如く青年を對手とする雜誌に在つては、先づ第一にその人格に對する疑に就いて一言せねばならぬ。世間では一般に、信玄を親を逐ひ出した不孝者だと云つて居る。予は詳しくその事實を調べた譯ではないが、此の點に關する諸書の記載は區々であるらしい。普通に信じられる所によると、信玄の父信虎は性質狂暴であつたのみならず、次子信繁を鍾愛して長子たる信玄を廢嫡しようとしたので、信玄は常に自ら晦匿して人に及ばざる爲をなし、厚く姉聟たる今川義元に結んだ。それとも知らず信虎は、信玄の廢嫡を圖る爲めに今川義元を訪ふたが、板垣、甘利飯富等の信虎の狂暴を厭ふ面々が、義元に內通して信虎を抑留し、之をして甲斐に歸ることを得しめなかつたと云ふ。予は此の裏面には、種々面倒な事實が伏在してゐる事と思ふ。戰國時代の如く爭奪の甚だしい時代に在つては、反間苦肉の策が行はれてゐたのであるから、表面のみを見て直ちに判斷を下すことは出來ぬ。世間では信玄が信虎を放逐して自立したやうに云ふが家老達にも何か考があり、今川義元に於ても何等かの計畫があつて、終に年の若い信玄を擁立するに至つたが、その信玄が存外豪くて遂に名望を收むるに至つたと云ふやうな關係があるのではあるまいか。これは大に研究を要する點であらう。兎に角信玄自己の意思より出でゝ、簒奪を計つたものとは思はれない。當時信玄は僅に二十一歲で未だ今日の學生時代の年齡であつた。

經濟上の苦心と貨幣鑄造

信玄の武略の點に就いては、今更喋々するまでもなく、南の方駿遠二國を脅かし、北の方信州を戡定し、東北はるかに上州までもその兵威を逞ましくしたが、その用兵の巧妙神速なることは、當面の敵たる上杉謙

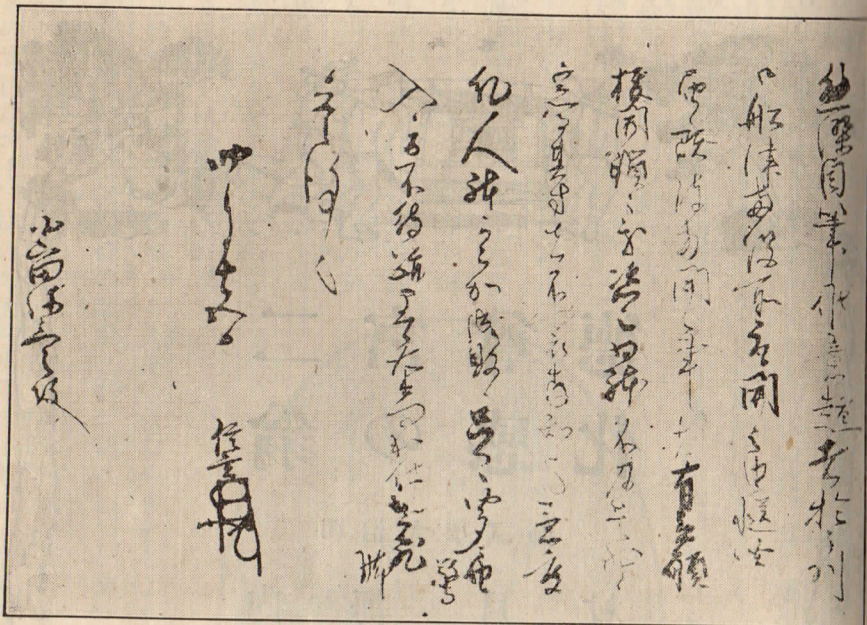
信と共に、當時に於いても第一流と認められてゐた。源平時代以來舊式の散兵戰を廢して隊伍式を用ひ、歩騎砲工輜重の區別を立てゝ切りに鐵砲を利用したる點などは、吾等が幼少の時讀聞した甲越軍記などを以ても判斷することが出來る。併し信玄は、啻に武事のみならず、文事にも心を致し、甲州の文明は彼によつて造られたと見る形跡が多い。彼の治水財政についての事蹟は、今尚ほ各方面に遺つてゐる。所謂『信玄堤』の構造の堅固にして能く治水の法に適したる如き、又所謂「大小切」の租税徵收法が用意周到にして民法上の要旨に適へるが如き如何に彼が偉大であつたかゞ分る。武を國外に用ゐんとするには、先づ國內を治めて內顧の患をなからしめねばならぬが、當時の英雄豪傑は、何れも此の點に意を留め、殊に經濟上には深甚なる注意を拂つてゐた。或る鑛山學者が戰國時代の英雄は皆鑛山に眼を着けてゐたと云つたが、實際その通りで、上杉は佐渡に、佐竹は出羽に、その他何れも金なり、銀なり、銅なりの鑛山を持つてゐたが、武田氏は黒川金山を始め國中諸所に金鑛を開いて盛に採掘をした。甲州金といふのは、甲州で鑄造せられた金貨に對する名稱で、『甲金』の一種には、圓形で、表面の周圍にボツ〳〵の突起があり、日本人の考案か何うかと思はれるやうなのがある。これは形が圓いのみならず、緣に突起を現はして摩滅を防ぐなど、貨幣鑄造史上進步したる考案で、現今の金貨幣と同一であるのは大に注意すべきことであると思ふ。

武田信虎及び同夫人の畫像

信玄一人の力

英雄の燦爛たる事業の影には、多數の無名の英雄が潜んでゐて、それを扶成するのだとは一般の説であるが、如何程無名の英雄が多く居ても、眞に偉大なる英雄がそれを統一するにあらざれば、何等の效果が揚るものではない。信玄在世の時、甲州は日本六十餘州中の最强國であつた。彼が野田城上の笛聲に誘はれ、流丸にその生命を奪はれたと云ふ小説的事實の眞僞は別として、其死去以來武田氏の權勢は日に月に消磨して死後十年遂にその國家は亡びて了つた。甲州の强かつたのは武田氏があつた爲め、武田氏が强かつたのは信玄があつた爲め。信玄在世の時、勇名敵軍に振ひし馬場、山縣、内藤、高坂の徒も、彼一たび此の世を去れば何の爲す所もなかつたのを見ると、つまり彼一人が豪かつたのである。彼一人の力が多數の傀儡を巧みに操つて、自己の手足の如く働かしてゐたのである。これから推測すると、彼は單に武勇絶倫であり、才略無比であつたのみならず、德望の人心を牽くに足るものが有つたに相違ない。

火の裡に坐せる快川和尚

彼の德望はたゞにその在世の時許りではなく、死後に至るも人々より懷かしまれ、甚だしきに至つては今日も尙ほ神の如くに尊崇してゐる者がある。甲府の東二三里の所に惠林寺と云ふ寺がある。濃州の僧快川なるもの、國主齋藤義龍の不恭を憤り、甲州に來つて信玄に賴つたので、彼は之を惠林寺に迎へたが、彼卒して勝賴の代となり、天正十年春二月織田信長の爲めに滅ぼさるゝや、府内の禪衲は悉く惠林寺に逃れ、敗軍の士また秘かに此處に逃れたので、快川は之を匿して出さなかつた。信長は之を諜知して大に憤り、門下に薪を積んで四方より火を放つたが、快川は學徒と共に火焰の裡に坐し、『安禪未必須山水。滅却心頭火自涼。』と唱へて微塵も動かず、遂に糜爛して絶命した。これ禪の方面から見れば禪定であるが、他面に於いては信玄の德を憶うて、その國家の滅亡と共に自己をも滅却したものではあるまいか。それは兎も角、恁くの如き高德の僧に就いて、信玄はその智德を磨いたのであるから、武勇一片の豪傑でなかつた事は窺ひ知られる。

武田信玄の小山田彌三郎（信茂）に與へし書翰

死後の德澤全國に光被す

信玄の感化は單に一人、一鄕、一國に止まらず、施いては日本全國に偉大なる影響を與へた。——と云ふのは、後年六十餘洲を統一せし德川家康は、始め甲州と戰つて苦心の間に其の武を習ひ、終に功成つて幕政を布くに當つては、武田氏の舊制を參酌したのであるから、つまり信玄の德澤が甲州と云ふ小さい範疇を超えて、日本全國に行き渡つた譯である。元々家康は賢明なる人であつたから、十分信玄の偉かつた事や、その政治の善かつた事を知つてゐたので、勝賴が滅んだ後心を盡くして武田の臣下を招致し、頻りに之を登用してその才を展べしめた。一例すれば夫の金山奉行として有名な大久保長安の如きも、矢張り甲州出身であつた。實際、三百歳の太平を致した德川幕府の政治は、その基礎を三州の名主の制度と、甲州の信玄の制度とに置き、それに多少の改變を加へたものに過ぎなかつたのである。甲州人が今尙ほ信玄を追慕し、その名を呼ぶ時必らず『公』の字を附するのは、以て其の德澤の百世に及べることを證するに足るものである。

二宮尊德翁の感化

明治大學講師
內海月杖

熱烈な苦學と非凡な努力

同じ國ではあるが、僕の郷里からは少し離れてゐたので、僕等は幼時に於て直接に翁の事業については何の知る所がなかつたのである。一體、報德社の事業といふものが、その頃はまだ、翁の郷里のゐまはりにも殆ど發展してゐなかつたのだから、あの邊のものにしても、翁の事業が、果してどういふものであつたかといふ事をよく意識してゐる人はごく少なからう。たゞ何だか知らないが、貧苦の中から、えらい人になつたといふこと丈けは、ぼんやりみんなの耳に入り、みんなの頭に宿つてゐて、それが、ある一種の偉大なる感化を、青年時代の僕の上にまで與へてゐたのである。

して、それは、翁のあの熱烈なる苦學と、あの非凡なる努力といふことの二つである。

僕等の田舍の總役

何所でも同じことだらうが、僕等の田舍には、よく

總役といふことがある。何か、ある事變の起つた時、村中總出で村の爲に勞役するといふのだ。僕の郷里は山村で、冬になると、よく山火事がはじまる。そこで例の總出で、その消防につとめるのだが、さういふ場合に、中以上の家では、大抵人足を雇つて出す。

これを、僕などは、その所謂中以上の家に生れたものだがいつも自分で出かけさせられたものである。そして十三四位の少年で、けはしい山の上で火がゝりをするのだから、さう巧くは働けないが、それでも、何うかして、一人前のはたらきをしよう、今出來なければ何か皆の雜用を引き受けようと勤めたものである。その心の守となるものは、外ではない、あの尊德翁が十二歳の時酒匂川の土手普請に出て、一人前の仕事ができないからと云うて、家に歸つてから毎晩、草鞋を作つては、外の人々に捧げてゐたと云ふ美談そのものであつたのだ。

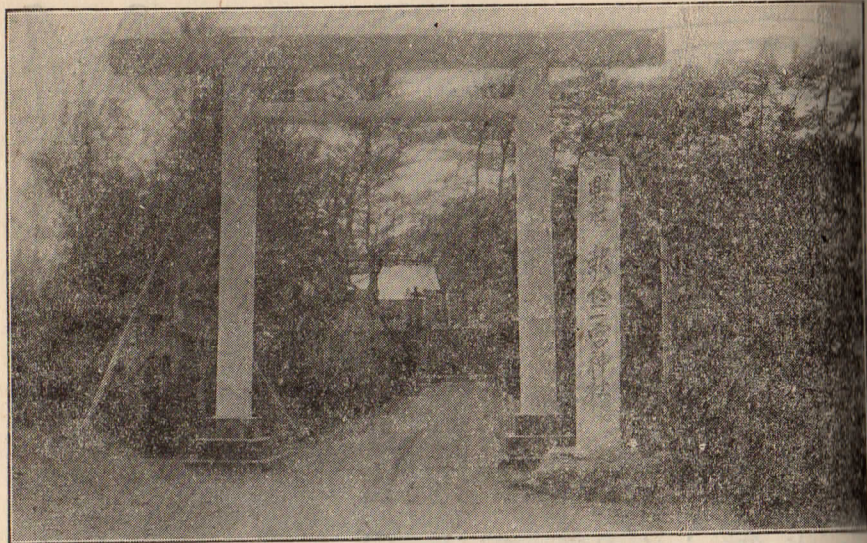
二宮尊德翁像

油を買つて讀書する

併し、それ以上のゆかしい感化を與へてくれたのは翁の苦學のあとをしのぶといふ事からであつた。翁が十六の時、父母に死に別れ、一家離散の厄にあつて、伯父萬兵衞の所に養はれた當時、伯父がやかましくいうて、讀書をさせないので、深夜になつては讀書する。それを又、油が損だといふて差し止める。そこで、家業の餘暇に、やれ地を開拓して油菜を植ゑて、その種子を賣つて油を買つて讀書する、それをなほ更にやか

ましく云はれる。已むなく一旦、寝た風をして、人の寝しづまるのを待つて、そつと起きて、着物で行燈を掩つては、光をぬすんで讀書したといふ話は、まるで古英雄の立志傳でも聽くやうな心もちで、ひどく僕等の頭に、そのおそろしい印象を與へたものである。僕自身などは、親の方から勉强をすゝめらるゝ方で、そんな必要はなかつたが、丁度僕の友人に、家で讀書をやかましく云ふのがあつて、翁そのまゝのいき方をやつたものがある。が、僕は、その友人の手傳をして、裏の竹藪のがけ道を開いて、二人で一生懸命に油菜を丹精した。ばかなもので、するともう、自分等はまるで立志傳中の人となつたやうな氣がして、菜の丹精をしながらに、天下國家を論じては、大得意になつたものだ。當時、僕は自分の境遇の自由なのが、却つてうらめしく、漫ろに友人の上を思うては、自分がその型をやり得ないのを悔んだことがある。で、何でも冬のことで、ある晩、殊更に、夜中に起き出て、そつと行燈に着物をかけて、眞面目くさつて、机に向つたところを、父に見つけられて、おこられもし、笑はれもしたことがあつた。

三本の長い燈心

兎に角、翁のその苦學のあとを忍んで、その道を追ひ進むといふことは、僕等一般の上に渡つてのことで、僕等はその爲に確かに或るゆゝしい感化を受けたものであつた。僕は、翁について、猶一つ、僕の父の僕に、もの語つた一小話を記憶してゐる。父がまだ十三四の頃、人のすゝめで、翁の敎を受ける爲に翁を訪問したのださうだ。父は、ひどい貧苦の中に成長して早くから一家の生計に任じてゐたので、何うかしてその貧苦から離れる爲に、翁から勤儉の敎を受けようと思つておとづれたのださうだ。翁は來意を問うて、まあ一晩ゆつくり泊つて行けと云はれた。其のまゝ泊めて貰つたが、別にお話もない。それでゆつくり寝て、朝起きると、翁は父を見て、笑ひながら『お前は迚も節儉のできる性質ではない。まあ、何でも人より餘計

縣社報德二宮神社の光景

かせぐやうにするがいゝ』と云はれる。何でそんな事を云はれるのか、父はまだ氣がつかないで、ぼんやりしてゐると、『これを御覧』と云つて、父の寝た枕もとの行燈を開けられる見ると、燈心が三本、長いのが入つて居たさうだ。父もはじめて氣がついて『あゝしまつた』と叫んだら、翁は口を開いて、からからとうち笑はれたさうだ。其時の翁の顔と父の顔は何んなであつたらう。

翁の匂ひと光彩

僕はこの一小話を通して、翁を思ふと、翁は何うも今の報德信者の傳へるところの翁とは、大分變つて居られた人のやうに思はれてならない。云ひ換へて見ると、實際この世に生きて居られた時の翁は、今日、一般の人々が考へて居る翁よりも、もつと人間らしい、生々とした光彩と匂ひを有つて居れたのではあるまいか、杓子定規の勤儉一流の眼鏡で、翁のにほひや光彩は、よほど見下されて居るのではあるまいか但し、自分には全く柄にないことであるから、つひ研究したこともなし、何とも斷言することは出來ぬ。

幕末の志士齋藤彌九郎

山又山の佛生寺

内閣書記官長　南　弘

我郷里たる越中は、海の國で、北は富山灣に面し、東西南の三方は山を以て圍まれてゐる。東南の方信濃、飛驒を境するものは、立山山脈で、西の方能州加州を劃るものは寶達山脈である。その寶達山脈の蜿蜒たる中、谷から谷と嶺を縫うて、部落を成してゐる小村は佛生寺といつて、『酒屋へ三里、豆腐屋へ二里』の寒村僻落ではあるが、幕末の劍客で又志士として、その名高き齋藤彌九郎善道は、實に此の村の字脇谷内といふ部落に呱々の聲を擧げたのである。吾輩は矢張此の村の生れで、子供の時には耳に瘤の出來る程『齋藤彌九郎』といふ名を父老から聞かされた　吾輩は勿論翁を知らぬが、その末弟は今日尚存命してゐて、吾輩の父親などの所に能くやつて來たからその容貌を記憶してゐるが、翁も矢張り此末弟と同樣に、身長骨大、狀貌魁偉で、一見人をして壓迫さるゝが如き感を起さしめたといふことである。同家は富樫齋藤の末裔だといふが、詳しいことは知らない。たゞその狀貌には、一脈の High-bread が身中に通へることをば想像せしむる。

大名行列を見て憤を發す

齋藤彌九郎、名は善道、字は忠卿、晩に篤信齋と號した。父の名は新助、兄弟は七人あつたが、翁はその長子である。家は世々農を業とし、且つ獵を以て生計を補つてゐた。翁は十歳の時、始めて村の僧侶に就いて句讀を受けたが、十五の時に國を出奔した、出奔の動機については色々說があるが、吾輩が子供の時聞いた所によると、翁は或る日高岡の城下に出て、鹵簿肅々たる大名の行列を見たがその瞬間に功名の心が強く頭腦を刺擊して、『寒村僻落は以て丈夫の志を伸ぶる所に非ず』との豪語を發せしめた。いよ〳〵出奔と決心しては矢も楯もたまらず、直ちに家を脫して倶利伽羅の嶺に登り、その不動尊を拜して誓つて曰はく、『我他日の志を達するに非ずんば、再び此の地を踏むことあらじ』と、道を間道に取り、飛驒越へをして、江戸に抵つた。その時翁の持つて往つた路銀は僅かに一分であつたが、板橋驛へ着いた時には二十文しか殘つてゐなかつたので、燒芋を買つて飢を凌いだといふことである。

齋藤彌九郎の肖像

書は劍を擊ち夜は書を讀む

かくて郷人土屋某を便り幕府旗下の士能勢祐之亟の從者となり、當時劍法を以て鳴れる岡田十松の門に入

り、始めて撃劍の術を學んだ。併し晝間は息子に素讀を教へたり、雜役に服したりしてゐたから、勉强する暇といふものは殆んどない。これでは駄目だと、翁は夜も眠らず机に憑つて書を讀み、睡魔が襲つて來ると拳骨を額に當てゝ机上に俯したので、額には拳骨の痕が殘つて痣のやうに見えた。又冬季には寒さに堪へかねて立ち上り、竹刀を把つて厩の柱に向ひ、伐り反へしといふのを試つて暖を取つたが、度重なつて柱が減殺し、半程から折れようとしたことが屢々であつた。能勢家の會計役は非常の節儉家であつたが、翁の熱心と忍耐とに感心して之を止めなかつたのみならず、遂にはその女を以て翁に娶はした。これが室堀氏で、よく內を守つて、翁をして後顧の憂なからしめた賢婦人である。

江川坦菴と肝膽相照らす

後入塾して益々劍法の蘊奥を究め、又經義を赤井嚴三に、西洋砲術を高島秋帆に、馬術を品川吾作に學ぶ傍ら、平山子龍、清水俊藏等に兵法の事を問うて、拮据黽勉、夜を晝に繼ぎ、寒暑一褐殆んど十五年の星霜を閲した。後師十松の死に會し、門弟子の推薦によつて其の後を嗣ぐこととなり、文政九年を以て飯田町に道場を設け、劍術教授の業を始めた。是より先き伊豆韮山の代官江川英龍も、亦十松の門に在り、翁とは意氣相投じてゐたので、代官の職に就くや否や翁に囑するに內外改革の事を以てした。翁はその厚意に感じ、暫らく英龍の手代となつてその屬吏を鼓舞し、大に勤儉の風を興し、屢々管內を巡視して惰民を教誡し、農業を勸め、凶歲に備ふる等、事大小となく身を以て傭使の任に當り、英龍を助くること尠くなかつた。天保八年大鹽平八郎の兵を大阪に擧げし際の如き、翁は英龍と謀り晝夜兼行を以て大阪を達したが、その時平八郎は既に捕吏の圍む所となり、火を家に放つて焚死した後であつたので、遺憾ながら空しく歸東したが、平八郎の殘黨が英龍の管下たる甲、武、相の三州に潛匿してゐるとのことで、翁は英龍と共に身を刀劍商に裝ひ、微行してその罪跡を探つたことがある。天保九年、不幸にして飯田町の道場が類燒したので、三番町（今の靖國神社のある邊）へ再築して、授業を續けたが、此の土木は英龍の助が多いといふことである。

水戸烈公に知らる

天保九年十一月には水戸齊昭公の召を受け、小石川の邸に於いて拜謁し、合力扶持を給せらるゝこととな

つた。同十二年五月、武川德丸原で幕府の洋式銃隊演習のあつた際、翁は江川英龍の部下に在つて、野戰砲の打方をした。超えて八月、水戸の弘道館が新築落式して、開館の典を擧げらるゝ時、翁は召喚の命を拜し舍弟齋藤三九郎、門人百合元昇三、細田泰一等を率ゐて水戸に赴き、數日の間弘道館に昇降して公の詞賞を拜した。弘化元年、齊昭公の駒込の邸に幽閉せらるゝや、翁は扶持を放たれて怏々として娯まず、室堀氏酒飯を調へて翁に羞め『何をくよ〳〵なされまする。人間には七轉び八起きと申すことがあります。先づ一杯召上つて、氣をお晴らしなさいませ』といつたので、翁は始めて襟懷を解いた。間もなく水戸の家臣武田耕雲齋、吉成又右右門等、主君の爲めに寃を雪がんとして脫藩し、翁を訪ねて謀を訪うたので、翁は之を內藤新宿萬屋彌三吉方へ潜匿せしめた。かくとも知らず齊昭公は兩人の行末を氣遣ひ、自ら書を裁して翁に賜ひ、兩人の捜索を命ぜられた。後耕雲齋等が閣老水野越前守に對し、書面を出して水戸侯の寃を訴へたので間もなく齊昭公は幽閉を解かるゝに立ち至つた。

德川齊昭（烈公）肖像

醉漢に扮して罪人に近づく

その頃幡崎鼎といふ人があつて、長崎で蘭學を修め頗ぶる海外の事情に通じてゐた。後江戸に來つて蘭書を飜譯し、水戸侯の抱となつてゐたが、長崎で國禁を犯したことが、發覺して水戸侯へお預となり、後勢州菰野藩へ預け替となつて將に護送せられんとするに際し、江川英龍は幡崎の志

のある所を知り、金を贈つて囚情を慰めんとし、之を翁に一任した。是に於いて平翁は身を土人の姿に變じ、その後を追つたが警護嚴しくて近づくことが出來ないこれでは叶はぬと、翁は一足先に往き、神奈川邊を徘徊してゐると、彼方から囚駕がやつて來た。折柄の大雨で、駕は止まつて茶店で憩うた。翁は好機逸すべからずと、泥醉漢の眞似をしてよろ〱と蹌踉げ、駕に衝當つて中へ手紙と金とを投げ入れた。警護のものは去りとも悟らず、叱して之を去らしめた。後英龍之を聞いて大に喜び『卿でなければ迚も出來ぬ仕事だ』といつて感歎した。

劍隊野戰の實地演習

十松の歿後、同門の士武田彥九郎、藤田虎之助等、皆翁に師事したので、翁の名聲は天下に聞え、弟子の數は甚しく殖えた。列藩爭うて之を延き、或は之に祿せんとしたけれども、翁は悉く固辭して之を受けず、唯だ出入をして扶持方を受くるのみに止めた。その頃交友頗ぶる多く、渡邊華山、高野長英、佐久間象山、吉田松陰、賴三樹三郎、齊藤拙堂、大槻盤溪、橋本佐內の徒皆翁と往來して當世の務を談じた。翁は嘗て水戶、越前、長門三侯の殊遇に感激し、屢々時事策を獻じたが、その擊劍隊組織に關する獻言は、當時に在つては進步したものであつた。安政三年四月五日、翁は小石川の水戶邸に於いて劍隊野戰の演習を試みて公の謁覽に供したが、その法は兵を兩陣に分け、劍隊銃伍を以て正兵に充て、突騎長槍を以て奇兵に充て、對抗して戰に擬したのであるが、號令嚴命にして進退意の如くであつたので、公は歎稱して『海內の兵皆愢くの如くならば、外侮も亦憂ふるに足らぬ』といひ、自ら報國の二大字を書して、刀劍馬具と共に之を翁に賜はつた。之蓋し我邦に於ける三兵對抗の嚆矢であらう。

殖產興業にも力を竭くす

翁は獨り武事に心を致したのみならず、殖產興業の事にも志を寄せた。嘗て二宮尊德と議する所あり、武州代々木村に土地三千三百七十五坪を購ひ、精力を盡くして之を開墾したが、數年ならずして茫々たる荒野は一大茶園と化した。翁は鄕里に在る弟新助を諭して茶園を開かしめ、山地には漆の木を栽ゑしめたが、その種子や苗木は皆自から之を求めて鄕里へ送致したと言ひ傳へられてゐる。文久二年毛利元德公は狩獵の序でに翁を代々木の山莊に訪はれ、諮るに時事を以てしたので、翁は胸襟を披いて陳辯した。公は翁を信ずることが餘程深かつたと見えて、勇士を四方に募ることを翁に託したので翁は砂村の邸に移つて門生を敎育し、勇士組と號して之を長州に送つた。

彰義隊奮戰の圖（上野彰義隊墓所に揭げし圖額）

彰義隊の使者を叱す

明治戊辰の變に、官軍が三道より並び進んで江戶に薄るや、德川氏の臣屬は相率ゐて上野寬永寺に據り、翁を延いてその節制を受けんとした。翁はその使者を引見して容を改め『卿等の一擧一動は天下の治亂に關する抑々卿等の志ざす所は、何であるか、主家を復すると云ふか。德川氏は恭順謹愼して恩典を冀つてゐるが、天怒未だ霽れざれば今後の事は逆じめ計られない今卿等にして眞に主家を念ふの

心あらば、宜しく駢首屠腹してその屍を積み、上は以て主家の罪を贖ひ、下は以て臣子の分を盡さねばならぬ。卿等若し恁くなさば、老夫亦た卿等と倶に死して厚誼に報いよう』といふと、使者は驚いて『御高說御尤もで御座る、今一應歸つて再議を致しまする』と歸らうとすると翁は言を厲しくして、『事既に爰に至る、何ぞ再議するの暇あらん』といつて、歎息之を久しうした。

火中に跳入つて書類を取出す

明治元年八月徵命あり、徵士會計官判事試補を拜したが、九月會計官權判事を拜して、大阪に在勤することとなり、翌年廢められ、更に造幣局權判事より造幣允に轉じた。然るに十一月四日、造幣寮に火災があつたので、翁は驚き馳せて之に赴いたが、火は既に一面に廣がつて手の附けやうがない。僚屬を呼んで『公文書を何うした』と聞くと、『火の廻りが早くて出すことが出來なかつた』と云ふ。翁は一語をも發せず、奮然身を挺して火焰中に入り、簿書貨幣等を提げて出て來たが、頭髮は燃え、顏面は燒け爛れて、普通の人ならば卒倒もし兼ねまじき重態であつたが、翁は毫も屈せずして力を消防に盡した。これ蓋し簿書を失へば會計の跡を徵するに由なく、疑を殘すの嫌があるので、奮勵して此の擧動をなし、僚屬に會計の忽諸にすべからざることを示したものである。後火傷癒えて鑛山大佑に轉じ、疾に罹つて東京に歸つたが、枕が竟に上らずして、四年十月廿四日を以て卒した。墓は小石川の昌林院に在る。

人材多く翁の門に出づ

翁は膽大にして、果決慷慨、すこぶる氣節を尙び、業を授くる門弟子に接すること甚だ嚴格であつたが、その門には多くの人材が輩出した。熱心さもまた無比無類で、木戸孝允、山尾庸三、渡邊昇、井上勝、楠本正隆、關口隆吉等は、門弟三千の中最も名の聞えたものである。

越前の誇り橋本左內先生

學習院教授　有馬祐政

序言

余が鄕國越前は京畿に近く且つ北國の關門たるを以て、古來歷史に關係する所が多く、隨つて人物も少なからず輩出して居る。武將には瓜生保、朝倉義景、柴田勝家。藩主には結城秀康、松平慶永、間部詮勝の諸公。武臣には杉田壹岐。僧侶には越知山泰澄、永平寺道元、總持寺瑩山、平京寺功存、香月院深勵、專信院徹周。醫家には大月壽齋、三崎道庵、奧村良竹、半井仲庵、笠原白翁、橋本綱常。國學には橘曙覽。漢學には伊藤錦里、淸田儋叟、力丸東山、吉田東篁。書家には曾我蛇足、岩佐又兵衞。工藝には明珍小左衞門、出目吉滿。相撲行司には吉田豐後守追風。音樂には桃井幸若丸等最も著名である。然れども未だ天下の耳目を一身に集注せしめた程の俊傑は出て居らぬ。然るに近世に於いて、我が景岳橋本左內先生の出て來られたのは、我が越前をして大光彩を放たしめ、越前人をして、大なる誇を得しめたのである。越前の代表者として眞に適當の人であると申さなければならぬ。

家庭

先生の家は本桃井氏より出づ、桃井氏は足利氏、新田氏とその源流を同じくする名門である。兵部少輔義胤はその氏祖にして、八代目の直常豪勇を以て著はれて居るが、その子直安幼名幸若丸叡山に在つて一種の音曲を創作した。之が幸若の音曲である。叡聞に達して菊桐の御紋を賜はる。後越前に住した。其子孫永く丹生郡西田中の庄に居り、徳川氏の幕臣として祿を與へらる。之に四家あり、彌次郎系、八郎九郎系、小八郎系、少次郎系とす。而して少次郎系の長徳に至つて、慈母の命により其の生家橋本氏を冒して、幕府の醫員西玄甫の門に於いて外科を學び、名を玄貞と改め、元祿元年越前侯に奉仕したのである。五代を經て長綱に至る。名は琢磨、通稱彦也、海量又發陳堂主人と號し、又外科醫を以て重用せられた。その夫人梅尾は坂井郡箕浦大行寺といふ眞宗大谷派の寺の住職靜境の長女であるが、其の寺よりは先に一代の名僧香月院深勵を出だしたのである。又母系は同郡同派本莊村福圓寺にして、祖父賢珍は性豪俊志義烈、深勵と莫逆の友であつた。長綱は本と田代大膳大輔信綱の後裔道玄齋春綱の第三子で、君命により其の親族橋本氏に養はれた者である。其の人と爲りは俊爽にして快活、能く警語を以て人を訓誡し、又武事を嗜みて常に氣節を重んじてゐた。醫術にては極めて斬新なるものを取り、乳癌截除術等を唱へて西洋治療を行ひ、又率先して囚人の屍體解剖を行つた。卓見あり奇骨ある人であつたのである。夫人は性質温良なれども剛毅果斷、事理に明かにして忍耐力に富み、良人の遊學を賛け家政を治めた賢夫人である。左内先生は實にその間に出來た子である。而も長男である。父の奇骨卓見、母の温厚果決、集つて先生の氣魂を爲し、心神を造つたのである。更に溯れば桃井、田代兩家と、大行、福圓兩寺との感化遺傳が、その源泉を爲したこと、亦疑ふべからざる所である。

修業

先生は天保五年三月十一日、福井城下常盤町に生れられた。名は綱紀、又長富、字は伯綱通稱佐内、景岳又藜園と號す。就中左内の名最も人に知られ、親達は勿論、友人知人皆左内を以て稱して居つた。幼より警敏で、本を讀むことが好であつた。七歳にして漢籍及諸文を福井藩醫舟岡周齋、妻木敬齋、勝澤一順に學び、書を藩の祐筆久保一郎右衛門、萩原佐一、小林彌十郎に習つたのである。翌年更に文を藩儒高野眞齋に學んだ、皆朱子學者である。十歳の時『三國誌』を通讀し、能く之を解して少しも誤る所がなかつたといふ。十二歳の時、又藩儒東篁吉田悌藏について經史を學び、これより識見大に進み、學問の面白味が餘程分つて來た。景岳といふ號も此の歳につけたので、これは宋の岳飛(武穆)を景慕したからである。劒道柔道も習ひ出し、更に藩の醫學所濟世館に入つて漢方醫を學び初めた。翌年、即ち十三歳の頃には、詩文も上手に出來、その上診察の補助をする樣になつて、餘程父の手傳をしてゐた。分けて手術が得意であつた。又當時未だ行はれなかつた所の患者日記を作つて居た。その器用で、創見に富んで居つたとが分る。その頃吉田先生の母堂が腫物を患ひ父彦也君が療治せられてゐたのを、或る時先生が見て、最早十分に膿んで居るから切開しませうと云つて、直樣手術をせられて忽ち快くならしめた。父君が其後やつて來られて何うだと尋ねられたが、實は先刻左内さんが手術せられて、この通り直つて了つたと云はれて、父君が二度吃驚させられたといふ話を聞いて居る。誠に天才と申さなければならぬ。十四歳には研學診療益々勉め、又詩文に習熟し、交友互に評隲し合つた。鈴木蓼處、矢島立軒が最も親しい間柄である。十五歳には同志と詩巻を編するに至つた。かの有名なる『啓發錄』も此の歳に出來たものなのである。

橋本左内肖像

遊學

十六歳の時、他郷遊學の念盛んにして、『身僻地に學ぶも未だ井蛙の見たるを免れず、大都の名醫に就いて知識を朗發するに若かず』と

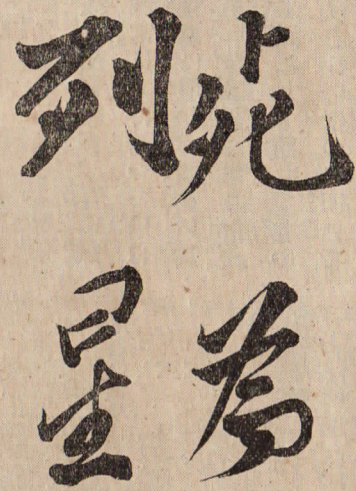
爲し、父の許を得て其の秋始めて大阪に出で、緒方洪庵について和蘭學及び西洋醫術を學んだ。藩主春嶽公之を聞き、特に使を遣はして其の篤學を褒賞せられたといふ。大阪に在ること三年、時々夜深うして乞食町に往きて診察し、研究の材料を得、又慈惠の志を成してゐた。又書肆より書を借覽して厚意を受けてゐたから、家人の病氣を治して之に報いたことがある。學問事業に熱心であつたことが分る。遂に藩より手當の金を賜るに至つた。是が抑々福井藩給費の嚆矢である。先生緒方塾に在るや、學修最も勉め、『扶氏經驗遺訓』、『病學通論』、ローセ氏『人身究理書』イフホルシング氏『理學書』等、數多の原書及び譯書を寫して居る。十八歳の冬、父病患の報に接して倉皇歸省して親しく病床に侍して孝養を盡され、傍ら診療に從事せられた。或る時梅毒患者があり、先生は之に對して局部切斷術を施されたが、それを父君が見て居られて、非常に感嘆滿足せられて、『倅の技術既に此れまでに達した。これで全く安心である。』と云はれ、死すとも更に恨む所なしとの意を漏らされた。留學はたつた三年であつたけれど、得られた所は頗ぶ多大であつたことを知るべきである。而して先生の天才と熱心とは愈々發揮せられたと云はねばならぬであな。

橋本左内の筆蹟

家督相續

かくて父君は十九歳の十月八日に病歿せられたので、先生はその翌年家督を相續して醫を業とし、且つ醫員に列せられた。僅に十九歳の青年である。而かも父さへ安心せられたる誠に立派な醫師であつたのである。翌年は專ら家に在つて業務に勉められ、種痘にも出精して藩主から慰勞の辭を賜はつた。翌年廿一歳、技術學問未だ足れりとせず、公許を得て二月

更に江戸に出で、先づ坪井信道の塾に遊び、ついで杉田成卿の門に入つたが、成卿一見直にその學才に感じて深く愛重し『濟世三方』等の校閲を託するに至つた。此くの如くして蘭學、醫學を講究し、又英學、漢學をも修習し、『鈴韜雜錄』を著はした。漢學は鹽谷宕陰に就いたのである。此に於いて學大に進み、識大に高まり天下の諸名士と交を締び、藤田東湖、佐久間象山、藤森弘庵、林鶴梁芳野金陵、羽倉用九、安井息軒等、皆先生の知人である。藩の參政鈴木主稅江戸に在り、一日東湖に會して天下人材に乏しきを嘆ぜしが、東湖然らずと爲し、『貴藩の橋本左内、年壯にして學才識見共に備はる、何ぞ登用せざるか』と云はれて大に驚き、直に同僚中根雪紅と謀つて先生を藩主に勸め、藩主より學業上達の褒詞及び印籠を賜はり、遂に廿二歳の七月公命に依つて歸國した。先生の修學は多方面に亘り、而も大阪に江戸に、天下の大宗師について十分に致されたのであつて、刻苦勉勵實に非常非凡といはざるを得ない。既に非常非凡の才幹あり識見あり、加ふるに此の修學を以てす、天賦に加ふるに人力を以てす。其の活動事業の亦非常非凡英雄的なることは自然の結果であろう。

(安政五年秋病中の書)

南洲と左内

藩主春嶽公賢明にして能く人を用ゐらる。主稅、雪江亦一代の俊逸である。而も此の二人の推薦にかゝる左内先生を拔擢せらるゝ、何ぞ躊躇せられよう。十月醫員を免じて御書院番となさる。誠に異數である。母君驚きて父の志に負くものとなし、『どうして辭さないのか。』と叱責し、聲色共に厲しかつた。先生惶恐伏泣すること久しうして、後徐ろに君恩の深重なるを語り、身を國事に委するの志を述べられ、且つ特に弟を醫員に列し世業を襲がしめらるゝ旨を曰はれたので、母君は漸々色を和げられた。而して次弟綱維氏(時に十六歳)は航海術を志ざしてゐたから、季弟綱常氏(十一歳、維新後獨逸に學び、歸つて陸軍々醫となり、總監に進み、醫學博士となり、子爵に叙せられたが三年前に歿

した。)が後を繼ぐことに成つた。先生之より一身を君國に捧げて、單に越前の人たるのみならず、いはゆる『天下の士』となつて活動の時代に進み入られたのである。先生は十一月を以て江戸に出で、常磐橋内の藩邸に住し、竊に天下の形勢を察し、又四方の名士と交はり、徐々畫策する所があつた。十二月廿七日水戸藩士原田氏の曹舍にて、始めて西郷南洲に面會せられた。後特に南洲を訪うて國事を談ぜんとせしが、南洲は先生の容貌婦人の如きを見て輕侮し、多く語らなかつた。先生乃ち『足下秘する勿れ。』と一喝して、滔々所說所思を吐露したから、南洲は始めて先生の超邁なるを知り、益友を得たりと云つて、爾後深交を結び、互に氣脈を通じて爲す所があつた。南洲常に人に語つて曰はく、『吾れ先輩に於いては藤田東湖に服し、同儕に於いては橋本左内を推す、二子の才學器識豈吾輩の企及する所ならんや。』と、南洲既に豪傑なり、而して此の言あり。先生の大人物たることは之れに依つて明白である。

拔群の擢用

翌くれば安政三年、内外多難、志士天下に盡すべき秋である。先生齢二十三。六月藩主に随うて越前に歸り、七月藩學明道館に出勤して蘭學科掛となり、更に陞りて幹事となり、兼て御側役支配を命ぜられた。此に於いて政教の根本たる學事に對して更革を計ると共に、常に藩主の股肱となつて機密に參與し、獻議に、實行に、着々功を奏し、人皆耳目を聳動した。是が先生活動の序幕である。その間閑あれば、親切に二弟に教授しその成長を祈り、又青年を指導して其の榮達を望み、更に國内の古蹟を討査し、又鑛山に行きて實驗する所あり、電氣電信をも試みてゐた。翌年二十四歳の正月には、明道館御用掛兼學監となり、藩學を總理することになられた。學識、度量、材幹、徳望が備らなければ出來ぬ事である。然るに先生は泰然事に當り、洋書習學所の創立、兵法、物産、算術等の講習、武藝所の開始等、皆先生の胸中より出たのである。政教一致、文武不岐の標準により、人材を知り、之を養ひ、之を成し、之を取るの四綱を立て、宏遠濶大の規模を有すべしと主張した。其の外農政の整理、産業の振興、特に商業道徳の改善を力說せられた。而も藩主に勸めて身を以て諸有司を率ゆるやうに致した。此に於いて藩内に蟠まつてゐた宿弊頓に革まり、學政一致の端開けて、闔藩その風化に歸した。先生が斷々乎として事を爲すの勇氣と豪膽とは、實に欽仰に餘りあるではないか。

内外の經營

而して先生自ら人材を擢用して、各々その技能に應じて專門の學に就かしめ、又種々の職に任ぜしめた。現存せられてをる堤正誼男、佐々木長淳氏、瓜生寅氏、加藤斌氏等、既に故人となられた子爵由利公正、その弟三岡友藏、松田東吉郎等數多の人々は、直接間接に先生の指導誘掖を受けた者である。又親近の間柄なりしは中根雪江、村田巳三郎(氏壽)、長谷部甚平(恕連)、石原甚十郎諸氏である。中にも村田長谷部二氏は兄弟も及ばざる位で、始終相呼應し協同して藩政を釐革せられたのである。又先生は此等の人と相談して、横井小楠を熊本から招聘して實地の教育に任ぜしむることにして、藩内の事は最早治りがつく樣になつた。此に於いて先生決する所ありて、其の八月上府せられた。直に侍讀兼御内用掛を命ぜられ、主として當時の大問題たる幕府建儲の事、外交の事等に必死盡瘁することになられた。蓋し藩主の信任厚き極點で、此の主ありて此の臣あり、此の臣ありて此の主あり。此臣に依つて事を謀るべし、此主に依つて志を成すべしといふ默契があつた。而して天下の形勢は此の默契を最も有功にし、最も現實にせなければならぬ樣にさした。實に千載の一遇である。先生これより身を忘れ家を忘れて、日夜畫策經營する所あり、西郷を始め柳川藩老立花壹岐、水戸藩士武田耕雲齋等と交遊し天下の志士亦來り訪ふ者多く、先生は最早越前の人ではなくして、天下の人——大日本帝國の國士となられた。

松平春嶽公

公武一

先生二十五歳の安政五年は、井伊直弼大老となり、米露英佛蘭の五國と通商の假條約を結んだ。此に於いて海内鼎沸幕府の批政を論じ、井伊の專横を難ずる聲が高くなつた。

致論

而して正月、內地外交に關し、老中堀田正睦は幕臣川路聖謨・岩瀬忠震等を隨へて上京したから、先生は機逸すべからずと爲し、藩主の許可命令を受けて後を逐うて上洛、三條通の藩邸に寓し、名を桃井伊織又は亮太郎と變稱して、靑蓮院宮を始め、鷹司、三條等搢紳の諸家に出入して、『條約を定め貿易を開くことは、朝命を待ちて之を行ふべき事』を議して公武一致を謀り、又賢明、年齡、人望の三點よりして、一橋慶喜公を儲君に立て、內治外交を處理せんことを要とし、朝命を以て決定されんことを願ふたのである。協定略ぼ成るに垂んとして、忽ち奸臣の妨ぐる所となり、空しく退京することになつた。是が實に先生の大活動であつて、先生の生存は此の爲めであなたと云はなければならぬ程のことで、當時の苦心勞思は筆舌の及ぶ所ではない。嗚呼此の活動が先生を活したのであるが、又あはれにも先生を殺したのである。

抱負

先生は先づ慶喜公によつて公武の一致を期し幕府の威信を高うし、其下に國內事務宰相を置き、藩主春嶽公、又は水戸烈公、島津齊彬公を之に任じ更に外國事務宰相を置き、鍋島閑叟公を之に任じ、それ等の屬僚として幕臣川路聖謨・永井尚忠・岩瀬忠震、その外天下有名達識の士を選擧して各々才力を盡して謀議執務せしめ、又尾張齊恕公、池田慶德公を京都守護に、井伊直弼戸田氏彬を其の指添にし別に蝦夷の警衛に伊達宗城公又は山內容堂公を遣はし、その他小名有志の向を適當の處に擧用して、國家の富强を計るべしと爲し、略ぼ今の內閣組織同樣の意見であつた。それから、露米二國より牧師五十人程を借受けて學術稽古所を起し、物產の道を廣くし、又蝦夷の開墾を爲し航海を盛にすべし。外交については、山丹滿洲の邊朝鮮をも併せ進んでは米又は印度に領地を有すべく、且つ信あり、隣境あり、唇齒の國である所の露國と同盟するが大切である。但し當分は米國に依賴するが宜しい。其等の國から人を傭うて水軍陸軍を興すべし。交易は官府交易とし、阿片及び借地は斷り、港は堺、神奈川、函館、長崎とす。つまり日本國中を一家と見做し進んでは米を一個の東藩と見、西洋を我が所屬と思ひ、露を兄弟とし、而して近國を掠略するが、我が國を立派に獨立せしむる手段と考へて居られた。其の卓識

千住骨ヶ原に於ける景岳碑

豪膽、地球を掌上に弄し、世界を口中に投じたる概がある。蓋し先生の英邁聰明にして、多年の西洋研究によつて此の大抱負を胸中に畫き定められたものである。然るに先生の曰はるゝ通り、『廟堂上の小兒輩其邊の話出來候者到底一人もなし。此等の事夢にも見難く思はれて、感慨無量計らず落涙せられて、今後の形勢如何に成り行くや計り難し實に志士可憤惋之秋なり』である。將軍家定公薨ずるや、井伊大老群議を排して紀伊より家茂を迎へ立て、同時に反對の人々を幽閉致仕せしめた。又手を出す能はざらしめた。大老の俠量暴斷忠君の臣を容れず。憂國の士を用ゐず。況んや先生の如き抱負の大にして識量の廣き者をや。遂に先生は抱負を簡牘に記すのみで、眞に夢にも見られずに了つた。然し先生の抱負は、井伊の死と共に着々實現せられて今面前之を見る機運となつて居る。先生の卓見天荒を破ると謂つ可である。

悲壯なる最期

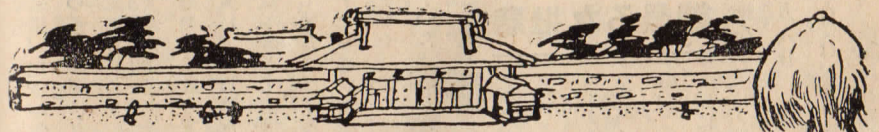
先生京都より江戸に還るや、尙ほ計畫する所があつたけれども、皆無功である。萬事皆夢となつた。十月二十二日夕突然町奉行所の役人が先生の曹舍に闖入して家宅搜索を爲し、多くの文書簡牘を收め去つた。翌日呼出になり町奉行所に出で取調べを受け、直ちに謹愼の身となつた。これより世を遠ざかつて、讀書吟咏自から慰んで居られた。安政六年、廿六歳正月八日、二月十二日、三月四日、七月三日町奉行所にて嚴重なる紏問を受け、事日に非となつた。然れども先生飽く迄も正義を持して應答し、從容自若男らしく論辯してをられた。十月二日評定所に於いて紏問せられ、終に傳馬町の獄舍に下された。尙ほ連日吟味ありしが、『所詮主命とは乍㆑申、公邊を不㆑恐と申事に陷り申候、此等も嘆ケ敷存候得共、何分御威光御嚴重にて、私共其御席にて辭を盡し兼候次第、何共不㆑堪㆓悲涙㆒候。先達て迄は度々心中も吐候へ共、何故か私申上候處には、御聞取模樣違候哉に被存候。』（十月六日記）と自ら記された通りで幾多の辯明皆水泡となり。或は仇ともなつて、本と五手の判決は遠島の刑に處することに成つてゐたが、大老老中の評定により一等を重くし、竟に死罪を申付けられた。實に安政六年十月七日である。嗚呼先生は此に無限の抱負、無限の活動力を有しながら、其日君侯より贈られた新衣を着し狹き獄室より出らるゝにも裃の折目正しく、獄吏も感ずる許り從容とし又肅然として到頭刑刄を受けて了はれた。享年わづかに二十六である。

獄中の詩作

先生獄舍にあるや、吉田松陰も亦在り、先生仍つて七絶二首を賦して贈られた。

曾聽㆓英籌㆒慰㆓鄙情㆒。與㆑君久要訂㆓同盟㆒。碧翁狡獪何限恨。不㆑使㆔春帆颿㆓太平㆒。

磊落軒昂意氣豪。夫君聞說膽生㆑毛。想看痛飲京城夕。扼㆑腕頽睨日本刀。

松陰も『留魂錄』の中に、『益々左內と半面なきを嘆ず、左內幽囚邸居中、資治通鑑を讀み、註を作り、漢紀を終る。又獄中教學工作の事を論ぜし由、獄の論大に其意を得たり。益す左內を起して一議を發せんことを思ふ。噫夫。』とあり、而して先生に後るゝと二十日にして、亦暴政の下に刑せられた。痛嘆の極である。

果斷に富みし井伊直弼

ドクトル・オブ・フィロソフィ　服部文四郎

(一) 恩人か罪人か

曾て歐洲に至りし時、山水の明媚を以て誇る瑞西に漫遊し、或る日バイロンの詩を以て有名なるチロン城の、碧色透るが如き湖面に映じて聳ゆるを望み、遙かに水清き琵琶湖上に聳ゆる彥根の錦龜城を想ひ起したことがある。それから後に歸朝して、一日杖を上野公園に曳き、恰もその當時、開會中であつた維新志士遺墨展覽會を訪ひ、その陳列品中に水戶の志士有村が、掃部頭井伊直弼の首級を得たといふ一口の、刄も處々こぼれてゐる大刀を見て、轉た感慨に打たれたことがある。實に大老井伊掃部頭直弼は、かの錦龜城主であつたのであるが、此の大刀の爲めに、櫻田門外の雪と消えたのである。

彼が櫻田の變に倒れた萬延元年三月三日から計へると、今は早や五十三年に成る。その間決して短いとは云へぬ。又その間には我邦も非常なる發達進步をして、所謂星移り物變り、世は封建の時代より、社會の事凡て公論公議によつて公平なる判斷を與へらるべき憲法政治となつた。聞く男子は一度柩を蔽へばその眞價定まると。然るに獨り直弼の毀譽褒貶は、今に至るも尚ほ定まることがない。或は直弼を以て我邦開國の元勳なりとするものがあれば、違勅の罪人なりとするものがあり、或は又幕府の奸臣なりとするものがあれば、誠忠の人なりと云ふものがある。而して其の井伊直弼の銅像は、横濱の開港を紀念すべく、神奈川驛の附近小高き丘上に立つてゐるけれども、その除幕式は曾て横濱開港紀念祭と同時に行ふことを許されず、その敷地また之を横濱市に寄附することも出來なくて、今尚ほ銅像は敷地と共に柵を繞らし番人を附して、警護せねばならぬ有樣である。

抑も井伊直弼とは如何なる人であらうか。毀譽褒貶の絶えない人だけに、玆に之を詳說細論することは困かしい。故に唯だ許されたる紙數の範圍内に於いて、偉人井伊直弼に就いて感じたる二三の重要なことを述べて見よう。

(二) 埋木舍裡の刻苦十五年

普通に井伊直弼の事を謂ふものは、彼が我國開國の元勳であると云ふ。固よりそれに相違はない。但しそれよりも直弼に就いて、先づ第一に取り立てゝ云ひ度いことは、彼が久しき間勤勉と忍耐とを以て修養を積み、終に一世の大事業をなしたと云ふ事である。

兎角薄志弱行の徒は、何事にも成功することの出來ないのは勿論であるが、失敗を自己一身の腑甲斐なきに歸せずして、責を他に讓り、或は境遇などに托けて自から自己を欺くものである。然るに直弼は如何なる境遇に在つたかと云ふと、彼は文化十二年十月二十九日、德川譜代第一の大藩、京畿の重鎭たる井伊氏第十二代直中の子として、彥根城槻館に於いて生れたので、實に立派な大名の子とは云ふものゝ、直弼は數多き兄弟の末の方に生れ、上には兄があつたのであるから、當時の社會制度の慣ひ、如何に大名の子でも一窮庶子たるに止まり、その誕生の如き左程重きを措かれず、

天下恐らくは誰れも此の人が將來彥根三十萬石の藩主となり、縱令井伊氏は世々大老職に上る家柄なりとは云へ、大老になるなどとは夢にも想はなかつたらう。

直弼十七歲の時、父直中卒して、その兄直亮が彥根藩主となつた。井伊氏の家憲には、庶子にして他家を繼がざるものは家臣に養はしめ、他家をも繼がず、家臣ともならざるものは、若干の廩米を給して窮居せしむと云ふ定めがあつたから、彼は父の死と共に槻館を去つて、その弟直泰と共に尾末町に在る公邸に移つて其處に住み、その邸を自から埋木舍と稱して、極めて質素なる生活を營んでゐたが、その間江戶に在る兄の直亮から召されて、弟直泰と共に江戶に下つたことがある。それは諸侯の養子候補者として見參に行つたので、弟直泰は旨く試驗に及第して日向の延岡侯に養はれ、一躍七萬石の城主となつたけれども、直弼はつまり落第して、再び悄然として彥根に歸つた。それから直弼の前途に大なる光明のあるでもなく、自身も望を當世に絕ち、世を離れ身を捨てゝ桑門に入らんとまで決心した位である。若し彼にして薄志弱行の徒であつたならば、自暴自棄して、その住ひたる公邸を埋木舍と呼んだ如く、埋木となつて世を終つたかも知れないのである。

然るに直弼は、望を當世に絕ちながらも、尙勤勉なる資性と絕倫なる精力とを以て專ら修養に努め、一朝事あらば其の本分を盡さんとの心止め難く、斷じて安逸遊惰に耽るが如きことなく、孜々として武藝文事を修むる事十五年。不思議なる運命の手が彼の頭上に下された。即ち藩主直亮の弟にして、その養子たる直元が想ひがけなく俄かに死んだので、彼は兄直元に代つて彥根城主の世嗣となり、始めて世に浮び出る事となつた。その後五年、即ち嘉永三年直亮卒去して彼はその遺領を襲ぎ、彥根城主となつて掃部頭と稱した。時に年三十六歲。それから安政五年四月二十三日、大老の職に上り、職にある事約二箇年にして、櫻田の變に倒れたのが四十六歲の時であつた。

之に依つて之を視ると、井伊直弼の一生の大事業は、

その大老の職に在つた約二年の間に成し遂げられたのであるが、彥根藩主となる迄には一窮庶子として十五年、藩主の世子として五年、合計二十箇年の歲月を經過して居る。此の歲月は實に、彼が一代の大業を成すべき準備時代であつたが、特に埋木舍に於ける十五年は、不遇の境に在つて自から棄てず、大に拮据黽勉した修養の時期に屬してゐる。實際直弼の大業は、此の修養に負ふ所が少なからぬのである。之を彼の從臣に見るも、後日彼の股肱となり腹心となつた長野義言を始め、犬塚、宇津木、三浦等は總べて此の埋木舍時代に於ける交友である。

若し直弼にして此の修養を缺いたならば、恐らく後日彼が如き難局に當り、深く事の理非曲直と、利害得失とを考慮して明快なる判斷を下し、天下の大立物となる事が出來なかつたに相違ない。獨り直弼に止まらず、苟も大事業を成し遂ぐる者は比々皆爾りで久しき間辛酸を嘗め修養を積み、或る機會に於いて之を發揮するものである。彼が私を顧みず、開國政策を斷行し幕嗣の決定を爲し、社稷の難局に當つて毫も恐れざりしは、蓋し偶然ではない。彼の一生は實に、修養が大切だと云ふことの活きた標本である。

彥根城（慶長八年井伊直勝工を起し廿年を經て成る）

（三）開國政策の決行

次に井伊直弼に就いて申さねばならぬ事は、開國政策と、幕嗣の決定と、それに伴ふ安政の大獄とであるが、此等は即ち彼の大事業で彼をして天下の大立物とならしめ、今に至るもその毀譽褒貶が定まらぬ所以

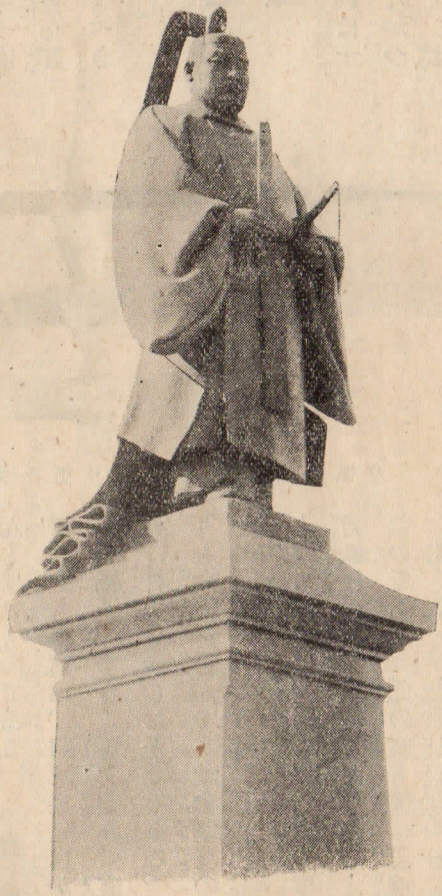
のものである。詳しい事は省くとしても、直弼畢生の大偉業たる開國政策の斷行については、是非共一言を費さねばならぬ。

固より開國政策と云へば、直弼が米使ハリスと談判して調印せしめたる安政五年の日米通商條約以前に、ペリー神奈川條約あり、開國政策に多大の貢獻をなしたるものは、直弼以外に阿部正弘、堀田正睦を始め、井上、岩瀨の徒あり。その功は直弼獨り之を恣にすべきものではないが、併し眞正なる意味に於いて、始めて我が國境の關門を開いた端緒は、實に安政五年の日米通商條約であり、而してそれに調印せしめて開國政策を斷行し、正面の責任を負うて立つたものは、誰あらう井伊直弼其の人であつた。

今日に於いてこそ開國は當然の事で、之を斷行したのが偉大なる事業であるとは想はれぬかも知れぬけれど、何分にも德川幕府三百年の間、頑固に鎖國主義を維持し來つて、太平の夢に醉ひつゝあつた時の事であるから、その鎖國主義を一朝にして破ることさへ容易でないのに、尊王論と攘夷論とを結び付けて、『外國と通商條約を締結するのは、我が神州の尊嚴を瀆すものである』と云ふ聲さへある時に當り、『尊王の聲に和して徒らに攘夷を唱ふるのは事情に通せぬ爲である。今日の情勢は、米國の請に應じて通商條約に調印する外に道がない、これ我國の利益である。』と云つて一身の利害を顧みず、國家百年の大計の爲めに、奮然猛進して開國政策を斷行したのは實に容易ならぬことで、斯かる果斷決行は、到底凡人の夢にも行ひ難い所である。

然るに其の結果は如何。或る者は『直弼は今日あるを知つて開國策を斷行したのである、彼の先見の明は驚くべきものがある。』と云ふが、それは直弼を過賞したもので、云ひ過ぎである。――但し直弼は國家永遠の利害を慮つて、開國策の止むべからざるを悟つたので、その結果は今日の開明の基を開き、終に我國をして世界列强の一に加らしめのみならず、人をして時に、『我國の開國が最う五十年早かつたならば』と想は

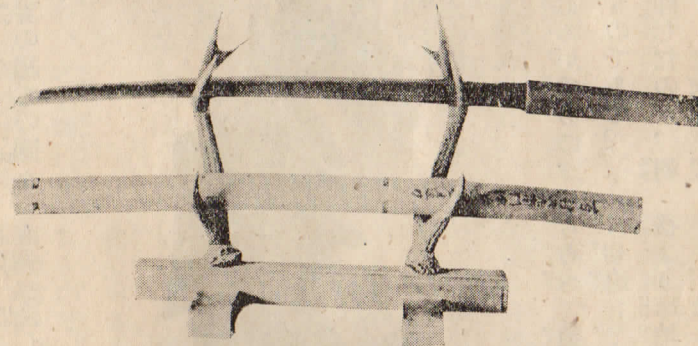
しめものである。實に我國の開國は、單に日本史上の一大事件たるに止まらず、又單に東洋史上の重大事件なるに止まらず、世界史上の一大重要事件である。何となれば、その輕からざる影響が、世界の總ての國々に及んだからである。若し之に反して、當時頑迷にも飽く迄鎖國主義を奉じて、諸外國の要求を容れなかつたならば、我國は今日果して如何なる運命に逢ふたであらう。考へても慄然とせざるを得ない。斯かる重要なる大事業を、凡ての事情甚だ困難なる日に於て、責任を一身に負うて斷行したのは、直弼の豪いところで、之あるが爲めに、彼は我國開國の第一の元勳と見做さるゝのである。

併し是に就いては『直弼が條約に調印したのは、朝廷の御許を得た上ではなく、寧ろ却つてその御意に反してゐる。故に彼は違勅の罪人である』との批難がある。若しそれが眞ならば、直弼は誠に輕からざる罪人であらう。但し段々事實の調査せられたものに由ると、直弼は決して勅命に背いたのではなく、國家の利益か

井伊直弼の銅像

ら考へて通商條約に調印するの外はないが、事情非常に切迫して、到底勅裁を仰ぐべき餘裕がなかつたから、後より事情を具して勅裁を得る心得で、自ら責任を負うて調印したのである。今日とは違ひ、交通不便なる

當時に於いて、極めて迅速を要することであつたから、大老の職責上止むなく斯かる緊急の處置を執つたのである。勅裁を經ざりしことは正道ではない。但し當時の事情と、直弼の地位とを考ふれば、強ち彼を罪人として取扱ひ、その功を沒すべきものではないと想はれる。

(四) 幕嗣決定と安政の大獄

幕嗣決定問題とは何か。それは十三代將軍家定が病弱で子がなかつたから、その嗣子の擁立について說が二派に分れ、一は水戶老公齊昭の子慶喜が、年長でもあり賢明でもあるから、之を立てゝ嗣子と定めやうと云ひ、他は十一代將軍家齊の孫紀伊宰相慶福が、血緣上家定に近いから之を立てやうと云つたが、直弼は後說を取つて慶福を世嗣とすることに定めた。然るに反對派の勢力は却々強く『直弼は專斷で幼主を迎へ、擁して以て威福を逞しうせんとするものである』との譏を受けた。併し之も事實は、將軍家定自から、慶福を嗣子とすることを望み、直弼は忠實に君命を奉じたまでである。又何よりも血緣を重んずる社會制度の當時に於いては、將軍に血緣近き慶福を世嗣と定めるのは、固より當然の事で、社會秩序の維持上寧ろ必要のことであつたのである。此の時も彼は急遽迅速以て事に當り、疾風迅雷耳を掩ふに遑あらざるの概があつた。

井伊直弼を斬りし有村次左衞の佩刀

然るに此れ等の事から、直弼の反對派は種々の策略を運らして、幕府の權威を失墜せしめ、社會の秩序を紊亂せしめんとしたので、彼はその未だ爆發せざるに當つて、早くもその重なるものを處分した。これが即ち安政の大獄であるが、その時、災を受けたのは多くは有力なる人々であつた。固より幕府の大老たるものはその職責上國政を斷じ、又幕府の權威を損じ、社會の秩序を紊すものを處分しなければならぬが、それが爲めに、彼は反對黨の憎むところとなつて不測の厄に會ひ、終に一身を亡ぼさざるを得ざるに立ち至つたのである。

(五) 一身の安危を忘れし國士

惟ふに井伊直弼の政治は峻嚴であり、且つその手段は辛辣であつたので、時には私憤的暴擧とも見える恐がないでもなかつた。但し、彼の時勢、彼の地位に立つて觀れば、一概に彼を奸臣なり、罪人なりと云ふ事は出來ぬ。今日尙ほ直弼を以て奸臣と目するものも、仇敵と云ふ考を捨て、偏頗な心を去つて、公平に且つ精細に、彼の心事に立ち入つて見たならば、恰かも直弼の反對者が國に盡すの赤誠を以て事に當つた如く、立場こそ違へ、敵味方にこそ分れたれ、彼も亦國の爲に竭すの赤誠を以て事を斷じたことを疑ふ餘地はあるまい。又爾う見るのが武士道ではあるまいか。

幼時より不遇の地に居て修養を怠らず、一旦地位を得れば世事日に非にして幕府の權威失墜し、強烈なる反對者に圍繞せられつゝ、尙ほ且つ果斷決行以て開國策を實現し、一は以て今日開明の基を開き、一は以て德川幕府の頹勢を挽回した直弼は、實に一身の安危や利害を顧みる暇なく、挺前して社稷の難局に當つたのである。その勤勉、忍耐、膽氣、節操は、誠に感ずべきものである。彼が德川幕府の末路に一異彩を放ち、德川氏の歷史に光輝を添へた事は、德川氏の初に井伊直政が燦爛たる光彩を放つたのと、極めて好い對照ではあるまいか。しかも彼一度倒れて後、三百年の餘威を有する德川幕府は、終に再びその衰運を回すことが出來なかつた。之によつて見るも、直弼一人の力が如何に偉大であつたかゞ知れよう。

※ ※ ※

錦龜城は今尙ほ巍然として聳え、琵琶湖の水は永へに淸く、岸に打寄する漣は、昔ながらにその上の歷史を囁いてゐる。直弼の生れた槻館の跡は、今樂々園となつて人の訪づるゝに任せてある。予は此の邊を逍遙する每に、いつも懷舊の情に堪えないが、そは獨り直弼を想ふ許ではなく、一身の利害を顧みずして、果斷決行社稷の難關に當る偉人を懷ふのである。何れの世にも欲しいのは、身の安危を忘れて國家の爲めに盡す人である。

捕卒と鬪ふ高野長英

高野長英の脱獄するや・姓名を變じて澤三伯と云ひ・鐵譯を以て口を糊す・事現はれて七人の捕卒青山の寓居を圍む・長英躍つてこれを斬殺し・返す刀に吾が頸を刺して死んだ・（藤田茂吉著『文明東漸史』挿畫に依る）

鴻儒森田節齋

宮崎榮雅

（一）閲歴の概略

森田節齋は大和五條の人である。五條は大和の南方に偏り、一目千本の櫻の名所を以て知らるゝ吉野山に近く、前には混々たる吉野の清流あり、西北遙かに葛城金剛の諸山を望み、南北朝以來、勤王の遺跡として名高く幕末には大和天誅組擧兵の地として知られたる所であるが、節齋は實に此の處で呱々の聲を擧げた。節齋の生れたのは文化八年であるから、今より略ぼ百年程前である。彼は十五歳の時、京師に出でゝ賴山陽の門に入つたが、文政十二年、二十三歳にして江戸に到り、昌平黌に入つて三年の間勉強をした。業を卒へて後、彼は四方を漫遊して學者名士に交はり、大にその知見を廣めた。

三十二歳の時、京師に出でゝ居を三條に卜し、帷を垂れて子弟に教育したが、その頃仁和寺法親王の恩顧を受けて、朝廷に接近することが出來た。節齋が感奮する所あり、秘かに心を王事に致したのは實に此の頃の事である。

節齋京師に在る事六年、文名東西に馳せて、方々の大名から頻に招かれたが、何れも固辭して赴かず、遂に郷里五條に歸つた。その頃、長州の吉田寅次郎（松陰）が、江戸に赴く途中、態々五條へ往つて節齋を訪ふた。吉田寅次郎が迂路を取つて彼を訪ふたのは、その

雷名を聞いて學風を慕つてゐたからであるが、此の點から觀ると、彼の學問性行は松陰の人物を感化したと見ても可い。

節齋には優れた三人の門下があつた。彼嘗て謂つて曰はく『我に三奇士あり、曰はく江幡五郎、曰はく原田龜太郎、曰はく吉田寅次郎』と。この中江幡に就いては聞くところがないけれど、原田はその後天誅組に加り、大義を唱へて難に死した。吉田は即はち松陰で、その門名士雲の如く、維新の際には國家の爲めに力を致した。

これ等の諸點から觀ると、節齋は直接の關係こそなけれ維新の宏猷を翼けた點に於いて、間接に非常な功果があつたと云はねばならぬ。彼が勤王の志を懷くに至つたには、故鄕、師匠、交友などの影響もあつたことは勿論であるが、彼の家系また之を然らしめた一原因とも見ることが出來る。

節齋の先祖は櫻井四郎と云つて、楠公赤坂籠城の際守戰に功を立てたが、負傷して吉野郡天川村に來り、其處に土着して數世を經た。節齋は實にその後裔なのである、彼が幕末に於ける隱れたる勤王家であつたのは、蓋し怪しむに足らない。

その後、姫路侯から禮を厚うして招かれたが、彼は官を喜ばず、居る事暫時にして辭し去り、中國の諸州を漫遊した。その間彼は心を學問の啓發に致したが、その最も力を濺くしたのは備中の倉敷で、此處では多年敎授に從事し、その門には少なからざる高材逸足を出した。

森田節齋の筆蹟（古川定次郎氏所藏）

（二）人格の片影

節齋は身の丈高く、骨骼大きく、姿態粗野にして毫も邊幅を飾らなかつた。その母曾て梅毒の害の恐るべきを説いたので、彼は其の訓を守つて五十に至るまで女色を近づけなかつたが、五十歳の時、始めて妻を娶つた。

妻は無該女史といふ、節齋の門弟である。幼少の時重い疱瘡に罹つて痘痕面に滿ち、その醜くさは無比であつたが、同時にその博學なることも無比で、儒學の外和歌、俳諧、發句を善くし、漢詩もまたその得意とする所であつた。結婚の當時、節齋は一絶を賦して女史に示した。その詩は、

二十歳耽レ文蓋奇。苦心唯有二節翁知一。
寄レ言門下孟光女。除二却吾儂一欲レ嫁誰。

と云ふのである、女史また之に和して一絶を唱へた。

海內文章今屬レ誰。詞場盡稱節翁奇。
先生如許レ執二箕箒一。半作二良人一半作レ師。

その頃、我が邦の學者として有名なものは、伊勢の齋藤拙堂、大阪の篠崎小竹、福山の江木鰐水等で、共に山陽歿後雄を文壇に唱へ、盛名天下を籠罩した人々である。

山陽の易簀するや、鰐水は『山陽行狀』を作り、小竹は『山陽遺稿』の序文を書いたが、節齋は二人の文を見てその誤謬を發見し、書を兩氏に與へて、情を盡くして極力その非處を辯駁した。後又拙堂は『海外異傳』を著はしたが、節齋又書を與へてその誤謬を指摘し、文戰數回、三氏は皆屈服して了つた。

死して神に祀られたる松陰を感化し、一時天下の覇を以て聞えし三大文豪を屈服した點を見れば、彼が如何に學問人物に於いて、時流を抽いてゐたかと云ふ事が知れる、彼の名の聞えざるは、彼が多年仕官せずして四方に流寓してゐた爲である。

彼程の人物であつたけれども、惜い事にはその著書が甚だ少ない。現に存じてゐるのは『節齋遺稿』二巻であるが、これは有名なものである。

高野長英の青年時代

男爵 後藤新平

幼少の時の記憶

幼少の時、余は長英の噂を人より聞き、何となく下らぬ人間、否、寧ろ不名譽なことをした人間であると考へて居た。父などに長英のことを尋ねると、さういふ事は子供などの聞くべき事ではないと云はれ、時には又、喧嘩などすると附近の子供等より『君の叔父さんは磔刑に處せられた人だ』と云はれるので、磔刑を非常に惡い事と考へて居た當時の自分は、同時に長英を親戚のもので何か惡事を働いた人間であると考へたのである。その頃余の祖父は寺小屋を開いて居たが、余を家に置いて敎育するを欲せず、八歳の時分に竹下といふ親戚の家に預けられた。祖父は常に余に向つて曰く『お前は書家になれ、學者にはなるな、學者といふものは兎角身を過るものである』と。今より考へて見ると、これは即ち長英の最後に懲りて居たからであらう。

余の家は、岩手縣舊水澤藩一萬六千石の目付役であつたが、長英騷動の爲に家祿を沒せ

られ、その後引續いて役に付かなかつたのである。

余が家との關係

十一歳の時、即ち明治元年、始めて水澤に膽澤縣を置かれ、故安場男爵が大參事として來任された。そこで余は早速この安場氏の許に學僕として住込んだのであるが、その頃漸く長英に對して稍々詳しい話を聞き知り、家に歸つてこれを家人に告げた。當時、祖父は既に世を辭し祖母ばかりとなつてゐたが、この時始めて祖母よりも長英の事を詳しく話された。然し自分は未だ半信半疑であつた。そこで、猶長英の著『夢物語』などを出して讀んで見たが、一向惡事をしたらしい形跡がない。で、その旨を祖母に話すと、忽ち一喝されて『馬鹿をお云ひでない』と云はれた。余は實に奇妙に感じた。それはさて措き、余が母の家は、阪野長安といふ當時の名家で、歷代醫を業とし、傍ら書生を養つて居たが、その門よりは、幕末維新の洋學者箕作省吾等を出した。高野長英も亦實にその門人の一人で、名義上余の母の兄弟に當るが、余の家とは直接に血緣ではなかつた。それは追々長英の傳記を話すに從つて分るであらう。——因に云ふ。箕作省吾は箕作阮甫の義子であるが、阮甫は最初より津山の人、省吾は水澤の人で、後に省吾が水澤より京都に赴き、阮甫に學才を見込まれて其の養子となつたのである。人名辭書に『阮甫は奥州水澤の人、田村信に仕ふ、酒癖あり、人を殺して岡山に奔る』云々とあるが、これは飛んでもない誤謬で實際は右に述べた通りである。殊に『酒癖あり、人を殺して』とある如きは極端な誤謬で、阮甫は勿論省吾も至つて謹直な君子人だつたのである。

長英の生れた家

長英の父を後藤惣助といふ。この人、猪狩といふ家から妻を娶つて一男を擧げ、繼いて高野家から娶つて三男を擧げた。長英はこの繼室の第三男で、文化元年五月五日、奥州膽澤郡水澤に生れた。性質非常に俊敏なので、母の父、即ち外祖父の高野元端が深く彼を愛し、自から讀書習字の初歩を敎ふると共に、又余の母の家、即ち阪野長安の許に弟子に入れた。所でこの高野家の祖先を探つて見ると、文祿慶長の頃に高野佐渡勝氏なる者があつた。驍勇を以て當時名あり、上杉景勝に事へて居たが、その子四郎左衞門氏信の世に故あつて臣籍に列せられ、五代を經て元端に至り、始めて醫師となつた。元端の子は元齊、同じく醫を業とし、傍ら蘭學を杉田玄白に學んで居たが、後に甥、即ち長

英をその養子とした。長英が後藤家に生れて高野の姓を冒したのも之に依るのである。

十七歳で江戸遊學

長英の直ぐ上の兄を湛齋といふ。この湛齋が余の母の父長安の養子となる約束があつたので、そこで余と長英とは名義上叔甥の關係を生じたのである。長英十七歳の時、兄湛齋は醫學修業のために江戸に赴くと聞き、早速兄の許を訪れて一緒に江戸へ連つて行つて吳れと願つた。然し旅費がなかつたので大に失望して居た所、偶々附近の家に賴母子講があり、長英義父に代つて鬮を引くと、思はずも當り鬮で十餘金を得た。長英手を拍つて喜んで曰く『これ天の賜也、この金を旅費となし、兄と共に江戸へ行けば、我が目的を達することも極めて容易であらう、父を欺くのは甚だ惡いが、他日名を成し家を興すやうにもならば、今日の罪は乃ち之を償ふに足るであらう』と。そこで急いで阪野家に至り、具さに心事を述へて兄に從ひ江戸に赴かんことを願つた。一方、義父の元齋は、長英が久しく歸らざるを怪しみ、人を遣はして所々捜して見るとやがて阪野家に居ることが分つた。で、大に驚き、一旦は叱つても見たが、長英の素志頑として枉ぐる能はず、遂にその請を容れ、兄に同行させた。時に文政三年、長英は丁度中學三年生位の年頃であつた。

高野長英肖像

彷徨歸する所に迷ふ

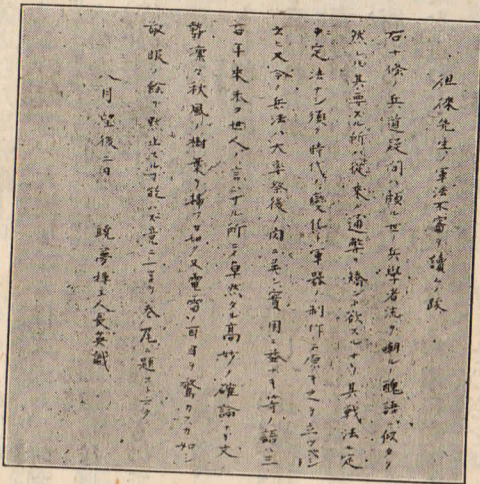
斯くて首尾よく江戸に出で、父の縁故によつて早速杉田家(即ち玄白の家で當時は既に子伯元の代となつて居た)を尋ねて見ると、何うした譯か入門を拒絶され、一時非常の窮境に陷つた。それは、當時長英より叔父茂木左馬之助に送つた手紙を見るとよく分る。曰く『私事、段々右樣仕り、夜々相勵み居り候處、朝には茶屋にも飯等出來申さゞる時も有之候故、迷惑に及び候事共有之候に付、兄方へ參り候て相談に及び候處以前より私事も右仲先生へ參り候て時々面會仕り候事も有之、勿論書物等拜借仕り候而入魂に御座候故、此方へ參り居り、杉田先生へ通に仕と申事共に候得共、之も遠慮仕り居り候、再三に仰せ下され候に付、先以て右仲先生に食客同樣にまかり在り、毎日杉田先生へ通に仕まかり在り候、併し右仲先生に用事有之候節は參り不申、手傳居り候、實に世の中には鬼は無之物に候、古人之語も有之候通りに御座候』云々と。この手紙によれば、長英は伯元より入塾を拒絶され、已を得ず戸田某に依りし所、やがて戸田よりも見離され、殆ど彷徨歸する所に迷ふたのである。然し、後に川村右仲の眷顧を受け、遂にその家に寄宿して毎日杉田の塾に通つた事が分る。その頃、中橋上槇町に吉田長叔といふ人が内科醫院を開き、非常に名聲を博して居たので、長英は間もなく杉田の門を辭して長叔の門下生となり、熱心に醫學を研究した。長叔は深く彼の才を愛し、己れの名の一字を與へて、彼を長英と稱せしむるに至つた。そこで、長英の本當の名は何かといふと、高野讓、初め悅三郎と稱し、後に卿齋と改め、更に長英と稱したのである。瑞皐はその號で別に曉夢樓主人、驚夢山人等の號があつた。

家兄卒然として逝く

文政四年九月、長英十八歳の時、彼は師長叔の命によつて日光、筑波の二山に登り、雨を衝き風を冒して種々の藥草を採集した。往復七十餘日。無事江戸に歸ると長叔も非常に喜び、これより師弟相援けて益々深く醫術研究の途に歩を進めた。所が、宿志漸く成らんとする時に當り、意外なる凶變は忽ち彼の前に現はれた。それは家兄湛齋の死である。湛齋は當時醫を都下に開き、業務漸く盛大に赴きつゝあつたが、この年の冬不圖病にかゝり、翌年五月二十日、終に卒然として黃泉の客となつた。長英の悲哀、それ如何ぞや。而かもこの時、長英の父惣助は既に死し、長兄勇吉家をついで居たが、義母(即ち長英の實母)との仲兎角圓滿でなく、その結果長英の實母は實子慶藏(即ち長英の弟)

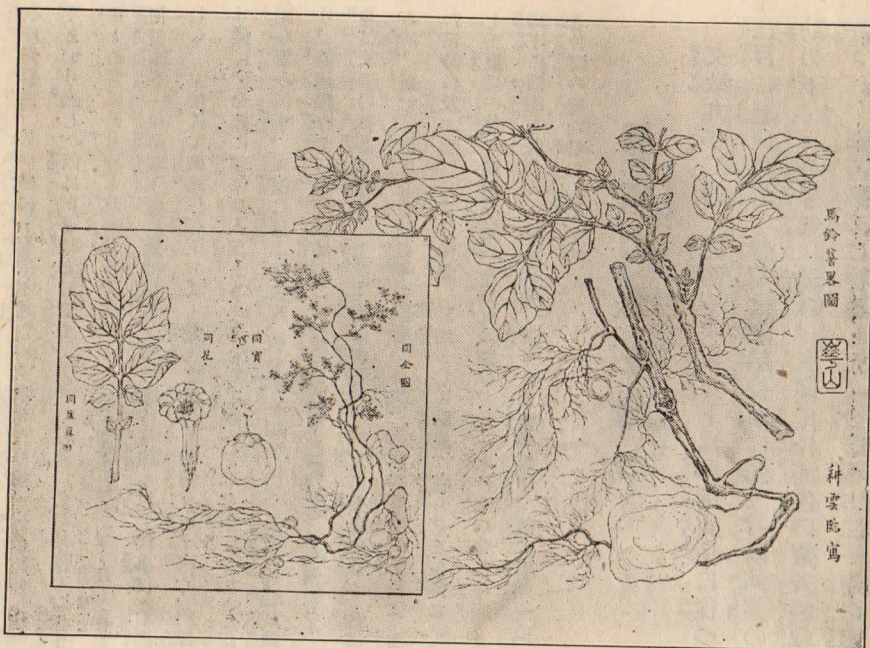
を連れて勇吉と別居し、一意専念に湛齋等の成業を待つて居たのである。然るに、湛齋今卒然として逝く。慈母の悲哀、それ如何ぞや。この邊の事情は、兄の病中長英より叔父茂木に寄せた手紙の中に『兄萬一の事有之候ては、先以て第一母事も共に病死可仕、是のみ日夜心痛仕候、本人も是のみ甚だ不孝と申居り候』云々とあるを以て、一斑を察することが出來る。從つて、湛齋の、死後は、長英母子相愛の情が一層深く且つ濃やかになつたのである。

一難纔かに去り一難また來る

文政六年九月、即ち長英二十歳の時、彼は偶々養父元齋病氣の報知に接して、不敢取水澤に歸つた。所が元齋は却つてこれを不快に思ひ、修業の中途で無暗に歸郷するとは何たる心得違ひぞと云つて、長英を家に入れず、義母がその間に立つて種々取りなしたにも拘らず、遂にこれを許さなかつた。長英、慨然として嘆き、割然として悟つて曰く『吁われ誤れり、學もし成らずんば死すとも復この地を踏まず』と。そこで、滯在三日の後、孤影悄然として再び江戸に歸つた。然るに、この歸途の旅行中、福島の仙臺屋仁兵衞といふ家に泊つた所、同家に石之卷住吉、丸一屋久米吉といふ者が滯在して居て、長英の、出府の道中にあるを聞き、是非共一緒に連れて行つて呉れと賴まれた。長英、一旦はこれを斷はつたが、兩人の嘆願があまりに煩いので、終に同行を約し、それから三人で追々江戸の方へ近づいて來ると、或る日、兩人は長英に向つて『吾々は親元を逃出して江戸へ赴き、菓子屋へ奉公致

高野長英筆蹟(南葵文庫藏)

したく思ふものであるから、何卒貴下の御盡力によつて可然き奉公口を探して貰ひたい』といふので、彼も一時後悔したが、今更斷はるわけにも行かず、已なく自分が保證人に立ち、京橋の阿部家の陸尺頭善藏といふ者の家へ奉公に遣はした。所が、この奴等、大變な食はせもので、翌年の二月頃、主人の金子三圓を使先から盜んだのみならず、高價な櫛笄の類をも引きさらつて風の如く逐天して了つた。迷惑したのは長英で、主人方よりは嚴談を持ち込まれ、もし相當の辨償をしなければ容赦なく公儀に訴へると云はれたが、今の場合、何としても彼にはそれ丈けの資力がない。と云つて、親元へ事情を談し、金を取り寄せるといふやうな事は猶更出來ぬ。絶體絶命、思案を重ねた結果は、殘念ながら自分で奉公口を探し、そこから得る給金を以て損害者に支辨することゝ定め、以後約半年の間、或る家の下男となつて働いた。彼の無念、殘念、口惜しさは如何ばかりなりしぞ、彼は朋友にも親戚にも何人にも事情を漏らさず、唯無言で働いた。そして無事に約束の期間を働き上げ、これで漸く安心と思ふ間もなく、又々前と同じやうな事情の下に、或る人に損害の支償をしなければならなかつた。一難纔かに去り一難又來るとは實にこの事、千古を睥睨し、一世に軒擧する偉丈夫も、時到らざれば、自から屈し、奴僕の間に徒らに困頓しなければならぬとは！人間の一生は凡そ斯くの如きものである。

騏驥千里の念

然し、長英の長英たる所は、この困難災厄の間に却つて著しく發揮される。彼は身を奴僕の間に投じ、暗涙を呑んで勞働に從事しつゝあるの傍ら、少しも油斷なく學事に勉勵した。それが端なく主人の眼に觸れ、深くその志を憐まれて、遂に一軒の家を借り受け、そこで醫術の業を開くやうにして貰つた。兎角するうちに、師の吉田長叔は金澤侯に召され、晝夜兼行任地に赴く途中病を得、その年八月十日遂に金澤に達して死んだので、長英は後事を托され、ついで同門に推され

高野長英の『二物考』に挿まれたる馬鈴薯の圖

て第二の吉田長叔となつた。然かも騏驥千里の念は猶止み難く、最後に長崎の遊學となつたのである。これより先、日本の學界は蘭學の全盛を來し、人々爭うてその方面の師を探して居たが、長英も時勢の要求に動かされ、何とかして例の有名なシーボルトに就かうと豫て思つて居た。シーボルトはその頃和蘭政府の醫官として、出島の居留地に醫術を開業して居たのであつた。長英、乃ち機會を見て長崎に赴かうと思つて居ると、恰かも好し、友人今村某が長崎生れの男で、近日歸鄕するといふ事を聞き込み、早速これに相談して一緒に行く事となつた。時に文政八年七月、即ち長英が二十二歳の時である。

長英最得意の時代

長崎に着いて見ると、竹内玄同、二宮敬作、青木周弼等、即ち當時天下の秀才と聞えた人々が既に皆集つて居た。そこで相共にシーボルトの塾に入り、寢食を忘れて蘭學の研究に熱中した。正にこれ、長英最得意の時代である。後三月、養父元瓆に送つた手紙に曰く『拙者も色々の事にて毎度御心配相かけ候上、御病氣の事故早々歸國仕り候事本意には

御座候得共、如何樣にか勤學不才ながら成就仕り度、夫故九州の地までまかり越し、既に御尊地より唐土之方甚だ近所にまゐり候も、不幸之至と心頭には寸時も忘却仕らず候得ども、右之次第是非なく存じ奉り候何分來春一年御暇下され候は丶佐々木仲澤には膝を屈し候事は有之まじく、左候は丶御地に相下りても是迄之恥辱も相雪ぎ申すべく、熟思仕り候に、金銀の望は萬人望まざる者も無之候へども、小生の如き貧性、福を望み候事、天道に逆ふの道理、假令弊衣垢面にても勤學而已成就仕り、歸國候存念に御座候間、兼て左樣御思召下し置かるべく候』云々と。

身は天涯の孤客となり、老父遠鄕に病む、これ實に長英の忍ぶ能はざる所。然かも思念一たび往年の歸省に及び、二たび奴僕の勞役に服した當時に及ぶと、一片の憤氣、勃然として胸底に漲らざるを得ない。そして更に一箇年の遊學延期を養父に請ひ、佐々木仲澤の輩を早晩その脚下に睥睨し吳れんといふ決心、落々たる彼の眼中、既に奥州一の學者仲澤の徒を呑むの慨がある。

歸國の念を絶つ

文政九年二月、恩師シーボルトは和蘭貢使に從つて江戸に赴いたが、長英は斷然長崎に留り、神崎某の扶助の下に專心學業に勵み、又同地松浦侯の藏書縱覽を許され、刻苦飜譯に從事した。『分離術』二十卷の書は即ちこの際に譯したものである。然るに、翌年七月、突然鄕里の養父死去の報に接した。長英、慟泣して急ぎ家に歸らんとしたが、待て暫し、家君既に逝く千里喪に奔るも何ぞ生前不孝の罪を償ふに足らんと思ひ返し、これより益々力を飜譯に注ぎ、遂に歸國の念を全然絶つて了つた。以後、シーボルト投獄事件の難を避けて熊本に逃れ、廣島に至り、尾の道、大阪を經て京都に入り、次に江戸へ來て麹町に醫業を開き、傍ら當時の志士學者と交はりつゝ著述に從事し、『醫原樞要』や『二物考』や『夢物語』などを世に公にして獄に投ぜられ、弘化二年解放せられて江湖に漂零し、最後に幕府の捕吏に襲はれて自殺するに至るまでの事は多くの世人が既に知る通りである。彼の死んだのは嘉永三年十月、年四十七の時である、今この話を終るに當り、余は彼の青年時代を『刻苦勉勵』の四字で蔽ひたいと思ふ。刻苦勉勵はやがて自彊不息の精神、不羈獨立の精神である。この精神を以て、彼はその少年時代、青年時代壯年時代、即ち一生を貫いたのである。

先見の明ありし佐藤信淵

内務省地方局長法學博士　水野錬太郎

國家的偉人

秋田縣に於ける偉人は誰かと云へば、誰しも先づ指を佐藤信淵、平田篤胤の二人に屈するであらう。此の二人は政治家とか、武人とか云ふ風の華やかな仕事をした人ではないが、學者として、或は思想家として偉人たることは疑を容れぬ。否單に秋田縣の偉人たるに止らず、國家的偉人と云うても差支がない。信淵は固より學者であつたが、世の常の『書物讀み』の學者ではなく、實際上社會に立ち働らいて各種の事業をなし、功績を揚げることの出來た人である。

家系

信淵は明和六年六月十五日を以て、出羽國雄勝郡西馬音内鄕郡山村に生れた。姓は佐藤、名は信淵、字は元海、椿園又は融齋と號し、通稱を百祐と云ふ。家は世々醫を業としてゐたが、信淵の事業幷びに學問は、主として經世、農政の方面であつた。併しこれは獨り翁のみの力ではなく、寧ろ家學——佐藤家の學風であつた。佐藤家は遠く嗣信に出たと云ふことであるが、昔のとは措いて言はず、高祖父信利に至つて、心を經濟の學に潛め、大に農業政策の研究を始めた。信利は醫を業としてゐたが、『農は天下の大本である。我邦は農を以て國を建て丶以來茲に二千年を經たが、中古戰亂相踵いで農耕の事が顧みられず、爲めに田

野荒れ、山林廢るゝに至つた。かくの如くにして若し一朝凶歳に遭遇せば、百萬の生靈は空しく餓死するの外はない。今の時に當つて之を救濟するの道を講ぜればならぬ。』と刀圭を抛つて農政の學を研究し始めた。爾來曾祖父信英、祖父信景、父信季相嗣ぎて祖先の遺業を勵み、以て信淵に及んだのである。此の間年を閲すること二百有餘年、漸く家學を大成することが出來た。信淵はよく父祖の遺業をついで、幼より心を農政經濟の事に致した。天明元年には父に從うて松前に遊び、翌年奥州の諸國を遊歷し、出羽の鳥海、月山、羽黒などの諸山に登り、また庄內、最上、米澤の風土を察しつゝ、會津に入り、下那須の高原を超えて、親しく土地の狀勢、農政實況を視察した。同三年、また父に從うて日光の溪谷を跋渉して諸種の物産を採集し、次いで足尾の銅山に入つて銅礦石分拆の法などを見學した。

父の遺言

その頃信淵は父の喪にあたつた。父はその再び起つべからざるを知るや、彼を枕元に呼んで遺言して曰つた。『我が家は世々經濟の學を講じ、農政の策を研め、吾に至つて四世二百餘年を閲した。爾もまた宜しく祖先の遺志を繼いで、家學を大成するに努むべきである。これ實に國家に竭くす所以の道である。高祖父の『國土經緯論』、曾祖父の『氣候審驗錄』、祖父の『土性辨』の三書の如きは、國家經營の至寶である。爾よく此の三書を祖述し、反覆研究して造化の眞理を闡明するに努むべし。』と病中ながらも言を厲しくして信淵を奬勵した。彼はその時、年僅かに十六であつたが、謹しんで父の敎訓を守り、一生を家學大成の爲めに獻ぐべきことを誓つた。後彼は遺命を奉じて江戸に出で、本草學者宇田川槐園の門に入つて蘭學を修め、又井上潜に從うて經濟の學を習ひ、刻苦精勵して天文、地理、動植物を始め、暦算測量等の技術を習得し、居ること年あり學術大に進歩した。

活動の開始

寛政の初め津山侯に見え、『弊政改革記』二卷を著はして之を獻じ、又久留米の有馬侯の爲めに、筑後川の水害を防止する法を講じ、治水土木の獻策をなしたが、文化三年に江戸に歸つて居を京橋に卜した。四年の夏には河波德島に至つて火技の術を講じ、『三銃用法論』を著はしたが、その海防策には先人未發のものが多いと云ふことである。後再び江戸に歸り、更に上總の大豆谷に退

居して家學を講究し、祖先の遺稿を訂正し、自らも亦有名なる『農政本論』を著はした。その後、或は薩藩の召に應じ、或は三州田原侯の請に依り、その領內を巡歷して農業を視察し、殖産興業に關して種々の講明をした。田原侯の老臣渡邊華山等と交を訂したのも此の時の事である。その後又丹波の綾部の城主九鬼氏の需に應じ、封內を巡歷して農法を説示し一村毎に社倉を設くるの制を講じ、『責難錄』といふ有名なる書物を著はした。天保十四年には、伊豫宇和島侯の爲めに『種樹園法』三卷を著はして、開墾に關する原則を説示した。その他長州侯の爲めに、三田尻の海濱を修めて鹽田の制を敎へ、或は大坂の富豪鴻池家の爲めに新田開發の法を授けしを始め、各地の個人並びに列侯の爲めに、經濟政策を講じて實功を擧げたことは一々枚擧すべからざるものがある。恁くの如くにして、信淵は日本全國を跋渉し山々谷々、津々、浦々、みなその足跡を印せざるところなく從つて我が國の風土習俗ことゞく明らかに彼れの頭腦中に印象せらるゝに至つた。

佐藤信淵肖像

西洋文明の研究

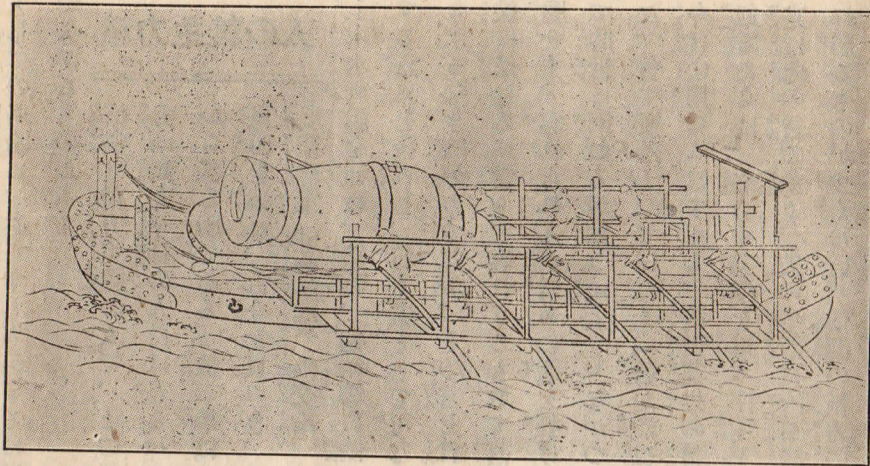
信淵は斯くの如く、家學を祖述するに努めたのみならず、一面に於いては西洋各國の行政を研究して、『西洋列國史』、『禦侮儲言』、『水陸戰法錄』などを著はした、弘化三年に至つて武州鹿手袋村に退居し、其處で『經濟問答』などの著述をなして、貧民救濟の方法を講じ、之を水野侯に呈したが、嘉永元年には『東西火砲辨』を著はした。——斯くの如く、信淵一生涯の經歷は、經國濟民といふ點を離れなかつたが、その所説は單に理論に止まらず、實驗に基づいて立てられたものが多く、然かもそれを時の當局者に提供して治政の參考とせしめるなど、心は常に經世濟民を離れなかつたが、嘉永三年正月六日を以て、江戸に病死した。時に年八十二であつ

た。信淵は天資剛邁、よく物に耐え事を忍び、毀譽得喪を以て毫も意に介しなかつた。その事を論ずるや立論斬新　所說奇拔にして人の意表に出づること多かつたが、而も考證精確にして所說肯綮に當り、時代の人をして之に服せしめたが、碩學宇田川玄隨曾て彼を評して『信淵は當世に得難き非凡の大才である。彼必らずや將來大業を成さん』と云つたが、果然彼は經濟農政の學を以て一世に雄飛し、重きを列侯の間になすに到つた。

著書三百巻

信淵の著書は三百有餘巻ある。その中には大分散佚したものもあるやうだが、今日遺つて居るものを見ると、何れも意見的確にしてその所說は一々肯綮に當つて居て、今日の專門の經濟學者、社會政策學者と雖ども、尙ほ一籌を輸せねばならぬと思はれる。予は素より遺著の全部を讀破した譯ではなく、僅かに二三のものを繙いたに過ぎぬが、それですら尙ほその達見に驚かされざるを得ぬ。例せば『物價餘論』の如き、經濟、社會政策の兩方面に於いて、歐洲の學者すら言ひ能はざる所に言及してゐる。特に白河樂翁公の消極政策に對する批評の如きは、實に正々堂々たるもので、その忌憚なき辯難攻撃は後世の人をして奮起せしめる。彼は曰く『今日の政策は、消極主義に傾いてはならぬ。夫の勤儉貯蓄を勸むるが如きは、徒らに民心を萎靡沈滯せしめるに止まる。須らく積極的政策を立てゝ、治道の要としなければならぬ』と。實に卓見である。彼は又江戸の華美を奬勵し『都市の人口集中は世界の趨勢である、之を壓迫するは斷じて不可である。江戸をして花の都たらしめしは、これ神君が深く鑑みる所あつて採られたる政策である。徒らに節約主義を採つて、都市集中を沮害するは愚である。』と云つた。その所見は甚だ剴切で、電の如き眼光は、到底迂儒腐學の企て及ばざる所であらう。

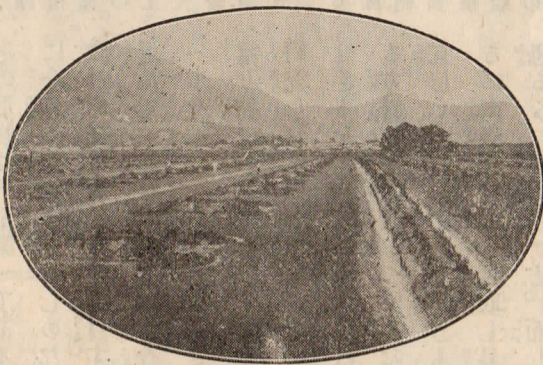
名論卓說

その他『宇內混同祕策』の如き、國家の大勢を論じて藩政制度に及んでゐるが、その卓見は大に敬服に値する。殊に帝都論の如きはその最たるもので、帝都は政治の根本であるから、形勝第一の地を選んで之を奠めねばならぬ。而してそれには江戸が最も適してゐる。宜しく都

佐藤信淵の工夫發明せし異風砲異樣船の圖

を此の地に奠めて、長く移動することなかるべし。江戸は土地平坦にして且つ廣く、三面陸に續き、一面大洋に接し、進退攻禦二つながら處を得てゐる。殊にその附近の平野は曠莫にして馬肥え民強く、その形勝は天下第一である。』と云つてゐるが、若し信淵をして地下に今日の東京を見せしめたならば、果して如何の感を起すであらう。彼の外交政策も亦た注目すべきもので、その對露策、對英策、更に進んで對滿策の如きは、今日の明敏なる外交家、國際家と雖ども、一歩を彼に讓らざるを得ざる慨がある。素より此等の論を立つるに當り彼は親しくその土地を踏んだのではなく、書物によつて地理を研究したに過ぎぬが、その言剴切にして符節を合せるには一驚を喫せざるを得ぬ。一例すればその對滿策の如きは、信淵は曰く『他邦を侵略するには、宜しく弱くして取り易きものより始む可し。方今世界の大勢を察するに南滿洲は最も奪取し易からう、清國は國勢凭弱にして必ずしも恐るゝに足らず』と。而して彼の沒後間もなき今日に於いて、此の政策は實行せられ、南滿洲は我が勢力範圍となり、朝鮮、樺太また我が有となつたが、彼は既に百年前に於いて之を說破してゐる。彼の言は往々誇大に失するが如き嫌なきに非ざりしも、その對外政策

としての所論は、必らずしも目するに誇大を以てすべからざるものがある。

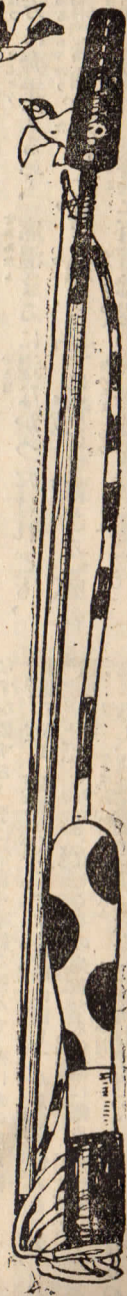
精力主義の人

信淵は精力主義の人で、その勤勉、忍耐、努力は到底今日の人には見るべからざる所である。彼の學は東西を兼ね、古今を貫ぬき、農業政策、社會政策、外交論、土木水利說を始め、鑛物、砲術等に關する意見を發表し、行く處として可ならざるなき概があつたが、その言を君侯に進むるに當り、容れざるも敢て落膽せず、容れられんが爲めに說を枉げて時世に阿ねるが如き事をしなかつた。嘗て慨然として曰はく『吾が說は今日に用ゐられずとも、後世英雄の君起るあらば、必らず家學を以て宇內を一新しよう』と。寔に此の言の如く、彼の學說は今日に於いて實現せられ居るものが少くない。信淵の精力の強いのは子供の時からで、その健全なる體格が之を致したのでもあらうが、又その頭腦が明晰でよく事に耐えた點と、父母の遺訓を奉じて家學を大成することを、畢生の事業としようと云ふ信念があつたからであらう。信淵の肖像を見ると、狀貌魁偉、長鼻方顏、手は頗ぶる長くして垂るれば膝に達したと云はれてゐる。以てその體力が如何に強健であつたかを想像するに足る。

三田尻地方の鹽田

馬鹿藤と狂兒

彼の幼時は極めて傲放で、或は放火し、或は人を罵るなど、傍若無人の振舞をしたので、隣人は之を『佐藤の狂兒』と呼んだ。而かも彼は毫も悛めず、愈々益々傲放を極めたので、母は常に之を戒め且つ說いて曰はく、『見給へ庭には藤の花が咲いてゐる、世にも美しく咲き盛つてゐる。此の藤は祖先が栽ゑられたものであるが、何年經つても花が咲かぬので、近所の人は皆佐藤の馬鹿藤』と云つた。處でお祖父の信景殿が、力を盡して培養せられた結果、翌年には數百の美花を着け、而かもその長さが五尺餘りにも達した。爾また幼にして狂狷度を超え、世人より狂兒と云つて擯斥せられてるが、今後は擧動を愼しんで努力奮勵し、大業を成して大名を博せよ』と。彼は此の訓戒を聞いて悟る所あり、節を折つて學問を勵むに至つた。彼の大成は素より身體の健全と、頭腦の明晰とに基づくが、かくの如き父母の訓戒がまた與かつて力のあつたことは疑ふべからざる事である。——實に彼は、此の健全なる身體、明晰なる頭腦、確固たる信念、懇切なる敎育の四者を以て基礎となし、家學大成の爲めにその一生を獻げたのである。故に彼は如何なる辛苦艱難も意とせず、ひたすら自己の信念を强行するとに努めた。その國を憂へて四方に奔走するや、席溫まるに遑なかつたけれども、所謂『膏油を焚いて晷に繼ぎ、手に管を釋ざる』底の勉强を以て、無慮三百有餘卷の大著述をなし得た。

信淵に學べ

斯くの如きは翁の經歷の一端である。若しそれその言行を詳に說き具さに論じたならば、數百頁の書も尙ほ足らざるを覺ゆるであらう。兎に角、これ等の遺業、遺著を見れば、翁は單に一鄉一國の人ではなく、之を世界的偉人と稱しても差支があるまいと思ふ。——幕末に當つては諸藩一時に多くの學者を輩出したが、何れも章句の註疏に拘らひ雕琢の末技に泥んで、實學に志ざすものは甚だ少なかつた。獨り信淵は彼等と選を異にして學問の應用に着眼し、空理空論を避けて實功實績を揚ぐるとに苦心した。而してその苦心の方面は、單に經濟政策、農業政策のみに止まらず、漁業、土木、水利、鑛業、鹽制は勿論、社會政策、貧民救濟法、敎育制度、外交政策等各種の方面に亘つたが、而かも議論上のみではなく、何れの說も實情に適し、實行の出來ると許りである。學者多しと雖ども徒らに空理空論をのみ說かば、その言は何等世に益するところが無からう。よく學問を實地に應用して、國家社會に貢獻してこそ、始めて學問の學問たる價値がある譯である。故に予は常に學生を誡めて、學問の基礎は堅實正確を要するけれども、書籍の奴隷となつて文字の末に趨るのは宜しくない。よく社會の實況を知り實情に通ずるが如き研究をなすを要する。予は信淵の事績を讀んで、殊に此の感を深くした。殊に東北の人は、西南の人に比して理論に偏してゐる氣味がある。甚だ以て遺憾の次第である。宜しくその先輩なる信淵に鑑み、發憤努力して思を此に致し、東北未開の地を開いて富源を開發するゝに努めればならぬ。

上杉鷹山公の性格

文學博士　吉田熊次

模範的人物

上杉鷹山公は道德上模範的人物の一人で、國定修身書にも載せられてある程の立派な御方であるが、世人は動もすれば公の名を聞いて直ちに質素儉約といふ事を聯想するであらう。從つて又、公を極めて姑息な消極的の人物のやうに思ふかも知れない。が、此等は決して公の人格を充分に代表する批評ではないのである。成程、公は非常に質素な生活を爲されたが、同時に又、殖産興業の方面にも積極的に力を盡されたので、今日も猶、公の名は米澤一鄕に普ねく知られ、兒童走卒と雖も公の名を聞いて敬慕の念に打たれぬものは無いのである。然らば、何故公が一方に於いて質素儉約を旨とせられ、他の一方に於いて殖産興業に力を盡されたかといふに、それは公が米澤藩主となられた時の狀況が偶々これを必要とし、これに依らなければ到底米澤一鄕の繁榮を來たすことが出來なかつたからである。上杉家の藩史編纂に專ら從事されて居る伊佐早謙氏は、『公は獨り君公として名主なるのみならず、一個の人格としても亦實に完全無缺の御方であつた』と云はれて居るが、これは決して過分の讃辭では無いと思ふ。

克己は眞勇なり

西洋の格言に敵に勝つは眞勇に非ず、己に克つこそ眞勇なれといふ意味のことがあるが、この意味に於いて、公は實に眞の勇者であつた。決して世人の考へて居るやうな消極的な御方ではなく、寧ろ積極的活氣に充ちた進取の人であつたやうに思はれる。徒らに時風に迎合するは、決して眞の勇者の爲すべきことで無い。時弊に反抗して、決然思ふ所を爲すは眞の勇者の行爲、所謂男子の本懷とする所である。

上杉鷹山公の肖像

此點から見て國定修身書に公の事蹟を述べ『堅志の模範的人格』としてあるのは、誠に道理なる事である。

越後より會津へ移る

鷹山公の事業を理解するには、先づ當時の米澤藩の狀況を知らなければならぬ。それには、話の順序として、勢ひ上杉家のことを沿革的に略叙すべき必要がある。

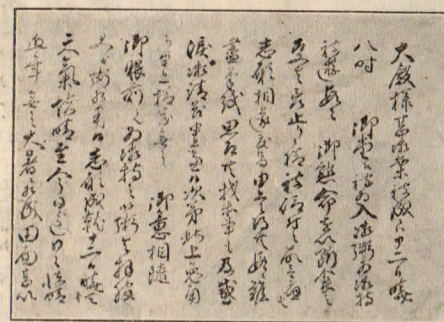
上杉家はもと、越後の國主で、謙信公の時、その名が燦然たる光彩を史上に放つに至つた。謙信公が武勇絶倫、武士道的氣節の人であつたことは、諸君の既に熟知する所。然るに、その義子景勝公の時に至つて會津に移り、百二十萬石を領するやうになつたが、關ケ原の戰に於いて石田三成と計を通じた爲めに所領を失ひ、米澤一鄕、及び信夫、福島の二郡を合せ、三十萬石の領

主となられた。そこで、謙信公以來の將士數千人は、皆景勝公を慕つて米澤に移つたが、元來この土地は非常に狹いから已を得ず彼等を藩内の各地に分配し、一は以て藩の防備となし、一は以て農事に從はしめた。けれ共、景勝公自身簡易生活を尚ばれ、質素を旨とせられた御方であつたから、斯かる不自由な處置に對しても、部下の將士は唯々諾々として沈默を守り、一人として不平不滿を云はなかつたのである。

質素律義の家風

景勝公の子は定勝公である。この御方も亦文武兼備の名主で、特に勤儉尚武を旨とせられ、自から治世の條目を定められたが、その第一條に次のやうなことがある。

他家の風、似すべからざる事。家中の諸士、その下下までも、跡々よりの御家風の御質素、萬事御律義なる御作法を相守り、他家の風を少しも學び申すまじく候、學び候へば、律義なる御家風を取り失ひ、その上義理作法も存ぜざるに至り候間、何れも跡々の御家風を少しも違へず嗜み可申事。

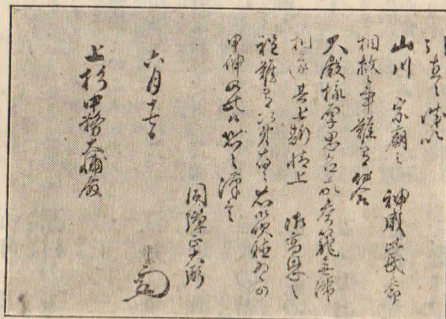
これに依つて見ても、上杉家は代々質素律義の風を養つて來たことが解るので、鷹山公が簡易儉約を奬勵せられたのも、要するにこの御家法をうけつがれたまでの事である。景勝公の子は綱勝公、綱勝公には子がなかつたので吉良家より綱憲公を入れられ、同時に家祿を十五萬石に減ぜられた。

羽前米澤の賢主上杉鷹山公の筆蹟

島利右衛門の上訴

斯くの如く上杉家は次第に減祿されたので、自然財政に困難を生じた。その上、綱憲公は年二歳で世をつがれたので、財政の紊亂は愈々甚しくなり、藩民もその苛政に堪えないで、愁聲諸方に起るやうになつた。所で、米澤一郷の中の屋代郷三萬石は、舊來幕府の所領で、上杉家の預り所となつて居たが、上述の如く上杉家の政治その宜しきを得ずといふので、島利右衛門といふ人が、これを幕府に訴へた。然るに幕府はそれ

を受け付けなかつたので、島は一計を案出し、新たに挾箱を作り、葵の御紋を置き、それを携へて一茶亭に入り、酔に托して故意と棄て去つた。後に、茶屋の主人がこれを見て、德川家の定紋のあるのに驚き、直ちにこれを訴へ出た。そこで役人が早速その中を開いて見ると、思ひもかけぬ一通の書付があつて、上杉家の不正を訴へて居た。かれこれの事情で上杉家は屋代郡を取り上げられ、島は將軍家の御紋を濫用したといふ咎によつて刑に處せられた。これに依つて見ても、當時米澤藩内の人民が如何に苛政に苦しんで居たかの一般を想像することが出來るのである。

（上杉中務大輔に宛して手紙の一節）

市内に一揆起る

綱憲公の子は吉憲公である。公の子、宗憲公、宗房公、重定公等、兄弟相次いで藩主となられた。そして重定公は實に鷹山公の義父である。重定公の代となり、財政益々困難に陷つたやうである。加之、一方に於いて幕府よりは東叡山の修繕に托して莫大の出資を命ぜられ、他方に於いては凶作相つぎ、飢餓の民道に横はるといふやうな有樣で、士卒の俸祿も充分にこれを給することが出來ず、終には部下の五六百人のものが一揆を起して米澤市内を掠奪するに至つた事もある。然るに寵臣森平衛門利直なるもの君側にあり、驕奢を事とし、毎年二月の初午に行はれる稲荷大明神の祭典には、澤山の燈籠などを作つて馬鹿騒ぎをするのみならず、遠方から遊女の類を集め、歌舞宴樂に夜を徹する始末。而して、一方では財政難の理由の下に士卒、人民一般より人別錢を集め、毎月一定の額を上納せしめた爲に、或は妻子を賣つてこれを拂ふものさへあるに至つた。鷹山公は實に斯かる時期に際して上杉家をう

けつがれたのである。

鷹山公と藁科松伯

抑も鷹山公は、日向佐土原の城主秋月種美の次男で松三郎と稱し、後に治憲と改められた。鷹山はその號である。公、十歳の時に、重定公の養子となり、十七歳の時に、上杉家の主君となられたが、藩政既に述べた如くである以上、如何にせば米澤一鄕をこの困憊より救ひ出すことが出るかとは、蓋し幼少なる公の第一に心を惱まされた所であらう。而してこれに對するの道は一方に於いて質素の風を養ひ、他の一方に於いて殖産興業に力を盡すより外はないのであるが、幸にして公は大決心を以てこの大任を成し遂げられたのである。公が上杉重定公の養子となられた時に、上杉家の侍醫に藁科松伯といふ人があつた。公はこの人について句讀を學び、又神保綱忠を學友とせられた。松伯は大に寵臣森平衞門の專橫を憤り、志士竹股當綱等と計つて藩政を改革せんと企て、當綱は志士と力を合せ、遂に平衞門を殺して了つた。藁科松伯が或る時江戸兩國橋の附近で辻講釋をして居る蓬頭粗服の一浪人に會つた。時にその浪人の講義が如何にも感服すべきものであつたので、後にそれとなく彼の後を跟けて見ると、濱町山伏井戸の小屋に住んで居ることが解つた。そこで改めて面會を求め、名を尋ねると、拙者は細井甚三郎といふ浪人で御座ると答へた。松伯は直ちに請うてその門人となり、後に竹股をも亦その弟子とならしめ、最後にこれを鷹山公に勸めて公の師となした。この浪人は即ち有名なる細井平洲であつた。

名主賢臣の言を聞く

鷹山公は天資聰明にして又學問を好み、古今の治亂興亡の跡を明かにし、前賢の特質を講究するを以て無上の樂みとせられた。平洲を師とせられたのは、明和元年、即ち年十四歳の時である。平洲は尾張知多郡平洲村の豪農甚十郎の第二子で、鷹山公の師となつたのは正に三十七歳の時であつた。明和六年に、鷹山公は江戸よりその封土の米澤に歸られんとしたが、その時公が平洲に向つて問ふて云はれるには『われ幼少にして人の君となり、戰々兢々、實に薄氷を踏むの思がある。この時に當り、先生は何を以てわれに教を垂れらるゝであらうか』と。すると、平洲は襟を正し、愼んで答へた。曰く『拙者が卑賤の身を以て乏しきを賓師に受け、名主群賢の事蹟と邦家興亡の有樣の、戒めと

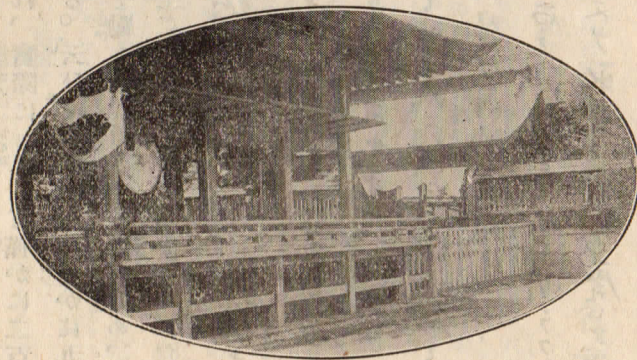
なし鑑みとなすべき所は既に盡く言上に及んで居る、而して、これ等は唯講釋に止まり、謂はゞ虚に過ぎないのである。然るに公が今封土に歸られ、實際に行はれんとする所は、虚に非ずして實である。云ひ換へると實地の事柄である。故に宜しく勇氣を勵まし、斷乎として行ふべきを行はるゝ外に何等申上ぐべきことは無いので御座る』と。鷹山公が非常の決心を以て藩政を改革せられたのも、要するにこの平洲の感化による事が多いであらうと思ふ。

自から先づ實行す

斯樣にして、公は藩政を救ふは勤儉にありと考へられ、自から先づこれを實行するに非ずんば人もこれを信ぜぬであらうといふ所より、從來の衣食の費用五百五十兩の定額を減じて僅かに二百〇九兩となし、奥中の侍女五十餘人を減じて僅かに九人となし、山海の珍味をしりぞけて一汁一菜と定め、衣服に絹布を禁じ、すべて木綿を用ゐる事とせられた。これ等は一國の藩主としては非常なる儉約であつて、これを斷行したのは非常なる勇氣に基くのである。

公が襲封より僅かに五ケ月の後、江戸の藩士を集めて示された手控の中に『居ながら亡ぶるを待つよりは、君臣心力のつくるまで成るべき丈けの大儉約を執行候はゞもしも立行く事もやと、この事きつ

上杉鷹山公筆蹟（米澤興讓館所有）

と思立ち候』とあるのを見ても、如何に偉大なる決心を定められたかゞ分るのである。然しながら、斯かる簡易生活は、一般に人の喜ぶ所でないのみならず、森の橫暴によつて驕奢の風の上下に彌漫して居た時代であるから、人皆公の政治を非常に窮屈なものと考へ、主君は小藩に成長せられたので、規模狹少、妄りに節約を主とし、大國の風を失はれるといふやうな謗も起り、又或るものは、年少の君主が何うして斯かる思慮ある政治をなさるべき筈があらう、これは定めし君側にある者の爲す計ひであらうといふやうな流言を放つものもあつた。而して、江戸詰めの家老莅戸善政等は斷然その職を辭するに至つたが、公の決心は毫も動く所なく、傍役のものが『衆心に違ふ改革はお愼み遊ばされる方可然』と諫めたのに對しては、親しく政治の大道を彼等に說かれ、質素儉約を惡く思ふのは、畢竟儉約と吝嗇とを取り違へて居るからであると云はれ、少しもその主義を曲げられなかつた。今の世に於いて、徒らに時の流行を趁ひ、世風に迎合して顧みる所なき薄志弱行の徒は、これを聞いて當に慚死すべきである。

上杉神社の拜殿

誓文を林泉寺に納む

鷹山公が勤儉以て自から奉じ、振つて米澤一鄕の衰頹を挽回せんことを心に期せらるゝや、先づ一種の誓文を林泉寺春日山に納められた。當時は、何人も、これを知らなかつたが、慶應元年回祿にかゝつた際に、初めて人々の發見する所となつた。今、それを見るに、

一、文學壁書之通り、無怠漫相務申候、武術右同斷。

一、民之父母之語、家督の砌、歌にもよみ候へば、此第一に思推可仕事。

一、居上不驕則不危、又惠而不費と、有之候語日夜相忘間敷候。

一、言　不齊、賞罰不正、不順無禮、無之樣愼可申事。右以來固く相守可申候、若於怠慢仕者、忽蒙神罰、永可家運盡也。

仍如件

明和丁亥八月朔日

上杉彈正大弼　藤原治憲　敬書

とある。これを見ても、公が如何に文武に心を用ゐられ、人の長たるものゝ任務を重んじ、自己の修養に努められたかゞ解る。『家督の砌歌にも』云々といふその歌は『うけつぎし國の司さの身となれば忘れまじきは民の父母』と云ふのである。猶公が殖產興業に力を盡された事などは、國定修身書に詳しく說いてあるからこゝに再び繰り返す必要はないと思ふ。所で、公の政治は次第にその功果を奏し、あれ程までに困弊を極めた米澤市民も皆豐かに生活をするやうになり、曾ては藩政の不正を恨んだものも漸く公の德政を慕ふやうになつたのみならず、村山、最上の隣藩の市民までが、遂に米澤の政治に傚はんことを願ひ出づるに至つた。

斯くの如きは、政治家として非常なる大成功であるばかりでなく、又實に道德上模範とすべき善行爲たるを失はない。二十六億の國債を有する現今の時勢に當つて、公の遺風を敬慕するは最も必要なとであらう。

公の遺風を慕へ

最後に一言し度いのは、鷹山公は一國の藩主として斯かる治績を擧げられたので、一般人民の身分のものに在つては、直接にこれを學ぶことが出來ぬかのやうに考へて居るのもあらうが、それは大なる心得違ひである。公は如何にも米澤一鄕・上杉家の爲に善政を布かれたが、その行爲たるや何人も模範とすることの出來るもので、吾等が一家を盛ならしめる爲には、宜しく先づ公のこの遺風をうけて質素簡易の生活を營むと共に、進んで殖產興業の道に勵むべきである。又一家内の風義をあつくする爲には、親に孝にして師を敬すべきである。且又、公が一般の君主として心がけられた事は、吾等が一家の長として自己の部下のものに對する場合に常に心がくべき事であつた。即ち人に君たるの美德は、同時に常人が部下のものに對して守るべき心得となるのだ。この點に於いて、身分高き人の行と雖も、何人にも適用し得べき教訓となるので、今日の青年學生の如きは、特にこの點に留意すべき必要があると思ふ。（談話）

市井の俠幡隨院長兵衛

笹川臨風

一 男達中での男達

乾坤の間に生れ出でたる男一匹、双の腕には鐵の骨あつて、打てば金石の響を發する。見かけは六尺に足らぬ小さい野郎だが膽は大きい。相手が殖ゆれば龍に水、賣る喧嘩なら、買つてやる。江戸紫の其中に一本すぐれし濃紫、男達中での男達、命のやり取り、男達の無盡の掛捨、遂に引を取つた事のない男。名はと問へば、それ御存じの大江戸八百八町に隱れのない幡隨院長兵衛。憚りながら市井の俠、命を淺草海苔の輕きに比して、一諾は千代田の城の礎石よりも重い。

二 棒振を食ふ金魚

寛濶六法日本大小の神祇組、公方の尻持男達の總領旗本奴の元締水野十郎左衞門。身は旗

本の重きを顧みず、好んでなせる異形のいで立ち、異様の振舞、家來に綱、金時、定光、末武の四天王あつて、用人には保昌、獨武者あり。乃公は天晴れの源頼光を氣取れども、素行は大江山の酒顚童子のやうであつた。烈日金錢も融けんばかりの夏を冬と稱し、戸を閉ぢて爐を圍み、流汗瀧津瀬となるをも恐れず、身には小袖三四領を重ね襲して、猶寒い寒いと云ひ、湯玉を沸かせる饂飩を啜つて、これですと人心が着いたと、至極落ち着き拂ふ。寒風吹きすさみ、玉霰ぱら〳〵と屋根にこぼるゝ時、庭前に打水し、戸障子をがらりと開け放ち、主客帷子をつけて、如何にも暑う御座るとの扇遣ひ、がた〳〵身振ひしながらに飲むは冷水、食ふは冷麥、冷素麵、やう〳〵涼しうなつたと、わなゝきしての挨拶。客のもてなしには土鼠の汁、蛙の膾、鼠の濃漿、蛇の蒲燒、蚯蚓の鹽辛、百足の吸物、之をおつと稱し、通と自惚れる。持つたが病のつむじ曲りであつた。

されば彼等は行く所として横道ならざるはなく、爲す所として傍若無人ならざるはなく、横に車を推すを以て自家の本領として居たのである。名は男達であつたが、義俠よりは寧ろ我儘であつた。之を快と云はば快である。しかしながら人の迷惑をも顧みず、人道に外れた行を主義綱領と心得るやうになつては、社會の寄生蟲、人間界の黴菌と云はねばならぬ。當時夜廻の辻番改めを渾號して棒振蟲と稱した。そが白張提灯と棒貳本とを携へて居たからである。旗本奴の徒が彼等の糺問に遇ふや、傲然として叱咤一番して曰はく、我等を棒振を食ふ金魚とは知らざるか。ざまア見やがれ。

團十郎の幡隨院長兵衛（一）

此の厄介な旗本奴の横暴に對して、市井の爲めに氣

ばと云つて、之を放駒唐犬の徒に謀らんか。餘りに臆病に似たらずや。咄嗟の際に長兵衛は度胸を据えた。

『可うがす、參りやしやう。』

六 『無念』の一聲を最期

水野の屋敷の歡待は至らざる所なしであつた。定光末武、綱等出でゝ之を好遇し、延いて書院に至れば十郞左衛門既に座にありて、『近う〳〵』と其の座を進めさせ、森田座のことを語りて、長兵衛の勇を賞し、爾汝の友たらんことを請ふこと慇懃であつた。酒肴はそこに持運ばれる、肴は評判の土鼠の汁、蛇の蒲燒ではなくて、いづれも善盡し、美盡してのもてなし。しかし長兵衛は些とも油斷せず、刀は膝元にあり。死ぬまでも應戰をとの覺悟はあつた。

盃は廻る、酒は酣となる、日は暮れて燭は列る。饂飩の馳走はある。大盃七合ばかりも容るべきものを進めて、『それ、これにて今一盃』と云ふ。長兵衛『そればかりは御免』と辭む。定光定平、銚子を取つて、『長兵衛殿、それにて一つ過されよ』と酌せんとする。隙間やありけん、熱湯とたぎる酒を充てたる銚子を取つて、はッしとばかり長兵衛の眉間を打つ。熱燗の酒はさッとばかり長兵衛の面より眼に灑ぐ。長兵衛たぢろぐ所を十郎左衛門拔く手も見せず、ばらりずんと其の左の頰を斫る。保昌、末武、右より左より刀を拔き連れて長兵衛を撃つ。『卑怯千萬』と云ひざま長兵衛、一足引き退つて刀を拔かんとしたが、刀の鞘は背の扉に支へて急に拔けぬ。暗中に人あり大身の鎗を一しごき長兵衛の腰をぐさりと刺す。『無念』の一聲を最期に、男の中の男は敢なくも散つた。何處の寺の晩鐘か、殷々として暮靄の裡に漂ふ。

七 墓は清島町の源空寺

長兵衛の亡き骸は水に投ぜられ、浮きつ沈みつして龍閑橋の下まで流れ往つた。長兵衛の行衛を心懸りにして探し索めたる放駒の徒は之を獲て、水野の仕業なることを推察した。復讎々々の聲は町奴の中に起る。長兵衛の骸は之を手厚く、下谷清島町の源空寺に葬りて、さてそれよりは對旗本奴策の講究と實行とに移つた。

長兵衛の死狀に就ては諸説紛々として定まらぬ。或は水野の風呂の中で縛せられ、爼の上でさいなまれて死んだとも傳へられ、水野の大庭にて打たれたとも云ふ。いづれが眞説か、一寸と區別がつかぬ。兎に角水野の招に應じて、覺悟の死をなしたることは事實らしい。放駒の徒が復讎としては、吉原土手下に水野以下の旗本奴を要撃して、その耳と鼻とを殺いで報いたと云ふ説もある。是もどうだか眞僞の判斷に苦む。

長兵衛の死んだ年は詳にせぬ。寛永年間に在世したとあり、又承應年中在世ともある。恐らくその死は寛文の初めであらうと想像される。寛文の初とすると、後西院天皇の御世で、四代將軍德川家綱の時代、元和偃武の時を去ること四十餘年である。寛文二年には天皇御讓位あつて、靈元天皇が即位なされた。して見ると長兵衛が男達として男を磨いた時代は承應明曆の頃と思はれる。

世の中に白井權八と長兵衛との事を傳へ、狂言綺語に之を演じ講ずるも、之れ亦事實とは認め難い。權八は強盜追剝などを本職とする惡黨で、延寶七年十一月三日鈴が森で刑せられた。延寶七年は寛文元年を去ること十八年、權八の享年はよくは分らぬが、假に三十六とすれば、寛文元年、長兵衛の殺された頃には十七八歳であらう。長兵衛と交際があつたとすれば、少くも其享年は此位でなければならぬ。

松本幸四郎の演ぜし幡隨院長兵衛

水野十郎左衛門は寛文四年二月二十六日、平生の不屈不行跡の罪から松平阿波守にお預けとなり、その翌二十七日切腹仰付けられた。流石は旗本奴の最期だけに見事なる死樣をした。當時の人、落彼に代つて歌つて曰はく、すなら地獄の釜をつんぬいてあほう羅刹に損をさすべい。

幡隨院長兵衛は下谷幡隨院の寺内に住したから、取つてその稱としたと云はれる。一説には幡隨院和尙の弟と云ふが、どうだか當にならぬ。放駒唐犬などの男達とは、親分子分ほどの關係ではなかつたらしいが、水野と爭うて、甘んじて町奴を代表して死んだと云ふ花々しい行動が天下を聳動させて、獨り其の名を擅にしたのである。昔支那人戒めて云ふ、日暮れて猶烟霞は絢爛たり。歳將に晩れんとして更に橙橘は芳馨たり。故に末路晩年は君子更に宜しく精神百倍なるべしと。長兵衛の一死は則ち庶幾し。

を吐いたものを町奴とする。幡隨院長兵衛は實にその代表的人物であつた。

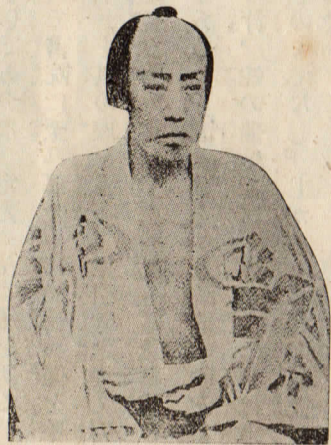
三　森田座の喧嘩

木挽町の森田座では今狂言の最中である。觀衆は棧敷に高土間に平土間に滿ち〳〵て、瞳を凝らして舞臺を見つめて居る。取分け觀衆のうちに異彩を放ちたるは棧敷七八間に水澤瀉の紋打ちたる緋縮緬の幕打ち廻したる一連であつた。いづれも伊達模樣伊達裝束の武家、金紙の平元結に髮さツと結び上げたる小姓は花の如く見えた。之を誰とかなす。今江戸八百八街には、子供の泣きを鎭むべき旗本奴の頭領水野十郎左衛門其の人であつた。

此に端なくも舞臺前にて爭が始まる。芝居の案内男客を導いて町奴の雷十五郎の席に之を割込まんとした。十五郎憤然として『ならぬ』と云ふ。案内男『そは我儘なり、芝居の作法を心得ぬか』と詰る。十五郎叱咤して曰はく『我を誰とか思ふ、今江戸中に隱れもなき雷十五郎とは知らざるか』。案内男屈せずして、『雷でも電でも其樣な無法は此では通らぬ、こちらへ御座れ』と引摺り出さんとすれば、雷起ち上つて案内男を引倒し、背の上にどつかと坐る。場中騷然として皆起ち上る。時に棧敷の一方に一聲高く呼はるものがあつた。『騷ぐな人々。靜まれ人々。天下月星も御存じの水野十郎左衛門が見物に來てあるぞ』と。一鶴の喊聲は群鶏の鳴を鎭めて、場中水を打ちたるが如くに靜まり返る。然れども雷や猶案内男の背にありて下らず。十郎左衛門之を見て、『あいつ推參千萬、取りひしいで來れ』と云ふ。『あツ』と答へて駈け往くものは、四天王の隨一人金時金左衛門、金字を縫ひたる黑繻子の長羽織に追風打たせて、近よりさま雷の首を把へて之を捻ぢ伏せ、どつかとばかり馬乘りに打跨り、舞臺を望んで『狂言始めた〳〵』と呼ぶ。是に至つて場中は沸くが如く、見物は右往左往に立騷ぎ、一大事とは見えた。

四　素町人の町奴の大氣焰

太夫元役者は花道に走り出でゝ、立ち騷ぐ見物を聲を限り、手を擧げて制したが、騷ぎは加はるばかりであつた。咄嗟、一人の大男、黑茶の木綿布子と同じ色の蝙蝠羽織を着け、左卷の三尺手拭にて頰被りしたるもの、『御免ねえ』と見物を推し分け、進むと見る間に金時が腕を摑んで頸の骨を捻ぢ、其の背にどつかと腰を据える。『上は梵天帝釋、下は金輪奈落の底まで御存じの幡隨院長兵衛。喧嘩ならば己が商賣、相手は擇ばぬ、來れや來れ』と大音聲に呼ばはつた。同じ町奴の一味徒黨、唐犬權兵衛、放駒四郎兵衛、

大佛八郎兵衛、小佛小兵衛、勘三婦彌平等、各躍り出でて棧敷を睥睨し、神祇組でも白柄組でも、何組でも宗門に選好みはせぬ、和尚の引導濟んだらば、卵搭場へ渡して呉りやう』と呼ぶ。金時下から刎返して刀を拔かんとしたが、『どつこい爾うはならぬ』と、唐犬權兵衛、朱鞘の双刀取り上げて遠くあなたへ投げ飛ばす。十郎左衛門は無念々々、我が大事の家來を素町人の町奴風情に斯くはさいなまれたれど、喧嘩の相手とならば五千石は棒に振らねばならぬ。骨髓に徹する怨を忍んで、おめ〳〵と此場を退散した。

五　辭せんか卑怯往かんか死

斯くて旗本奴と町奴との大衝突は來た。十郎左衛門は之を復讎せねばならぬ。彼はその最も怯懦にして殘忍なる法を選んだ。而して長兵衛は甘んじて其の犧牲となつて死花を咲かせ、獨り男達中での男達の稱を擅にした。

團十郎の幡隨院長兵衛(二)

十郎左衛門は座敷に歸つてより以來、憤々悶々やる方もない。正面に長兵衛との果合ひは、彼が食祿五千石に離るゝ所以、手段は陰密でなければならぬ。夜一夜思案に思案を重ねた上、がばと床を蹴つて起上り、枕元なる一刀をすらりと拔けば、刄は玉を散らして燭光はさツとすべる。にツこと笑つて『今に見ろ、長兵衛が素ツ首を丁と落してくれやう。』一擊虛空を切れば、劍は四壁に聲して、夜陰の間に鬼啾々の響きをする。

水野の使は丁寧なる辭を以て、長兵衛をその舘に招待せんとした。長兵衛は固より其の何の意に出でたるかを十分に知了した。辭せんか卑怯なり、往かんか死せんのみ。死か怯か、その一を選ばねばならぬ。さら

ばと云つて、之を放駒唐犬の徒に謀らんか。餘りに臆病に似たらずや。咄嗟の際に長兵衛は度胸を据えた。

『可うがす、參りやしやう。』

六　『無念』の一聲を最期

水野の屋敷の歡待は至らざる所なしであつた。定光末武、綱等出でゝ之を好遇し、延いて書院に至れば十郎左衛門既に座にありて、『近う〳〵』と其の座を進めさせ、森田座のことを語りて、長兵衛の勇を賞し、爾汝の友たらんことを請ふこと慇懃であつた。酒肴はそこに持運ばれる、肴は評判の土鼠の汁、蛇の蒲燒ではなくて、いづれも善盡し、美盡してのもてなし。しかし長兵衛は些とも油斷せず、刀は膝元にあり。死ぬまでも應戰をとの覺悟はあつた。

盃は廻る、酒は酣となる、日は暮れて燭は列る。醞飩の馳走はある。大盃七合ばかりも容るべきものを進めて、『それ、これにて今一盃』と云ふ。長兵衛『そればかりは御免』と辭む。定光定平、銚子を取つて、『長兵衛殿、それにて一つ過されよ』と酌せんとする。隙間やありけん、熱湯とたぎる酒を充てたる銚子を取つて、はッしとばかり長兵衛の眉間を打つ。熱燗の酒はさッとばかり長兵衛の面より眼に濺ぐ。長兵衛たぢろぐ所を十郎左衛門拔く手も見せず、ばらりずんと其の左の頰を斫る。保昌、末武、右より左より刀を拔き連れて長兵衛を撃つ。『卑怯千萬』と云ひざま長兵衛、一足引き退つて刀を拔かんとしたが、刀の鞘は背の扉に支へて急に拔けぬ。暗中に人あり大身の鎗を一しごき長兵衛の腰をぐさりと刺す。『無念』の一聲を最期に、男の中の男は敢なくも散つた。何處の寺の晩鐘か、殷々として暮靄の裡に漂ふ。

七　墓は淸島町の源空寺

長兵衛の亡き骸は水に投ぜられ、浮きつ沈みつして龍閑橋の下まで流れ往つた。長兵衛の行衛を心懸りにして探し索めたる放駒の徒は之を獲て、水野の仕業なることを推察した。復讎々々の聲は町奴の中に起る。長兵衛の骸は之を手厚く、下谷淸島町の源空寺に葬りて、さてそれよりは對旗本奴策の講究と實行とに移つた。

長兵衛の死状に就ては諸説紛々として定まらぬ。或は水野の風呂の中で縛せられ、俎の上でさいなまれて死んだとも傳へられ、水野の大庭にて打たれたとも云ふ。いづれが眞説か、一寸と區別がつかぬ。兎に角水野の招に應じて、覺悟の死をなしたることは事實らしい。放駒の徒が復讎としては、吉原土手下に水野以下の旗本奴を要撃して、その耳と鼻とを殺いで報いたと云ふ説もある。是もどうだか眞僞の判斷に苦む。

長兵衛の死んだ年は詳にせぬ。寛永年間に在世したとあり、又承應年中在世ともある。恐らくその死は寛文の初めであらうと想像される。寛文の初とすると、後西院天皇の御世で、四代將軍德川家綱の時代、元和偃武の時を去ること四十餘年である。寛文二年には天皇御讓位あつて、靈元天皇が即位なされた。して見ると長兵衛が男達として男を磨いた時代は承應明曆の頃と思はれる。

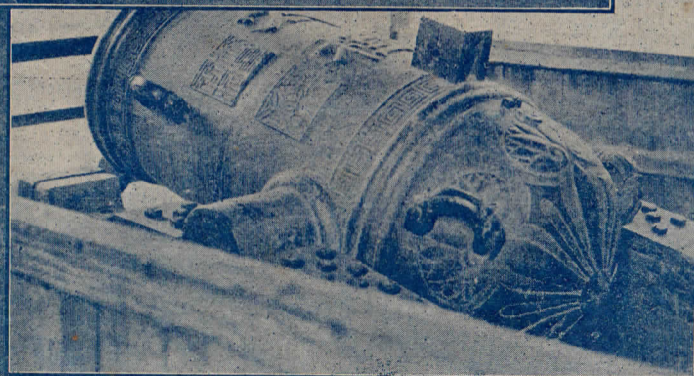
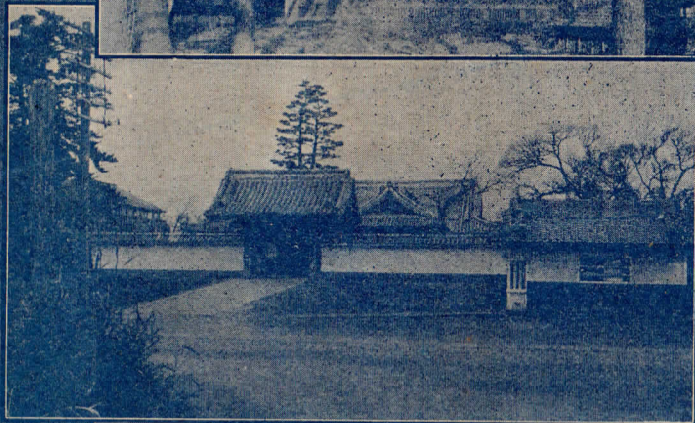
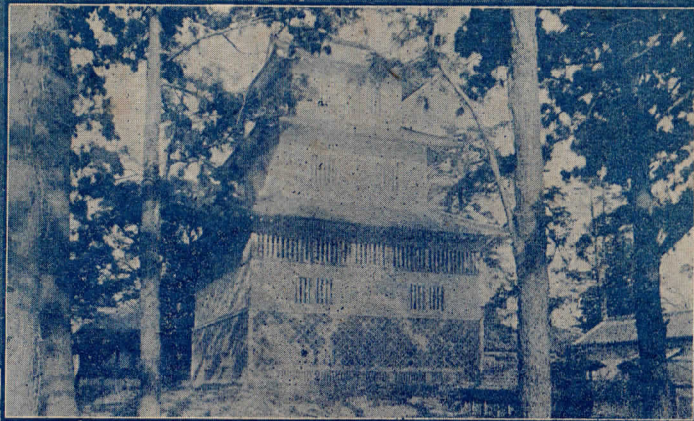
世の中に白井權八と長兵衛との事を傳へ、狂言綺語に之を演じ講ずるも、之れ亦事實とは認め難い。權八は強盜追剝などを本職とする惡黨で、延寶七年十一月三日鈴が森で刑せられた。延寶七年は寛文元年を去ること十八年、權八の享年はよくは分らぬが、假に三十五六とすれば、寛文元年、長兵衛の殺された頃には十七八歳であらう。長兵衛と交際があつたとすれば、少くも其享年は此位でなければならぬ。

松本幸四郎の演ぜし幡隨院長兵衛

水野十郎左衛門は寛文四年二月二十六日、平生の不屆不行跡の罪から松平阿波守にお預けとなり、その翌二十七日切腹仰付けられた。流石は旗本奴の最期だけに見事なる死様をした。當時の人、彼に代つて歌つて曰はく、落すなら地獄の釜をつんぬいてあほう羅刹に損をさすべい。

幡隨院長兵衛は下谷幡隨院の寺内に住したから、取つてその稱としたと云はれる。一説には幡隨院和尚の弟と云ふが、どうだか當にならぬ。放駒唐犬などの男達とは、親分子分ほどの關係ではなかつたらしいが、水野と爭うて、甘んじて町奴を代表して死んだと云ふ花々しい行動が天下を聳動させて、獨り其の名を擅にしたのである。昔支那人戒めて云ふ、日暮れて猶烟霞は絢爛たり。歳將に晩れんとして更に橙橘は芳馨たり。故に末路晩年は君子更に宜しく精神百倍なるべしと。長兵衛の一死は則ち庶幾し。

上は水戸城の一部を撮影したもの・中は烈公の建てた弘道館の光景・下は同じく烈公が鑄造せしめし臼砲の側面である・何れも義公の忠君愛國の血汐がその後裔に流れて・これ等の事業を成さしめたものである（菊池謙二郎氏記事參照）

塙検校追懐録

男爵　澁澤榮一

曠世偉人の四字

坂谷朗廬といふ人が、曾て保己一傳に叙して『曠世偉人の四字、保己一の外恐らくは皆愧色有らむ、敬す可く欽す可し』と云つたが、検校は誠に世の所謂偉人の一人であると思ふ。從つてその傳記なども從來已に數多く世に出て居るので、それ外以更に新らしい事實と申しては、自分のやうなものは未だ餘り多くを知つて居らぬ。故に爰には、埼玉縣教育會の編纂にかゝる德育資料に基き、思出でるまゝに検校の事共を述べて見る事と致したい。

五歳にして失明

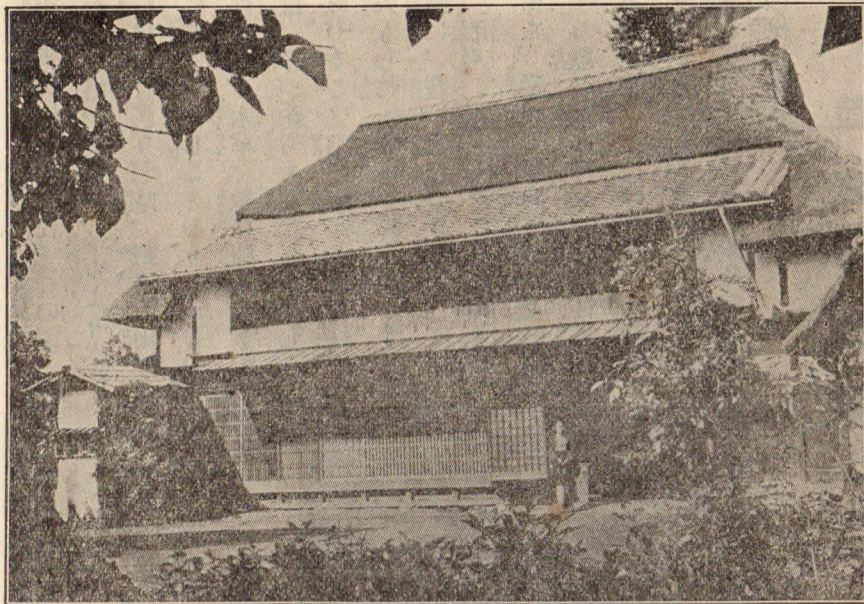
検校の生家は、縣下兒玉郡保木野村の荻野といふ家で、祖先は參議小野朝臣篁卿の末流。保己一はその名で、水母子はその號、後に恩師雨富検校の本姓を冒すに及んで、始めて荻野の姓を棄て、塙と呼ぶやうになつたのである。三歳の時肝の病に罹り、五歳の時全く

兩眼の明を失つた。この頃、檢校は深く草花を愛したさうで、某書に『幼少より木草の花を好みて、いまだ盲目ならざりし時、野邊に出で菫數種を求めて前栽に植ゑられしことありき。もの見ずなりて後も何にまれ花咲く木草を數多植ゑおきて、人の見喜ぶことあれば、みづからも並ならず樂しみめづること常の業なり。されば人もし物の色目を語らんとする時に、花の色につきて云へばいと悦びて語られき』とある位である。從つて自身も屢々花に關する歌を詠んだ。『一夜ねし名殘あかずも朝露にぬれて菫の床ぞまちかき』とか『眞萩原散りし草葉と見るまでに菫花咲く野邊の春かせ』とかは、先づその例である。

發奮の動機

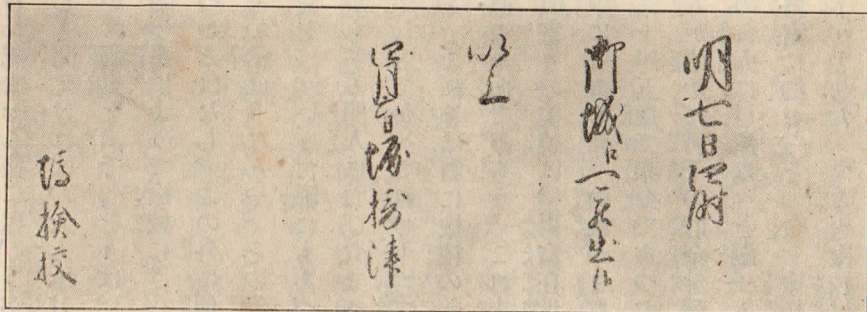
寶暦七年六月、檢校十歲の時、慈愛に富めるその母は敢なく草葉の陰にかくれた。その頃、檢校は不圖した事より發奮の動機を得た。同じ書中に『當時某とかいふもの、太平記一部を暗誦し、東都に在りし諸家に出で入り、名を顯すと聞きて、心におもはく、太平記は全部四十巻に過ぎず、之を知るを以て名を顯し妻子を養ふことを得、難かる可きことかは。こゝに至りて東都に出づるの志いと切なり』とある。即ち、これ等が重なる動機となつて、愈々出府の志を固めたものと見える。檢校が江戸に出たのは、その翌年で、年正に十三歲。本庄、熊谷、吹上、鴻巣、桶川と今の中仙道を逆に上つて、一人の絹商と共に遙々江戸に出で、先づ土手四番町の東條源右衛門方に寄り、次いで四谷の雨富檢校の門下となつた事は、世人の既によく知る通りである。

塙保己一肖像

塙保己一の生家（埼玉縣兒玉郡保木野村）

因に云ふ。檢校が始めて出府した時、旅行の荷物は一つの古めかしい素麵箱に入れて來たが、この箱は今猶塙家に保存されてある。又、出府の年についても、種々異說を傳へて居るが、爰には假りに五歲失明、十三歲出府を眞實として置く。

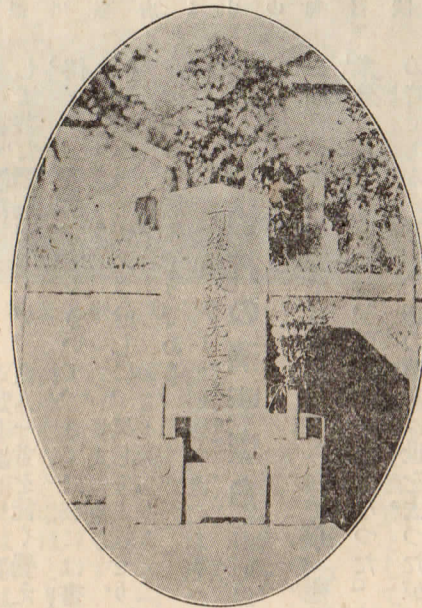
音曲按摩の術に拙し

さて、雨富檢校の門下となりはなつたが、肝腎の音曲按摩の術には極めて拙かつた。檢校の長女トセ子の傳ふる所によると、『多くの瞽者はカンのよきものなるに、大人は然らず、つね〴〵路ゆく折には曲り角、或は橋梁などのほとり困じなやめるやうにてありける。又食事の折にはいはゆる握箸もて椀の向うの端より口に掻いこみ食せり。』云々又『大人性來至りて無器用にて按摩鍼術にも拙なかりけり。殊にカン〳〵甚だ惡しく琴三絃の藝など三年が程習へども〳〵かんどこも分らず調子もあはず、果ては音曲のことには心も染まず、只管文の道に勵まれたり』とあつて、自身も餘程困難した

徳川幕府よりの御召狀

ものと思はれる。そこで、恩師雨富も次第に檢校の長所と短所とを認め、その短所をば餘り責めず、その長所は益々これを發揮させるやうに努めた。以後、檢校の學問は長足の進步をなし、漢學に、神道に、和歌に、律令に、醫書に夫々その道の師を求め、益々廣く深く硏究の步を進めたのである。伊東宗益といふ人の談に『塙は極不器用にて、遊藝種々習はせても何一つ覺えず、唯晝寢のみして甚だ懦弱なりしが、百人一首を能く覺え、その外書物を讀むを好んで終日倦まず、安房守之をきいて、さては彼には書を聞かせ且つ歌を詠ますべしとて師を撰み歌を覺えさせしに、果して上達せり』云々とあるは、よくこの間の消息を傳へて居るやうである。

檢校の淸廉潔白

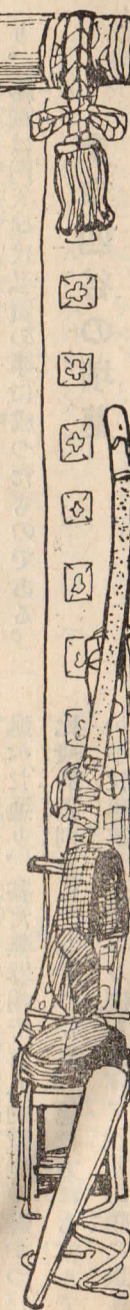
斯くして、一方では學問を勵みながら、他方では本來の師の道にもいそしみ衆分より勾當となり、更に總檢校となつた。時に天明三年三月、檢校三十八歲の時である。翌年、師の雨富は世を去つたが、その臨終に於ける遺言を見ると、師弟の情誼のこまやかなること、實に想像の外である。曰く『天明四年雨富病みて死なんとせしをり、大人を呼びて云ひけらく、我れさきに人に貸しおける金若干あり、その中に我世にありてすら返し得ざる人あり、其劵契をば皆燒きすてたり。さもと思ふ劵契をば、こゝに殘しおけり、讓るべき子もなければ

われ死去せん後には、うべ、とりて汝が用にあてよかしと聞えければ、大人承けずして答へしやうは、やつがれ郷里を出でしをりは、露ばかりの貯へなかりしに師の恵によりて檢校にさへなりにけり。徳これよりあつかるはなし、この外に何をか給はりなんや。その劵契をば、いまだ職にもあづからざる門人にたびたまへかしとてかへされけり』云々と。これ等は實に檢校の美德の一面であらう。これと似寄りの美談は、雨富在世中にもあつた。檢校がまだ二十四五歳で衆分であつた頃、或る時同格の盲人の一人が遙かに若干の貯金を殘して世を去つた。然るにその盲人には然るべき嗣子もなかつたので、或る人より雨富に勸め、その金を檢校に與へて盲人の家を嗣がせようとした。すると檢校は即座に斷はり『豐一（盲人の名）生けりし折、己と心よからず、死にたりとてその家を嗣ぐべきすぢある可らず、且彼が家を嗣がでありとも、去る可き果報のありなんにはかばかりの財貯へなんこと難かる可らず』云々と答へたさうである。即ち非常に獨立心の盛な人であつた。

塙保己一の墓（四谷愛染院）

群書類聚の出版

檢校の一生中、最大の事業はいふ迄もなく群書類從の編纂及び出版であるが、これは彼が三十四歳、即ち漸く勾當となつてから五年目程の時に思ひ立つた計畫で、以後有らゆる苦楚をなめ盡して、遂に安政二年彼が七十四歳の時に漸く版木とすることが出來たので、この間都合四十一年間、その辛抱強いことは、實に古來稀に見る所である。この書が、如何なる動機によつて作られ、如何なる内容を含み、又如何なる批評を當時及び後世の學者より受けて居るかは、こゝに改めて贅する迄もない事と思ふ。次に、當時の俗諺に『番町に過ぎたるものは二つあり、佐野の櫻に塙檢校』とか『番町で目あき盲に物をきゝ』と云はれた其番町の和學講談所は、檢校が幕府及び二三の人の保護勸告に基き、自身も感ずる所あつて始めて創立したもので、最初校舍を裏六番町に置き、後更に表六番町小林權太夫の拜領地八百餘坪の地を借りて引移つた。以後、三代七十餘年間打ちつゞいたが、明治の初年に至り、學問の荒廢すると共に廢止された。又世に溫古堂と傳へられて居るのは檢校の堂號で、故きを溫ね新しきを知るといふ檢校の平生の主張をそのまゝ堂號としたものである。先年まで内閣書記官をして居られた三輪醇氏所藏『溫古堂』三字の額面は、即ち當時の溫古堂の額面で、字は水戸治保公の筆に成り、彫刻は門人屋代弘賢の手に成つたものである。

東京四谷の墳墓

檢校は、文政五年九月、年七十七を以て沒したが、墳墓は今東京四谷寺町二十二番地愛染院光明寺の境内にある。以前はその東北隅に當る安樂寺の境内にあつたのだが、明治三十一年の頃、井上賴圀氏などが主唱者となられて、多くの有志と共に今の所に改葬されたものである。猶、舊墓地、即ち安樂寺の跡には檢校の妻子の墓が殘つて居る。之を要するに、檢校は、一面より見ると學者、識者、歌人であるが、他の一面より見ると實業家、經綸家であつたかとも思はれる。從つて、その性格にも、長短明暗の二方面を倶へて居たが、長所として就中著しかつた特質は、意志の强固な事、平生活動的な事、寡欲淡泊な事、寛宏人を容るゝに吝ならぬ事、頓才機智に富んで居た事、記憶力の非常に强かつた事等で、これには一々その實例を擧げることが出來る。又、短所の方面より見ると、前にも既に述べた通り、甚だ無器用で盲人的感覺の鈍かつた事、比較的獨創力に乏しかつた事、想像力にも富んで居なかつた事等だが、一々例を擧げて說くの煩に堪えぬ。

修養上より見たる義公

菊池謙二郎

(一) 明敏剛毅なる天性

『同じ年(義公六才の時をいふ)京都の呉服所松葉乘九と申す者、參り候て昔々を語り候が、私事唐へ渡り候時、舟中にて龍虎の戰をつぶさに見申候、面白き事にて御座候。海上より龍出で、山の上より虎出で迎ひ、近邊四五里、黑雲起り闇の如くに罷成、波は山の如くに湧き揚がり、天地震動仕候由申候、其時義公仰せられ候は、それは面白き事なり、さて汝は何方に居候て見申候哉、船には居られ間敷候、見所合點ゆかずと仰せられ候へば、乘九御返答に困り、おそろしき殿かなとて御座敷を逃げ申候由。』

義公は天性聰明英敏であつた。

『小石川御屋敷(水戸藩邸)にて英公(義公の同母兄にして讃州高松城主賴房卿)と度々馬上の竹刀打を遊ばされしに、御兄子の御心まゝなる、御身へ當りたる竹刀をば當らぬと仰せらる。義公爭ひ給へども御兄子なれば、いつも御主の御理分にのみ仰せらる。義公安からず思召す、ある時又馳せ合はせ給ふに、義公竹刀を投げ捨て給ひ英公に組み付き給ふ。御馬は兩方へ馳せ違へば既に落ちさせ給はんとす、英公思ひがけもなき御事なれば、是はいかに、あぶなきぞと仰せられけるを、何のあぶなきと云ふ事のあらんとて、ひしと組み付き給へば、英公あをのきに落ち給ふ。義公上に落ち重り給ひ御胸の上に乘りかゝり給ひて首をかくぞ〳〵と仰せられければ、英公おし鎭め給ひて首はかゝばかけよ、腰が痛きぞと仰せられける。それよりして、いや〳〵あの如き暴き事する仁とは無用なりとて、再度竹刀打遊ばされずとなり。』

義公は天性、剛性で負け嫌であつた。

德川光圀の肖像

(二) 五聖の第一位

聰明英敏の者は世間の人が馬鹿に見ゆる筈である。其の上に剛情我慢が强ければ自己の思ひ立つたことは一歩も後へ引かぬが常である。されば自ら用ゐること厚きに失し、終に固執の弊に陷るものである。かやうの人は少くない。非を遂ぐる王安石の徒は此の部類に屬する。この部類の人も非凡は非凡であるが、決して偉大なる人物といふことは出來ぬ。義公も天性のまゝで終つたならば、蓋し或は王安石の徒と擇ぶ所はなかつたであらう。然るに義公在世の當時すでに五聖人の第一位に置かれて、天下萬衆の瞻仰する所となり、二百餘年の今日に至つてい

よく〱ます〱其の徳光の發揚せらると云ふのは何の爲めであらうか。勤王の倡首、復古の指南だつたのも其の一因ではあるが、畢竟其の人物の偉大高傑の致す所である。その偉大高傑なる人格は天性と修養と相待つて出來上つたものと言はねばならぬ。されば義公は如何なる點に向つて修養を專つぱらにしたであらうかそれは義公の自ら語つた所に由つて明らかに知ることが出來る。

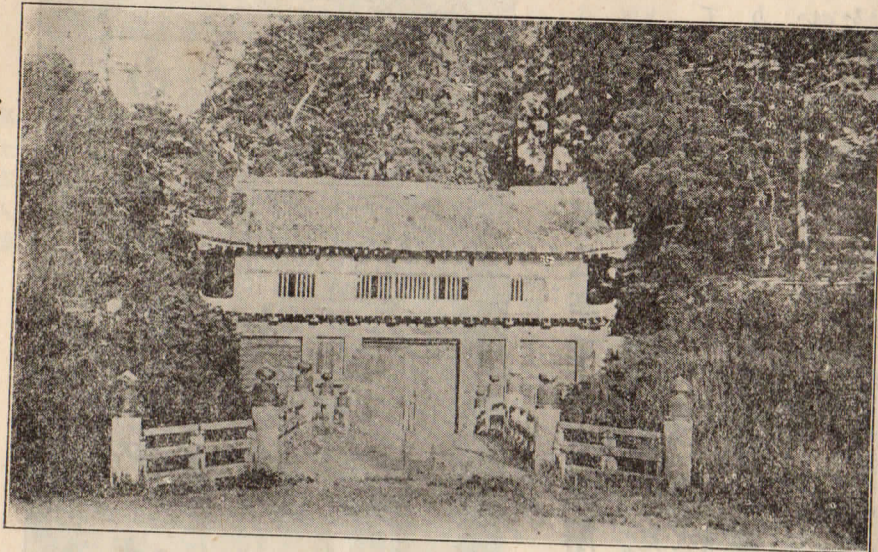
(三) 人間第一の修行

『義公常に仰せられ候は、平生物に着せざる事人間第一の修行なり、汝等も着を離るゝやうに心かけ候へと、御家臣共にも御示し遊ばされ候。物毎初めに聽き候事は聽き直しにくき事皆人情に候、詩歌の趣向も初め存寄り候事を忽ち捨て、別の趣向に致し換候義は成り難きものなり。依つて理非に迷ふ事まゝ有之、よく〱心得べき事なり、我も隨分此の修行をするなりと度々仰せられ候。』

自説を固執したり、吾が所好に偏するは人情の常である。此の短所弱點を打破するには、己を虚うし事に着せざるが第一の修養であることは、義公の申された通りである。特に聰明英敏にして意思强固なる人に在つては、猶更に必要で、義公がこの修養に專心したことは、能く己れを知れるものと云ふべく、天性雅量に富みたる(『御幼年より御家老共、御守の者共の御異見申上候事あれば、御あらかひなく御聞いれなされ候』)上に此の修養を積まれたるが故に、ます〱偉大なる人物となつたのである。

(四) 敵を愛する心

義公は此くの如く、己を虚しうし事に着せざることを心掛けられた、されば其の見る所、考ふる所は至公至平であつた。たとへば昵近者といへども、寵愛者といへども、重く用ゐることをせられず、必らず其の能不能に由りて之に適せる職を授けられた。罪あつて或は追放に處せられ、或は閉門を命ぜられたものに對し

舊水戸城の眞景

ても、赦免後は少しも舊惡を思はずして元の如く任用せられた。諛言を呈する者ある時はいたくこれを嫌はれ、時として喜色を浮べらるゝやうのことが有つても、後に至つて之を疎んぜらるゝのであつた。又直言を進むる者あるときは之を喜ばれ、時として顏色を損し、或は無言にならるゝことがあつても、頓がて心を取り直して之を容れらるゝといふ風であつた。石田三成は徳川家に敵對したので、幕府時代は蛇蝎の如く忌み嫌はれたが、義公は彼を評して『石田治部少輔は惡くからざるもの也。人おの〱其の主の爲めにすといふ義にて心を立て事を行ふ者、敵なりとも惡むべからず、君臣ともによく心得べき事なり』と言はれた。眞田信仍も徳川家に敵對し、千手村正の鍛へたる刀劍は徳川家に祟を爲すとの傳説に由つて、常に村正の大小を帶びて居つた。義公は之に就いて『士たる者は平生かやうの事にも忠義をふくみ、心を盡くし候事尤なり』と言はれた。かくの如きは、幕府の懿親たる義公の言としては、實に公平無私なものであつて、これにより其の敵を愛する心のゆかしさも推諒せらるゝことである。

大日本史卷頭に冕せし聖旨

(五) 至公至平なる見解

其の他聖賢の人物學說に對しても公平の見解を持して、一方に偏することはなかつた。かの一般の儒者より異端邪說なりと稱せらるゝ荀子、揚子、韓非子に就いて、義公はかう言はれた、『荀揚韓、皆明儒なり、善を進め惡を懲らし、聖人の道を尊み、邪僻の行を戒しむ、大儒にあらずして何ぞや、其中に性を說くに違ひ有つて、議論各異なれども、皆一理ある事なり、畢竟善人なり、……人皆異見無きにしもあらず、總じて大儒をば小疵ありとて誣るべからず』。かく儒者の攻擊する荀揚韓を辨語すると共に、儒者を非難した。其の言にいふ、『儒者の異端あり、聖人の道を說きつゝ甚だ固滯にして物理に通ぜず、政を爲す時は民樂まず俗和せず。其の性命道德を論ずるは高きに似て、自己今日の勤は愚直に異ならず、却つて俗人に學問害をなすかと嘲けらる。此くの如き類異端にあらずや。朱文公、陸象山、陳白沙、王陽明、各異論あれども、共に此れ千古の大儒なり。今日其の書を學び圓に用ふれば其の行處皆善道となる、偏に用ふれば善敎も惡しく成るなり、日蓮宗三大部に固滯して一句半言に偏りて、偏見をなすやうに儒者も偏見を挾み、中和の道を失ふ輩は、皆此を儒中の異端と言ふべし。』義公が固滯偏執を嫌惡せられたことはこの評論でも知

らるゝと同時に、公が如何に偏見固執を離るゝことに專心したかを窺ふに足るのである。

(六) 進步的なる批評眼

儒者が神の如く敬ひたる孔子に就いても、公平なる見解を下して居る。『俗人は何事も聖人の知らざる事なしと思ひて、聖人を奇異に說きなすは偏見なり、孔子の「知レ之爲レ知。不レ知爲レ不レ知。是知也。」とのたまひ、圃を學ばんことを請はるれば「我不レ如二老圃一。」と宣ふ。禮を學び樂を學び給ふ、聖人も初より知り給はぬ事多かるべし。先聖未發の所を後世に發明することあまた有り、就中天文地理は、元の代に至つて精微を極めたり、今より後如何なる妙理をか發明すべき』。孔子を崇拜し、其の一言を神語とも見做し、孔孟攻め來らば如何にすべきかとの問題さへも提出せられた當時に在つて、義公が恁かる批評を加へたことは、實に進步的であつて、是亦偏見固執を打破せられたものであると思ふ。

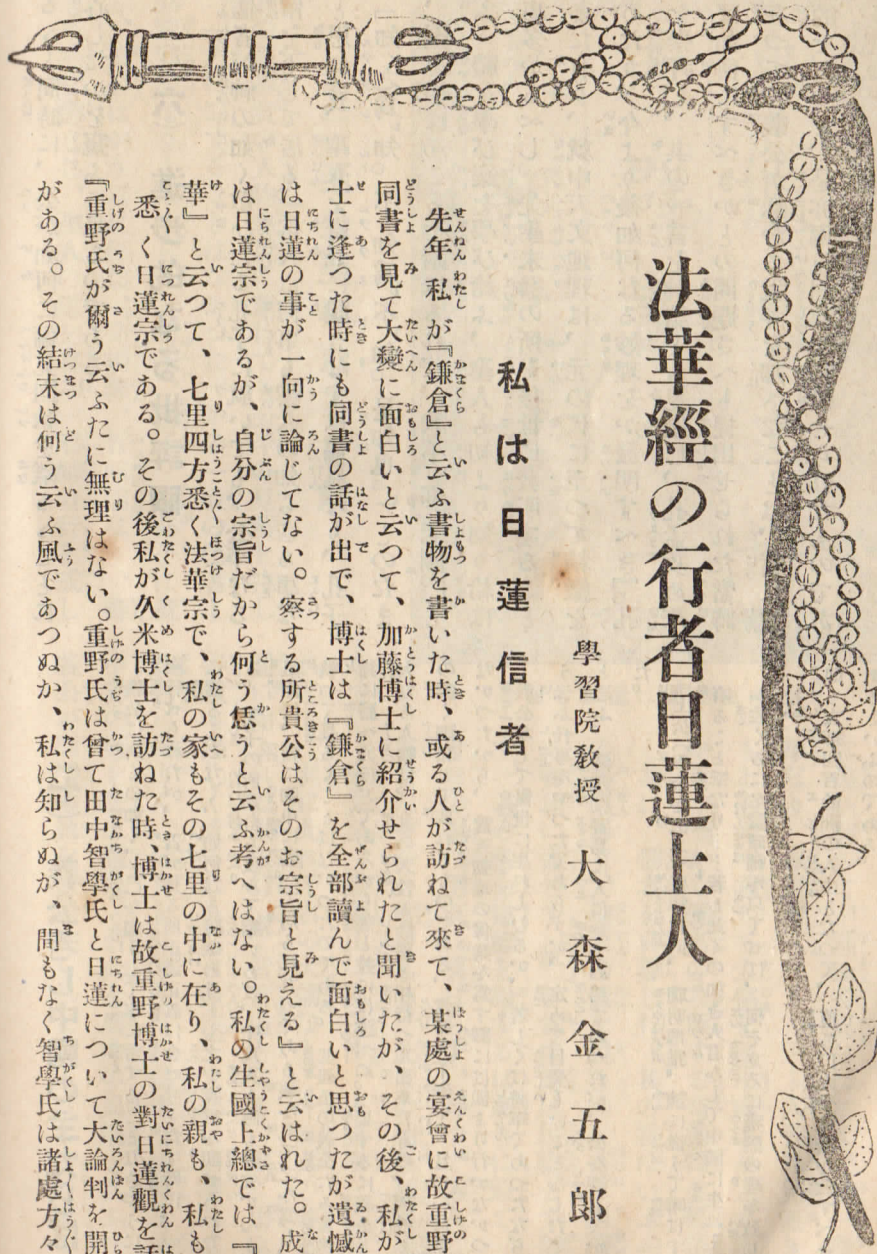
(七) 義公若し中國の主たらば

義公は斯くの如く、己を虛うして事に着することなきやうにと專念修行せられたが、吾が見る所正道正義に合せりと爲す時に、一歩も他に讓ることなく、如何なる障礙ありとも之が實行を期せられたのである。孟子の所謂自ら反みて縮からば、千萬人と雖も吾往かんといへる氣節は、常に胸中に蓄へて居られたのである義を見て之を爲し、正を執つて畏るゝことはなかつたのである。其義公の義公たる實例は、僂指に勝へぬほどであるから態と茲には述べぬ。要するに義公といふ偉大なる人物は、其の天性と修養と相待つて出來たもの、天性と修養との能く調和して成れるものである。當時天下泰平で且つ一藩主に過ぎなかつたから、震天動地の偉業を爲す譯には固より行かなかつた。もし義公をして亂世に生れしむるか、若しくは將軍であつたならば、どう云ふ仕事をやつたであらうか、定めて目覺しいことをしたであらうと思ふ。舜水は容易に人に許さぬ男であつたが、公を評してかう言つた。『上公(義公を云ふ)盛德仁武、聰明博雅、諫に從うて咈はず、古今、有ること罕なり……若し此くの如き人君をして中國に生れしめ、之を佐くるに名賢碩輔を以てせば、何ぞ立ろに雍熙の理を致し難からむ』即ち支那四百餘洲の人主となつて、直ちに太平の治を致すべき人物であるといふのである。

法華經の行者日蓮上人

學習院教授　大森金五郎

私は日蓮信者

先年私が『鎌倉』と云ふ書物を書いた時、或る人が訪ねて來て、某處の宴會に故重野博士が同書を見て大變に面白いと云つて、加藤博士に紹介せられたと聞いたが、その後、私が重野博士に逢つた時にも同書の話が出で、博士は『鎌倉』を全部讀んで面白いと思つたが遺憾なことには日蓮の事が一向に論じてない。察する所貴公はそのお宗旨と見える』と云はれた。成る程私は日蓮宗であるが、自分の宗旨だから何う慿うと云ふ考へはない。私の生國上總では『七里法華』と云つて、七里四方悉く法華宗で、私の家もその七里の中に在り、私の親も、私も、一家悉く日蓮宗である。その後私が久米博士を訪ねた時、博士は故重野博士の對日蓮觀を話され、『重野氏が爾う云ふたに無理はない。重野氏は曾て田中智學氏と日蓮について大論判を開いた事がある。その結末は何う云ふ風であつたか、私は知らぬが、間もなく智學氏は諸處方々へ引札様のものを貼付けた。その引札を見ると、重野氏が智學氏の前で頭を下げて閉口してゐる繪を描いてあつた。それを見て重野氏が大に怒られた、かくて其返報に國史眼編纂の際日蓮の事を安房の屠者の子云々と書かれた』と云ふ意味の話をされた。重野博士程のものが、感情に動かされて有りもせぬ事實を書かれるやうな事は萬々有るまい。

日蓮果して屠者の子乎

所が普通の書物によれば、日蓮は後堀河天皇の貞應元年安房長狹郡東條鄉小湊の出生、父は貫名重忠、母は梅菊と云ふやうに成つてゐる。尙貫名氏は元は藤原氏、母は淸原氏の系統であるとは、多くの書物の記すところである。然らば何故、日蓮を以て屠者の子となすのであらうか。それは日蓮の書いたものゝ中には、往々それらしい文句が見える。即ち『日蓮は安房國海邊の陀旃羅の子なり』と云ふやうな句があるが、旃陀羅とは印度に有つた五つの階級中、最も低い賤しい階級で、先づ奴隷、我が邦で云ふと恰度穢多に當つてゐる。思ふに、重野博士は此の文句を取つて、日蓮を屠者の子と記されたのであらうが、世間にも往々、日蓮は穢多の子だと云ふ說が廣まつてゐる。併し、日蓮が慿く云つたのも、自分を卑下し、謙遜したものである。大眞理を唱ふるものが、自己の位置を卑くして、眞理の位置を一層高からしめることは有勝の事である。然らば重野博士程のものが、それを取つて直ちに『屠者の子』と書かれたのは、果して當を得てゐるであらうか。尤も一說には、支那では武士のことを屠者と云つたとある。武士は人を斬るもの故、爾う云ふ言葉が出來たのであらうか。そこで他から突込まれれば爾う言ふ逃げ道もあるから・感情づくと云ふ程でもあるまいが、田中氏に對して揄揶半分に彼の書かれたものであらう。それは兎も角、前置はこれで止めることにする。

日蓮上人研究難

さて私は『鎌倉』を著はした時、何故日蓮の事に就て

詳說しなかつたかと云ふに、これは言ふまでもなく、その頃研究が不十分であつたからである。私は宗教上から研究した事はないが、旅行好故屢々總房の地を漫遊して、歷史上の古蹟を探檢した。清澄山に登つては、日蓮上人が建長五年に始めて『南無妙法蓮華經』の題目を、朝日に向つて唱へ出したと云ふ場所をも見、小湊の誕生寺をも見た。又かねて上人の『遺文錄』などをも繙いて居たが、其後總州中山の法華經寺に到つて、上人の古文書類の保監せらる丶の饒多なるに一驚を喫したことがある。又駿州の大石寺にも、上人の遺文書が數多くあると聞いてゐるが、それはまだ見ないから何んとも分らぬが、兎も角、これ等遺文類を讀んで見ると、却つて生中の批評が出來にくくなる。日蓮は日本の諸宗教に對して如何なる意見を懷いて居つたか。又自己の宗旨は他のそれと何う違つてゐるか。これ等の問題は遺文書類を系的統に調べねば分ることでない。尙ほ又上人の歷史上から見た評論の如きも、相當の月日をかけて、遺文書類の眞僞の鑑定から、其內容に至るまで研究した上でなければ、妄りに言を發することは出來ない。——恁う思つて『鎌倉』を書いた時には、ほんの概略を記すに止めたのであるが、今日とても當時と大した違はなく、格別の研究が積まれてゐる譯ではないが、折角の『學生』記者が御要求ゆゑ。所感の一端を抒べて『鎌倉』へ書き殘したところを補はう。

十五年間の苦學研究

前述の如く、日蓮は貞應元年を以て安房小湊に生れ、四條天皇の天德元年十二歲の時、淸澄寺に入つて道善といふ和尙に師事し、十八歲の時出家したが、その後十五年間は專心佛敎の研究に從事し、釋迦一切の諸經文は悉く之を研究したと云ふ。或は比叡山に上つて名僧知識を訪ね、或は宋國より渡來せる道隆などにも見みえてあらゆる方面の研究に耽られた。而して三十二歲の時、即ち建長五年四月に、房州淸澄寺に於いて、三時より出で丶、立つて朝日に向ひ、聲朗らかに『南無妙法蓮華經』の題目を高唱した。これが即ち日蓮宗の起因である。上人の書いたものに依ると、此の時上人は、念佛は無間の業であると見出したが、それが上人にとつて一生の不祥事であつたと記されてある。即はち世に普ねく行はる丶法然上人の念佛宗などは、佛敎の本旨に背いた似而非宗門だと云ふことを、此の時始めて上人は發見したのであるが、それは一生の不祥事だと云はれたのは畢竟謙遜の辭たるに過ぎぬ。念佛始め他の宗門の非を唱へ出せば、擾々たる天下の凡人輩に怨を買ふことは決つてゐる、かと云つて唱へざれば佛敎の仇となつて、地獄に墮ちることは必定である。煩悶多時、日蓮は此の點について沈思したのであるが、遂に大決心を以て獅子吼を始めた。

英雄僧日蓮上人

一生は奮鬪の歷史

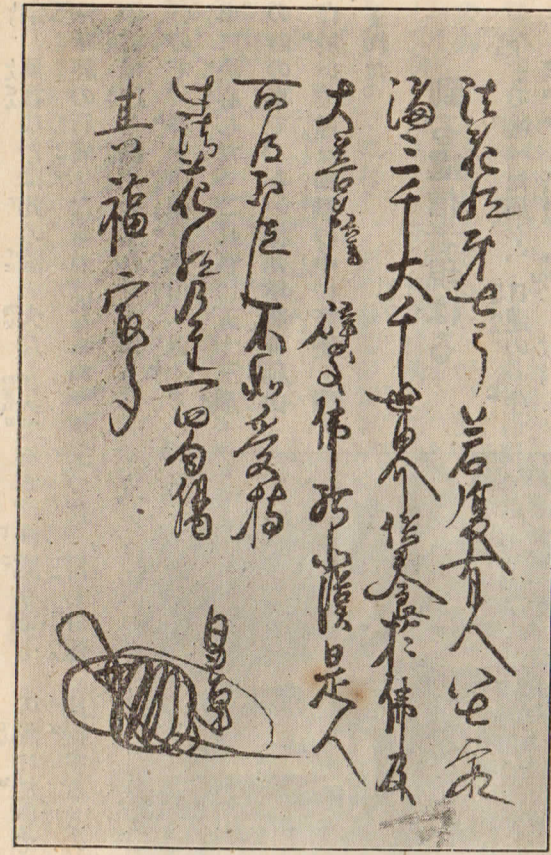
此の後上人一生の事業は、悉く他宗と大奮鬪の歷史である。上人が他のあらゆる宗門から怨まれ、又鎌倉幕府からも壓迫を被むつて種々の危難に遭逢したことは一々玆に述べ竭くすことが出來ない。日蓮が恁く諸宗を誹謗したのは、飽くまでも自己の所信を貫かんと努めた爲で、好んで他を陷擠せんとしたのではない。かの四大格言『禪天魔。律國賊。眞言亡國。淨土念佛。無間地獄。』の如きは、他宗を誹謗すること甚しきもの

故、勢ひ他より攻撃を免れないが、上人よりして之を觀れば、敢て事を好んで言を設けたのではなくて、自己の感想を飾り無く發表したもの、所詮は他の宗門を破壞せねば日本國家のため不爲であるとの決斷から起つた大勇猛心に外ならなかつたのである。かくて文應元年、三十八歳の時、『立政安國論』を書いて幕府に上つたが、これは宗門上より見ても、又學問上より見ても、實に堂々たる大文字であると思ふ。然るにその中の叙述が、諸宗を誹謗し、且つ時の執權北條時賴の忌諱に觸れ、四十歳の時伊豆の伊東に流され、三年間其處に止まつたが、その間も切瑳琢磨して修養を怠らなかつた。

『鎌倉殿は牛飼か』

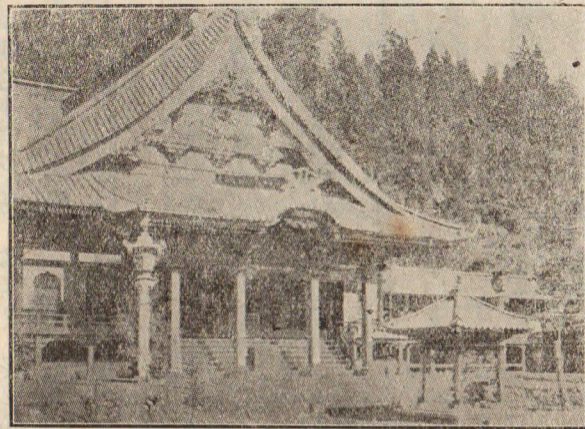
三年の後、日蓮は許されて房州に歸つたが、その時母親は年既に七十、ふとした病氣が素になつて枕上らず、遂に敢なくなつて了つた。人生の一大悲痛を嘗めた日蓮は、更に猛勇心を喚起して房州を出で、他方に向はんとしたが、東條の小松原に於いて、數百に餘る念佛信者に取籠められ一大厄難を受けた。けれど上人は辛うじて此の難を免れ、鎌倉に入つて再度の獅子吼を始めた。曾て北條時賴に面會した時、上人は聲を厲しくして言つた、『建長寺、極樂寺などの念佛者、禪學共が堂塔を燒き拂ひ、彼等が首を由比が濱にて悉く斬る可し。これ等諸僧の唱ふる所は、釋迦の本意にあらず、佛教の本旨とは似て非なるものであるから、恁樣の僧侶を養ふは牛を飼ふに均しい。鎌倉殿は牛飼ひか』と。猶かういふ暴言が重なつたから又幕府の忌諱に觸れ、文永八年九月を以て、又佐渡が島へ流されることに成つた。此時龍口御難のことが諸書に見えて居る。重野博士が主として論せられるのはこの龍口御難を無いことゝして抹殺するにある。このことは史徵墨寶の考證にも京都本滿寺の日蓮上人の自筆文書を引いて記述せられてある。事實はあの通りであらうかと思はれるが、猶研究の餘地が無いでもない。時に上人は年五十歳であつた。

佐渡流謫中の著述

上人は佐渡にあること四年、櫛風沐雨の間に益々深き修養を積み重ねた。かの『開目抄』、『觀心本尊抄』等の書物の出來たのも此の間の事である。又日蓮宗の根本義の確立決定したのも此の時で、上人は此の時他の一切の經文を悉く棄て、法華經のみを所依の經典となし、日本第一の法華經の行者たることを自任することに決定した。日蓮宗は天台宗とも大きな似寄を持つてゐるが、その異なる所は主として法華經のみを所依となす點に在る。上人は又『南無妙法蓮華經』といふ七字の題目を唱へることを標榜とせられたが、それは『此の題目は三途の川にては舟となり、死出の山にては牛車となり、冥土にては燈となり、靈山へ登る時には杖となる。故に日蓮の信者は常に此の題目を唱へて、勇猛に奮迅すべし』と云ふ趣旨と見える。その後日蓮は赦免せられて、佐渡より歸り來つたが、『御房はも早や法華經の法門を止められたるか』と尋ねられた時に、日蓮は之に答へて『王地に生まれたれば、身は隨へられ奉るとも、心は隨ひ奉ること能はず、念佛や、禪

日蓮上人の筆蹟

宗、眞言などは此の國の大なる災である。何處までも法華經の行者とならねばならぬ』と云つた。併し日蓮の言は迚も採用せられさうにもないので、身を甲州身延山へ退くる事に決心した。これ實に五十三歲の時の事で、その後九年間身延山に於いて種々國難の中に修養を積まれた。

到る處信者現はる

今まで述べた如く、日蓮の一生は、全く他の宗門に對して奮闘の歷史である。同じくこれ僧侶とは云へ、或は朝廷に出入し、或は公卿達に締交して、その弘布を圖るものの多き中に、日蓮の如きに有らゆる高僧、有らゆる貴族を敵として奮闘し、飽くまでも自己の初心を貫ぬかうとしたわけで、かう云ふものは實に尠ない。此の點に於いて、耶蘇教の革命者マルチン・ルーテルと比擬するものがあるが、或は適當であらう。實際、日蓮の赴く所信者ありて、佐渡へ流さるれば佐東に伊渡へ流さるれば伊東に、到る處熱心なる信者が出來た。前述の中山法華經寺の如きも、當時その邊に住んでゐた富木常忍が、非常に日蓮を信じて自分の家を寺にしたものである。又身延山久遠寺の如きも、矢張り信者波木井實長が、上人の爲めに庵室を建てたのが基になつた。波木井氏は熱烈なる信者であつたが、上人も亦篤く波木井氏を信じ、父とも母とも賴むと云はれた程である。此の外上人に對しては、各地から、米だとか、餅だとか、果物だとかを贈つて、上人を饑餓より救はんとするものが多かつた。此等の篤信者に對し

甲州身延山久遠寺の祖師堂

上人が一々書かれた返事は『遺文錄』の中に收められてあるが、それで見ると返書の認め方が極めて懇切で男は男、女は女、その身分に從うて夫々適はしい謝辭を述べてゐられる。

熱烈勇猛の裏面は慈悲懇切

鎌倉に於いて諸宗を誹謗し、時の執權をも物ともしなかつた點から觀て、上人を亂暴粗野、殆んど發狂人の如く思ふ人もあるであらうが、前述の信者に送られし文書を見ると、その性格は決して他から想像したやうなものではなく、懇切慈悲の情が現はれ、惻々として人を動かすものがある。殊に文章は巧妙で、身延山の敍景の如きは、筆意躍動して眞に逼つてゐる。書も弘法大師以來の能書と呼ばれてゐるが、實際、佐渡流謫中に破れた紙を繼ぎ合はせたり、粗末な紙を引き伸ばしたりして、それに一々音信や意見を書いて弟子達に送られたものを見ると、その字句の陰には當時の慘憺たる上人の生活が潛んでゐて、一層深く人を感動せしめる。之等を見るにつけても思ひ出さるゝのは誠心誠意の力である。人苟くも誠心誠意、一身を獻げて事に當れば、たとひ一時は身を窮乏、批難の中に措くことあらんとも、必らずや人を感動せしめて、所謂『捨てる神あれば拾ふ神あり』の俚言の如く、當代若しくば、後世に於いて、偉大なる感化を與へることが出來るに相違ない。

池上宗長の家に寂す

かくの如く一生を惡戰苦鬪の裡に送つた日蓮上人は弘安五年六十一歲の時病に罹り、弟子達に連れられて身延山を發し最後に房州へ向はうとせられたが、武藏國千束郷池上まで來て、池上宗長の家に滯在中、遂に空蟬の世を去られた。遺骨は遺言によつて身延山に葬むつたが、今の池上本門寺は、即ち上人永眠の遺跡である。讀者若し閑あらば、請ふ池上を訪うて上人の熱烈熾盛なる事業の跡を見給へ。一種の電氣の全身に感ずるのを覺えるであらう。

戊辰の亂と河井繼之助

文學博士　吉田東伍

歴史は事實の記錄

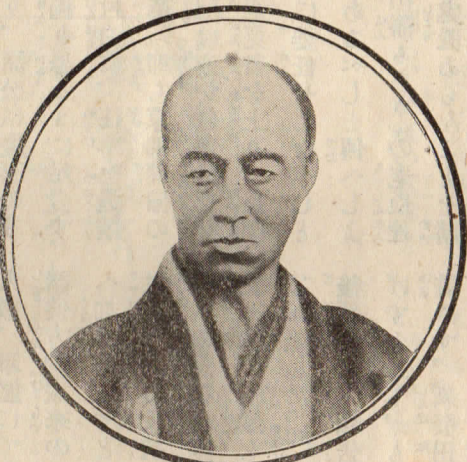
歴史は現未の一二の或政治の機關にもあらず、當來の一二の或教育の資料にもあらず、飽迄も既往の事實の記錄也。而も『據レ實直書、得失自現』で、天地古今の間に眞實以外の眞理善美は無い。政治の爲にも教育の爲にも必ず大効果があるに相違無い、任意の製作は小說で歴史では無いとは諸君の既に承知せらるべき所、然るに世上往々にして此の理を忘れ、妄りに淺薄なる方便の名義に拘泥して以て史的事實の眞相を掩蔽せんとするもの、今も昔も少なからず。かの王政維新の際に當り、同じく國家の前途を憂慮して東西に奔走しながら、偶々周圍の事情に制せられ、事、志と違ひ、遂に拭ふべからざる汚名の下に、可惜生涯の事業を抹殺し去られんとする多くの名士の如きは其一例である。逆賊の名は恐るべく、朝敵の義は惡むべし、されど唯これのみを以て遽かに史上の事實を斷ずべからざるは普ねく史家の經驗する所。歴史はそれ自身に於いて權威なかる可らず、斷じて他の規矩するを許さない。熟々維新當時の歴史を回顧するに、所謂『勝てば官軍敗くれば賊』とありし俗傜の如く、邪にして正名を負ひ正にして邪名を冠せらるゝもの、決して少はない。今の文部大臣長谷場と云ふ人も薩賊の小隊長で有つたから多少此意味を實驗した人であるべき筈である。希はくは南洲以上の大活眼を開いて活史を讀め。これ予の諸君に望む所、同時に又、主題に入るに先だち、特にこの一項を附加する所以である。人間の世界は永續すべきもので、局促せる目前の考は小人の常である。

王政維新の大業

王政維新の大業、これを詳論すれば優に浩翰なる數書に餘るべく、これを概言すれば僅々四五の行間に盡く。曰く、數百年來國政を料理せる武家の權威全く地に墜ちて、神武復古の革命思想旺然として天下に溢れ發しては聖上五箇條の御誓文とあり、潜んでは薩長幕朋の軋轢となり、紛亂又紛亂、丁卯戊辰より庚午辛未に至り、遂に廢藩の一擧すべての禍根を絕して兎にも角にも後年紹ぐべき大業の基礎を置くに至つた。これ其の大要である。政體これによつて變じ、王室の尊嚴これによつて明かに、民人の位地これによりて定まつた。かの勤王と云ひ、攘夷と云ひ、佐幕と云ひ、公武合體と云ふが如きは、唯その一時に便せんとする旗幟的論議に過ぎず。暴風止んで一天快晴の後は、有らゆる世論俗識に超越して、終始一貫變革の楔子たりし大破壞理想の實現せられたるを見るのみ。故にもし此の理想をして、或は建武中興の史績に拘泥せしめ或は律令制度の舊想に牽合せしめて止みしならば、恐らくは明治中興の業も中途にして終つたであらう。況んや內亂在ると共に外夷の覬覦するありしに於いてをや。當時の新聞『藻鹽草』の記事に曰く『日本國のいつまでも日本人の手にあらんことを欲せば、速かに內亂を治めて衰弊の風を止め、外國人をして垂涎の情を逞しくせしむること勿れ』と。國家危急存亡の秋とは正にこんな時を指して云ふのである。

革命內亂の經過

さて、此の革命內亂の經過は、便宜上凡そこれを四期に分つことが出來る。曰く今上陛下、踐祚と大政奉還、曰く復古號令と京都の變亂曰く江戸討伐、曰く奧羽越後の亂とその平定。初め慶應二年十二月先帝孝明天皇崩御遊ばされ、翌年丁卯正月今上陛下寶祚を踐ませ給ふや、御年僅かに十六歲。前左大臣二條齊敬、賀陽宮朝彥親王と共に幼帝輔弼の任に當つた。時に幕府は江戸城にあつて猶天下の政權を左右したが、折柄起れる長州征伐の爲に將軍慶喜は西に赴き、諸大名を率ゐて京都二條城に滯在して居た。けれども時勢は既に幕勢の失墜を示し、列藩の暗鬪反目紛雜して底止する所を知らず、加ふるに困難なる外交事件頻發し、朝野の人心は頗る闇慘を極めた。就中注意すべきは薩越土豫四藩の聯合呈書で、防長處分に關する幕府の專橫を二條攝政に訴へ、施いて薩長同盟幕府轉覆の密計に便する所少からず。幕府は百方策を講じて萬全の擧に出でんとするも、大勢は日に非なるを奈何せむ遂に同年十月十四日、慶喜前代以來の初志に基き、京都所司代松平定敬をして大政奉還を二條攝政に上奏せしめ、翌十五日を以て允許せられ、更に二十四日上奏して征夷大將の歷代官職をも辭した。然るに討幕を主眼とせる薩長の藩士は、慶喜の決斷決行に先んじて窃かに暗中飛躍を試み、前中將岩倉具視の主謀盡力により首尾よく討幕の倫旨並に錦旗を授けらる。これ實に大政奉還允許の日の前日であつた。政令二途に出で表裏反覆す。古今の奇怪事。天下の議論これより沸騰し人心向背に迷ふと雖も、薩長志士の密謀は着々として歩を進め、海內二分の勢漸く分明にまつて來た。十二月九日、岩倉等前夜來の廷議を決し京都警備の任を薩尾越土藝五藩の兵に命じ、同時に幕府會津の諸兵に代らしむ。風雲急なり。十二日、慶喜遂に幕會桑の將士を擧げし大阪城に移り、期せずして京阪對峙の勢を成す。順逆の名、勝敗の機、その一擧にして定まると云つても不可はない。翌年戊辰正月二日慶喜その參內に託し、專ら薩人の惡を訴へ君側を淸めんと欲し、兵二萬を以て大阪を發し京都に向ふ。三日、京都戒嚴して以て入犯となし薩長の將士六千五百、伏見鳥羽の兩道に出で、これを拒む。所謂伏見鳥羽の亂とはこれ。翌日議定仁和寺宮嘉彰親王征討大將軍として錦旗を賜はり親しく軍を督せらる。薩長の兵大に振ふ。六日、幕軍敗走、九日大阪城陷落、慶喜はすでに軍艦に遁れ、遑々として江戸に還る。そこで朝廷東征の令を布き、降伏諸藩の兵を集めて漸次東行せしむ。當時京童相和して謠つて曰く『錦の御旗を知らないか』と。轉じて慶喜を見る。彼は東歸の後、薩長の橫暴を惡む會桑の君臣及び板倉、小笠原等の閣老をも放ち還し、朝旨に恭順ならんことを力めて寬永寺に蟄居す。麾下の將士悲憤慷慨して止まざれども皆な納れず。既にして官軍東山、東海の兩道より江戸に進み、三月十四日、無事に江戸城明渡しの談判整ふ。それより三日前に慶喜は水戸へ退去した。福澤諭吉翁かつて曰く『德川家已に政權を返上し、世は王政維新となりたることなれば、帝室を高所に仰ぎ奉りて江戸も薩長も諸藩一樣にその恩德に畏まりながら下界に居るものとす。此下界の諸藩諸家に相爭ふ者あるときは、敵身方の區別なきを得ずと雖も、何ぞ必ずしも官賊の褒貶を要せんや』と。けれども紛雜せる當時の事情はかゝる冷靜なる判斷を許さず。借名釀亂の一派と、據實慷慨の一派と、兩々對峙してこの禍亂を惹起したのである。五月十五日江戸の殘黨彰義隊最後の活劇に滅盡して江戸全く定まり大勢は再轉して奧羽越後の亂となつた。

奧羽越後の形勢

これより先き、征會督將九條道孝は奧羽に赴きて諸藩に諭す所あらんとし、三月二十日を以て海路仙臺に行つた。抑々會藩は東北の雄、不幸にして賊名を負ひ薩長の奸を惡むこと益々甚だしく、窃かに保護を米澤仙臺に請うて萬一に備へてゐたが、殊に仙臺の執政但木土佐等一輩は、征會軍參謀世良修藏の漫りに東北諸侯を凌辱し、且つ九條督將をも慢罵するを憤り、遂に仙米の藩士等と共にこれを福島に要殺した。次いで閏四月二十日、奧羽越十七藩の重臣、白石城に會して義擧を盟約す。これ宛然たる列藩共和の一國。伊達氏その主領と成る。期する所は薩長と雌雄を決するに在り五月、九條督將の一行、諸藩の解兵を許して盛岡に至り、又秋田に走つて大山參謀に合し、久保田藩に倚らんとした。然るに藩士は官賊兩黨あり、官黨は同盟諸藩の使者を斬つて自絶し、奧羽越後は大抵その賊軍と爲る。そこで庄內の士は卒先して戰端を開き、今の桂公爵の少年士官を擊退した。米澤の兵は越後に出で、桑藩松平定敬も亦別邑柏崎に走つてその將立見鑑三郎をして幕會の兵と共に西軍の來伐を防がしめた。けれども所在の人民官軍を迎へ、東軍苦しむこと一方ならず、閏四月下旬、西軍は高田城下に屯し、又三國峠を奪ひ、上越後はすでに全くその占領に歸して了つた。東軍の運命は愈々危い。

河井繼之助肖像

所謂正義黨の主張

何故に越後が斯かる形勢を呈するに至りしや。これには遠き由來がある。嚮きに慶喜大政を奉還するや、朝廷に於いて慶喜任用如何の議あり、諸公は慶喜の才鋒に壓せられんことを恐れ、三條獨り恐るゝに足らずとして慶喜入朝の路を開いた。西村泊翁、往事を追懷して曰く『十二月九日の朝廷大變革（即ち京都警備の交代）より、引續き、土佐容堂（山内）は速かに會議を興し、公論を以て事を決すべしとの意見書を上り、長岡藩士牧野忠訓は、再び大政を德川に委任せしむべしと請ひ、又前將軍は削地貶官の朝命あるべしと傳へしより、在京の十大藩（この中に新發田藩もあり）の老臣連署して、德川家に對し公平正大の處置あらんことを請願す』と。これ長岡藩の會津藩と共に獨自の意見を發表したる初めである。又戊辰戰史にも當時の一書を引く如く『（丁卯の年京都動搖にあたり）越後筋に於いて容易ならざる風聞あり、正義黨と唱へ、浪人どもの謀策は、江城を火にし、會津を攻め落し、横濱へ打つて出で、長州よりは京都へ切込み申すべき手配なり。而かも朝廷の手を借り申さずては、賊兵に落ち、諸人信仰も薄く候に付、有栖川宮樣を招請致し、長洲一味の人數、軍艦にて海上乗り廻し、干戈を動かし候手段、諸侯方御家來の内、又百姓町人にも百二百と追々右黨へ加はり候』と。その正義黨とは武家士族に對する百姓町人の反抗で、越後では河井と雖も其治下の百姓町人の駕御に困んだものである。又諸藩の士族は、薩長一味の横暴を惡みながら、敢て錦旗に反抗するを非なりとした。即ち戊辰五月中外新聞の記事に曰く『越後新潟より報告あり、北方の諸侯は、勅使の通行を妨げずと雖も、もとより南方の兵のその領地に入るとを許さず、新發田溝口侯の兵五百人許り、京都に赴かんとせしかば、北方は溝口侯に迫りて、何故に南黨に屬するや、若し北黨の軍に加はらざるに於いては城地を奪ひ取るべしと手强き掛合ありしかば、溝口より莫大の償金を出して和を乞ひたり云々』と。この百姓町人の反抗や米澤兵の溝口脅迫事件は偶々以て東北人の眞相、否、内部の葛藤を暴露したもので、遂に俠氣の强者をして敢て賊名を辭せずして王師に反抗するの暴擧にも及ばしめた。併し長岡の河井は白石同盟に加らず寧ろ最初から孤立の位地を守つた。而して結局、會津人と共に長州の先鋒時山直八を倒し、越後の戰爭を始めたのである。

河井繼之助の素志

彼初め藩主牧野に從つて京都に在り十二月の變革あるや、西軍討幕の隱謀を挫折せしめんとし、赤誠を吐露して建白して曰く、

嘉永年間、外國後來、和戰の兩端より公武御間柄彼是を生じ、時論不定、姦雄その虚に乘じ巧に尊王の名を借り、浮浪の激徒、狂暴醸亂、幾人となく非命に陷り候次第、慷慨決死の心底は可憐事に候へ共全く一身の私憤に出で、義理の當然、國家治安の道を不辨『不好干上、而作亂者、未有之』と、浩歎の至に御座候。爾來物情恟々世上不穩、續いて防長の事件も相起り、遂に今日に至り候は、誠に可悲事に御座候。抑々外國和親の儀、天下諸侯種々異説も御座候へ共、追年事情も相分り、既に先帝御治世の砌交際御許にも相成、只今に至り候ては、攘夷の不出來は分明仕候。然れば年來尊王の名に托し、攘夷の功を唱へ候輩も、唯今に至り猶狂暴を働き候哉。借名醸亂の人々は、近頃西洋變革の説を羨み變亂反つて開國强兵の基といふ說も一理なきには無之候へ共、變亂を醸し候は、德川氏の損害、隨つて天下の諸侯無益の奔命に疲れ、無用の財力を費し候儀、全く皇國の疲弊なることを能々御了解相成

河井繼之助の筆蹟

候へば、暫時尊崇の虚名を御喜びなく、萬民塗炭に苦しみを御憂慮被爲在、是迄の通り、萬事徳川氏へ御委任被爲在候より外に治安の道は無之儀と奉存候云々』と。

然れども、これ素より當時の政府の容るゝ所でない。河井はそこで大阪に趣き、幕兵の上京討薩を不可とし たが、又用ゐられず。既にして伏見鳥羽の戰、幕軍の大敗に歸したので、河井は割據の勢自立自强に在るを悟り、國に歸つて大に兵備を嚴にし たのである。

頽勢已に挽き難し

さて、閏四月下旬を以て高田城下に屯したる西軍は勢に乘じて所在北軍を破り、六月、參謀黑田清隆、山縣有朋等は已に小千谷、柏崎を取つた。仁和寺宮樣や西園寺中納言(今の侯爵)も御下向だ。之より先き、河井は五月六日を以て西軍の軍監岩村精一郎と小千谷に會し、辯論する所あり、且つ書を呈して曰く、『方今海外の諸國互に富强を計るの日に、日本は爭亂不止の勢、行末の所深く案せられ候へば、微小の弊邑にても用を節し儉を勤め、兩三年中には海軍用意も可仕と、一同勉勵仕居候處、斯る形勢となり、亂を濟ふに小補無しと歎かれ候』と。然るに岩村はこれを一喝して曰く『今日に至りて從軍、獻貢の命を拒む、長岡藩の如き者は則

最後に見た河井さん（小山正太郎氏作）

天兵の一擊を待つべし、歎願書などは之を見るの要無し』と。越後口の戰役は實に斯して發したのである。その十九日、長岡城一旦西軍の手に歸したが、これより東西の兩軍對抗連戰すること六十餘日、河井は强襲を力行して西園寺や山縣の官軍を走らせ一たび長岡を回復したが、頽勢は遂に挽き難く、東軍は一時に潰走した。大西郷(南洲)が新潟方面へ軍艦で上陸し、越後は官軍の物に定まつた。

結局平和論者

これに依つてこれを觀ると、河井は結局一種の平和論者であつた。彼は初めより尊王討幕の借名的旗幟を樹つるを非とし、大政は依然これを從來の如く德川氏に委任し、朝廷諸公は又別種の威嚴と權力とを以てこれに涖み、斯くして內亂騷擾を釀すことなく、最も平和なる手段によつて時局を解決し、一は以て更始一新の實を擧げ、他は以て寸時も油斷すべからざる外敵の覬覦に當らんとしたのである。然るに薩長の輩討幕に急にして河井の素志を見るの明なく、同時に過激なる會米諸藩の王師反抗は、彼をして遂に自守自彊の苦境に陷らしめたのであらう。最後に、河井の墓碑文の大要を揭げてこの話を終らうと思ふ。

戊辰閏四月、薩長諸藩、奉勅征奧羽、一軍自越後進、會桑諸藩出兵防之、遂迫長岡曰共戮力。君峻拒之、自封境以待。征東監軍來駐小千谷、君乃撤强兵、卢穿禮服、單騎謁曰、今日是何時、外國窺四邊、而內戰自斃之爲、願使我藩、自守養民、圖他日以効。監軍素疑其與奧羽、悃請一晝夜、終不聽、既侵略封內。君乃憤然決意曰、我恭順不敢抗拒、而彼來虐無辜之民、是薩長賊耳。(中畧)五月十九日長岡城遂陷、藩主逃會津、君聚敗兵于加茂、奧羽諸藩兵亦來會。王師既據長岡、互築胸壁、連亘數十里、日夜砲戰、勝敗不決者五十餘日、七月二十四日、君自率死士四百、冒天經澤、放火攻城、城兵狼狽、不戰而潰、比天明全復長岡、適飛丸中左肩。既而王師收敗縉殘二十九日四面來攻、城再陷、王師自此所向無前。世謂、君向不傷、東北平定。不知費幾歲月、或然。

是は三島中洲翁の撰文で、三島は河井と共に備中松山藩板倉家の名儒山田方谷の門人で陽明學に傾いた學生であつた。即ち同學の人である。

軍學の泰斗山鹿素行

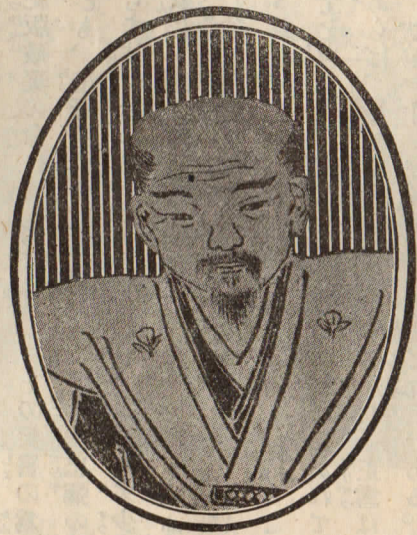
柴四朗

幼にして會津を去る

山鹿素行のことを余に話せといふのは、全く方角違ひである。素行は、會津に生れたには相違ないが、成長後天下に名を擧げたのは、江戶及び赤穗藩に於てゞある。嘗て何かの書に就いて讀んだ所に從へば、素行の祖は東肥山鹿の人で、父元庵の代に伊勢へ移り、更に江戶に出て蒲生氏に知られ、間もなく相共に會津に趣いた。素行は即ちこの元庵の庶子である。幼名作太郎、字は子敬、甚五右衞門と通稱した。然るに、素行が會津に居たのは極く短かい間で、九歲の時には已に父に從つて江戶に出で、林羅山の門人となつた。十一歲の時、人の爲に小學、論語、貞觀政要等を講じたのを見ても、幼より穎悟非凡の小供であつたことが知れる。十八歲で北條氏長に就き兵學を究め、二十二歲で秘訣皆傳、それより文武の名漸く現はれ、三十歲にして早くも大家の列に入つたとある。斯くの如く彼は早熟の天才であつたが、會津に居た間は極く短かつたので、そ

の事績、傳說、感化等、一として生れた土地には殘つて居らぬ。

將軍家光に知らる

素行の名が世に高まると、將軍家光は早くも之を拔擢せんとしたが、未だその志を果す機なくして世を去つた。乃で、以前より素行の門に入り、その教を受けて居た赤穗藩主淺野長直が、禮を厚うして之を招ぎ、祿千石を與へて自から師と崇めた。素行、時に三十一歲、聲望益々上下に普ねく、幕府旗下の士は云はずもあれ、諸國の士大夫處士に至るまで、皆爭うてその門に集まつた。從つてその收入も非常なもので、一時は五六千石を食む小名と雖も、素行の威勢には叶はなかつたと云ふ。元來彼は博覽强記の人で、一方では多數の門下に兵敎の學を講じながら、他方では孜々として色々の著述に從事した。『兵法神武雄備集』とか『武敎要錄』とか『兵法或問』とか『武經全書』とか『古今戰略考』とか『武類全書』とか『武經本論』とかの兵書は勿論、進んで『治敎要錄』とか『修敎要錄』とか『聖敎要錄』とかの經解類に至るまで、皆この間の執筆と云はれて居る。

山鹿素行肖像

赤穗に幽閉せらる

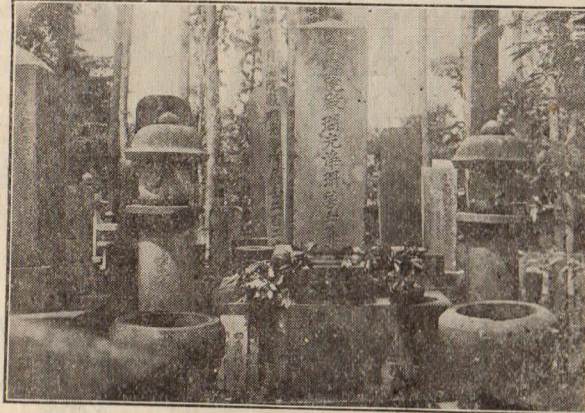
就中『聖敎要錄』は、素行一代の苦心の著述で、之が爲に遂に罪を得るに至つた。初め彼は老莊の學を研究して、何れも之を正道に非ずと難じ、退いて前揭の『治敎要錄』とか『修敎要錄』とかを著はした。所が更にこれにも疑を抱き初め『山鹿語類』を作つて自己の所

信を吐露した『聖教要錄』は即ちこの『語類』の綱領を摘記したものである。書中、程朱の學を辯駁すること頗る峻烈を極め、爲にこの學を專ら尊信した當時の多數者の惡む所となり、寬文六年、遂に罪を着せられ赤穗藩に幽閉せらるゝ事となつた。『聖教要錄』が天下の民心を毒するものとして一時絶版破棄の命に接したのも此の際のことである。けれども、淺野侯は少しも頓着せず、素行の流謫後も相變らず彼に對して弟子の禮を執つた。素行も甚く君恩に感じ、常に力を盡して藩士の敎化に從事した。或る時、彼、藩主に謂つて曰く『臣聞く、士は己を知るものゝ爲に死すと。公は臣の愚を以てせず、臣を待つに國士を以てす。宜しく一死以て報ずべし。諸臣萬一緩急あらば、豈償ふ所なからんや』と。所が、その後果して元祿年間に所謂四十七義士を出した。或る人は、これ即ち素行敎化の實を結んだものであるといふ。

素行と正雪

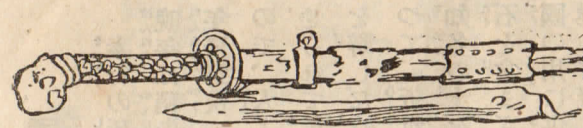
赤穗に閉門して居ること十年の後、偶々家光將軍の二十五回忌辰に會つて江戸に歸るを釋され、これよりは專ら兵學の研究に沒頭し、敢て弟子を集めようとはせなかつた。但し、爰に一說がある。即ち、素行が赤穗に幽閉せられたのは『聖教要錄』の爲ではなくして却つてその兵書の爲であると云ふのは、慶安中由井正雪及び丸橋忠彌の徒が例の幕府顚覆を計畫した事に關して、素行も多少その罪を擔ふべき位置に立つて居た、云々。斯ういふ說である。前說とこの說と、何れが眞か僞か、それは余などの知つた事ではない。唯正雪と素行との間にこんな逸話が殘つて居る。或る時素行が某家に招がれて行つて見ると、丁度その座に正雪が來て居た。正雪は素行よりも十歲許り年上で、容儀も甚だ立派である。二人は互に寒暖の挨拶丈けを交換して、その日は別れた。後に素行が淺野侯に面謁した時『臣彼の容貌を見るに眼光常ならず、その意亦計り難し、君幸に彼を近づくる勿れ』と云つたが、果してその通りであつたと云ふ。

國體論の先驅者

素行の死んだのは貞享二年、六十四歲の時である。晚年は稍失意の境遇にあつたが、中年淺野侯に仕へて居た頃は非常なもので、人より常に天下の士を以て任ぜられて居た。彼が赤穗で舊來の祿を辭した時、藩主は親しく素行に向つて『近世の諸侯は多く厚祿を以て知名の士を招致して居る、夫士は萬石を食まざれば、則ち出でゝ以て軍國の用に供するに足らず、入つては以て祖先の祀に奉ずるに足らぬ。予は微祿にして天下の士を養ふこと能はず、卿の賢を以てせば諸侯必ず招致するであらう。然し、苟くも萬石を食むに非ざれば則ちその聘に應ずる勿れ』と云つた。以て如何に彼が重要視せられたかゞ知れる。然し、素行の最も偉かつた點は、山崎闇齋、本居宣長の出づる前に於て已に早く國體論をやり、謂はゞ勤王の先驅者となつたことである。一體、當時の學者は、學問の上から云へば或は偉かつたかも知れぬが、未だ一人として日本の國體を論じた者はなかつた。皆德川氏に遠慮して、縱令知つて居ても、口を開かなかつたのである、其の後神道主義の學者、即ち前述の闇齋等が出て、始めて國體論が八釜しくなつた。素要はその先驅をやつたのである。これは素行一代の事績中最も大なる光彩を放つもので幸に世間でも皆知り、又、彼の著書を讀むと明かに分ることである。去る明治四十年に正四位を御贈りになられたのも多分この邊の意味からであらうと思ふ。因に云ふ、素行の墓は今東京牛込辨天町の宗三寺境內にある。（文責記者）

山鹿素行の墓（牛込宗三寺）

高山彦九郎と廣瀬淡窓

文學博士　遠藤隆吉

★

林子平は仙臺の人で、勤王愛國論を唱へた。山縣大貳は甲州の人で勤王論を唱へた。蒲生君平は下毛の人で勤王論を唱へた。而して高山彦九郎は上毛の人で、最も熱心なる勤王家であつた。何れも關以東の人である。維新の事業――多く西方の人の手に成つた。而かも關以東の其れ等偉人が、當時に於いてなしたる事業は、實に其の前提であつた。

余も亦上毛に生れたれども、時勢の遠く離れたる爲め、又鄕里の多少離れたる爲め、所謂『父老』の言を聞くことは出來なかつた。但だ二三のことを聞いたのみである。多くは書物に由りて知つたのである。子平、君平と彦九郎との關係は、何人も知つてゐるし、其の傳の如きも山陽、栗山の手に成つた者を始め澤山ある。その交遊は餘程廣かつたが、偉人と認められたが爲に、大概の學者の手帳に殘つて居た。

★

九州に入つて帆足萬里を訪ひ、風呂を沸かして沐浴せしめし時、彦九郎は再三婢に謝辭を述べたといふので、萬里は流石の英雄でも、旅の疲れで湯が餘程嬉しかつたらしいと云れたといふ事を九州で聞いた。又日田に往き廣瀬淡窓を訪ねた。淡窓の『懷舊樓筆記』に云ふ。寛政五年日田に至り、高田屋利右衛門の家に滯留す。淡窓の家に來る。父と親し。年齒時に四十餘。顔面雄壯眼大鬚多。當縣を去つて久留米森嘉膳といふ人の家に滯留せしが彼家にて自殺したり。其故知る者なし。此人淡窓を稱して才子也と言へり。淡窓一日百首を咏ず。父それを高山に示せしに、

大和には聞くモメツラシ珠を聯ね
　一日に百の唐歌のコヘ

『高山操志』に現はれし高山彦九郎

★

淡窓後年筑前に遊び、南溟先生に陪せしに、彼人となりを稱して非常の豪傑となせり。樺石梁が文集に贈序あり。その自殺せしは世を憤る旨ありとの事なるべし。辟世の歌二三首ありしやうに聞きおよべり。其の一を記るす。

松崎の厩の長に問うて知れ
　心盡くしの旅のあらまし

また以て、眞相の知られざる高山一生の一般を窺ふことが出來る。

余の景慕する蒲生君平

朝鮮總督府學務局長　關屋貞三郎

寛政の三奇士

○君平は余と同郷であるから、特別感じが深いと云ふ譯ではない。同郷であるといふ事が間接に此の觀念を强からしむるのは勿論であるけれども、余が特に君平に對して景慕措く能はざるは、これ以外更に理由があるからである。

○寛政の三奇士と云へば、子平、正之、君平の三人を思ひ出さない者はあるまい。此の三士は徒らに奇士の名を史上に留めて、一面多少狂者の樣にも見られて居るのは、誠に遺憾千萬である。然し、これが三士の三士たる所以であつて、當時眼中國家なき一部の人士などにこそ、奇士とも狂者とも見えたのであるが、日に降り行く邦家の行末を思ひ、あれども無きに似たる天皇陛下の御境遇を見奉つる者は、三士ならずとも一日も安閑として居ることは出來ない。三士の奇は決して無意義の奇ではない。國を思ひ、君を思ひ奉つる狂である。我が景仰する蒲生君平は正しく此

の三奇人中の一人である。

孝子の門より出づ

○君平の傳記については、事實文編、近世慷慨家列傳を始めとして、之を記せる書甚だ多く、又よく世上に知れ渡つて居るから今更めかしく述べる程の必要もない。唯余が私淑する所以の一二をかい摘んで話したいと思ふのである。

○忠臣は孝子の門より出づとは、古來の金言である通り、我が君平は奉侍の道に缺くる所がなかつた。兩親に對する孝養はどうした譯か書物に逸して居るが『祖母の喪に居るや、日に喪服をつけて香を燒いて端座し、哀至れば則ち痛哭した』とあるのに徵すれば、父母に對しても亦必ず至孝でなければならぬ。此の孝心深き君平は書を讀み、史を閱するにつれて、天子の尊ぶべきを知り、國體の他に比なきを覺り、更に又國歩の艱難なるを見て邊防の忽にすべからざるを信じたのである。君平は我が歷帝の山陵中、湮滅して傳らざるものあるを慨き、自から其の地を涉覽して實際を討究し、千辛萬苦此の後山陵誌を編述した。此の一事は即ち君平が忠君の赤誠の表はれた所であつて、今日の聖代より見れば左迄深く感ずる程であるまいが、幕府が實權を握つて畏多くも朝廷を牽制し奉つた當時、葵の紋の威光にも恐れず、竹內式部山縣大貳、藤井右門等の實例を眼前に控へながら、とかく幕府から嫌はれがちな尊王心を振起して山陵誌

蒲生君平肖像（蒲生又右衛門氏藏）

を著はし、而も修覆を幕府に促さうとしたのは、眞に君平其の人の赤誠がありありと見える樣ではあるまいか。

足利尊氏の像を鞭つ

〇此の擧は幕吏の喜ぶ所とならず、之を幕府に上らうとした時、市尹某、うまく言を左右に託してなか〳〵取次がない。君平大に怒り、大喝して立ち去つたといふ事である。其の熱烈痛辣は俗吏の心膽を寒からしむべく、その義氣、その膽力は、現代青年に見るべからざる所である。

〇此の山陵探究中のことであつたかと思ふ。君平京都に遊んで夫の有名なる小澤蘆庵の許に寓し、或日、夜更けてから歸つて來た。蘆庵怪しみながら其の故を尋ねると『いや、それは別儀でも御座らぬ。某今日等持院に參り、足利尊氏の像を見たので御座る。あまりの腹立たしさに彼の罪を數へて三百計りも鞭つたので御座る。これですこしは、腹がいえたから、寺前の居酒屋で二三杯ひつかけると、大層好い氣分になつて路草の上にぐつすり寢込んで、此の始末で御座る』との返答に、流石の蘆庵も、これはと云つて大笑したと馬琴が書いて居る。

〇此の事などが奇士の名を得た所以であつて、やゝ過激な點もないではないが、畢竟胸中の熱誠が溢れたからのことである。其の精神に至つては、凛乎として千秋に輝くものと云はねばならぬ。我が日本男子は何所までも此の忠膽義魂を失つてはならぬ。

突然飛出して大喝

〇又下野の鹿沼に寓した時、或る者が頻りに室鳩巣の説を引いて楠公を批難した。君平厠の中より之を聞き義憤に堪へず、突然飛出して來て大喝した。鳩巣の説に由ると『三國の昔し、孔明は劉備の三顧を待つて始めて南陽の草廬を出た。それであるから能く三分の策を劃し得た。出方が重々しかつたから君王の任用も重かつた。正成は只一回の使に由つて直ちに帝に應じて兵を起した。自重が足りないから、帝の信賴も亦深くない。これが正成の戰死を早からしめた所以である』と云ふのである。

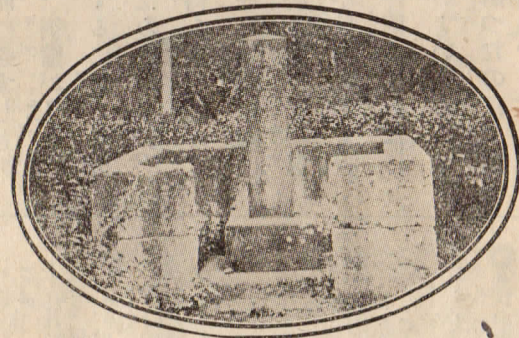
〇これは國體を辨へぬ論であつて、孔明は必ずしも劉備に仕へねばならぬといふ必要はない。劉備が己を欲するの切なること、換言すれば知己とするに足るや否やを知るまでわざと重々しく見せかけたのであらう。然しこれは、國家と君王とを別々に見得る國で始めて出來る事であつて、君と國と二にして一なる我が國には斷じて採るべからざる説である。楠公が萬一孔明氣取りで勿體をつけたらば、恐らく建武中興の大業も覺束なかつたであらう。極端に云へば、一回の御召だになくば、全然擧兵に及ばずともよろしいといふ事になつて來る。かゝる道理に迷つて楠公を誹つたのは、猶大石良雄以下四十六人を義士にあらずとして、夫の田横に比した徂徠と同樣である。君平がこの説をきいて烈火の如く怒つて、誰か廷尉を議するものぞと叱り飛したのは、尤も千萬の事である。

蒲生君平の筆蹟（子爵戸田忠友氏所藏）

不恤緯と海國兵談

○不恤緯五編は子平の海國兵談と共に有名なものであつて、當時の志士が憂國の結晶と云つてよろしい。よしや其の論の幼稚にして採るに足りないにもせよ、これは論ずべき限りでない。尊ぶべきは滿身の赤誠である。寛政四年十月、魯船始めて我が漂流民を送つて根室に來てから、文化二年には長崎に來て互市をねだつたり、同三年には蝦夷を侵したりなどして、北門の警備は日一日と必要を感じて來た。君平の不恤緯は之に慨して出來上つたもので、內容の如何は兎にも角にも、字々皆是れ憂國の涙である。

○君平が之を幕府に上つた時、有司は布衣の國政を議するを不埒なりとして、嚴刑にも行ひかねまじき勢であつたが、大學頭林述齋の取りなしによつて僅かに免るゝ事を得た。かくて後、文化十年、我が下野の偉人蒲生君平は、四十七を一期として此の世を去つた。

宇都宮に在る君平の忠節碑

現代青年頂門の一針

○君平の逸事は此の外にもなほ少なくない。中には稍如何がはしい所もあるけれども、心中至誠至忠を抱く人の憤慨に堪へぬ當時にあつては、多少過激に亙るの行爲も、要するに白玉の微瑕に過ぎないのである。現代の青年に向つて直ちに君平を模せよと云はゞ多少の語弊もあらう。然し、其の忠君愛國の赤心は長へに我が國民の手本ともして景仰休む能はざる所である。利己主義、箇人主義等の惡思潮に沒頭し、動もすれば、國家、社會の存在を忘れんとする現今の青年に取つて、我が君平の如きは確かに頂門の一針でなければならぬ。

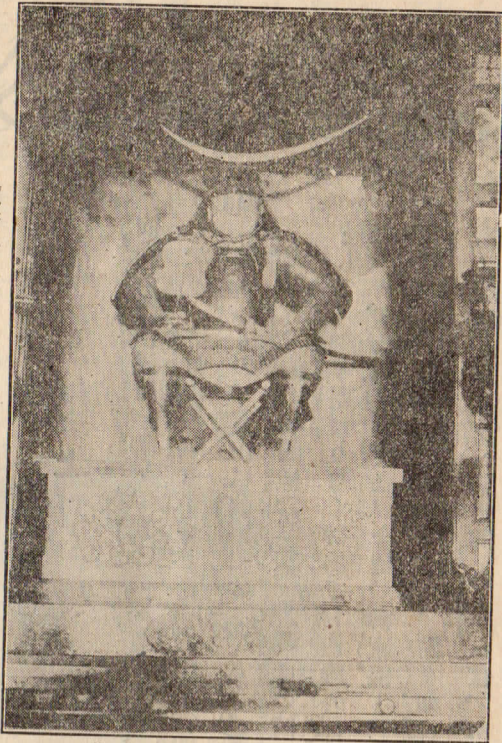
文武兼備の伊達政宗卿

文學博士 大槻文彦

（上）

「仙臺黃門伊達政宗卿が、武勳の高きことは、人のよく知る所なり。德川氏に心を寄せてはありしかど、亦骨硬の事も多かりき。『貞山公御明語集』(又『御命期集』ともいふ。將軍家光の世の頃に書きしもの、貞山は政宗卿の諡なり。)と云ふ書に、

或る時、前の相國樣(將軍秀忠)御成の時、前日、酒井雅樂殿、土井大炊殿、酒井讃岐殿始として、御年寄殘りなく御出で、內藤外記殿、柳生但馬殿、御取持の衆、色々御相談候て、其上、外記殿被仰候は、今度、御祝儀として御進上物は、如何樣の物に御座候哉、各へ見せ御申、御相談可レ然由申候に付、內々如是支度被遊候とて、貞宗の御腰物、來國俊の御脇指、袋のまゝ、各へ見せ御申候へば、外記殿、今度の御進物には、今少し能き物に被成候

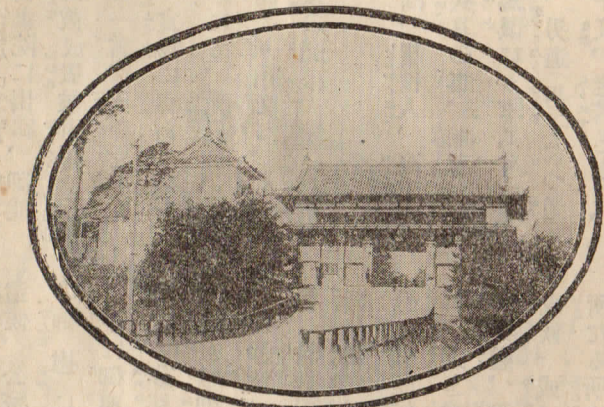
伊達政宗木像(松島瑞巖寺藏)

てはいかゞと御申候へば、それこそ安き事なれ、如何程も御覽候へと、銘物の御道具、百餘り、見せ御申候へども、是も是も如何とあり、貞山樣被仰候は、今度始めての御成にも無之候、縱ひ始めての御成に候とも、此道具の內に、我等進上に似合はしき物なからんや、扨如何あるべきと仰せ候へば、そこにて、外記殿、御年寄衆中の顏を御覽じ、被仰候

(一六八八)

は、御成の日取定まり候てより、公方樣、いまや〳〵と被相待候、御機嫌其かんもなく候間、迚もの御事に、貴樣には、銘物のしのぎ藤四郎吉光の小脇指被爲持候間、それを御進上候て可然由、御申候を聞召、俄に御氣色、以ての外被爲變、此藤四郎は、太閤樣より、首尾ありて拜領の物なり、其品は、天下に隱れなし、人は、代替り追從思ふとも、一言の御恩、申合候事といひ、旁翻すことゆめ〳〵あるべからず、此義を以て、上樣へ不致進上、是程百餘りの內に上ぐべき道具なきにや、上ぐべき道具なくば、上げまじきなり、各御老中家も、今日は、萬事御相談のために申入れ候に、此義、外記に手をまはし、御いはせ候は、縱ひ、上樣御內意たりとも、不出來也、我等家の名字ある內は、進上申まじく候。御相談之議も、大形濟候間、我等は、座敷を立候、各、明日御供あれとて、御座の間へ御入り被成、以ての外

御腹立にて候、外記殿は不及申、御老中衆、扨々、御尤至極、我等など心得にて外記にいはせ可申哉、如何樣にも御腹のいるやうにと、種々被仰分、御機嫌なほらぬ內は、戻るも成まじくとて、御掃除など、各馳廻り暮に及び、やう〳〵申なだめ、各にも御會ひ、色々御咄あつて、いつもの御腰物、御脇指、御上げ候へど、何れも被仰分、御歸り被成候、各汗を握り申候事、後に傳へ聞くに、御內意にて御座ありと申唱候事。(節文、以下同じ)

豊臣太閤の舊誼を忘れず、幕朝執權の威に屈せず、思ふまゝに抗言せし氣魄、欽すべからずや。

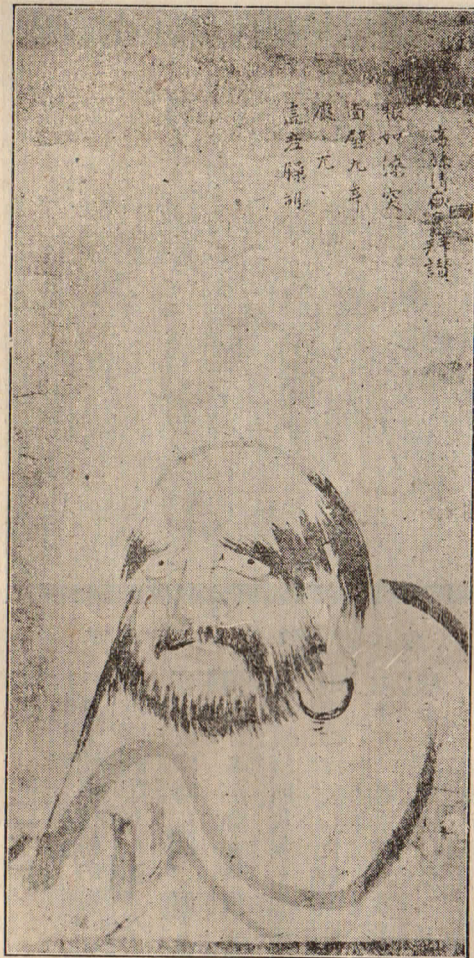
(中)

仙臺青葉城の光景

次の日、朝、早々御成、御數寄屋御相伴は、道三法師、立花飛驒殿、丹羽五郎左衞門殿なり、既に、御膳を、貞山樣御上げ被成候時分、內藤外記殿かはらけに、箸を一膳持ち、貞山樣を追懸け、御膳のおに(鬼)をして御上げ被成候へど、御申候へば、そのまゝ御膳を、御數寄屋口に被爲置、外記いはれぬ事を被申候、政宗程の者が御成を申し、自身御膳を上ぐる上はおにどころではなきぞ、御膳に毒を入るゝは、はや二十年先の事なり、二十年前にも、日本の神ぞ、毒などにて殺し奉るべきとは、ゆめ〳〵思はぬぞ、一度は乘寄せてこそ、とは思ひ候と、被仰候處へ、御數寄屋の內より、通ひ口をあけ、飛驒殿御出で、一段似合たる御挨拶、上樣にても御感にて候御膳遲く成申候間、早々と御申候に付、其時、御

(一六八九)

膳御上げ被成候、扨々頼母しき御挨拶かなと、公方樣御直に御禮にて、御落涙の由に候、諸人、扨も〱と奉感候、御數寄屋過て、御書院に出御、御能など御見物被遊、暮に及び、還御被成置候御事。

一度は乘り寄せてこそと思ひしとの一言、天下を爭はむの豪氣想ふべし。鬼をするとは、食物に毒あるかを試みることなり。鬼といふは、禁中にて、元旦に、供御の屠蘇を進むるに、藥子、鬼の間より出で丶、先づこれを嘗むるより起れりと云ふ。鬼の間は、壁に、白澤王の鬼を斬る繪あるより云ふ。

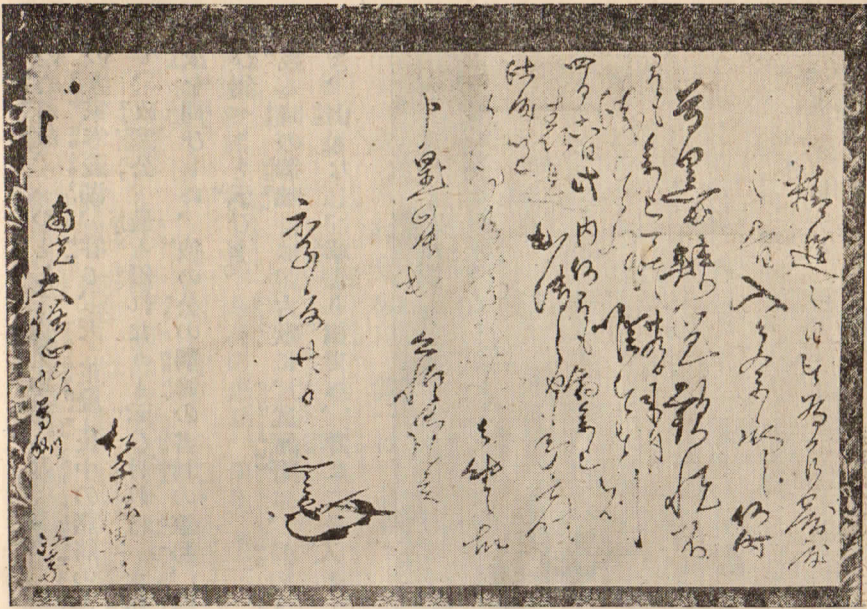
萬事の處を奉拜見候に、第一は、諸役人、高下なく御慈悲、民を御憐み被成候、兵具の事、明暮、珍らしきをば御支度被成、又武具馬具にかぎらず、不成者には、被下候。奉公の忠功、男道(男子たつ道)の油斷なきやうにとある義なり。又、老若ともに、之を心懸くる者をば、御ほめ被成候、不斷御もてあそびにて、書物、儒者を以ては、其道を御尋、僧を召しては、佛法の事を被爲聞候。御筆跡は、天下に隱れなき御事、歌道の達者を御抱へ、朝夕、其事を聞召し、御歌を遊ばし、近衞殿へ御點取にいつも被遣候、公家方にも、是程の御上手無之と申唱候、常の御慰には、御詩歌を被遊候。御馬鷹は、尙以御上手に御座候。御鐵砲は、諸人汗を潰し申程、御上手、一夢秘事を御相傳被成、天下に隱れ無御座候、御數寄屋御物數寄は、上樣にても御感被遊候、佛法の御沙汰は、和尙も舌を振ひ申候、立華、香、茶の會、料理の方、何れもおろか無御座候。三面の盤は御存被成候へども終に不被遊候。御兵法の事、申も愚に御座候。尤軍法の御事は、諸人舌を振ひ申候。御前近き衆には、歌をよませ、詩を作らせ、武道の御穿鑿、御國の祭、二六時中、夫に日を御暮らし被成候。或は、鹽竈、松島、宮城野、名取川、其外名所たる所には、御殿を結構に被爲作、御酒宴の遊事樣々御座候、又假そめの御咄にも、聖賢の語を御引懸け、總じて、古人の詞を、面白くおぼしめし、國土安全長久の事計、絕えず御諚被成候へども、野人

の心ね故、一つとして覺え申處もなく候。

書の大家卷菱湖、嘗て、天正慶長中の諸將の書を論じて、政宗公、最も優れたりと云ひければ、大槻磐溪其故を問ひしに、彼の公の鶺鴒の書判の筆勢、誰人か學び得べきと云ひき。

或る時の御咄には、古歌に、武藏野は、月の入るべき、山もなし、草より出で丶、草にこそ入れ、とある、尤、武藏野を、いかほども大きに取りなす心かな、人は、草より出で丶草にこそ入れとあれど、出づる日も知れたるやうに思はれて、如何なれは、右の古歌の心を借りて、出づるより、入る山の端は、いづくぞと、月に問はまし、武藏野の原、とよみて近衞殿へ遣はし候へば、殊更ほめられ候、と御咄被成候。又ある時、近衞殿へ、さぐりだいを送り、だいの歌、數多點取に遣はし候へば、大形ならぬ御はめにて、御自筆に、近來あるまじきの由にて候、中にも、富士の歌、いつ見ても、始めて向ふ心かな、たび〱かはる、富士の氣色は、とある歌を、不斜御ほめなされし由、御咄被成候。

政宗の畫に仙臺瑞寳寺開山清獄和尚の賛せしもの(大槻博士藏)

伊達政宗の天海僧正に宛てし書翰（大槻博士藏）

（下）

豐太閤の征韓の役、旋軍諸將の分捕して携へ歸りし品々の無數なりし事、今も諸家に藏するにて知らる。然るに、政宗卿には、何も携へられぬ由にて、伊達家に何も傳へざるが如し。唯一品あり、それは梅芽なり。後年、卿が隱棲所なりし仙臺の東南郊なる古城といふに、此梅の芽の成長したる臥龍梅の老樹あり。（此地、今、監獄となりて、樹存す。文彥の園中にも、此樹を繼木したる木株あり。）此梅に就きて、卿の詩あり。

絶海行軍還レ國日。鐵衣袖裏裹二芳芽一。
風流千古餘二清操一。幾歲閑看異域花。

戰利品の梅一株なる事、如何に其の風流高潔なりしかを想はしむ。明治三十四年十一月、卿に御贈位ありし時の策命にも左の如くあり。實に文武兼備せる不世出の英將にこそ。

汝命其我領禮留公民乎撫弖慈志美兵乃道乎始米弖文乃道乎母修米外國乃狀爾母思比涉留等專王爾勤志美大御國爾竭志々功績乎萬世爾旌表左牟止爲弖特爾正三位乎贈ヘ給比（云々）

津輕爲信の機略

外崎覺

奥羽三傑中の一人

元龜天正の間、國亂れて群雄四方に割據し、いはゆる豪傑雲の如く、謀將雨の如き有樣であつた。當時、東奥に雄を唱ふるもの、伊達政宗、最上義光、而して予が茲に語らんとする津輕爲信。大小の區別こそあれ何れも一世の俊傑である。殊に爲信公は機略に富み、政治に通曉し、最も部下を使ふことに長じてゐた。主將如何に機智軍略に富むと雖ども、その手足となるものが働かなかつたならば、十分に之を活用することは出來ない。戰術に長じ、文學に通じてゐたものは勿論、農、工、商すべての人物を網羅して、之を自己の四肢の如くに使つたことは、爲信の最も豪いところであつて、之あるが爲めに彼は小國の主にして十九年間戰爭に從事し、或は南に、或は北に兵を出して軍陣兵馬の間に奔走することが出來たのである。而してこれ等の人格は、皆これを平生の修養によつて得たのである。當時津輕地方には、磐城平の人で、丹波の永澤寺の住職であつた格翁禪師がゐたが、爲信は之に參禪して普化鈴鐸の話を聞き、飜然悟つて禪機に達すると同時に、また戰略にも通じた。これから少しく、爲信の機智戰略について語ることとしよう。

楠公式の戰略

此の頃、南部高信と云ふ人が、中津輕の石川に城を構へて四方に號令し、津輕全體の統領の如き觀があつた。高信の配下には多數の小大名があつたが、何れも

微々として振はなかつた。高信は驕傲奢侈に身を持ち崩して用度不足を告げ、徵斂甚だ急であつたので、人心離れて民に菜色があつた。玆に於いて乎爲信は白眼を石川城に向けて、『此の罪責めざる可からず、此の人伐たざる可からず』と、衆を集めて凝議した處、何れも附近の小大名を討つて、而して後に石川城に及ぼさうと云つたが、爲信公は首を振つて『枝葉を斷つは迂遠なり、直ちに根幹を斷つて、自然に枝葉を枯らしむるに若かず』と、衆議を排して石川城攻擊の策を立てた。元龜二年夏五月、世は菖蒲の花盛りなるその二日に、胸に一物ある爲信公は使を遣はし石川の老臣、金澤、杤尾、鶴浪の三名を大浦城に招き、三日の間珍羞を具へて欵待到らざるなく、侑むるに劍馬時服を以てし、又板垣兵部信成をして之を送つて堀越城に至らしめた。三人は大に滿足して石川城に還り『津輕氏自ら登城し度いが、差支あれば許されよ、その中機を見て拜謁せん』と爲信の挨拶を主人の高信に傳へると、主人は大に喜んで双頰に微笑を湛へた。

菖蒲節供の奇襲

その夜爲信は急に群臣を召し、密かに誓書を示して曰ふらく、『南部は我家累世の仇、領地も亦悉く彼の褫ふ所となつた。予今之を討たんとす、爾等心力を一にして功名を樹てよ』と。群臣感激して勇氣平日に百倍した。かくて爲信は兼平綱則を後に留めて城を守らしめ時こそよけれと五月四日の子の刻、兵三百餘を率ゐて大浦を發し、丑の刻に堀越城に入つて兵馬を休むること少時。兵を三隊に分つて、板垣信成を先鋒となし、自らは中軍を帥ゐ、盛岡信元等に兵二百五十を附して之を申驅とし、夜の中に進んで石川城を取り圍んだが明日は節供と云ふので城内には何の備もない。鷄鳴に城下が急に騷がしくなつたので、何事だらうと驚いて見れば、前後左右悉くこれ敵兵である。高信は豪勇の器であるけれども、城中に在るのは宿直のもの許り、侍は皆家に歸つてゐるから何うすることも出來ぬ。侍もまた城に入つて援ふことが出來ぬ。間諜々々してゐる中、市中に火が起つた。高信は驚きは驚いたが、敵はまだ何者とも知れぬ。侍臣をして馬標を見せしめると、馬標は錫杖、旗印は萬字巴。『殘念、扇（爲信のこと）に圖られたか』と悔んでも、如何ともせん術がない。進退谷まつて妻子を殺し、自らも亦双に伏して果てた。

津輕爲信の木像（弘前長勝寺藏）

和德城の攻擊

普通大抵の人ならば、凱歌を擧げて直ぐ引還すべきところであるが、爲信は令を軍中に下して、謙抑して驕らしめず、降る者は悉く之を許し、婦女小兒は篤く之を保護せしめた。城全く陷るに及んで、直ちに兵を和德に向け、取上村に至つてその兵を三隊に分け、森岡元信は二百餘人を率ゐて、一本柳より進んで稻荷林に伏し葛西信淸は百五十餘人を率ゐて日金林に陣し、讚岐の父永春を邀へ擊たうと云ふ謀である。二隊先づ發し、爲信は麾下五百を帥ゐて高崎より進み火を和德の市中に放つた。此の日は恰度端午の佳節で、士卒は皆登城してゐる。城主讚岐は既に石川城の陷りしことを聞き、『石川の敵は扇に相違ない、扇ならば必らず和德へも來るに相違ない』と云ふ言の畢らぬ中、市中に火が起り、煙の間から錫狀の馬標が見えたので、『果然！好漢來れり！』と流石は驍勇の聞えある讚岐の事とて、直ちに兵を率ゐて爲信の軍を目懸けて突進したが、その間に稻荷林

に潜んでゐる森岡信元は城に入り、部兵をして讃岐の背後を衝かしめた。かくとも知らぬ讃岐は腹背敵を受けて進退度を失ひ城を枕に討死せんと城に歸れば、城中には卍字の旗が立つてゐる。父の永春また變を聞いて讃岐を援はんものと、城を出た處前に葛西信清の兵あり。かくして讃岐の一族は悉く自盡し城は全く陷つた。此の二つの城さへ落せば、後は斷たずとも自づから枯れ果つべき脆弱の城。津輕の勢力は一時に加はつて、威望四隣を壓した。

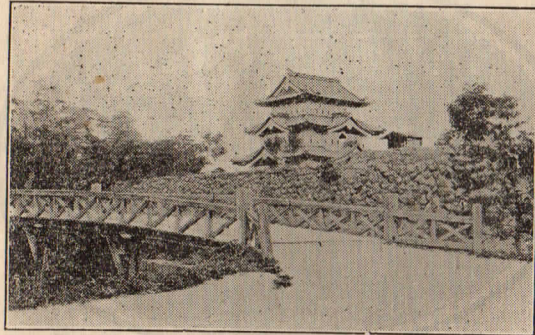
津輕爲信筆蹟

大光寺を攻めて泥田に陷る

當時、南津輕の大光寺には瀧本播磨守がゐて、武勇四隣に響いてゐた。天正二年秋八月、爲信公は兵を出して大光寺城を攻めたが、その時も兵を三手に分ち、一町田信清をして兵九百を領して第一陣に將たらしめ、葛西信清等をして兵一千を率ゐて第二陣に居らしめ、森岡信元は一千餘を帥ゐて麾下に隷し、相約して烽火を館田林に擧げて合圖となし、三面均しく大光寺を壓しようと云ふ策略である。軍令一下、第一陣は瀧田口より、第二陣は東山に傍うて、麾下の兵は中堅となつて進發した。城主瀧本播磨守重行は剛勇無比の士、館田林に牙旗のあるのを見て、敵將は必ず館田林に在らん、一押しに押し潰せと、衆を指揮して殺到して。左右の軍は力を竭くして戰つたが戰利あらず、麾下の兵また分れ〳〵になつて、不幸、爲信は離れて一騎となり、泥深き荒田の中に陷つた。これではならぬと鞭を上げて頻りに打つけれども、馬は一歩も動くことが出來ぬ。折しも攻め寄せた瀧本が軍勢泥田の中で何やら動きよる、必定敵と鎗を攢めたが、距離遠くして鋒先が屆かぬ、二本繼いでぶすりと一突きにしようと企んでゐる處へ、櫻田副貞馳せ來つて敵を追ひ拂つたが、主君の鞍破れて危ふく見えたので、

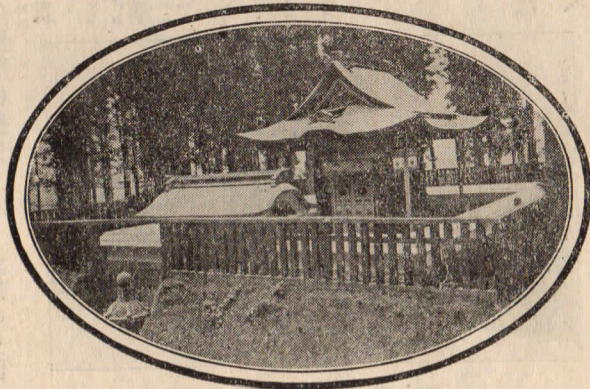
自から泥田に飛び入つて手拭で結び合はした。其處へも又しても現はれた森岡信元、こは一大事と泥中に躍り入り、兩手で馬の脚を抱えて、えいの懸聲に抱き上げると、馬は俄然として躍り上つた。爲信は辛うじて虎口を脱し、鐵鞭肅々として逃げ伸びようとすると、前に溝あり、馬は逡巡うて前に進まぬ。まご〳〵してゐる殿の姿を遠くから見遣つて、衞門四郎大聲に呼はるらく『助かるも天道、助からぬも天道、思ひ切つてその溝を超えさせられよ』と。『寶にも』と爲信は一鞭強く馬に當てれば、馬は跳上つて溝を越したので、命からがら逃げ歸つた。戰果てゝ後、爲信は衞門四郎を呼び、汝の一言吾を救へり、爾今、爾に『天道』の性を名乘るを許さんと云つたが、今でも尙は舊津輕藩には天道の氏を名乘る者がある。

弘前舊城の概觀

正月元日の不意打

此の失敗に懲りて、爲信はいろ〳〵と肝膽を碎いた末、漸と一計を案じてほくそ笑んだ。一計とは何ぞ。翌くれば三年正月朔日——まだ鷄の鳴かぬ頃から、兼ねて用意の樏を穿たしめ、軍容肅々として大光寺の城を壓迫した。鷄鳴、朝暾。——城中では登城參賀の群臣が驚いて色を失ひ、周章狼狽して津輕勢に當つたが、雪の深さは四尺にも餘つてゐるのに、樏がないので行動自由を缺き、散々敵の爲めに打ち破られて死する者過半。重行は殘兵を收めて城に入り、門を閉ぢて死守したが頽勢は挽回すべくもない。一旦は自害をしやうと思つたが、弟の諫に從うて出でゝ降り、城を輸して去らんことを請ふた。乃で部下の兵士を附き添えて小湊口まで送り、重行及

びその妻孥を橇に乘せて去らしめた。その日の先鋒乳井建清罷り進み、『重行は不具戴天の讐である、願はくば彼を斬つて甘んぜん』と云つたが、公は『汝の言や善し、然れど彼既に降を乞ふ、姑らく我が言に從へ』と云つて、建清にその父の舊地を與へて慰めた。

敵も味方も共に供養す

かくて爲信公は津輕一帶の地を服したが、十九年間も戰爭が打續いたので、深く心を政治に用ゐて人民の休戚を憂へ、農工商の奬勵を計つて實業を發展せしめしのみならず、神社佛閣を興して闔藩の人心を統一した。或る年、公は清水森に壯んなる祭壇を築いて、敵味方とも長らくの戰亂に僵れたものの靈魂を弔はうとした。これは太閤が京都に耳塚を造つて朝鮮人を祀り島津義弘が高野山に碑を建て、敵味方の亡魂を弔たのと同一徹 英雄の心事を見るに足る事蹟である。此の祭典は七日の間 行はれたが、或る日、姿の卑しからぬ婦人が侍女一人を從へて祭壇の前に進み、祭文と和歌とを讀み上げたので、尋常一様の婦人ではないと一同が目配せしてゐる中、婦人は矢庭に懐劔を抜いて自害した。これこそは曩に和徳の城主たりし小山内讃岐守の妹で、千徳掃部頭に縁づいてゐた者、兄も夫も爲信の爲めに城を屠られ浮世儚なく日を送つてゐたが、此の祭典を見て今は早や生き長らふる要なしと、刄に伏して相果てたのである。爲信は之を知つて大に愍れみ、部下に命じて篤く葬らしめたが、その墓は今も尚ほ殘つてゐる。

津輕爲信の廟

今一つ爲信公に就いて特筆大書すべきは、公が勤王の志の篤かつたことである。當時は長く戰亂の後を受けて財用窮乏し、諸侯に一として皇室の上を思ひ奉るものはなかつた。殊に奥州の如く京華の地を離れた場所に在つては、此の憾は一層深かつたのであるが、公は二回までも獻上物をして朝廷を崇尊する至情を現された。『御湯殿日記』と云つて、公のものではないか、女官たちの物した記録によると、當時朝廷に献上物をした大名は七名あるが、奥州では我が津輕爲信公許りてある。同日記の慶長十二年の條には、公が刀五十腰、鶴、錦一束、檀紙を二度献上したと書いてある。之は公の勤王の志篤かりし證據で、特筆大書すべき點である。

偉人投票の結果を評す

文學博士 三上參次

偉人投票の結果が分つた。甚だ面白い。我輩は實は早く其結果を見たいと待つて居たのである。蓋し、その樣子によつて、『學生』の讀者の趣味の程度、判斷力の有無等が推測せらるからである。

我輩は、平素、抽象的に立志、修身、齊家、治國の要を敎ふることも無論必要であるが、具體的に、史上の人物を目標として、之に私淑することを敎ふる方が、實際の功能が多くは無いかと論ずるのである。高山彥九郎の勤王心を起したのは、『太平記』で、楠木正成や新田義貞の事蹟を讀んだからである。松平定信が寛政の改革をやるやうな偉人となつたのは、『後漢書』の陳蕃傳を讀んで、慨然として天下を廓淸するの志ありと云ふところに、感じてからである。德川光圀が『大日本史』編纂の大事業の動機も、實に『史記』の伯夷傳を讀んで、大に發奮したからである。支那には、『史記』以下諸史の列傳を讀み、西洋にても、プルタークの『英雄傳』以下の史傳を讀んで、感奮興起したものがどれだけあるであらうか。この意味に於て、偉人投票の企ては、面白いと同時に甚だ有益なことである。

但し偉人崇拜は宗敎信仰とやゝ似たるところがある。偉人を景慕し、之に心醉し、日夕之を摸倣しやうと務めるやうになつてこそ、偉人崇拜の有難味があるのである。苟も偉人と云はるゝほどの

人であれば、必ず何處かに有難味のあることは勿論であるが、人には性格・境遇、但しは時勢等の相違があるから、人々が目標とするところの偉人の種類にも、また考量すべき點がある。鼠小僧や石川五右衛門の講談を聴いて、之に化せらるゝやうな極端な憫れむべき場合は論外として、これほどでなくても心配すべき點もある。そも〳〵目標と仰ぐ人には、成るだけ無瑕のものを擇ばなければならぬ。少くとも、その人の缺點短所は、能く鑑別して、それをも丸呑みに摸倣するやうなことをしてはならぬ。偉人の中でも、成るだけ偉大な人を捜すがよろしい。棒ほど願うて針ほどかなふといふ諺は、こゝにも適合するのである。雞鳴狗盗の雄を手本とするやうな、小さな考へではとてもいけぬのである。たゞこの遠大の目的に達するには、一足飛びには行かぬ。必ず一歩一歩、足元を蹈み占めて行くべき必要があるだけである。尤も、人には飲食衣服にも好き嫌ひのあるやうに、人物にもまた好悪がある。昔から、張良、韓信、及び蕭何と云ふ漢の三傑の優劣論がよくあるが、之を讀んでも、人々の好き嫌ひがよく分るのである。

さて、投票の結果を批評せよとのことであるが、投票者の一部分が腹を立ててもかまはぬ、我輩の腹藏なきところを云へとのことならば、一言しやう。腹を立てずに、終りまで聞いて呉れたまへ。第一、偉人の地方的分布は甚だ公平でない。非凡なる人物が或る地方より出で、大業をするときには、之に随從して、それ〳〵功業を樹てるところの多くの人物が出る。平家の盛んなる時代には、平氏に非ずば人にあらずといはるゝやうなものである。源頼朝が起れば、伊豆、相摸、武藏の各地から、多くの人物が出る。伊東、北條、土肥、三浦など、處々の名が、是等の人物の出所を示して居る。織田、豊臣、徳川の三雄が、引續いて尾三地方から出たがために、その頃、此地方からは、

英雄豪傑が雲の如くに出て居る。王政維新のときに、薩州、長州などから人物が多く出たのも、そのわけである。されば、是等の地方の偉人から、誰れか一人だけを擇び出すとなれば、横綱の一人だけが採られて、他の幕の内の力士は、すべて棄てられる。たとへ横綱でも、横綱が幾人もある場合には、たゞ一人の外は顧みられないことになる。この故に、愛知縣からは、豊臣秀吉一人だけで、織田信長も、徳川家康も、皆落第である。之に從ふところの、他の多くの大將連の如きは、全くゼロとなる。鹿兒島縣よりは、西郷隆盛一人選ばれて、大久保利通もなければ、島津齊彬も、久光もない。山口縣からは、吉田松陰のみで、木戸孝允も、伊藤博文も無い。右に云へる地方でなくとも、人物の多い府縣には、概してこの不都合は免がれないのである。之に反して、人物の比較的に少ない地方からは、所謂鳥無き里の蝙蝠で、宮相撲の素人大關でも、その地方での大關であるからと云ふので、之が選出せられる。今度の結果の中にも日本全般の上から觀るときには、二流三流であるところの人も二三當選して居るやうである。

特に意外なのは、東京府からの當選者である。それが幡隨院長兵衛とは驚くではないか。東京の『學生』の讀者は、皆が皆侠客肌のものでもあるまいに、長兵衛とは全く意外だよ。そも〳〵東京は三百年の幕府の所在地であつたからして、偉人が多くの地方から集まつて居る。こゝで生れた偉人もある。まづ、學者文士などでいへば、古今未曾有の大儒なる物徂徠がある。瀧澤馬琴がある。新井白石がある。畫家では谷文晁がある。松平定信、松平信綱、大岡忠相をはじめとし、多くの非凡な政事家がある。然るに、是れ等は皆落第して、長兵衛とは何事であるか。侠客もよろしい。たしかに善いところがある。所謂江戸ッ兒氣象は、之に淵源するところが多い。けれども、侠客なるも

の一旦其の義とするところのものを誤るときには、非常な弊害のあるものである。とにかく、弘法大師や、楠木正成や、徳川光圀などと同列に、この俠客が、東京府から選出せられた偉人であるとは、何としても驚かざるを得ないではないか。正成も、長兵衛も、同じく任俠の人であるなど〻、冷やかしを云ふてはいけない。輿論は必ずしも公平の論ならずと云ふは、此の類の事であらう。全國に亙つて、一番に驚かれたのはこれである。或は東京の投票者が、時代の人情風俗に慨するところがあつて、諷刺的に、こんなことをやつたのかとも思はれる。まづさう思つて自から慰めて置かう。京都府からの岩倉具視一人はよろしい。しかし千年來の帝都の地であつた故に、こゝにも人物が多い。藤原氏にも大分秀でた人がある。菅原道眞も、北畠親房も、三條實美もみな京都である。坂上田村麻呂も、京都の人と看てよからう。別して、林羅山、山崎闇齋、熊澤蕃山、伊藤仁齋東涯の父子などの大學者は、みな京都出である。畫家の圓山應擧もさうである。岩倉公一人で無論結構であるが、是等の人々の落選も、何となく惜い氣がする。

高知縣に野中兼山がなく、熊本縣に細川重賢がなく、新潟に上杉謙信なく、又竹内式部なく、石川縣に錢五一人といふのは、孰れも心細い。勿論たゞ一人が當選と云ふのだから、何とも致し方がない。宮城の伊達政宗、山形の上杉鷹山、茨城の徳川光圀、千葉の日蓮上人、愛知の豐臣秀吉、岡山の池田光政、香川の弘法大師などは、誰れも異存の無いところであらう。こゝに、チョット面白く思はるゝのは、香川の弘法大師と、次點者の柴野栗山との、點數の差の少いことと、之に反して、群馬の高山彦九郎と、次點者の新田義貞との差の多いことである。これは近頃、栗山の百年祭が行はれ、又高山は、俗謠にも歌はるゝほどの名高い人であるからであらう。或る府縣に於ては、頗る

意を得ないものがあるにもかゝはらず、大體に於ては、當を得たものと思ふ。尚一二の不足をいへば、岡山縣に於て、法然上人や畫聖雪舟が次點者の中にも見えないこと。傳教大師の滋賀縣の次點者中にもないこと、等である。是等は、其府縣の第一流の人である。然るに、次點者中にも見えないのは、如何にも不思議に思はれる。

次には、間々事蹟が十分に分らず、また生國のチョット判然せざるがために、選に入らない人があつたかと思はれる。例へば、源頼朝などは入選しさうな人である。さうして伊豆や相摸が直に聯想せられる。けれども、生地はチョット六かしい。大化の大功臣なる藤原鎌足も、やはり何府縣としてよいか、即座にはいへまい。源義家などもさうである。投票には、生れたる府縣と限られたやうだが、實は、それが分りにくい場合が少くないのである。又生れた府縣でよりも他の地方に於て實際其人の偉人たる事蹟を遺して居るのも少くはない。たとへば、塙保己一は埼玉縣の生れであるけれども、事業の上から云へば、寧ろ江戸の人と見るべきである。賴山陽の如きは、廣島縣で當選して居るけれども、其生れた土地は大阪で、偉人として名を成したは京都である。池田光政も備前の生れでなければ、上杉鷹山も山形の生れでない。是等の點に於て、今回の投票には、やゝ標準の一定して居ないと云ふ憾みがあるやうに思はれる。熊澤蕃山の如きも、生れは京都で、備前に仕へ、後に播磨や大和や下野などにも住居したがために、何處の人として投票してよいか、少しく分りにくい。或は是等の事情のために、落選した人もありはすまいかと疑はれる。

尾りに臨んで云ふべきは、當選したる偉人の種類分けである。江戸時代の明君といはれた人が、徳川光圀、池田光政、上杉鷹山等で五人。豐臣秀吉、武田信玄、伊達政宗、西郷隆盛の類の豪傑が

八人。楠木正成、名和長年、高山彥九郎等の勤王の士が六人。此の外に、大石良雄の如き義士、山田長政の如き冒險家もあるが、最も面白く思はれるのは、弘法大師、日蓮上人、賴山陽、佐久間象山等の學者、僧侶、其外精神界の偉人が十八人の多數を占めて居ることである。德川光圀其外、他の部類にも入るべき人で、この部へも入り得る資格を有つて居る人を、併せて數へるときには、廿一二人に及ぶであらう。即ち全體の約半分は學者僧侶等である。之に就いては、一面には、普通の意味の英雄豪傑のみでなく、又宗敎的でもなく、此かる精神的方面の偉人を崇敬尊信するやうになつたのは、喜ぶべきことである。又一面には、かゝる方面の偉人のかくまで多數なのには、我が國の文明敎化は、決して淺薄なものでは無い、根柢のなか〳〵深く固いものであることを、證明し得るのであつて、我々の心強く感ずるところである。又當選者の中に、紀文、錢五の二商人のあるのも、また注意すべき現象である。

要するに、折角の此の面白き企てに、一二の不眞面目と目すべき點が無いではないが、大體に於ては、賞賀すべき結果を得て居るといつてよろしい。各方面の偉人が並んで出て、頗る結構である。希くは、選出に心を勞したる學生諸氏は勿論、その他の人々も、是等の偉人を手本として、改むる所があつてほしい。但し最初にも云つた通り、偉人の地方的分布には不公平があるから、郷土の偉人を崇拜するのはよろしいが、他地方に、『より大』なる偉人があれば、それを目標とするがよろしい。餘りに地方的感情にのみ拘はれてはよくない。東京府から、幡隨院一人の出たことなどは、勿論考へものである。當に他地方の偉人を知らなければならぬのみならず、日本の外に、支那にも歐米各國にも、また昔から偉人が多くあつて、學ぶべきことのあるのを忘れてはならぬのである。

編輯局より

一記者

◎讀者諸君——諸君が數月に亘つて、本誌の爲に應募して下さつた偉人の投票は、已に前號に於いて發表したから、其誰々なる事は最早御承知であらう。而して應募者の入賞については愼重なる態度を以て抽籤を行ひ、別項の如く一等一人、二等二人、三等八人、四等二十人に對して、それ〳〵規定の賞品を送ることにした。

◎讀者諸君——諸君も御承知の如く、わが『學生』の特別號はこれで第三回である。第一回の『ナポレオン號』は旭日沖天の勢を以て二十萬部を賣り盡し、第二回の『世界動物園』もまた非常なる歡迎を受け、共に『學生』の基礎を固めたとは非常であつたが、今回發行の『郷土偉人號』は前二卷にも優つて立派なもので頁數はレコードを破つて三百十六頁とし、三色版三枚、寫眞版合計十六頁、地圖一枚、凸版、木版、寫眞版の挿圖約二百個を挿入してあるが、中でも偉人分布地圖の如きは芳賀博士の考案に基づいたもので、本文を離れて地圖丈でも沒すべからざる價値がある。

◎若し夫れ表紙畫の『ジヤイアント』に至つては齋藤畫伯が苦心の筆に成り、口繪なる『川中島の戰』は東城畫伯が燃犀な史的眼光を以て靈妙の筆を遣り、『矢矧橋上の麒麟兒』は渡部畫伯が數次詮考の末、故らに趣味ある歷史的傳說を基礎として揮毫せられしもの、共に本誌を飾つて燦爛の光を放つてゐる。

◎讀者諸君——當選人物は總てゞ四十五人あり、而してその筆者もまた四十五人あるが、筆者は偉人と郷里を同じくしてゐる人で、而かも雄を當代に唱へる名士でなければならぬと云ふので、本號の材料蒐集について、記者等がどれ程苦心したかは、敢て玆に喋々せずとも諸君のよく推察せらるゝ所であらう。しかも諸君、四十五人の名士からこれ丈の材料を集めるには、少くとも一名三回多きは、十回、平均五回として五々二十五、四五の二十で、二百二十五回の訪問をしなければならぬ次第である。かくて夜を日について漸く原稿の集まり終つたのが八月卅日の午前九時である。その時の記者の喜ばしさは、百萬の金を與へらるゝよりも更に數等の上に出てゐる。

◎併し諸君、原稿が集まつた丈では雜誌にならぬ。殊に本誌の特色は漫然と原稿を並べて置く丈ではいかぬ。內容に相當せる趣味ある繪畫を挿んで、グラフイツク式のものとせねばならぬ。かゝる偉人の肖像、筆蹟、遺物、遺址を集めるのは中々容易ではない。それも一國一郷ならば事易々たりであるが、範圍は日本全國に亘つてゐる、時代は少くとも一千年前に溯つてゐるのがある。記者は實際、非常な苦心をしてこれ丈に纏め上げたのである。

◎讀者諸君。これ等の材料を集めて編輯して之を版に上すには非常なる金錢を要する。本誌は實際その點を度外視して、儲かるとか儲からぬとか云ふ事を考へず、無鐵砲に贅澤な者を揃へたのである故、餘程賣れなければ元さへも引けないのである。願はくば諸君の平生に倍する熱烈なる歡迎と同情とによつて、平素に幾倍せる發行高を見ることを得ん。願はくば諸君。

◎記者は以上盛んに自畫自贊をした。記者等の微衷を諒とし、雷鳴の如き大喝采と、熱鐵の如き大同情と、百川を吸集する大海洋の如き大歡迎とを以て、本號に活きたる生命を與へられ、來月一日の普通號に於いて諸君に對し多大なる『郷土偉人號』の賣高を報告するを得しめよ。頓首謹言。

▲懸賞募集▼

甲　種

評論（大町桂月選）二十字詰八十行以內
美文（西村酔夢選）二十字詰八十行以內

乙　種

小品文（小川未明選）二十字詰十四行以內
新體詩（河井醉茗選）一人一篇二十五行限
和歌（窪田空穗選）一人一首限
俳句（內藤鳴雪選）一人一句限

賞　與

甲種　一等金三圓（現金）　二等金二圓　三等一圓（以上圖書切符）
乙種　一等金一圓五十錢（現金）　二等金一圓　三等金五十錢（以上圖書切符）

投稿規定

▲投稿は政治論時事論に涉つてはならぬと▲字數は總べて二十字詰行數は別項の規定によること▲用紙は半紙に限り二枚以上は綴ること（和歌俳句に限り端書にてもよし）▲各種各項別紙に認め封筒の表に學生原稿と朱書する事▲締切は每號發行一箇月前とし秀逸のものは順次次號に讓る事▲賞與は發表の後三十日以後に發送する事▲宛名は神田富山房學生編輯局の事▲住所氏名を明記する事

▲懸賞募集▼

偉人投票入選者發表

偉人投票の懸賞總應募數は、六六、三二九票にして、其の中無効とすべきもの一〇八票あり、差引六六、二二一票中より當選者を選拔し、更に嚴密なる審査の上抽籤を行ひ、下記の三十一名に規定の賞品を送附することゝしたり。

一等（一人）双眼鏡一箇

群馬縣山田郡川內村一一九　矢嶋涙歌

二等（二人）銀側懷中時計一箇宛

大分縣北海部郡四浦村三八二　川崎太市
大阪府堺市大町東三丁　平野和一

三等（八人）萬年筆一本宛

茨城縣久世郡上小川村　石野　昇
宮城縣栗原郡築館町一五六　石崎　赤
香川縣三豐郡觀音寺四一五　和田慶一
青森縣西津輕郡木造町野崎庫一方　桑田金治
鳥取縣西伯郡米子町糀町一丁目　淺間樂水
長野縣松本市日の出町三二二四　梅村義雄
愛知縣名古屋市南伊勢町二　丹下高福

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

美くしい寫眞募集

美くしい•見事な寫眞ならば何でもよろしい•學生編輯局へ宛てて送つて下さい•その中で選評して本誌へ掲げる事に致します•……………………………

又自分の寫眞をお持ち合はせの讀者諸君は•本誌へ寫眞を御寄贈願ひます•機を見て寫眞版として•本誌へ掲載することに致します•……………………………

美くしい寫眞募集

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

廣島縣安藝郡仁保島村一八一八　小川　涉

四等（二十人）五十錢圖書切符一枚宛

東京市麴町區永田町二の二九　小谷津恒雄
大阪市東區中道川西町四五一中野藤太郎方　北野德司
高知縣高岡郡浦之內村六三　富永譽重
京都府加佐郡河西村一二四　桐村保太郎
山形縣飽海郡酒田町四二　淺野庸則
福井縣敦賀町末廣八九　高木捨藏
廣島縣薩摩郡西水引村二六四　福山哲四郎
佐賀縣小城郡北多久村二七八　大坪曉星
石川縣羽咋郡富來五六　大鍛冶善治
神奈川縣中郡南泰野村二三一六　露木惠治
島根縣松江市南田町一四八　奈倉正恭
山口縣佐波郡防府宮市二六八　河村節三
兵庫縣養父郡八鹿村三二四　小林達三郎
愛媛縣北宇和郡宇和島御徒町一四　中嶋彌壽夫
長崎市大德寺六　吉村重雄
秋田縣秋田郡保戸野仲四　小堀政三郎
山梨縣南巨摩郡南部町一　石川政三
千葉縣長生郡二宮本鄕村一五五五　大塚大二
靜岡縣志太郡高洲一六八〇　清水隆一郎
埼玉縣兒玉郡丹庄村肥土四七　高橋善吉

次號豫告

別刊『郷土偉人號』の發刊に依つて一區劃を限り、新たなる生涯に入れる本誌十月號は、秋燈親むべき時季に取りて殊に懷かしさを禁ずべからざらん也。**卷頭評論**は桂月主筆椽大の筆を揮ひ、肝付中將は續いて**海國男兒論**を寄せられ、三浦中將は新に**泣く子と地頭**には勝てぬの一文を稿せらる、芳賀博士の**殯宮**に**奉侍**する**記**は無限の愁情今井博士の**世界の馬**は諸君の相馬眼を開くべく、吉川博士の數學雜話**思出の儘**横山博士の**地震**の**惡戲**白澤博士の**臺灣の處女林**大幸博士の**化學雜話**は、本誌獨特の科學的記事、陽炎生の現代の人**ヤング氏**薄田斬雲氏の**探偵王**小池二高敎授の**玩具展覽會**は趣味あり敎訓あり。秦鐵血生の**蝴蝶陣**は水滸傳的色彩を發揮し來り、千頭清臣氏の**偉人博物館**は益々面白くなり增さる。**御大葬**に關する記事は簡にして要を得たり。又例月の如く歷史漫畫、十月漫畫、學生グラフイツクあり、判じ繪は益々出でゝ益々面白し。その他、吉岡氏の筆に成る**英文欄**あり痛快なる**運動談**あり紙面頗る賑やか也。

毎月壹回『學生』一日發行

本號に限り定價三十錢郵稅三錢

定價

册數	定價	郵稅	合計
一册	金十六錢	郵稅一錢五厘	合計金十七錢五厘
三册三ヶ月分	前金四十六錢五厘	同四錢五厘	同金五十一錢
六册六ヶ月分	前金九十錢	同九錢	同金九拾九錢
十二册一ヶ年分	前金壹圓七拾五錢	同十八錢	同金壹圓九拾三錢

廣告料

等級	一ページ	半頁	掲載の場所
特等面	金四拾圓		表紙の裏、裏表紙の表、三色版口繪の對向面
一等面	金卅五圓		石版、寫眞版對向面、目次文初對向面表紙三
二等面	金參拾圓	金拾七圓	寫眞版口繪、記事の對向面
普通面	金廿八圓	金拾五圓	適宜組込み

但寫眞版・木版・鉛版・電氣版等は實費可申受候

稟告

『學生』御注文は總て前金の事●振替貯金にて御送金は口座受入手數料金壹錢御同送の事●郵券代用は必ず一割增の事●前金相切れ候節は最終の雜誌帶封に『前金切』の印を押捺し次の前金領收まで發送停止の事●前金は本誌到着を以て領收の事と御承知の事●御住所氏名は楷書にて明瞭に御記載の事

大正元年九月十二日印刷納本（第三卷第十號）
大正元年九月十五日發行

編輯人　東京市牛込區新小川町二丁目二番地　西村眞次
發行人　東京市神田區裏神保町九番地　坂本嘉治馬
發行所　東京神田裏神保町　合資會社　冨山房
編輯用電話本局四四四二番　電話本局一〇三六・四一三〇番　振替貯金口座東京五〇一番

何人にも必要で何人にも分り易い

文學博士 芳賀矢一先生新著

最新刊

實用明治文典

天下文法書多し、然れども徒らに高尚に失する參考書にあらざれば乾燥無味なる教科書類のみ。未だ一般人士の爲に獨修を主眼とし編纂せられたる本書の如きは無し。本書說く所普通誤り易き點を指摘して懇切平明、一々演習題を課して口語と文語とを比較し、始終文の構造を基礎として品詞及び文章を解說す。既に文法の一斑を修得せる者は本書を以て更に活用上の寶典と爲すべし、未だ文法を解せざる者も、本書を一讀せば、行文誤りなきを得べし。苟も文を語り文を作るの士は必ず一讀するを要す。

菊判和裝全一冊
定價金卅錢
郵稅金六錢

同博士編 忽再版

聖代讀本

菊判上下
全二冊
毎冊二百
五十餘頁
定價毎冊
金四拾錢
郵稅八錢

發兌元 合資會社 富山房 東京神田 (振替東京五〇一番)

御注文の方は『學生』廣告に據る旨御附記を乞ふ

學生主筆 大町桂月先生著

第五版

筆のすさび

好評忽五版

寸珍本美裝全一册
紙數百頁
定價金四十五錢
郵稅金六錢

大町桂月先生は人格の人也。功名その顧る所に非ず、富貴も之を淫する能はず。陋巷に窮居して一管の筆天下の青年に訓へ、飄然時に出でゝ一枝の笻宇內の山川を探る。入つては則ち訓話あり、出でゝは則ち紀行あり。その訓話は明治の鳩翁道話を以て目せられ、字々皆肺肝より出でゝ、至誠至情の血肉を湧かしめ、或は相戒めて非行を悔悟し、或は相率ゐて善行を實踐す。若し夫れ、その紀行は我國の柳々州を以て目せられ、句々皆金玉、誦するに珊々の聲あり、讀めば則ち青山白水髣髴として眼前に現はれ來る。至れる哉先生。先生が最も苦心して成れる最近二年間の述作は、悉く收めて本書の中に在り。人らしき人、男らしき男たらんとする青年は、机上一卷の『筆のすさび』を備へざる可からず。

發行所 東京神田 合資會社 富山房
振替口座東京五〇一番
電話本局四一三〇番

冊に分ちたる新裝幀本の特賣

博士 瀨川秀雄先生著

西洋全史

洋裝美本全五冊
本文紙數貳千六百餘頁
附圖大小壹百廿餘圖

特價金拾圓（定價十三圓）
送料市内八錢内地四十四錢
樺太九十錢鮮支國一圓五錢

新元大正の大國民は一日も早く世界の大勢に通じて國運の興隆に貢献するを要す。世界各國の實情を知悉して英の強大、獨の堅實、米の殷富、佛の豪華等各々其由て來る所を究むべきなり。これ蓋し讀史の最大目的にして日露の協約も日英の同盟も乃至は移民問題、外資輸入も日々新聞紙上外國電報の報ずる所、論議する所一として世界歴史を基礎として解釋せられざるは無かるべし。歴史を知らずして現今の活動社會に立つは石を抱ひて淵に臨むが如し、誰か之を危ふまざらんや。記せよ世界歴史の正確なる知識を有するは我中流以上の人士の資格上必備の義務なることを。西洋全史二千六百餘頁と附圖とを以て五千年來世界の推移變遷を詳述し叙事殊に近世に重きを置き其紛糾錯綜を極めたる時代に於て史論は微に入り細を穿ち秩序整然として一絲亂れず讀者をして岐路に彷徨せしむるの弊なからしめたり。而も論評公平にして肯綮に當り、叙説凱切にして急所を衝く。全社會に於ける人類の總記錄としては本書實に絶群の聲名を博するに足らん。法制、軍事、外交、通商、宗教、科學、文藝、美術の各方面に於ける現代文明の先進者たる人々の事業は本書悉く之を追究して遺すことなし。

今茲に改元を紀念せんが爲め三千部限り實費特賣すべし。

發行所 東京神田 （振替口座五〇一番） 合資會社 冨山房

學生編輯 西村眞次先生編

好評再版 / 忽嘖々

ナポレオン

洋裝菊判美本全一冊
三色版四枚光澤寫眞版十二枚
八頁寫眞版
カット參百餘圖
定價金壹圓
送料内地十二錢
樺太、臺灣、朝鮮、淸國十六錢

『學生』特別號として『ナポレオン號』を出すや天下の讀書子翕然として之を求め從て製すれば從て賣り切れ。殆ど無際涯の歡迎と熱狂的の喝采とを博し、今や第六回の增刷亦一本なきに至れり。然れども、今の時ナポレオンを研究するは最も適切なる時勢の要求にして、萬客之を望むもの日に愈多し。即ち特別號に補ふに亦十數大家の卓説を以てし茲に本書を上梓す、目次左の如し

▲時勢とナポレオン　箕作博士
▲ナポレオン一世傳　瀬川博士
▲同　少年時代　齋藤教授
▲エルバ時代の那翁　千頭清臣
▲那翁の最後　葉山學士
▲那翁摸象錄　大町桂月
▲末路の悲慘　大隈伯爵
▲那翁は豪くない　林伯爵
▲南洲と豐公と那翁　後藤遞相
▲個人としての瞥見　千頭清臣
▲拿翁の常識的觀察　島田三郎
▲矛盾せる性格の人　鎌田榮吉
▲法曹界那翁の事業　梅博士
▲那翁經濟政策　河津博士
▲農政と那翁　古在博士
▲那翁の對英政策　瀬川博士
▲國際法と那翁　立博士
▲ナポレオン法典　岡村博士
▲憲法史上の那翁　市村教授
▲那翁の植民政策　村島學士
▲外交家としての那翁　箕作博士
▲帝政時代と桃山時代　原博士
▲那翁と建築　岡田教授
▲佛國美術と那翁　中村不折
▲劇の那翁　中村吉藏
▲教育家としての那翁　吉田教授
▲那破烈翁樹　伊藤博士
▲ロセツタ石とブルメンバツハ　坪井博士
▲宗教と那翁　浮田博士
▲美術史上の那翁　岩村男爵
▲那翁と獨逸文學　藤代博士
▲時代に及ぼしたる影響　島村抱月
▲那翁樂の印象　西村眞次
▲遺骸の迎葬　杉谷代水
▲那翁雜感　時岡茂弘
▲理學と那翁　池田博士
▲制海權と那翁　肝付中將
▲陸軍々人としての那翁　東條中將
▲海軍的觀察　小笠原大佐
▲軍陣外科と那翁　芳賀博士
▲ナポレオン戰史　鈴木大佐
▲最後の英傑　加藤博士
▲馬鹿野郎と那翁　澁澤男爵
▲那翁管見　青山博士
▲超人か猛獸か　寺尾博士
▲ナポレオンの母　箕作博士
▲那翁劇の印象　池邊吉太郎
▲琉球と那翁　中村博士
▲居酒屋に於ける皇帝　大島少將
▲那翁の身體　富士川游
▲宮殿と森林　小川博士
▲世界精神の一　桑木博士
▲那翁戰爭反響　新村博士
▲何を學ぶべきか　竹越三叉
▲人喰ひ　和田垣博士
▲那翁の兄弟　アツテリツヂ

發行所 東京神田 冨山房

學生

（大正元年九月十五日發行　同年九月二十日印刷納本）

（毎月一回一日發行）第参巻第十號

（明治四十三年四月廿九日　第三種郵便物認可）

懇切平易且つ極めて教育的なる完全の中學講義録は本會より發行せらる

第十八回新學期開講
入會の絶好機來れり

大日本國民中學會

此際の入學者に限り
特殊の一大特典あり

自宅に在りて正則に完全に中學全科を獨習せんとする人は迅に申込め！

（本號ニ限リ定價金

東京駿河臺

電話本局｛三〇〇二番　三〇〇四番　三七〇七番

見本つき　規則書　無料進呈

（日清印刷株式會社印刷）